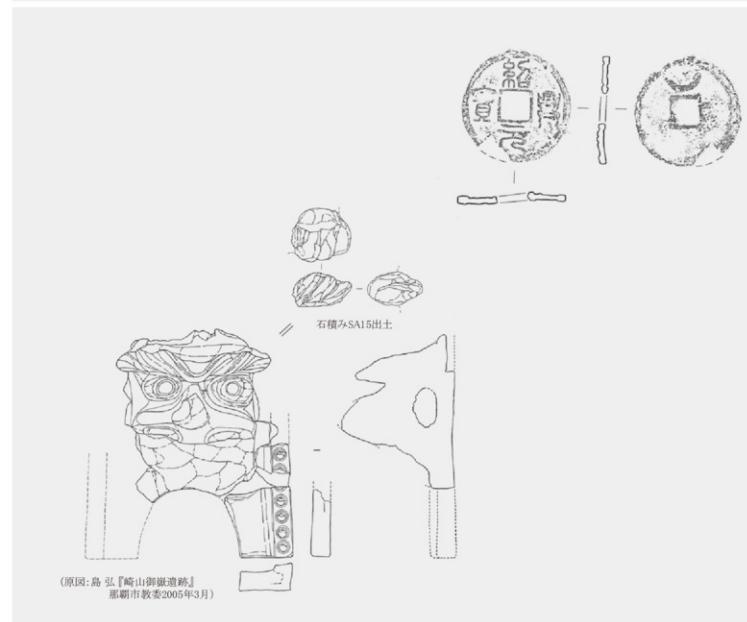


# 首里城跡

—京の内跡発掘調査報告書(VI)—  
平成6年度調査の遺物編(3)



平成29(2017)年 3月  
沖縄県立埋蔵文化財センター



# 首 里 城 跡

—京の内跡発掘調査報告書(VI)—  
平成6年度調査の遺物編(3)

平成29(2017)年 3月  
沖縄県立埋蔵文化財センター



## 序

首里城は、500 余年に亘って琉球王国の王城として、沖縄の歴史・文化の中心的な核となって、個性豊かな沖縄の歴史と文化の礎を築き上げてきたグスクであると同時に沖縄独自の建築技術や石積みなどの土木技術の粹を集めて完成された県内最大規模のグスクでありましたが、昭和 20 年の太平洋戦争末期に起きた沖縄戦による戦禍で首里城正殿（大正 14 年 4 月 24 日に「沖縄神社拝殿」として国宝指定）を始め、昭和 8 年 1 月 23 日に国宝として指定された歓会門、瑞泉門、白銀門、守礼門、園比屋武御嶽石門を含む多くの建造物や城壁の石積みはことごとく破壊され消失しました。戦災で灰燼に帰した首里城跡には、琉球大学が昭和 25 年に創設されますが、当時の琉球政府文化財保護委員会によって昭和 30 年 11 月 29 日付で首里城跡は、史跡として指定されます。その後、本土復帰の昭和 47 年 5 月 15 日に国指定の史跡として指定されています。

県民の首里城復元に対する熱い期待と要請により昭和 60 年度から沖縄開発庁（現：内閣府）、建設省（現：国土交通省）、文部省（現：文部科学省）の三機関からの助言や補助を得ながら、沖縄県によって首里城跡の復元整備事業が開始され古都首里城の歴史的風土にふさわしい区域として位置付け、平成 26 年度まで継続的に内閣府沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所からの受託による遺構確認調査が進められてきました。

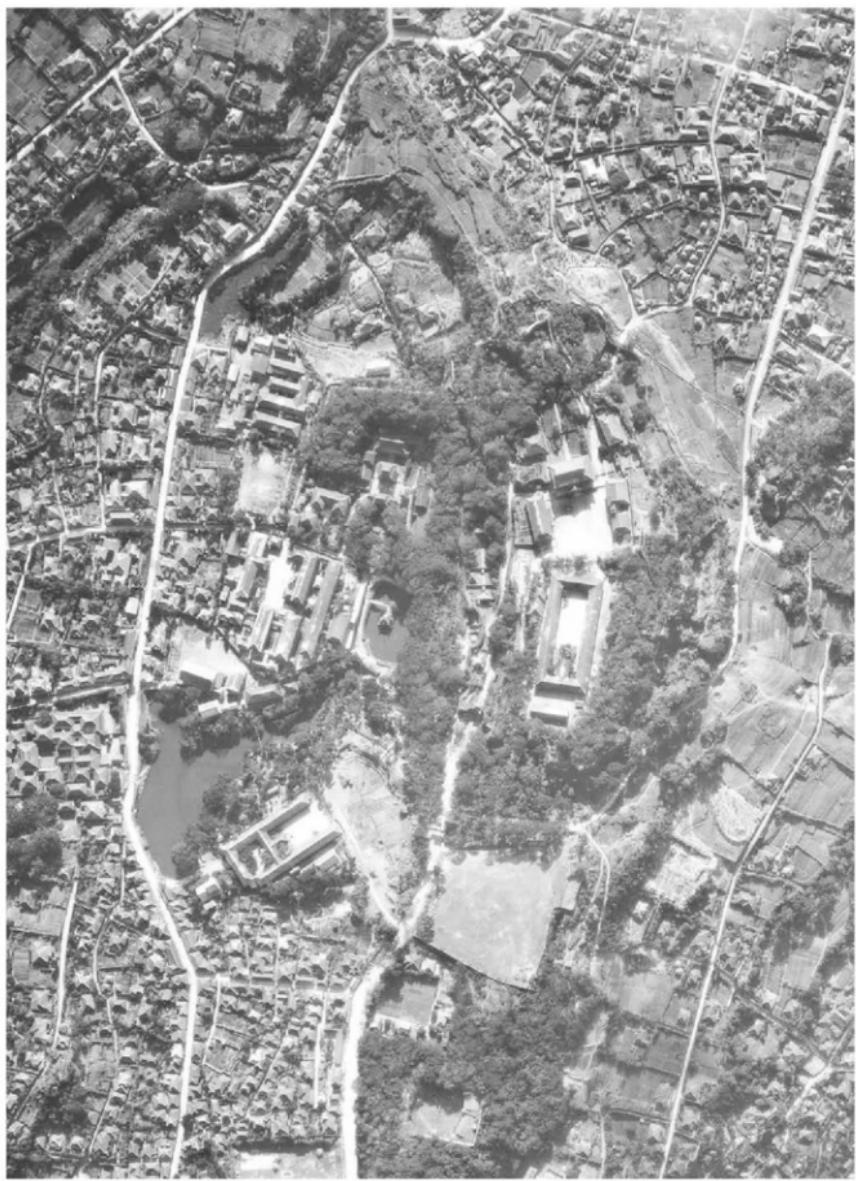
首里城跡の復元整備の中で、平成 4 年度には首里城正殿の復元と北殿、南殿、奉神門などの施設が再建され、在りし日の姿（1712 年の首里城再建を始めとする 18 世紀前半）を現在に写し出す形で首里城公園として一部公開されています。その後、平成 11 年に白銀門、平成 12 年が系団座・用物座及び二階脚般が復元され、同年 12 月 2 日には首里城跡を含む 9 資産がユネスコ世界遺産条約に基づき「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として、「世界遺産」（文化遺産）に登録されました。平成 15 年には京の内、平成 19 年が書院・鏡之間庭園などが復元されました。特に書院・鏡之間庭園については、平成 21 年 7 月 23 日付で国の名勝として指定されました。平成 22 年は叔順門の整備、平成 26 年が黄金御殿・寄満・近習館所・奥書院・奥書院庭園の復元整備が新たに実施されています。

本書に収録された首里城の「京の内」と称された区域は、正殿、北殿、南殿、奉神門の存在する政治的建造物空間が集中する区域とは離れた内郭の南北地域に位置し、京の内には文献や伝承に拠ると首里城築城以前に古いグスクがあつた場所としても考えられています。琉球王国時代は、聖域的空間として国王即位の儀式をはじめ琉球王国の重要な儀式や祭祀がおこなわれた空間として位置付けられています。このような中で、「京の内」跡の復元整備事業に必要となる京の内の位置確認と規模、そして、遺構の変遷などを解明する目的で平成 6 年度から平成 9 年度まで継続的に発掘調査が沖縄県教育委員会によって実施されました。平成 6 年度の調査では、1459 年の火災で消失した倉庫跡が発見され、当時の琉球王国の海外交易によって将来された中国をはじめとする東南アジア（タイ、ベトナム）、本土を含めた各地域の陶磁器 1,162 個体と、多くの金属製品やガラス製品が確認されました。これらの陶磁器類は、平成 12 年 6 月 27 日付で国の重要文化財（考古資料の部）「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点」として戦前・戦後をとおして、沖縄県ではじめて指定されました。

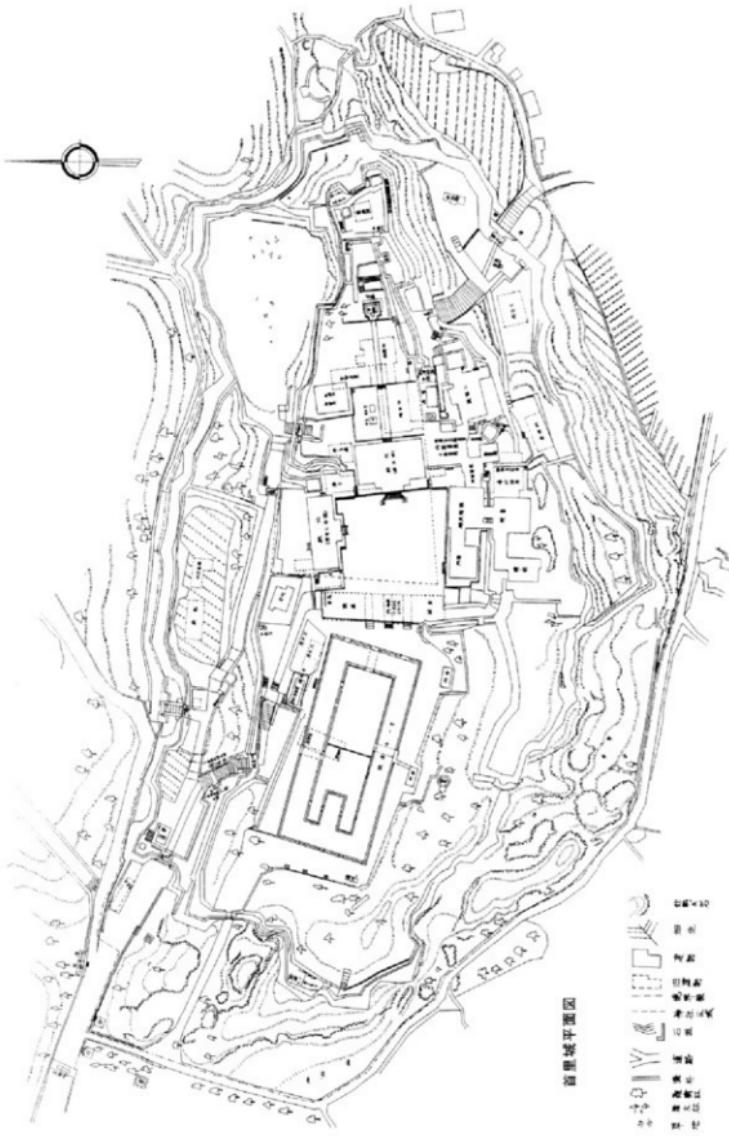
さて、今回の報告書に掲載した内容は、平成 22 年度に報告した平成 6 年度調査の遺構編に続くものであります。平成 6 年度の調査で検出された各種の遺構に伴って出土した陶磁器などから遺構の構築された時期を時期毎に整理し、第Ⅰ期（14 世紀前半～14 世紀後半）から第Ⅵ期（19 世紀終末～昭和 58 年）までの 6 時期に時間軸を設定して報告をおこないます。平成 23 年度は、第Ⅰ期から第Ⅲ期（15 世紀中頃）までの遺構に伴う出土品について報告をおこないました。平成 25 年度は第Ⅳ期（15 世紀後半～16 世紀初頭）、平成 28 年度が第Ⅴ期（16 世紀前半～19 世紀後半）の時期について報告をします。陶磁器などの出土品は、構築された遺構の時代を相対的に決定する事のできる重要な資料であると同時に祭祀空間であつた京の内の性格を理解する上で欠くことのできない勾玉、小玉や神事の際の容器として利用された中国華南彩釉陶器も出土しています。その他に石器（砥石の表裏面と側面）に「進貢船」とみられるものを線刻で表現した資料も出土しています。

本書が首里城跡の城郭研究や考古学、民俗学、歴史の各研究分野に寄与することができれば幸いに存じます。

平成 29 年 3 月

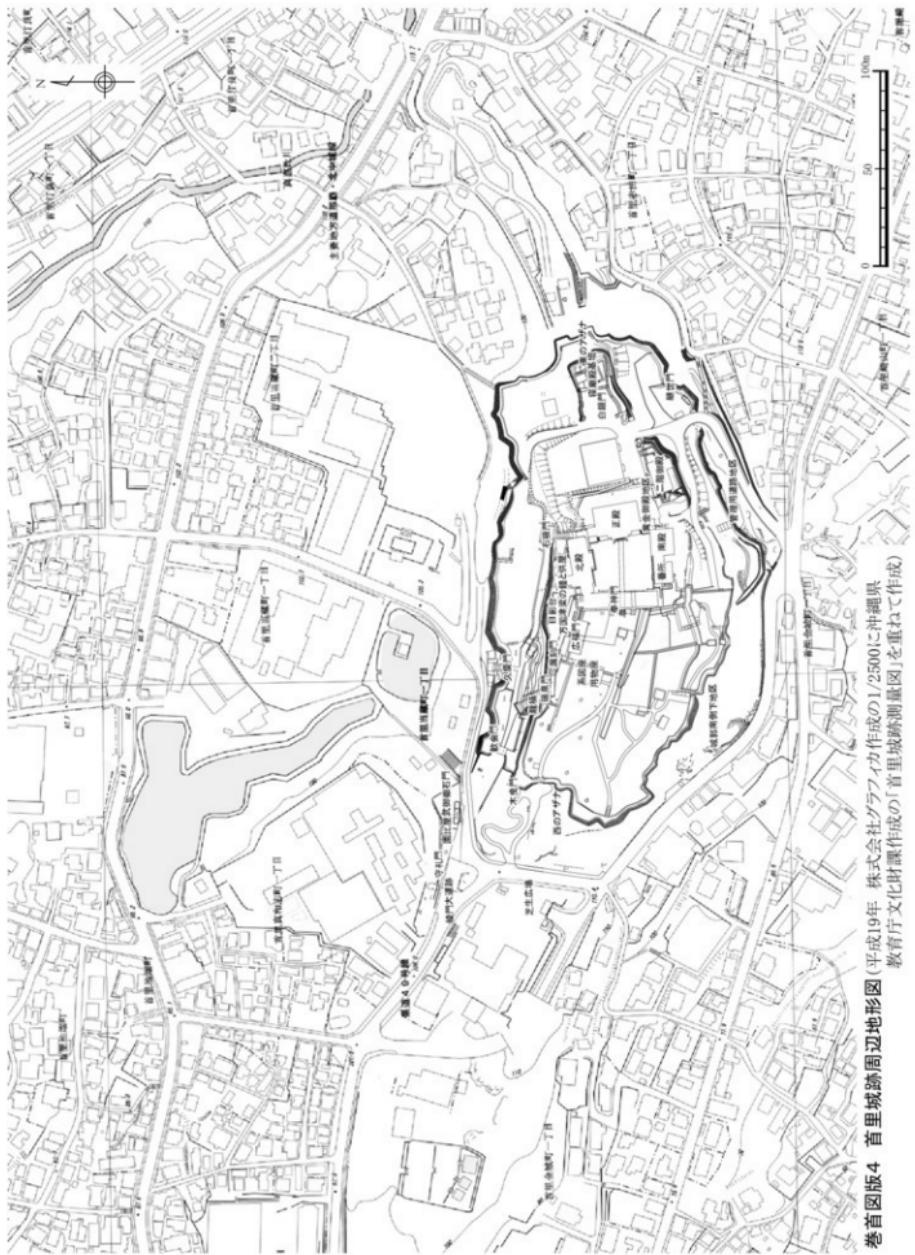


巻首図版1 1945年4月2日 米軍撮影(CV20-103-63)の首里城周辺  
(沖縄県教育委員会 文化財課 史料編集班 所蔵)





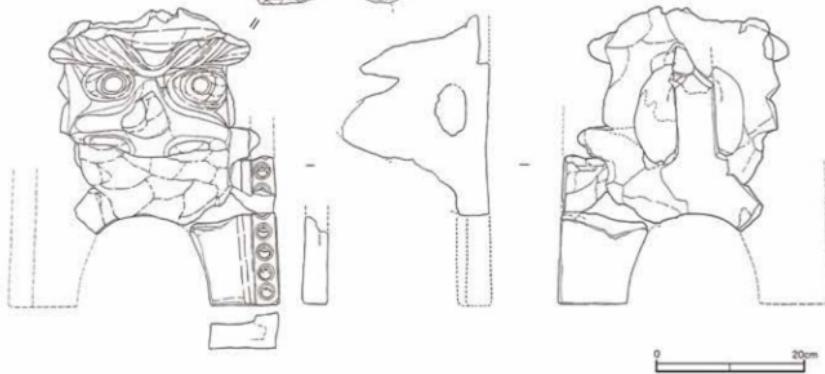
卷首図版3 2009年首里城跡の航空写真(株式会社グラフィカ所有)



卷首図版4 首里城跡周辺地形図(平成19年、株式会社グラフィカ作成の「首里城跡測量図」を重ねて作成)  
教育文化財課作成の「首里城跡測量図」を重ねて作成



(原図：島 弘『崎山御嶽遺跡』  
那覇市教委 2005年3月)



巻首図版5 石積み SA15 出土の大和系鬼瓦模倣の眉（15世紀後半～16世紀）と  
崎山御嶽遺跡出土の大和系鬼瓦（15世紀中頃～以降）



卷首図版6 上段：中国南宋の1131年铸造の「紹興元寶」裏側に三日月文様の「背上月」  
下段：塙敷きSS01出土の線刻石器

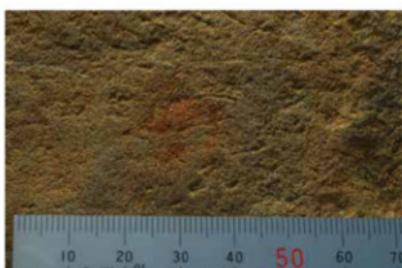
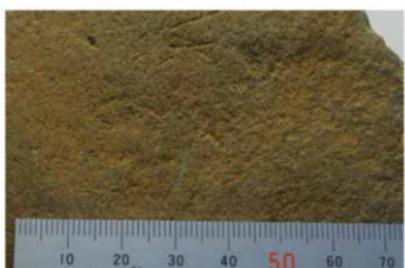
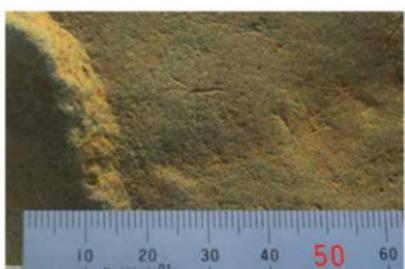








- 線刻石器（表面）
- 1段目 左：帆船・波、右：波と魚
  - 2段目 左：小型帆船
  - 3段目 左：種子の萌芽
- 線刻石器（裏面）
- 3段目 右：帆船・波・人物
  - 4段目 左：波と魚  
右：天幕のある和船・人物3名・船・波

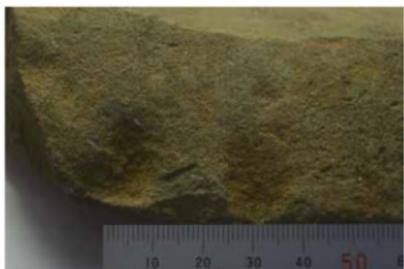


巻首図版7 線刻石器の拡大①









線刻石器（裏面）

1段目 左：鳳凰と菊花

線刻石器（側面）

1段目 右：帆船と魚

2段目 左：渦潮と船の竜骨

線刻石器（裏面）

3段目 凤凰と菊花の拡大写真



巻首図版8 線刻石器の拡大②



## 例　言

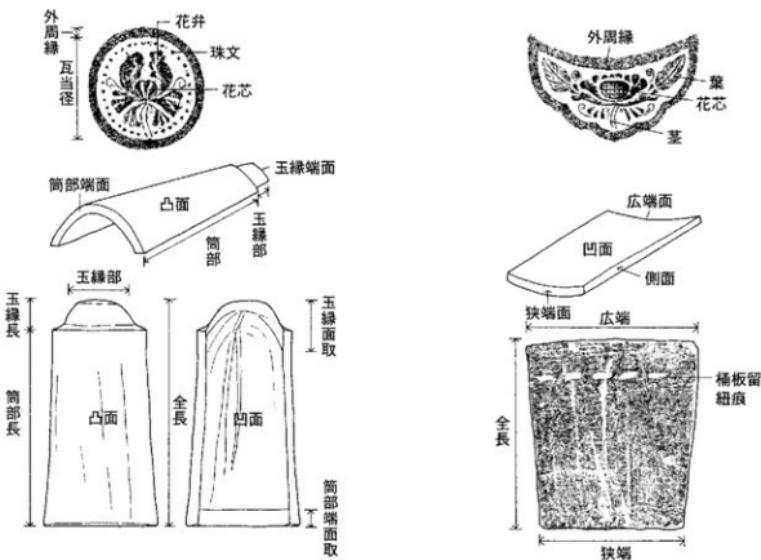
- 1 本事業は、国営首里城公園整備事業に伴うもので内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所からの委託（受託）を受けて沖縄県教育委員会が実施したものである。なお、発掘調査事業の総括及び業務調整等は所管課の沖縄県教育庁文化財課が行い、発掘調査に係る資料整理等については沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 2 本報告書は、平成6年度に実施した国営首里城公園（約4ha）の京の内北側地区（調査面積約2,000m<sup>2</sup>）で検出された遺構を整理して、平成22年度に「首里城跡一京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）—平成6年度調査の遺構編」を、平成23年度には「首里城跡一京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）—平成6年度調査の遺物編（1）」（第Ⅰ期～第Ⅲ期までの出土品）を、平成25年度に「首里城跡一京の内跡発掘調査報告書（V）—平成6年度調査の遺物編（2）」（第Ⅳ期までの出土品）を刊行した。  
今回の報告は、平成22年度報告の遺構編で記した第Ⅰ期から第Ⅵ期までの6時期の内、平成25年度報告（第Ⅳ期までの出土品）に統く第Ⅴ期の出土品について報告をおこなっている。  
なお、報告した出土品と遺構との時代関係について整合性は譲っていない。従って今後の出土品の報告によっては、遺構の時代観において変更もあり得る。
- 3 本報告書で掲載した航空写真は、2009年首里城跡の航空写真是、株式会社グラフィカの航空写真を複写掲載した。1945年4月2日米軍撮影（CV20-103-63）の航空写真是、沖縄県教育委員会文化財課史料編集班所蔵を複写掲載した。
- 4 また、本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000、1/50,000の地形図を使用した。那覇市都市計画部都市計画課発行の1/10,000の地形図、平成16年度沖縄県教育庁文化課作成の首里城跡測量図、沖縄県企画部情報政策課委託作成の地形図を使用した。
- 5 報告書抄録に掲載した座標系は、地形測量及び写真測量業務で委託した成果をインターネットで公開（<http://Vldb.gsi.jp/sokuchi/tky2jgd/>）されているWeb版TKY2JGDを利用した。日本測地系から世界測地系に変換した。入力方法を例示すると、入力値は平面直角座標を選択し、日本測地系「15系」を選択後に「X座標：23598.267m、Y座標：21971.191m」を入力後に変換方法を「世界測地系→日本測地系」を選択した。計算結果は「北緯：26° 12' 32.15599''、東経：127° 43' 18.24229''」が求められたものを見た。
- 6 本報告書は、金城亀信を中心に、宮里美也子・大城友理華・仲村綾乃ほかの協力を得て、編集を行った。なお、発掘調査・資料整理などの調査体制については、第Ⅰ章の第2節に記してある。
- 7 本報告書の原稿は、すべて金城が執筆し、出土遺物の観察には25倍のルーペを使用した。その他、実測図の修正点検、文様表現の修正点検などについても金城がおこなった。
- 8 本報告書に掲載された出土遺物の撮影及び現像・焼付けは、主に領家範夫・安里小弥子が担当した。なお、線刻石器の線刻画の撮影は、金城亀信がおこない、撮影補助は、外間太一朗が担当した。
- 9 出土品の名称及び計測部位などは、凡例に記したとおりであるが表現上、やむを得ない場合は別の名称

や表現を使用した。

10 発掘調査で出土した遺物及び実測図、写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

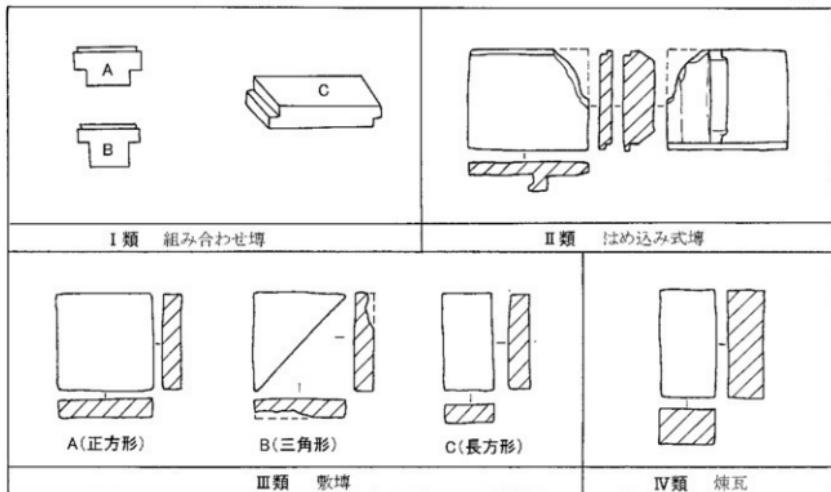
## 凡 例

- 1 屋瓦の名称は、『渡地村跡－臨海道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告書－』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 平成19年7月発行)より複写・掲載した。その他、埴瓦の分類に際しては、『湧田村跡－県庁行政棟建設に係る発掘調査－』(沖縄県教育委員会 文化財調査報告書 第111集 平成5年3月発行)より分類の基準となった実測図を複写して掲載した。
- 2 黒釉天目茶碗の分類に際しては、森本朝子の「博多遺跡群出土の天目」『唐物天目－福建省建窯出土天目と日本伝世の天目－』(茶道資料館1994年)より城間 繁が作成した『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－』(沖縄県教育委員会 文化財調査報告書 第132集 平成10年3月発行)を複写し、分類のⅠ類～IX類までの年代観は金城亀信が追記した。
- 3 金属製品の分類、名称、計測箇所については、下記の文献より引用並びに参考にして図面を作成した。
  - ①金属製品の分類は、小川 望の「工具類1 大工道具」、「工具類2 接合具」、「工具類3 その他」『図説 江戸考古学研究事典』(江戸遺跡研究会 柏書房株式会社 2001年4月発行)を参考にして、分類基準表を金城亀信が作成し、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅱ)－』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集 平成21年3月)に掲載した表を利用した。
  - ②札の各部の名称は、上原 静が作成した『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査－』(勝連町教育委員会勝連町の文化財 第11集 1990年3月発行)より複写して掲載した。
  - ③銭貨の各部計測点は、永井久美男編『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』(兵庫埋蔵銭調査会 株式会社ぎょうせい関西支店 1994年10月発行)を参考にして、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅱ)－』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集 平成21年3月)収録の「永楽通寶(中国明朝：初鑄造年1408年)」を掲載し、これに計測部位を表示した。
  - ④銭貨の各部名称については、上記した③の「永楽通寶」に陸原 保 編集『東洋古銭価格図譜例言(和漢泉鏡)』『改訂版 東洋古銭価格図譜』(1975年5月発行)掲載の例言より使用頻度の高い用語のみを掲載し使用した。
  - ⑤兜および立物の各部名称と大鎧の各部名称については、金城亀信が作成した『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅱ)－』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集 平成21年3月)を再度掲載した。
  - ⑥簪の名称と計測部位は、西銘 章・片切千亜紀・青山奈緒ほかの『与那国島 嘉田地区古墓群－嘉田地区は場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第21集 平成16年3月発行)に掲載して使用した。
  - ⑦煙管の部位名称は、西銘 章の『ヤッチのガマ カンジン原古墓群－県営かんがい排水事業(カンジン地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第6集 平成13年3月発行)に掲載の図を加筆修正して使用した。名称については、たばこと塩の博物館『キセル』(1988年発行)を参考にした。
- 4 ガラス玉の分類概念および計測は、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅱ)－』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集 平成21年3月)に掲載したものを使用した。
- 5 陶磁器類の碗の部位名称は、京の内跡出土品の中から「青磁雷文帶碗(14世紀後半～15世紀前半頃)」を図化し、名称を当て嵌めた。
- 6 図化を省略した青磁碗と盤の高台資料については、本報告書に掲載した実測図を使用して模式図を作成し、青磁碗は高台の横断面の形状からa～hまでの8種類に分けて集計をおこなった。同様に青磁盤(大皿)についても高台形状からa・bの二種類に大別して集計をおこなった。
- 7 タイ産土器(半縫)の蓋の分類については、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－』(沖縄県教育委員会 文化財調査報告書 第132集 平成10年3月発行)のP64第11表に掲載したⅠ類～Ⅷ類までの8分類中、7種迄の様式図を掲載した。今回は3種類(Ⅰ類・Ⅲ類・Ⅳ類)のみ出土している。
- 8 明代華南三彩鶴型水注のカラー写真は、平成元(1989)年に金城亀信撮影のカラープリントより複写した。



1-a 屋瓦の各部名称

『渡地村跡-臨海道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告書-』(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成19年7月)より複写掲載。



1-b 増の分類: 増瓦の厚さは、a(厚さ: 2.5~3.9cm)、b(厚さ: 4.0~6.0cm)の2種類に分けて分類した。

『湧田古窯跡(1)-県庁舎行政棟建設に係る発掘調査-』(沖縄県教育委員会 平成5年3月)より分類のため、実測図を複写掲載。

分類	器 型	特 徴	実測図（縮小1／3）
I類	断面逆三角形の平茶碗 (推定期12c前半)	底から口に向かってほぼ直線的に大きく開く平茶碗である。大きく次の三つに分けられる。I-① 胎土は黒灰色に白砂を含み、黒色の厚い釉。I-② 胎土は灰白色、釉は黒褐色を呈す。I-③ 底径は大きく、白覆輪である。	
II類	外反口縁の碗 (推定期12c前半)	I類同様、底から口に向かってほぼ直線的に開くが、全体はより深目の器形で、口だけ外反して開く。	
III類	断面逆三角形の深碗 (推定期12c前半)	口縁は外反するが、一度口縁下で押さえ、目立たない程の浅いくびみを作りいわゆる建盞なりの天目茶碗に特有のひねった口縁の萌芽と言える。口径と器高の比が3:2前後、5:2前後のものとでIII-①、②に分けられる。	
IV類	いわゆる「建盞」なりの茶碗 (推定期12c後半～13c前半)	高台脇を深く斜めに削り、そこから角度を変えて直線的に開き、口縁下でもう一度角度を変えて立ち上がる。いわゆる「建盞」なりの形と言えよう。タイプ的に建盞に近いものIV-①、やや遠いものIV-②とに大別した。	
V類	誇張的に表現された天目茶碗 (推定期13c)	身は大きく開き、口縁下で角度を変えて立ち上がる。内底をくぼめ、内面が曲線的に複雑になる。これは典型的な建盞の各部を誇張的に表現した天目茶碗である。小ぶりのものと、大ぶりのものとでV-①、②に分けられる。	
VI類	口縁のくびれの強い茶碗 (推定期13c)	V類より、口縁のくびれが強く誇張されたタイプの天目茶碗である。浅い碗とやや深めの碗とでVI-①、②に分けられる。	
VII類	口の内溝する平茶碗 (推定期13c後半～14c初)	体は大きく開き、半ばで曲線的に立ち上がり内溝気味に終わる。比較的浅い碗である。底部は上げ底であるが、輪高台らしく作るものもある。	
VIII類	高台脇を水平に削る深目の碗 (推定期14c終末～15c)	高台脇を水平に切る茶碗は広い底からほぼ直線的に開き、口縁で軽く角度を変えて立つ。口縁のくびれは弱い。外底は浅く上げ底風に削る。	
IX類	丸碗 (推定期14c後半～15c)	底部から口縁に丸みをもって立ち上がり、そのまま直口で終わる。	

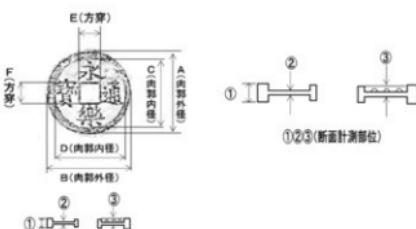
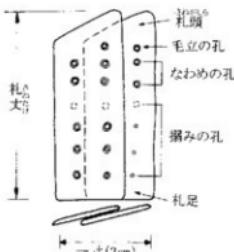
## 2 黒釉天目茶碗の分類

『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(1)』(沖縄県教育委員会平成10年3月発行)より複写掲載。

A. 工具類・生産用具	接続・固定金具	釘・鍔など 蝶番・鍔(飾金具)
	生産用具	刀子・鎌など
B. 装身具		簪・指輪など
C. 祭祀用具		鏡・香炉・鈴・柄杓(銚子)など
D. 生活用具		鍋・鉢
E. 武具	鎧金具(札・八双金物・鎖籠手・骨牌鉄鎖具足など)	
	兜金具(鉢・立物など)	
F. 武器	刀剣(锷・切羽など)	
	石火矢(弾・砲身ほか)	

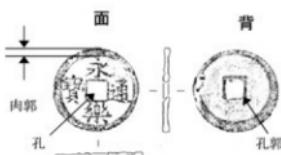
### 3-① 金属製品の分類基準表

『図説 江戸考古学研究事典』(江戸遺跡研究会 柏書房株式会社 2001年4月発行)を参考にして、分類基準表を作成した。  
当該表は『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(II)』(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成21年3月)に掲載。



### 3-② 札の各部の名称

『勝連城跡-北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査-』(勝連町教育委員会 1990年3月発行)上原 静氏作成の図を複写掲載。



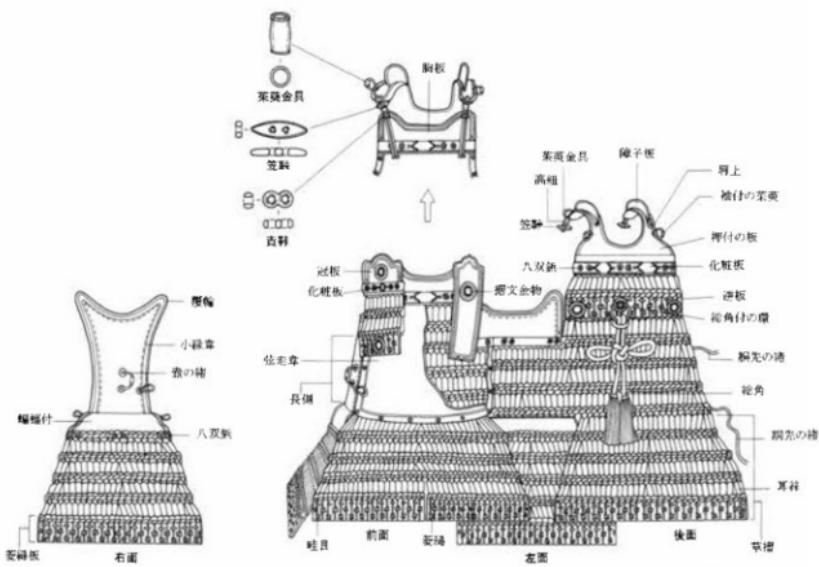
面: 表の意味。背: 裏の意味。  
孔: 穴のこと。穿、好とも言う。四角い穴は「方穿」とも言う。  
郭: 肉(四角の穴の縁)がないものを「無輪郭」と言う。  
孔郭: 穴の縁のこと。内郭、好郭とも言う。  
外郭: 外の縁。輪郭、周郭とも言う。外縁の縁幅が細いものを「細縁」と言い、逆に縁の幅のないものを「闊縁」と言う。

### 3-④ 銭貨の各部名称

『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(II)』(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成21年3月)掲載の「永楽通寶(明:初鋳造年1408年)」の拓影図に「東洋古錢価格図譜例言(和漢泉鑑)」(改訂版 東洋古錢価格図譜)(1975年5月発行)例言より銭貨の用語を掲載。

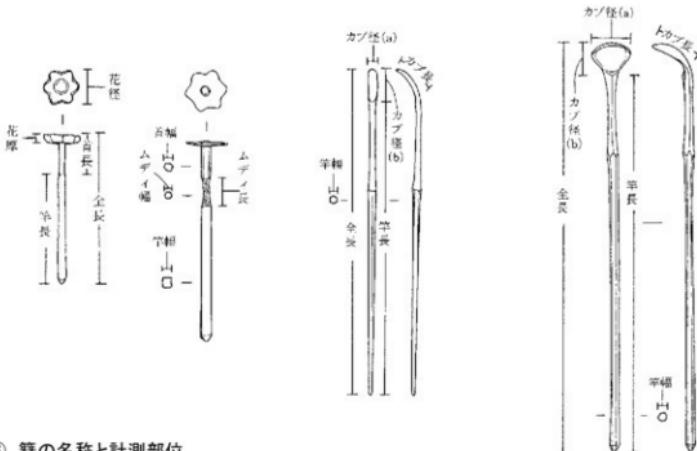


3-⑤a 兜および立物の各部名称



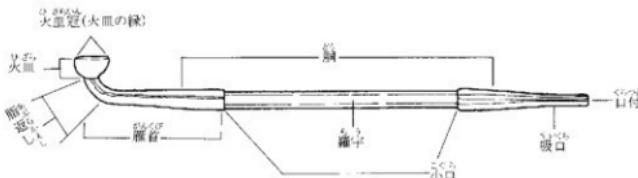
3-⑤b 大鎧の各部名称

3-⑤a 兜および立物の各部名称、3-⑤b 大鎧の各部名称については、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(II)－』(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成21年3月)の掲載図を複写掲載。



### 3-⑥ 筆の名称と計測部位

『与那国島 嘉田地区古墓群－嘉田地区は場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』  
 (沖縄県立埋蔵文化財センター 平成16年3月)の掲載図を複写掲載。



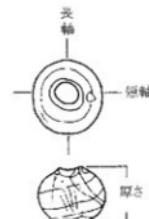
### 3-⑦ 煙管の部位名称

『ヤッチャのガマ カンジン原古墓群－県営かんがい排水事業(カンジン地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』  
 (沖縄県立埋蔵文化財センター 平成13年3月)の掲載図に加筆修正をおこなって作成した。名称については、たばこと塩の博物館「キセル」(1988年発行)を参考にした。

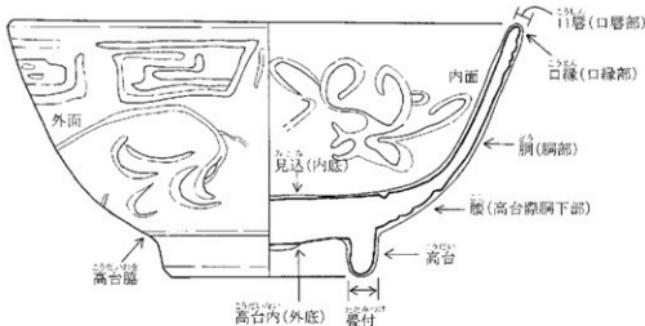
種類	形状	特徴など
I類	○	側面觀が正円、若しくは円形となるもの
II類	□	側面觀が正方形となるもの若しくは扁方形となるもの
III類	△	側面觀が隅丸三角形、若しくはこれに近似するもの
IV類	△	側面觀が楕形時に崩れて歪な形状となるもの
V類	—	火熱を受け崩壊・溶解したガラス玉の塊で不定形となるもの

### 4-a ガラス玉の分類概念

4-a ガラス玉の分類概念・4-b ガラス玉の計測は、『首里城跡一京の内蔵発掘調査報告書(II)』(沖縄県立埋蔵文化財センター平成21年3月)に掲載された分類概念図と図を使用。

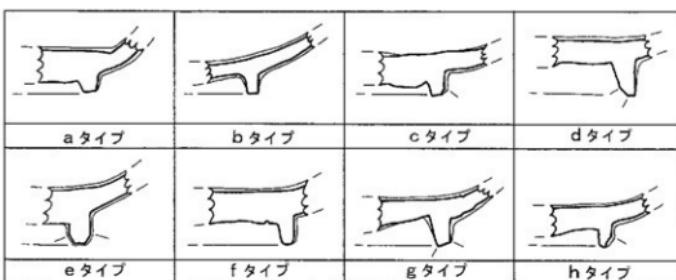


### 4-b ガラス玉の計測



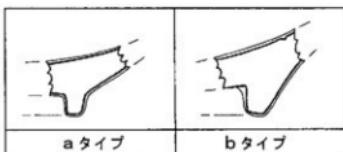
## 5 碗の部位名称

京の内跡出土品の中から「青磁雷文帶碗(14世紀後半～15世紀前半頃)」を図化して、名称を当て嵌めた。



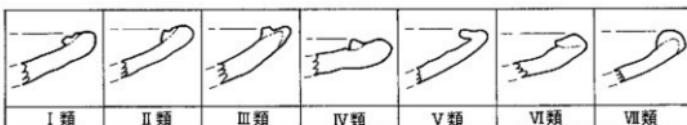
## 6-a 青磁碗の高台分類

主に京の内跡出土品の中から高台資料を抜き出して模式図を作成した。



## 6-b 青磁盤の高台分類

主に京の内跡出土品の中から高台資料を抜き出して模式図を作成した。



## 7 タイ産土器(半練)の蓋縁分類

『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(1)－』(沖縄県教育委員会 平成10年3月発行)より複写し、再編集して掲載。



8-a 明代華南三彩鶴形水注（参考資料：金城龜信撮影）

金城龜信「豊見城村内確認の明代三彩鶴形水注」『文化課紀要』第6号 1990年3月掲載に向けて 1989年に撮影したカラー写真を複写して編集した。



8-b 明代華南三彩鶴形水注（参考資料）

金城亀信「豊見城村内確認の明代三彩鶴形水注」『文化課紀要』第6号 1990年3月掲載した実測図に首里城跡木曳門地区出土の鶴形水注の頭部（県立埋蔵文化財センター調査報告書 第3集 2001年3月発行）を参考にして実測図を修正した。



## 目 次

序

巻首図版

例言

凡例

第Ⅰ章 調査の概要 .....	1
第1節 調査区の設定 .....	1
第2節 事業の体制 .....	2
第3節 調査の経緯 .....	7
第Ⅱ章 遺構 .....	10
第1節 遺構の概要 .....	10
第Ⅲ章 遺物 .....	23
ホ、第V期(16世紀前半~19世紀後半) .....	23
(1)石積みSA06の出土遺物 .....	85
(2)石積みSA13の出土遺物 .....	95
(3)石積みSA15の出土遺物 .....	101
(4)石積みSA21の出土遺物 .....	145
(5)石積みSA23の出土遺物 .....	166
(6)石積みSA31の出土遺物 .....	170
(7)埠敷きSS05の出土遺物 .....	171
(8)B-12・13北側トレンチの出土遺物 .....	205
報告書抄録 .....	209

# 挿図目次

## 図目次

第1図	発掘調査地域	8
第2図	「京の内」跡道構配図およびグリッド設定	9
第3図	遺構全体図	15
第4図	京の内北地区第V期（16世紀前半～19世紀後半）遺構の推定復元	19
第5図	線刻石器の線刻画配置図	25
第6図	線刻石器の拓本	29
第7図	線刻石器の鳳凰と菊花	32
第8図	C-10・11石敷きI期 (SS01・02, SS03-B, SS04-A)・II期 (SS02・SS04-A・B) の推定復元	37
第9図	C-10・11石敷きSS01・02, SS03-B, SS04-A遺構残存の盤根や刻印石の位置図	38
第10図	C-10・11石敷きSS01・02, SS03-B, SS04-A遺構残存の痕跡（1～3: SS01, 5: SS02, 6: SS03-B, 8: SS04-A）と刻印石（4: SS02, 7: SS04-A）	38
第11図	石積みSA06出土品③ 真質土器：1・2、青磁：3～8	87
第12図	石積みSA06出土品② 白磁：1・2、彩釉陶器：3・4、黒釉陶器：5、中国産褐釉陶器：6～8、本土産陶器：9、沖縄産施釉陶器：10、円盤状製品：11、金属製品：12	91
第13図	石積みSA13出土品 土器：1、青磁：2～6、白磁：7・8、タイ産褐釉陶器：9、金属製品：10・11、銭貨：12～13	98
第14図	石積みSA15出土品① 屋瓦：1～4	108
第15図	石積みSA15出土品② 屋瓦：5～7	109
第16図	石積みSA15出土品③ 青磁：1～7	116
第17図	石積みSA15出土品④ 青磁：8～13	117
第18図	石積みSA15出土品⑤ 白磁：1～4、青花：5～8	119
第19図	石積みSA15出土品⑥ 中国産褐釉陶器（1）：1～6	123
第20図	石積みSA15出土品⑦ 中国産褐釉陶器（2）：7～11	124
第21図	石積みSA15出土品⑧ タイ産土器（半縫）：1・2、タイ産炻器：3、タイ産褐釉陶器：4	125
第22図	石積みSA15出土品⑨ 沖縄産無釉陶器：1～3	125
第23図	石積みSA15出土品⑩ 貝製品：1・2、骨製品：3・4、石製品：5、円盤状製品：6～8	127
第24図	石積みSA15出土品⑪ 金属製品：1～7	131
第25図	石積みSA15出土品⑫ 銭貨：1～4、ガラス玉：5	134
第26図	石積みSA21出土品① 屋瓦：1、埠瓦：2・3	146
第27図	石積みSA21出土品② 青磁：1～11	149
第28図	石積みSA21出土品③ 白磁：1・2、青花：3～8、彩釉陶器：9・10、褐釉磁器：11・12、黒釉陶器：13	152
第29図	石積みSA21出土品④ 中国産褐釉陶器：1～9	154
第30図	石積みSA21出土品⑤ タイ産土器（半縫）：1、タイ産褐釉陶器：2・3、本土産磁器：4、沖縄産無釉陶器：5～10	157
第31図	石積みSA21出土品⑥ 貝製品：1・2、石製品：3、円盤状製品：4、金属製品：5・6	161
第32図	石積みSA23出土品 青磁：1・2、青花：3、中国産褐釉陶器：4、タイ産土器（半縫）：5、銭貨：6～168	168
第33図	埠敷きSS05出土品① 陶質土器：1・2、真質土器：3、屋瓦：4	174
第34図	埠敷きSS05出土品② 墉瓦：5・6	175
第35図	埠敷きSS05出土品③ 青磁：1～5、白磁：6、青花：7～11	178
第36図	埠敷きSS05出土品 鶴形水注の実測図はめ込み図	180
第37図	埠敷きSS05出土品④ 彩釉陶器：1～6	181
第38図	埠敷きSS05出土品⑤ 中国産褐釉陶器：1～6	183
第39図	埠敷きSS05出土品⑥ 本土産磁器：1～3	185
第40図	埠敷きSS05出土品⑦ 沖縄産施釉陶器：1～6、紗網產無釉陶器：7・8	188
第41図	埠敷きSS05出土品⑧ 骨製品：1、石製品：2・3、円盤状製品：4・5、金属製品：6～10	192
第42図	埠敷きSS05出土品⑨ 銭貨：1～8	196
第43図	埠敷きSS05出土品⑩ 銭貨：9～12	197
第44図	B-12・13北側トレンチ出土品 彩釉陶器：1、中国産褐釉陶器：2、金属製品：3	206

## 表目次

第1表	平成6(1994)年度「京の内」跡検出遺構件数の新旧関係	7
第2表	切り石積み（区画石積み・御嶽）の外観と内面の関係	13
第3表	平成6年度 京の内地区検出遺構と遺構の時期	14
第4表	線刻石器で確認された線刻文様の拡大写真及び線彫りの実測図と拓本の比較	33
第5表a	県内発見の線刻石板と京の内発見の線刻石器の事例と京の内線刻石器の推定期（知念勇「第三節線刻石器」『北谷町史』第一巻通史編 北谷町教育委員会 平成17年3月より改編・編集）	39
第5表b	県内発見の線刻石板と京の内発見の線刻石器の事例と京の内線刻石器の推定期（知念勇「第三節線刻石器」『北谷町史』第一巻通史編 北谷町教育委員会 平成17年3月より改編・編集）	43
第5表c	県内発見の線刻石板と京の内発見の線刻石器の事例と京の内線刻石器の推定期（知念勇「第三節線刻石器」『北谷町史』第一巻通史編 北谷町教育委員会 平成17年3月より改編・編集）	43
第6表	出土遺物状況	57
第7表①	石積みSA06 出土遺物状況	58
第7表②	石積みSA06 出土遺物状況	59
第8表	石積みSA13 出土遺物状況	60
第9表①	石積みSA15 出土遺物状況	61
第9表②	石積みSA15 出土遺物状況	65
第9表③	石積みSA15 出土遺物状況	69
第9表④	石積みSA15 出土遺物状況	73
第10表①	石積みSA21 出土遺物状況	77
第10表②	石積みSA21 出土遺物状況	78
第10表③	石積みSA21 出土遺物状況	79

第 11 表	石積み SA23	出土遺物状況	80	器観察一覧	151
第 12 表	石積み SA31	出土遺物状況	80	石積み SA21 中国産褐釉陶器観察一覧	153
第 13 表①	埠敷き SS05	出土遺物状況	81	石積み SA21 タイ産土器（半練）・タイ産褐釉陶器・本土産磁器・沖縄産無釉陶器出土状況	155
第 13 表②	埠敷き SS05	出土遺物状況	82	石積み SA21 タイ産土器（半練）・タイ産褐釉陶器観察一覧	155
第 13 表③	埠敷き SS05	出土遺物状況	83	石積み SA21 本土産磁器・沖縄産無釉陶器観察一覧	156
第 14 表	B-12-13 北側トレンチ	出土遺物状況	84	石積み SA21 貝製品・石・石製品・円盤状製品出土状況	158
第 15 表	石積み SA06	瓦質土器・青磁出土状況	85	石積み SA21 金属製品出土状況	158
第 16 表	石積み SA06	瓦質土器・青磁観察一覧	86	石積み SA21 貝製品・石・石製品・円盤状製品観察一覧	159
第 17 表	石積み SA06	白磁・彩釉陶器・黒釉陶器・中国産褐釉陶器・本土産陶器・沖縄産施釉陶器・円盤状製品出土状況	88	石積み SA21 金属製品観察一覧	159
第 18 表	石積み SA06	金属製品出土状況	88	石積み SA21 二次の大火熱溶解鉄貨	160
第 19 表	石積み SA06	二次の大火熱溶解鉄貨	89	石積み SA21 出土遺物状況（図版外）	160
第 20 表①	石積み SA06	白磁・彩釉陶器・黒釉陶器・中国産褐釉陶器観察一覧	89	石積み SA23 青磁・青花・中国産褐釉陶器・タイ産土器（半練）・出土状況	166
第 20 表②	石積み SA06	中国産褐釉陶器・本土産陶器・沖縄産施釉陶器・円盤状製品観察一覧	90	石積み SA23 青磁・青花・中国産褐釉陶器・タイ産土器（半練）・観察一覧	167
第 21 表	石積み SA06	金属製品観察一覧	90	石積み SA23 鉄貨観察一覧	167
第 22 表	石積み SA06	出土遺物状況（図版外）	92	石積み SA23 二次の大火熱溶解鉄貨	167
第 23 表	石積み SA13	グスク土器・青磁・白磁・タイ産陶器陶器出土状況	95	石積み SA23 出土遺物状況（図版外）	169
第 24 表	石積み SA13	金属製品出土状況	95	石積み SA31 出土遺物状況（図版外）	170
第 25 表	石積み SA13	二次の大火熱溶解鉄貨	95	埠敷き SS05 陶質土器・瓦質土器・屋瓦・埠瓦出土状況	172
第 26 表	石積み SA13	土器・青磁・白磁・タイ産褐釉陶器観察一覧	96	埠敷き SS05 陶質土器・瓦質土器・屋瓦・埠瓦観察一覧	173
第 27 表	石積み SA13	金属製品観察一覧	97	埠敷き SS05 青磁・白磁・青花出土状況	176
第 28 表	石積み SA13	鉄貨観察一覧	97	埠敷き SS05 青磁・白花観察一覧	177
第 29 表	石積み SA13	出土遺物状況（図版外）	99	埠敷き SS05 彩釉陶器出土状況	179
第 30 表	石積み SA15	屋瓦・出土状況	103	埠敷き SS05 彩釉陶器観察一覧	179
第 31 表	石積み SA15	屋瓦観察一覧	107	埠敷き SS05 中国産褐釉陶器出土状況	181
第 32 表	石積み SA15	青磁出土状況	111	埠敷き SS05 中国産褐釉陶器観察一覧	182
第 33 表①	石積み SA15	青磁観察一覧	115	埠敷き SS05 本土産磁器出土状況	184
第 33 表②	石積み SA15	青磁観察一覧	117	埠敷き SS05 本土産磁器観察一覧	184
第 34 表	石積み SA15	白磁・青花出土状況	118	埠敷き SS05 沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器出土状況	185
第 35 表①	石積み SA15	白磁観察一覧	118	埠敷き SS05 沖縄産施釉陶器観察一覧	186
第 35 表②	石積み SA15	青花観察一覧	119	埠敷き SS05 沖縄産無釉陶器観察一覧	187
第 36 表	石積み SA15	中国産褐釉陶器・タイ産土器（半練）・タイ窑瓦器・タイ産褐釉陶器出土状況	120	埠敷き SS05 骨製品・石・石製品・円盤状製品出土状況	189
第 37 表①	石積み SA15	中国産褐釉陶器観察一覧	121	埠敷き SS05 金属製品出土状況	189
第 37 表②	石積み SA15	中国産褐釉陶器観察一覧	122	埠敷き SS05 骨製品・石・石製品・円盤状製品出土状況	190
第 38 表	石積み SA15	タイ産土器（半練）・タイ産炻器・タイ産褐釉陶器観察一覧	125	埠敷き SS05 球形刻石器・円盤状製品観察一覧	190
第 39 表	石積み SA15	沖縄産無釉陶器出土状況	126	埠敷き SS05 金属製品観察一覧	191
第 40 表	石積み SA15	沖縄産無釉陶器観察一覧	126	埠敷き SS05 ガラス玉・プラスチックひねりこま出土状況	193
第 41 表	石積み SA15	貝製品・骨製品・石・石製品・円盤状製品出土状況	127	埠敷き SS05 鉄貨観察一覧	194
第 42 表	石積み SA15	貝製品・骨製品・石製品・円盤状製品観察一覧	128	埠敷き SS05 鉄貨観察一覧	195
第 43 表	石積み SA15	金属製品出土状況	130	埠敷き SS05 ガラス玉観察一覧	195
第 44 表①	石積み SA15	金属製品観察一覧	130	埠敷き SS05 こま（図版のみ）観察一覧	195
第 44 表②	石積み SA15	金属製品観察一覧	131	埠敷き SS05 出土遺物状況（図版外）	197
第 45 表	石積み SA15	二次の大火熱溶解鉄貨	132	埠敷き SS05 出土遺物状況	205
第 46 表	石積み SA15	ガラス玉出土状況	132	B-12-13 北側トレンチ 金属製品出土状況	205
第 47 表	石積み SA15	鉄貨観察一覧	133	B-12-13 北側トレンチ 彩釉陶器・中国産褐釉陶器観察一覧	206
第 48 表	石積み SA15	ガラス玉観察一覧	133	B-12-13 北側トレンチ 金属製品観察一覧	206
第 49 表	石積み SA15	出土遺物状況（図版外）	135	B-12-13 北側トレンチ 二次の大火熱溶解鉄貨	208
第 50 表	石積み SA21	屋瓦・埴瓦・出土状況	145	B-12-13 北側トレンチ 出土遺物状況（図版外）	208
第 51 表	石積み SA21	屋瓦・埴瓦観察一覧	146		208
第 52 表	石積み SA21	青磁出土状況	147		
第 53 表	石積み SA21	青磁観察一覧	148		
第 54 表	石積み SA21	白磁・青花・彩釉陶器・褐釉磁器・黒釉陶器・中国産褐釉陶器出土状況	150		
第 55 表①	石積み SA21	白磁観察一覧	150		
第 55 表②	石積み SA21	青花・彩釉陶器・褐釉磁器・黒釉陶			

## 図版目次

卷首図版 1	1945 年 4 月 2 日 米軍撮影 (CV20-103-63) の首里 城周辺	
卷首図版 2	首里城平面図	
卷首図版 3	2009 年首里城跡の航空写真	
卷首図版 4	首里城跡周辺地形図	
卷首図版 5	石積み SA15 出土の大和系鬼瓦模倣の眉 (15 世紀 後半～16世紀) と崎山御庭遺跡出土の大和系鬼瓦 (15世紀中頃～以降)	
卷首図版 6	上段：中国南宋の 1131 年鑄造の「紹興元寶」裏側 に三日月文様の「背月上」下段：博敷き SS01 出土 の線刻石器	
卷首図版 7	線刻石器の拡大①	
卷首図版 8	線刻石器の拡大②	
図版 1	線刻石器	29
図版 2	線刻石器の拡大①	30
図版 3	線刻石器の拡大②	31
図版 4	線刻石器の拡大③	32
図版 5	新聞資料①	55
図版 6	新聞資料②	56
図版 7	石積み SA06 出土品① 瓦質土器：1・2、青磁：3～8 ..... 93	
図版 8	石積み SA06 出土品② 白磁：1・2、彩釉陶器：3～4、 黒釉陶器：5、中国産褐釉陶器：6～8、本土産陶器：9、 沖縄産施釉陶器：10、円盤状製品：11、金属製品：12 ..... 94	
図版 9	石積み SA13 出土品 土器：1、青磁：2～6、白磁：7～8、 タイ産褐釉陶器：9、金属製品：10・11、銭貨：12～100	
図版 10	石積み SA15 出土品①・② 屋瓦：1～7	139
図版 11	石積み SA15 出土品③・④ 青磁：1～13	140
図版 12	石積み SA15 出土品⑤ 白磁：1～4、青花：5～8 ..... 141	
図版 13	石積み SA15 出土品⑥ 中国産褐釉陶器：1～6	141
図版 14	石積み SA15 出土品⑦ 中国産褐釉陶器：7～11	142
図版 15	石積み SA15 出土品⑧ タイ産土器 (半練)：1・2、 タイ産炻器：3、タイ産褐釉陶器：4	142
図版 16	石積み SA15 出土品⑨ 沖縄産無釉陶器：1～3	142
図版 17	石積み SA15 出土品⑩ 貝製品：1・2、骨製品：3・4、 石製品：5、円盤状製品：6～8	143
図版 18	石積み SA15 出土品⑪ 金属製品：1～7	144
図版 19	石積み SA15 出土品⑫ 銭貨：1～4、ガラス玉：5 ..... 144	
図版 20	石積み SA21 出土品⑬ 屋瓦：1、博瓦：2・3	161
図版 21	石積み SA21 出土品⑭ 青磁：1～11	162
図版 22	石積み SA21 出土品⑮ 白磁：1・2、青花：3～8、 彩釉陶器：9・10、褐釉陶器：11・12、黒釉陶器：13 ..... 163	
図版 23	石積み SA21 出土品⑯ 中国産褐釉陶器：1～9	
図版 24	石積み SA21 出土品⑰ タイ産土器 (半練)：1、タイ 産褐釉陶器：2・3、本土産磁器：4、沖縄産無釉陶器： 5～10	164
図版 25	石積み SA21 出土品⑯ 貝製品：1・2、石製品：3、 円盤状製品：4、金属製品：5・6	165
図版 26	石積み SA23 出土品 青磁：1・2、青花：3、中国産 褐釉陶器：4、タイ産土器 (半練)：5、銭貨：6～168	
図版 27	博敷き SS05 出土品①・② 陶質土器 1・2、瓦質土器： 3、屋瓦：4、博瓦：5・6	198
図版 28	博敷き SS05 出土品③ 青磁：1～5、白磁：6、青花： 7～11	199
図版 29	博敷き SS05 出土品④ 彩釉陶器 盆：1、鶴形・鶴形 水注：2、鶴形水注：3～6	199
図版 30	博敷き SS05 出土品⑤ 中国産褐釉陶器：1～6	200
図版 31	博敷き SS05 出土品⑥ 本土産磁器：1～3	200
図版 32	博敷き SS05 出土品⑦ 沖縄産施釉陶器：1～6、沖縄 産無釉陶器：7・8	201
図版 33	博敷き SS05 出土品⑧ 骨製品：1、石製品：2・3、円 盤状製品：4・5、金属製品：6～10	202
図版 34	博敷き SS05 出土品⑨ 銭貨：1～8	203
図版 35	博敷き SS05 出土品⑩ 銭貨：9～12、ガラス玉： 13、こま (プラスチック製品)：14	204
図版 36	B-12-13 北側トレンチ出土品 彩釉陶器：1、中国産 褐釉陶器：2、金属製品：3	207

# 第Ⅰ章 調査の概要

## 第1節 調査区の設定

調査区の設定に関する詳細については『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－平成6年度調査の遺構編』（註1）を参照されたい。併せて調査区の設定の概略については『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－』（註2）及び『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（V）－』（註3）を参照されたい。

本節では、平成23年度報告書の調査区の設定を再度掲載した。

平成6年度の京の内跡の発掘調査地区は、第1章第1節、第3節でも記したように京の内北地区2,000mが発掘調査の対象となった。首里城およびその周辺の地下には、昭和20（1945）年のアジア・太平洋戦争末期に起きた沖縄戦の際に第32軍司令部壕が昭和19（1944）年に構築されたことにより米軍の集中砲火を受けている事から事前に調査区内に不発弾等の有無確認を目的とした磁気探査を実施し、磁気異常箇所の有無を確認後に本格的な発掘調査を平成6（1994）年11月21日から開始して、平成7（1995）年の3月28日までの約5ヶ月間実施した。

発掘調査で検出された遺構のプランを基に京の内の復元整備の計画がなされるため遺構保護を目的として、調査地区内全域に保護砂の白砂を厚さ10cm～15cmを敷きならした後に周土で埋め戻した。

埋め戻しによって遺構の位置関係が直接的に把握できなくなるので、調査地区及びその周辺に基準点測量の三点（基-1、基-2、基-3）を測量業務に委託した。基準点の成果は下記のとおりである。

X = 23622.856	X = 23594.909	X = 23606.382
基-1 Y = 21998.541	基-2 Y = 21985.276	基-3 Y = 22047.613
H = 125.009 m	H = 126.486 m	H = 125.054 m

グリッドの設定（第2図）は、1グリッドの規模が10m×10mを単位とした。基準となった杭は、下之御庭の南側にあった東西に延びるコンクリート製側溝の南側縁より50cmの地点に基準杭A-11を設定した。以下、側溝と平行せながら東西方向に10m間隔でA-12からA-17の杭を設定した。南北方向には基準杭A-11からA-17を視認し、これを軸線としてA-17からW90° 0' 00"Sに振って10m間隔でB-11・C-11・D-11の杭を設置し、グリッド番号は東から西へ10・11・12…と数字を冠した。グリッドの記号はアルファベットを採用し、北から南へA・B・C…とした。グリッド名は記号と番号を組み合わせてA-10・B-10…と標記した。なお、グリッド名はグリッド内の東南隅の杭に冠して、将来的調査に使用できるように設定した。

基準杭A-11とA-17を結ぶ軸線（南北基準座標軸N° 19' 00" Wに偏る座標軸）からW180° 0' 00"Eへ振って、A-11から東側へ170cmの箇所にある奉神門基壇と丁度かち合うように基準杭A-11を設定した。

調査地区的A-11（北東）、A-17（北西）、D-10（南東）、D-18（南西）の4点のX座標とY座標について、写真測量図の読み取りから下記の結果が得られた（第2図）。

A-11 (X = 23604.474 Y = 22047.078)	A-17 (X = 23623.565 Y = 21990.239)
D-10 (X = 23572.885 Y = 22047.018)	D-18 (X = 23598.267 Y = 21971.191)

その他、A-11から東側にある奉神門基壇とかち合う接点（170cm）から奉神門南側階段がとり付けられた基壇（階段南側縁と基壇との接点）までの直線距離は6mと判読した。

## 註文献

1. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第56集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－平成6年度調査の遺構編』沖縄県立埋蔵文化財センター平成23（2011）年3月。
2. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第62集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－平成6年度調査の遺物編（1）』沖縄県立埋蔵文化財センター平成24（2012）年3月。
3. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第73集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（V）－平成6年度調査の遺物編（2）』沖縄県立埋蔵文化財センター平成26（2014）年3月。

## 第2節 事業の体制

京の内跡の発掘調査は、平成6（1994）年度～平成8（1996）年度までの三ヵ年以下に記した体制で実施した。資料整理については今回の報告書刊行に係った平成28（2016）年度に限定して、下記のような体制で実施した。なお、職名等は当該年度のものを表記した。

### ◎ 平成6（1994）年度 組織（遺構調査年度）

- 事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 嘉陽 正幸
- 事業所管 沖縄県教育庁文化課 課長 西平 守勝  
同 上 副参事 上原 武次
- 事業総括 同 上 課長補佐 知念 勇  
同 上 課長補佐 新垣 末子
- 事業事務 沖縄県教育庁文化課 管理係 係長 比屋根 正治  
同 上 " 主査 新垣 和子  
同 上 " 副主査 新崎 文子  
同 上 " 副主査 宮城 直子  
同 上 " 主事 伊波 盛治
- 事業実施 沖縄県教育庁文化課 埋蔵文化財係 係長 大城 慧  
同 上 " 主任専門員 岸本 義彦  
同 上 " 主任 岩袋 洋  
同 上 " 専門員 長嶺 均・専門員 金城 透  
同 上 " 指導主事 西銘 章  
同 上 埋蔵文化財係史跡整備班 班長 上原 靜（発掘総括者）  
同 上 " " 指導主事 運天 和夫  
同 上 " " 指導主事 我那覇 念  
同 上 " " 主任 盛本 煉  
同 上 " " 主任 金城 亀信（発掘担当者）  
同 上 " " 調査嘱託員 高宮とり・渡邊尚子

### ○ 専門調査指導・助言（遺構調査、資料整理 平成6年度～平成8年度）

- 文化庁記念物課 調査係 整備部門 主任文化財調査官 田中哲雄 平成6年  
同 上 " 史跡部門 文化財調査官 伊東正義 平成7年  
同 上 " 史跡部門 文化財調査官 増渕 徹 平成8年

奈良国立文化財研究所 元所長 坪井清足（平成6年）

同 上 飛鳥藤原宮跡発掘調査部 元部長 牛川喜幸（庭園 平成6年）

中国福建省文化庁文物所 副所長 鄭 國 珍（陶磁器・城郭 平成7・8年）

福建省博物館 副研究員 楊 琮（陶磁器・城郭 平成6年）

ベトナム 国立ハノイ考古学研究所 主任研究員 チン・カオン・トゥホー（Trinh Cao Tuong）

カナダ タロント大学 教授 リチャード・ピアソン（R.J.Pearson）

九州大学 文学部 教授 西谷 正（城郭 平成7年）

専修大学 文学部 教授 亀井明徳（陶磁器 平成6年）

愛媛大学 法文学部 助教授 村上恭通（鉄製品 平成8年）

東京外国语大学 専任講師 小川英文（フィリピン・東南アジア考古学 平成6年）

青山学院大学 文学部 教授 田村晃一（考古学 平成6年）

熊本大学 法文学部 元教授 白木原和美（考古学 平成6年）

鹿児島大学 法文学部 教授 上村俊雄（考古学 平成6年）

名古屋大学 文学部 教授 渡邊 誠（考古学 平成7年）

沖縄国際大学 文学部 教授 高宮廣衛（考古学 平成6・8年）

- ノルウェー科学アカデミー 博士 トゥール ハイエルダール (Thor Heyerdahl) (平成 8 年)  
 鎌倉考古学研究所 所長 手塚直樹 (陶磁器 平成 8 年)  
 漆器文化財科学研究所 所長 四柳嘉章 (漆器 平成 6 年)  
 冲縄県指定無形文化財保持者 前田孝允 (琉球漆器 平成 6 年)  
 冲縄県文化財保護審議会 委員長 嵩元政秀 (史跡・名勝・考古学 平成 6 年)  
 冲縄県文化財保護指導委員 玉津博克 (史跡・名勝 平成 6・7 年)  
 福岡市美術館 学芸員 尾崎直人 (タイ・ベトナム陶磁 平成 7 年)  
 福岡市教育委員会 埋蔵文化財係 主事 佐藤一郎 (陶磁器 平成 8 年)  
 宇佐市教育委員会 文化課 文化財係 技師 江藤和幸 (史跡・考古学 平成 8 年)  
 浦添市美術館 学芸員 金城聰子 (漆器 平成 6 年～8 年)  
 那覇市教育委員会 文化課 課長 金武正紀 (陶磁器・考古学・史跡 平成 6 年～8 年)  
 同 上 " 主査 島 弘 (考古学 平成 6～8 年)  
 同 上 " 主事 玉城安明・主事 仲宗根 啓 (考古学 平成 6・7 年)  
 那覇市教育委員会 壺屋焼物博物館準備室 室長 渡名喜 明 (美術・工芸 平成 7・8 年)  
 同 上 非常勤学芸員 我部太郎 (美術史 平成 7・8 年)  
 北谷町教育委員会 文化課 主事 山城安生 (考古学 平成 6 年)  
 南風原町教育委員会 文化課 学芸員 上地克哉 (考古学 平成 6 年～8 年)  
 玉城村教育委員会 社会教育課 主事 西平 剛 (史跡・考古学 平成 6 年～8 年)  
 糸満市教育委員会 文化課 主事 湖城 清 (考古学 平成 7 年)  
 同 上 " 主事補 大城一成 (考古学 平成 7 年)  
 中城村教育委員会 生涯学習課 主事 渡久地 真 (史跡・考古学 平成 6 年)  
 今歸仁城跡整備研究委員会 委員 名嘉正八郎 (歴史 平成 7 年)  
 同 上 委員 赤嶺和男 (建築 平成 8 年)  
 財団法人 沖縄県文化振興会 史料編集室 主幹 安里嗣淳 (考古学 平成 6～8 年)  
 冲縄県立博物館 学芸課長 當眞嗣一 (史跡・考古学 平成 6 年)  
 琉球大学 元教授 仲松弥秀 (民俗・地理学 平成 7 年)  
 法政大学 文学部 元教授 外間守善 (国文学 平成 6 年)  
 琉球大学 法文学部 教授 池宮正治 (国文学 平成 6～8 年)  
 琉球大学 法文学部 教授 高良倉吉 (歴史学 平成 6～8 年)  
 浦添市教育委員会 文化課 主幹 安里 進 (考古学 平成 8 年)  
 琉球大学 法文学部 教授 池田栄史 (考古学 平成 6・7 年)  
 基山町教育委員会 係長 山田 正 (史跡・考古学 平成 8 年)
- 聞き取り調査および情報提供者 (平成 6～8 年度)
- 阿波根直盛・新垣幸有・石川逢仁・上江洲安英・上間秀政・大城宜英・我喜屋宗徳・我喜屋 満・桂 辰哉・小橋川興永・島 秀範・城間富吉・高江洲良吉・田場典喜・仲本政治・真栄平房敬・宮城盛長・屋嘉比朝勇・屋比久益貞・首里城復元期成会・琉球大学
- 発掘調査協力者 (遺構実測など 平成 6～8 年度)
- 県教育庁文化課 埋蔵文化財係 主任 島袋 洋・金城 透 (平成 6～8 年)  
 同 上 " 指導主事 西銘 章 (平成 6 年)  
 県教育庁文化課 埋蔵文化財係 嘴託調査員 新城 恵・田中ゆきの・仲座久宜 (平成 6・7 年)  
 同 上 " " 上原清乃・仲與根ゆかり (平成 6～8 年)  
 同 上 " " 仲間留美・又吉純子 (平成 6～8 年)  
 同 上 " " 長田 剛 (平成 7・8 年)  
 県教育庁文化課 史跡整備係 嘴託調査員 矢沢秀雄 (平成 6～8 年)  
 同 上 " " 上原 久 (平成 6・7 年)  
 石垣市教育委員会 文化課 主事 島袋綾野 (平成 6 年)  
 下地町教育委員会 文化財係 主事 川満邦弘 (平成 7 年)

○ 発掘調査作業員(平成6年度)

呉屋正一・小波津夏子・山畠キミ・玉城富子・呉屋光子・大城輝子・小波津ヨシ子・幸地ヨシ子・小橋川恵子・小橋川幸子・永吉弘子・小湾清美・仲程喜美子・川鍋敬子・福嶺フミ子・仲里ハル子・玉城信子・嘉数キミエ・呉我フジ子・新垣美智子・中田邦子・嘉手納 太・諸見里幸子・島袋文子・松本倫子・柚木崎未子・堀切邦子。琉球大学 学生 米須美津・北谷 香・比嘉宮子・神里利恵子。富山大学 学生 古屋聰洋。

○ 発掘調査協力者(平成6年度)

金成淳一・松本 茂(以上2名 富山大学 学生)。山本 昭(奈良大学 学生)。

松竹 讓・喜屋武盛世・宮里富二男(以上3名 松竹重機)。澤崎直彦(与那嶼測量設計)

国営沖縄記念公園事務所 首里出張所・海洋博覧会記念公園 管理財团首里城管理センター

○ 資料整理作業員(平成6年度)

安和千代子・平良貴子・外間 瞳・島袋春美・金城礼子・西銘バトロシニア・仲村恒子・島 京美・備瀬枝美子・庵間味美津子・立津春枝・島袋里美・喜屋武さおり・源河秀子・玉城恵美利・知念純子・石嶺眞由美・新垣千恵子・川満奈美子・喜倉場かおり・高良三千代。

別府大学 学生 城間 肇。

○ 平成7(1995)年度 組織 (遺構調査年度)

○ 事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 仲里 長和

○ 事業所管 沖縄県教育庁文化課 課長 西平 守勝

同 上 副参事 濱比嘉 勝

○ 事業総括 同 上 課長補佐 日越 国昭

同 上 課長補佐 新垣 末子

○ 事業事務 沖縄県教育庁文化課 管理係 主幹兼係長 比屋根 正治

同 上〃 主査 新垣 和子

同 上〃 副主査 宮城 直子

同 上〃 副主査 新崎 文子

同 上〃 主事 伊波 盛治

○ 事業実施 沖縄県教育庁文化課 史跡整備係 係長 上原 靜(発掘総括者)

同 上〃 指導主事 運天 和夫

同 上〃 指導主事 我那覇 念

同 上〃 主任 盛本 煲

同 上〃 主任 金城 亀信(発掘担当者)

同 上〃 嘴託調査員 高宮 とり・渡邊 尚子

○ 事業協力 沖縄県教育庁文化課 埋蔵文化財係 係長 大城 譲

沖縄県教育庁文化課 埋蔵文化財係 主任 島袋 洋

沖縄県教育庁文化課 埋蔵文化財係 指導主事 西銘 章

同 上〃 専門員 金城 透

○ 発掘調査作業員(平成7年度)

大城輝子・仲程喜美子・永吉弘子・島袋文子・福嶺フミ子・仲里春子・玉城信子・小波津ヨシ子・

柚木崎未子・城間智子・呉屋正一・小波津夏子・山畠キミ・呉屋光子・幸地ヨシ子・玉城富子・

小橋川恵子・小橋川幸子。

別府大学 学生 城間 肇、琉球大学 学生 米須美津・富山大学 学生 金成淳一・松本 茂、

沖縄国際大学 学生 上原 久

○ 資料整理作業員(平成7年度)

伊波小百合・新垣千恵子・石橋朝子・小嶺禮子・浜元春江・又吉純子・仲間留美・大村広美・高良三千代・玉城恵美利・安和千代子・平良貴子・金城 薫・知念純子・岡村綾子・上原園子・外間 瞳・津波古好子・比嘉登美子・折田衣代・金城美折・金城さおり・長田 剛・伊波和歌子・又吉亞由美

◎ 平成 8 (1996) 年度 組織 (遺構調査年度)

○ 事業主体	沖縄県教育委員会	教 育 長	仲里 長和
○ 事業所管	沖縄県教育庁文化課	課 長	大城 将保
	同 上	副 參 事	川満 一成
○ 事業総括	同 上	課長補佐	日越 国昭
	同 上	課長補佐	稻垣 靖子
○ 事業事務	沖縄県教育庁文化課	管 理 係	主幹兼係長 比屋根 正治
	同 上	"	主 査 村山 佐代
	同 上	"	副 主 査 新垣 敏子
	同 上	"	主 任 當間 保智
	同 上	"	主 事 上原 直樹
○ 事業実施	沖縄県教育庁文化課	史跡整備係	係 長 上原 靜 (発掘総括者)
	同 上	"	指導主事 運天 和夫
	同 上	"	指導主事 我那覇 念
	同 上	"	主 任 盛本 煉
	同 上	"	主 任 金城 亀信 (発掘担当者)
	同 上	"	嘱託調査員 高宮 とり・渡邊 尚子
	同 上	"	嘱託調査員 矢沢 秀雄・稻垣 千明
○ 事業協力	沖縄県教育庁文化課	埋蔵文化財係	係 長 大城 慧
	同 上	"	主 任 島袋 洋
	同 上	"	指導主事 比嘉 聰
	同 上	"	専 門 員 長嶺 均・金城 透
	同 上	"	専 門 員 上地 博・仲座 久宜

○ 発掘調査作業員 (平成 8 年度)

大城輝子・仲程貴美子・永吉弘子・小波津ヨシ子・桃原隆信・瑞慶覧長祐・瑞慶覧繁美・真栄城千枝子・宮城澄子・中原ミツ子・安次富マサ子・諸見里幸子・金城和也・城間肇・山本正昭・喜舎場盛安・安次富正寿・桃原佐恵美・仲村トヨ子・山内利江子・小松博幸・中塚末子・與我フジ子・宮国恵子・与那嶺勢津子・大城愛子・大城かおる・外間徳男

○ 資料整理作業員 (平成 8 年度)

米田愛子・知念純子・岡村綾子・新垣千恵子・伊波小百合・嘉数禮子・金城 薫・備瀬枝美子・浜元春江・玉寄智恵子・石橋朝子・石垣奈美・津波昭史・島袋春美・仲宗根三枝子・城間千鶴子・田場直樹・當山慶子・金城美祈・我那覇悠子・比嘉孝子

◎ 平成 28 (2016) 年度 組織 (『京の内発掘調査報告書 (VI)』報告書刊行年度)

○ 事業主体	沖縄県教育委員会	教 育 長	平敷 昭人
	同 上	教育管理統括監	宜野座 茜
	同 上	教育指導統括監	與那嶺 善通 (文化財関係担当統括監)
	同 上	参 事	新垣 悅男 (文化財関係担当参事)
○ 事業総括	沖縄県教育庁文化課	課 長	萩尾 俊章
○ 事業事務	沖縄県教育庁文化課	管 理 班 班 長	稻垣 盛之
	同 上	" 主 査	多和田 友紀
	同 上	" 主 任	仲宗根 基希
○ 事業事務	沖縄県教育庁文化課	記念物班 班 長	上地 博
	同 上	" 指導主事	神村 智子
	同 上	" 主任専門員	羽方 誠
○ 事業実施	沖縄県立埋蔵文化財センター	所 長	金城 亀信 (資料整理・報告書作成担当)
	同 上	副参事	濱口 寿夫

沖縄県立埋蔵文化財センター 総務班 班長 比嘉 智尋 (事業予算総括)  
 同 上 " 主査 新里 靖  
 同 上 " 主査 比嘉 瞳  
 同 上 " 主任 糸数 晃子  
 同 上 " 事務補助員 親川 亜希・照屋 美奈子・平安 緑  
 同 上 調査班 班長 仲座 久宜 (事業業務総括)  
 同 上 " 主任専門員 新垣 力・主任専門員 山本正昭 (事業担当)  
 同 上 " 主任 宮城 淳一 (事業担当)

○ 資料整理指導 (平成28年度)

京都国立博物館 名譽館員 (元工芸室長)・畠山学院 教授 久保 智康 (天台宗 寂安寺 住職)

国立大学法人 熊本大学 文学部 教授 小畠 弘己 (文学博士)

国立大学法人 琉球大学 法文学部 人間科学科 地理歴史人類学 教授 池田 榮史

沖縄国際大学 総合文化学部 社会文化学科 教授兼任南島文化研究所 所長 上原 静

下関市立大学経済学部 教授 櫻木 晋一 (銭貨、「背上月」のある紹興元寶)

おきなわ石の会 会長 大城 逸郎 (線刻石器の石質鑑定)

○ 資料整理作業及び協力者 (平成28年度)

沖縄県教育庁文化財課 記念物班 主任専門員 知念 隆博 (金属製品:軟X線写真撮影)

沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班 主任 大堀 皓平 (褐釉陶器の構造:圧痕レプリカ法)

同 上 "	史跡・埋蔵文化財調査員	久場 大暉・平良 和輝・眞謝 太地
同 上 "	埋蔵文化財資料整理員	安里 綾子・石川 彩乃・大城 友理華
同 上 "	"	下里 利美・砂川 みなみ・仲村 綾乃
同 上 "	"	宮城 友美・宮里 美也子

株式会社 アーキジオ パシフィック支店 主任専門員 天久 朝海

同 上 "	資料整理作業員	伊藤 恵美利・平良 貴子
-------	---------	--------------

同 上 "	"	瑞慶覧 尚美・又吉 純子
-------	---	--------------

○ 埋蔵文化財資料整理員

池宮城 真子・伊集 左季・嘉数 渚・金城 礼子・下地 勝恵・城間 彩香・玉那霸 美野・知名 雪美・

手嶋 永子・當間 郁子・仲里 由利・花城 咲子・比嘉なおみ・比屋根 沙耶香・平安 百合子・外間太一朗・嶺井 多津美・宮城 綾子・宮城かの子

○ 資料整理作業員 工藤 孝美・富山 由貴・友利 江梨香

### 第3節 調査の経緯

平成6（1994）年度の調査の経緯についての詳細は、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（III）－』（沖縄県立埋蔵文化財センター 平成23（2011）年3月）（註1）を、調査の経緯についての概要是『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（IV）－』（註2）及び『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（V）－』（註3）を併せて参照されたい。本節では、前記報告書（IV）・（V）から調査の経緯を再度掲載した。

平成6（1994）年度に実施した首里城京の内跡の発掘調査は、同年11月21日から着手し、翌年の3月28日までの約5ヶ月間にわたって実施した（第1図下段）。

調査地区的発掘前の状況は、平成4（1992）年の首里城正殿、北殿、南殿、奉神門、廣福門などの復元整備が完了し、首里城公園として一部が開園した。開園に伴って京の内地域は、北側の下之御庭から南側の斜面地まで客土がなされ、全面に芝張りで暫定的な仮整備がおこなわれていた。客土は琉球大学の基礎跡より上になされていて、調査は仮整備の芝の除去から始まり、次に客土の除去をバックホウでおこない琉球大学の旧地表面まで剥ぎ取った後に磁気探査をおこなった。磁気探査の結果、琉球王国時代の遺物や沖縄戦で使用された不発弾等は検出されなかった。

この時点で磁気探査を終了したが、琉大地盤を東側から西側へバックホウで慎重に旧表土を削平しながら掘り下げたところ手榴弾4発、砲弾2発が検出された為、関係機関に連絡を入れて処理を依頼した。その後、遺構内の崩れた栗石を手作業による除去をおこなっていた調査員が持ち上げた石の下から完形の信管付の不発弾が見つかり、警察署をとおして自衛隊へ不発弾の処理を依頼した。

このような状況で琉球王国当時の地表面と首里第一尋常高等小学校（明治45年～昭和20年：1912年～1945年）当時の地盤までバックホウや手掘りで掘り下げたが、調査地区的南側半分は琉球大学校舎（短大管理棟、理科実験室、教育校舎及び同ビル別館、法文校舎及び同ビル別館Bなど）建築の際の造成により琉球石灰岩の掘削や削平がなされ、遺構の残り具合は悪かった。逆に北側は琉大校舎地盤のレベルより低い地域は、道路、中庭、各校舎への通路と利用されたことと校舎などの構築物が建設される事がなかった事が幸いして、旧表土レベルでの軽微な擾乱を受けている程度で、全体的に遺構の保存状態は良好であった。遺構検出に際しては、遺構直上までバックホウで慎重に削平しながら遺構を確認しながら掘り下げた。この辺はオペレーターの技術と経験が生かされ5cm前後の誤差で剥ぎ取りが可能となり、調査がスムーズに進行していった。遺構直上より下部の発掘調査は、人力による手作業で遺構を露出させながら掘り下げていった。

遺構の検出に際しては確認され次第、第2図のように遺構の形状などから記号と番号を検出順に冠していく。また、遺構の性格や時期を具体的に把握する目的で、遺構沿いにトレーンチを入れながら発掘調査を進行させた。結果として検出された遺構は51基（調査終了時点で、遺構番号に重複が発生）を数えた（註4）。その後、遺構の整理（途切れた石積み遺構同士が繋がり一つの遺構として整理、SA19・SA20・SA28が土壙SK01の倉庫跡となるなど）と検討をすすめたところ平成12（2000）年度の段階で39基（註5）となつた（第1表）。

第1表 平成6（1994）年度「京の内」跡検出遺構件数の新旧関係

NO.	種類	遺構の記号と番号	旧件数（1994年時点）	新件数（2000年時点）
1.	石積み	SA01～SA27・SA29～SA34	33基	17基
2.	石列	SR01・SR02	2基	2基
3.	石敷き・埠敷き	SS01～SS03	3基	6基
4.	溝	SD01～SD07	7基	10基
5.	土壙	SK01～SK03	3基	3基
6.	建物	SB01・SB02	2基	1基
7.	階段	SA28	1基	0基
遺構合計			51基	39基

これらの遺構発掘調査で約5ヶ月を要した。

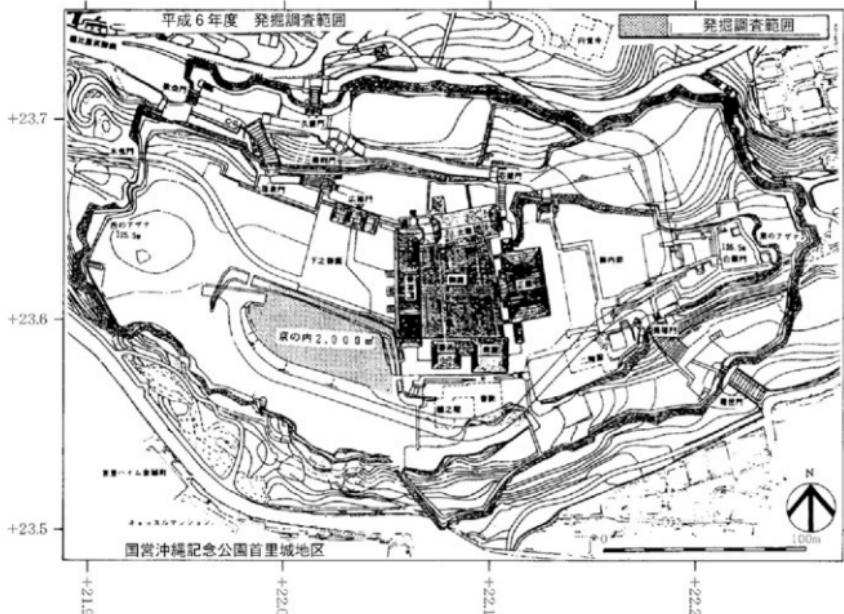
平成6(1994)年に実施した京の内北地区(約2,000m<sup>2</sup>)の埋め戻しは、平成8(1996)年2月29日に遺構や往時の面を保護するために白砂を15cm前後の厚さで岩盤の石灰岩を含む調査区2,000m<sup>2</sup>に敷いて、その上に残土を50~70cmの厚さで盛って埋め戻した。この埋め戻しに際しては、重機(バックホウ、タイヤショベル、ローラー)を使用するため、埋め戻しの方法について協議しながらおこなった。遺構面については調査員立ち会いのもとで人力による埋め戻しを実施した。

### 註文文献

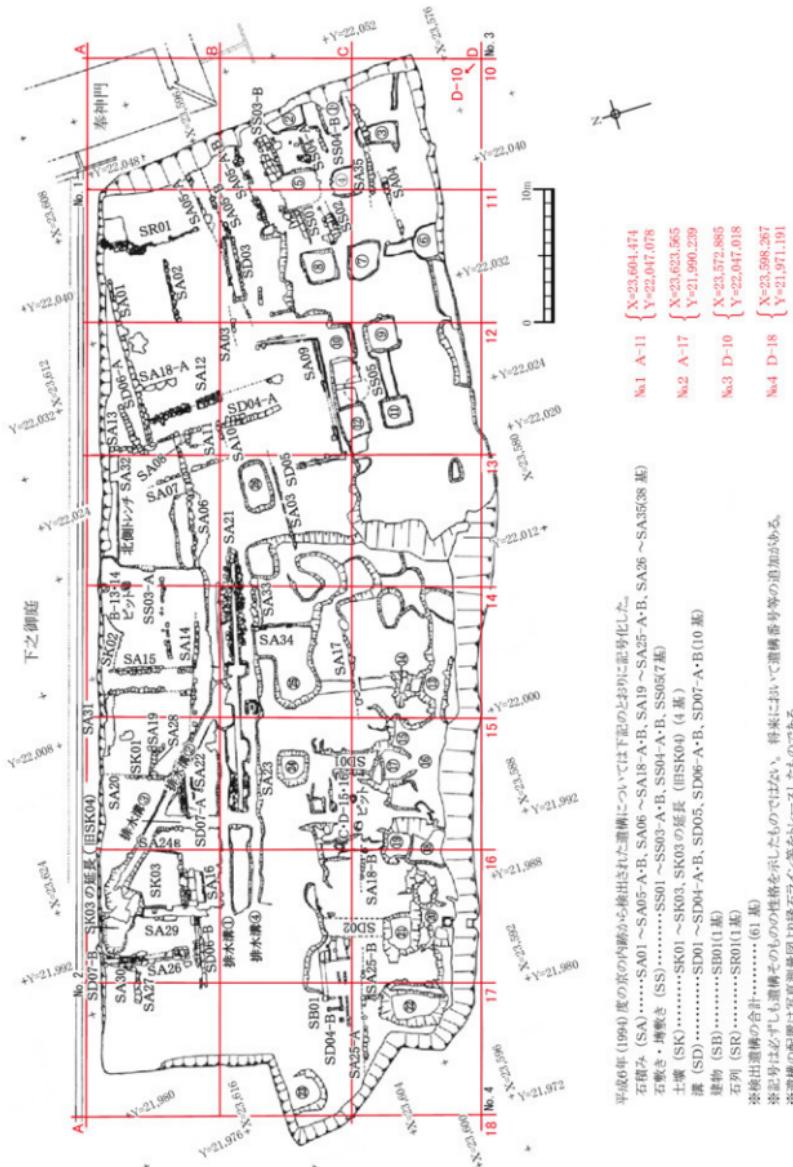
- 註1. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第56集『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(Ⅲ)-平成6年度調査の遺構編』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成23(2011)年3月。
- 註2. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第62集『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(Ⅳ)-平成6年度調査の遺物編(1)』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成24(2012)年3月。
- 註3. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第73集『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(Ⅴ)-平成6年度調査の遺物編(2)』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成25(2014)年3月。
- 註4. 沖縄県文化財調査報告書第132集『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(1)-』沖縄県教育委員会 平成10(1998)年3月。
- 註5. 金城亀信『首里城「京の内」跡の発掘調査概要』重要文化財指定記念特別企画展『首里城京の内展-貿易陶磁からみた大交易時代-』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成13(2001)年3月。

### 引用及び参考文献

1. 財團法人 海洋博覽会記念公園管理財團『国営沖縄記念公園首里城地区整備計画』平成7(1995)年3月。
2. 金城亀信『首里城跡「京の内」跡出土の輸入陶器-紅釉水注を中心-』『特集 琉球考古学最新情報』考古学ジャーナル N0.437 1998年。
3. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(Ⅱ)-』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成21(2009)年3月。



第1図 発掘調査地域



第2図 「京の内」跡遺構配置図およびグリッド設定

## 第Ⅱ章 遺構

### 第1節 遺構の概要

#### A. 遺構の種類と概略

平成6年度の京の内地区の発掘調査で遺構と共に出土した陶磁器類などを理解する上で、欠くことのできない遺構についても『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書(Ⅲ)－平成6年度調査の遺構編』(註1)の表現等を修正後に『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書(Ⅳ)－』(註2)及び『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書(Ⅴ)－』(註3)に掲載したものを本節では再度掲載して使用した。

平成6年度の首里城の内跡発掘調査で検出された遺構には石積み(階段を含む)、石敷き(埠敷きを含む)、土壌、溝、建物、石列などがある。検出された遺構のほとんどは真北に対し、やや西に振れるものと西よりに振れるものが存在した(第2図・第3図)。

各種の遺構は発掘直前に推定された遺構の種類や性格によって記号化し、検出された順に番号を冠した。

具体的には、建物と付属する溝、石敷き、石積みの外面や内面にも個別に記号と番号を付した。また、個別の遺構として取り扱っていたものが完掘後に一連の遺構となり、種類や性格も明らかとなった遺構もある。これについては古い記号と番号を尊重しながら新しい記号と番号を付して、新旧の番号と記号を併用した。基本的に同一遺構であっても調査時点に冠した記号や番号の改正などは実施しなかった。これは記号や番号の改正などによって図面整理や資料整理(ナンバーリングの変更など)で時間を費やす、資料整理の進捗に支障を来すことが予想されたからであった。遺構の記号は以下のとおりであるが必ずしも遺構の種類と性格を示すものではないことを付する。なお、今回の報告で新たに遺構が3基確認されたことは、大きな成果であった。

遺構の種類は石積み(SA)、石敷き・埠敷き(SS)、土壌(SK)、溝(SD)、建物(SB)、石列(SR)の6種類である。以下、遺構別に性格などを略記する。

#### 石積み(SA)

石積みの大部分はその上部を欠くため上部の構造は判っていない。石積みは外面と内面を並行に南北方向や東西方向に配置する区画石積みが主であった。古絵図にみられた区画石積みに空けられた通用門は戦後の造成(岩盤の削平と掘り下げ)で破壊され確認されていない。他に基壇状の建物の縁石や倉庫の壁石などのように外面のみが検出されたものもある。これは石積みの位置変更や幾度となく造成による嵩上げ等による内面の破壊や石積みの際に直接岩盤上に積み上げた事に起因するようである。その他に完掘の結果、階段や階段の脇石積みとして判明した石積みもある。石積みも大半が根石のみが存在する状況にあった。根石は粗加工の切り石や野面石に粗い加工を加えたものを用いて造成土盤(遺物包含層を二次的に使用)や削平した岩盤上に直接的に配置し、その上から切り石を積み上げているものが主であった。石積みの外面と内面において、外面は切り石で、内面が野面積みを用いたものがある。内面に野面積みを用いた理由として、内面側の土盤の仕上げが高い位置にあったため、野面石を基礎石として積み上げ途中から設定された土盤近くから切石に変更がなされたからであろう。この方法を用いた例は二例のみ確認されている。他にも例外的ではあるが野面積みを積み上げ途中から裏込目石の代りに礫混りの土砂を投入する特殊な例があった。発掘調査の結果、明確な石積み(区画石積み・御嶽・倉庫・琉大の石積み)となったものと今回の整理で新たに確認された2基(SA05-Bの内・外)を加えると、切り石積みでは東西方向に延びる石積みが15基(SA03, SA04, SA05-Bの内・外)、SA06, SA08, SA10, SA14, SA17, SA18-B, SA25-A, SA27, SA31, SA33, SA35)で、南北方向に延びるのは12基(SA07, SA11~SA13, SA15, SA18-A, SA19, SA20, SA25-B, SA30, SA32, SA34)が確認されている。これらの切り石積みの対比・相関関係については、第2表で整理した。野面積みは1基(SA24)のみで南北方向に延びていたようである。その他に建物の基壇の縁石や建物の縁石が4基(SA01, SA01背面、SA02, SA09)、階段およびその脇石積み3基(SA16, SA19, SA28)、側溝の縁石2基(SA26, SA29)、石積みの裏込目石の集石が2基(SA21, SA23)があった。以上の38基が石積み(SA)として取り扱ったものである。

なお、資料整理をとおして、平成9（1997）年2月20日～3月21日迄の期間で実施された下之御庭の首里森御嶽復元整備に係る遺構確認のための発掘調査（註4）で、下之御庭の首里森御嶽下部石積みが京内の石積み（SD 04-AとSA 18-A）と繋がっていく事を改めて確認[調査期間中に下之御庭の首里森御嶽下部石積みが京の内を南北に横断して最高位にある首里森御嶽へ繋がっていく事を現地で確認した。下之御庭の首里森御嶽は京の内にある首里森御嶽（本体）への遙拝所であることが石積み遺構からも推定できた]した。

#### 註文献

- 註1. 沖縄県立埋蔵文化財センター 調査報告書 第56集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（III）－平成6年度調査の遺構編』  
平成23（2011）年3月。
- 註2. 沖縄県立埋蔵文化財センター 調査報告書 第62集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（IV）－平成6年度調査の遺物編（1）』  
平成24（2012）年3月。
- 註3. 沖縄県立埋蔵文化財センター 調査報告書 第62集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（V）－平成6年度調査の遺物編（2）』  
平成26（2014）年3月。
- 註4. 沖縄県立埋蔵文化財センター 調査報告書 第47集『首里城跡－下之御庭首里森御嶽地区発掘調査報告書－』平成20（2008）年3月。

#### 参考文献

1. 金城亀信 首里城「京の内」跡の発掘調査概要 重要文化財指定記念 特別企画展『首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交易時代－』  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年3月。
2. 金城亀信「首里城京の内跡検出遺構について－平成6年度の遺構を中心に－」第50回文化講座『聖域へのアプローチ～考古学から何が見えてきたのか～』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成24年2月13日。

### 石敷き・埠敷き（SS）

石敷きは細粒砂岩製（俗称・ニーピヌフニ）と琉球石灰岩製の二種類が存在し、板状に薄く仕上げたものである。主に細粒砂岩製のものが主流であった。石敷きの方向は東西方向に途切れながら検出されている。これは後代の造成で破壊されたためである。埠敷きとしたものは埠瓦が敷かれた状態で検出されたのではなく、埠敷きが破壊されたままの状態で検出されたものである。

石敷きの細粒砂岩製のものは建物の縁石と礎石を伴うものであり、建物に付属する取り付けの回廊・踊り場などの施設であったものとして推察されるところである。石灰岩製の石敷きは側溝の底板であった。

石敷きの細粒砂岩製のものは5基（SS 01、SS 02、SS 03-B、SS 04-A・B）が存在し、小規模な構築物を囲む回廊様な造構とみられ、当該造構は切り合っている事から新旧、2時期が存在するようである。石敷きの石灰岩製のものは1基（SS 03-A）のみであったが、後述する首里第一尋常高等小学校の排水溝と関係し、一連のものとみられる。埠敷きは1基（SS 05）のみで、戦災やその後の造成で破壊された状態で検出されている。以上の6基を石敷き・埠敷き（SS）とした。

### 土壤（SK）

人為的な堀り込みや自然地形の部分的な落ち込みなどを総称して土壤とした。土壤は北西側に集中する傾向が窺え、検出直後に他の造構と同レベルで確認されたもの、掘り下げの途中から確認されたもの、完掘後に確認されたものの3種類があった。これらの土壤は3基（SK 01～SK 03）が確認されている。SA 19、SA 20、SA 28は完掘後に最終段階で倉庫内部であることが判明し、SK 01と名称を付けたものもある。

SK 02は岩盤の産みなどを利用し、造成土（遺物包含層を二次的に使用）で埋めたものである。造成土（SK 02）直上にSA 15、SA 31の石積みがなされている。

SK 03はSA 24の石積みと同レベルで検出されたものであるが、SA 24の西側を一帯の窪地を埋めた造成土（遺物包含層を埋土に用いる）である。SK 03を発掘した結果、SA 24の外縁の石積みが検出された。以上の3基を土壤（SK）として処理した。その他、SK 03と同時期の土砂が北西側にもある程度の広がりを持つて分布していたことなどから“SK 03の延長（旧名称：SK 04）”として取り扱った。

### 溝（SD）

建物や石積みに付属する溝と最終的に便所となったものなどをSDと記号で表記した。建物に付属する排水溝で東西方向に延びるものは3基（SD 06-A・B、SD 07-A）が存在する。南北方向に延びるものも3基（SD 04-A、SD 05、SD 07-B）が確認された。他に岩盤を溝状に掘り込んだ琉大の建物基礎（布堀り基礎跡）2基（SD 01、SD 02）や近代～現代の便所跡2基（SD 03、SD 04-B）が存在していた。以上の10基を溝とした。

### 建物（SB）

首里第一尋常高等小学校の頃の便所に伴う施設（基礎石、縁石、踊り場など）がセットで検出されたものを建物とした。1基（SB 01）のみであった。SB 01の建物の中にはSD 04-Bの便所跡が伴っている。

### 石列（SR）

擁壁跡の裏込目石や建物の縁石が列状に検出されたものを石列とした。擁壁の裏込目石は北東隅から南北方向に弧状に曲がりながら延びていたものであり、1基（SR 01）が確認されている。建物の縁石は石敷き造構（SS 01、SS 02、SS 03-B、SS 04-A・B）の東南隅から検出された。京の内跡発掘調査報告書（I）で、東西方向に延びたものが1基（SR 02）と報告したが検討の結果、前述した石敷き造構（SS 01ほか3基）と関連する一連のものと判断されたことから当該造構はSR 01の1基となつた。

以上の58基の造構は一連のものもあるが個別の機能を尊重したため重複するものなども含まれている。大雑把に大別すると以下のa～dまでの4種類に分類と整理ができるようである。

#### a. 石積み（31基）

イ. 切り石積み（SA 03、SA 04、SA 05-B内・外面、SA 06～SA 08、SA 10～SA 15、SA

- 17、SA18-A・B、SA19、SA20、SA25-A・B、SA27、SA30～SA35) ……27基。  
 □、野面石積み (SA24) ……1基。  
 ハ、排水施設を伴う切り石積みと関連する遺構 (SD04-A、SD06-A) ……2基。  
 ニ、拝所の一部となる切り石積みと関連する遺構 (SA25-A・B) ……2基。

b. 建物および付属遺構 (9棟)

- イ、基壇を有する建物の面石 (SA01・SA01背面) ……1棟。  
 □、排水溝や階段に取り付けられた建物2棟。1棟目 (SA09、SD05)、2棟目 (SA26、SD07-B、SD06-B、SA16、SA22、SD07-A、SS03-A) ……2棟。  
 ハ、便所を伴う建物遺構は3棟が存在する。1棟目 (SA02、SD03)、2棟目 (SD03、SD03関連施設)、3棟目 (SB01、SD04-B) ……3棟。

- 二、石敷き・縁石・礎石を伴う遺構 (SS01、SS02、SS03-B、SS04-A・B) ……2棟。  
 ハ、倉庫遺構 (取り付け階段を含む) (SA19・SA20、SA28) ……1棟。

c. 土壌 (3基)

- イ、倉庫遺構と重複する SK01 (SA19、SA20、SA28) ……1基。  
 □、土壌直上に遺構が存在する SK02 (SA15、SA31) ……1基。  
 ハ、石積みを埋めた SK03 (SA24) ……1基。

d. その他 (6基)

- イ、埠敷き遺構 (SS05) ……1基。  
 □、石積みの裏込目石の集石遺構 (SA21、SA23) ……2基。  
 ハ、擁壁の裏込目石の集石遺構 (SR01) ……1基。  
 ニ、建物の基礎 (布堀り基礎) 跡。溝 (SD01、SD02) ……2基。

以上のように大別すると49基が遺構として整理ができる。

次に切り石積みの外面と内面の対応関係について第2表で整理した場合、上記a.イの切り石積み27基の内、倉庫跡の石積み SA19・20の2基、琉大の石積み SA03の1基の合計3基を除外して、新たに確認された SA05-B (内・外側) の2基を追加すると26基となるが、切り石積みの対比・相関関係について検討したところ第2表のような結果が得られた。

第2表 切り石積み (区画石積み・御嶽) の外面と内面の関係

南北軸方向		東西軸方向		
NO.	外面(外側)	内面(内側)	NO.	外面(外側)
①	SD04-AとSA32か	SA18-A	①	SA04
②	SA07	SA12	②	SA05-A (外面)
③	既に破壊され消失	SA11	③	SA05-B (外面)
④	既に破壊され消失	SA13	④	SA06
⑤	SA15 (西側)	SA15 (東側)	⑤	SA08
⑥	消失	SA25-B (御嶽)	⑥	SA14
⑦	SA30	未確認	⑦	SA21 (既に破壊か)
⑧	未検出	SA31	⑧	SA17・SA18-B・SA25-A (御嶽)
⑨	既に破壊され消失	SA32	⑨	SA27
⑩	既に消失	SA34	⑩	SA31
			⑪	SA35
合計 10基			合計 11基	

## B. 各時期別の遺構

発掘調査時点で出土した陶磁器を基本に各時期別に遺構に時間軸を設けて整理すると、第Ⅰ期～第Ⅵ期（第3図）までの6時期に大別されるようであるが各遺構のトレンチ内から出土した陶磁器類を主とする遺物の整理が終了しないと正式な時期を絞り込むことができないので暫定なものとして考慮されたい（第3図）。

- イ. 第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半）……（『首里城跡 - 京の内跡発掘調査報告書（IV）- 平成6年度調査の遺物編（1）』収録の第7図参照。）
- ロ. 第Ⅱ期（14世紀終末～15世紀前半）……（『首里城跡 - 京の内跡発掘調査報告書（IV）- 平成6年度調査の遺物編（1）』収録の第38図参照。）
- ハ. 第Ⅲ期（15世紀中頃）……………（『首里城跡 - 京の内跡発掘調査報告書（IV）- 平成6年度調査の遺物編（1）』収録の第69図参照。）
- 二. 第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）…（『首里城跡 - 京の内跡発掘調査報告書（V）- 平成6年度調査の遺物編（2）』収録の第4図参照。）
- ホ. 第Ⅴ期（16世紀前半～19世紀後半）…（第4図）
- ヘ. 第Ⅵ期（19世紀終末～昭和58年）
  - a. 同期前半（19世紀終末～昭和20年）
  - b. 同期後半（昭和24年～昭和58年）

第3表 平成6年度 京の内地区検出遺構と遺構の時期

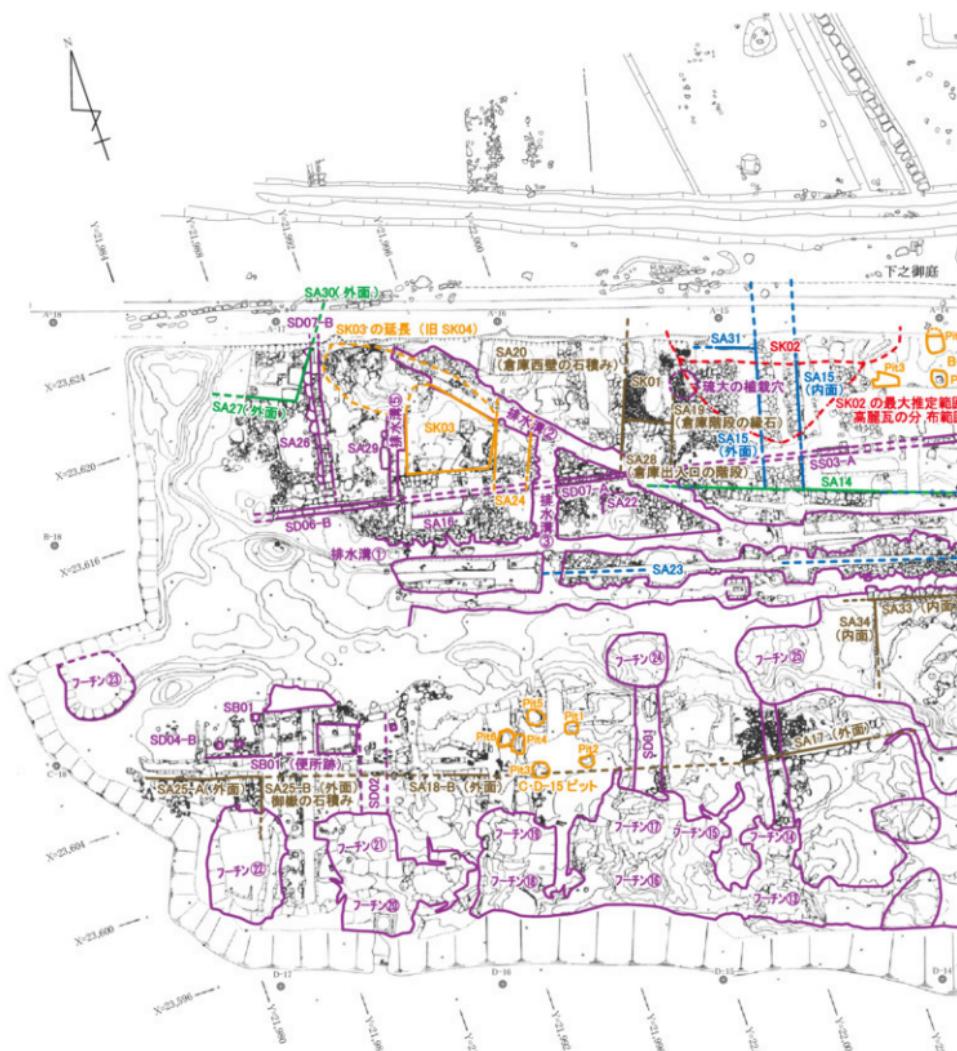
第Ⅰ期 (14世紀前半～ 14世紀後半)	第Ⅱ期 (14世紀終末～ 15世紀前半)	第Ⅲ期 (15世紀中頃)	第Ⅳ期 (15世紀後半～ 16世紀初頭)	第Ⅴ期 (16世紀前半～ 19世紀後半)	第Ⅵ期前半 (19世紀終末～ 昭和20年)	第Ⅵ期後半 (昭和24年～ 昭和58年)
SA24	SA01	SA08, SA10	SA04, SA35	SA06	SA26, SD07-B	SA03
SK03	SA05-A	SA17	SA05-B	SA13	SA29、排水溝⑤	排水溝①～④
SK03の延長 (HSK04)	SK02	SA18-B	SA07, SA11, SA12	SA15	SA16, SD06-B	SD01, SD02, SR01
B-13・14ピット	SA25-A, SA25-B	SA14	SA21, SA23	SA22, SD07-A	フーチン	
C・D-15ピット	SA33, SA34	SA27, SA30	SA31	SS03-A		
	SA18-A, SA32, SD04-A	SS01, SS02, SS03-B SS04-A, SS04-B	SS05	SA02		
	SD06-A		B-12・13 北側トレンチ	SD03		
	SK01			SA09, SD05		
				SB01, SD04-B		

以下、第Ⅴ期の各時期別に遺構周辺に設定した試掘トレンチ及び試掘坑内や遺構に伴う出土遺物や、遺構と関連する遺物について報告する。

遺構検出の目的で、遺構周辺に設定した試掘トレンチ及び試掘坑から出土した遺物が直接的に遺構の時代と特定することはできないが、遺構の構築時期や造成時期を出土した陶磁器類などから相対年代として、ある程度は推定する事ができる。

首里城内の他の地区と同様に京の内地区内の遺構についても、遺構周辺に設定した試掘トレンチ及び試掘坑内からも造成層（造成土盤や埋土を含む）や擾乱層（沖縄戦の砲弾等及び炸裂による再堆積を含む）などが、複数枚の堆積層となって確認されている。これらの遺物を含む造成層や擾乱層から出土した遺物からも遺構の履歴（構築の時期から遺構の廃棄時期）を知る上で、貴重な遺物である事から当該層より出土した遺物も掲載した。

なお、第Ⅵ期以降は、次回の報告に委ねることとする。



第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半）の遺構  
 第Ⅱ期（14世紀終末～15世紀前半）の遺構  
 第Ⅲ期（15世紀中頃）の遺構

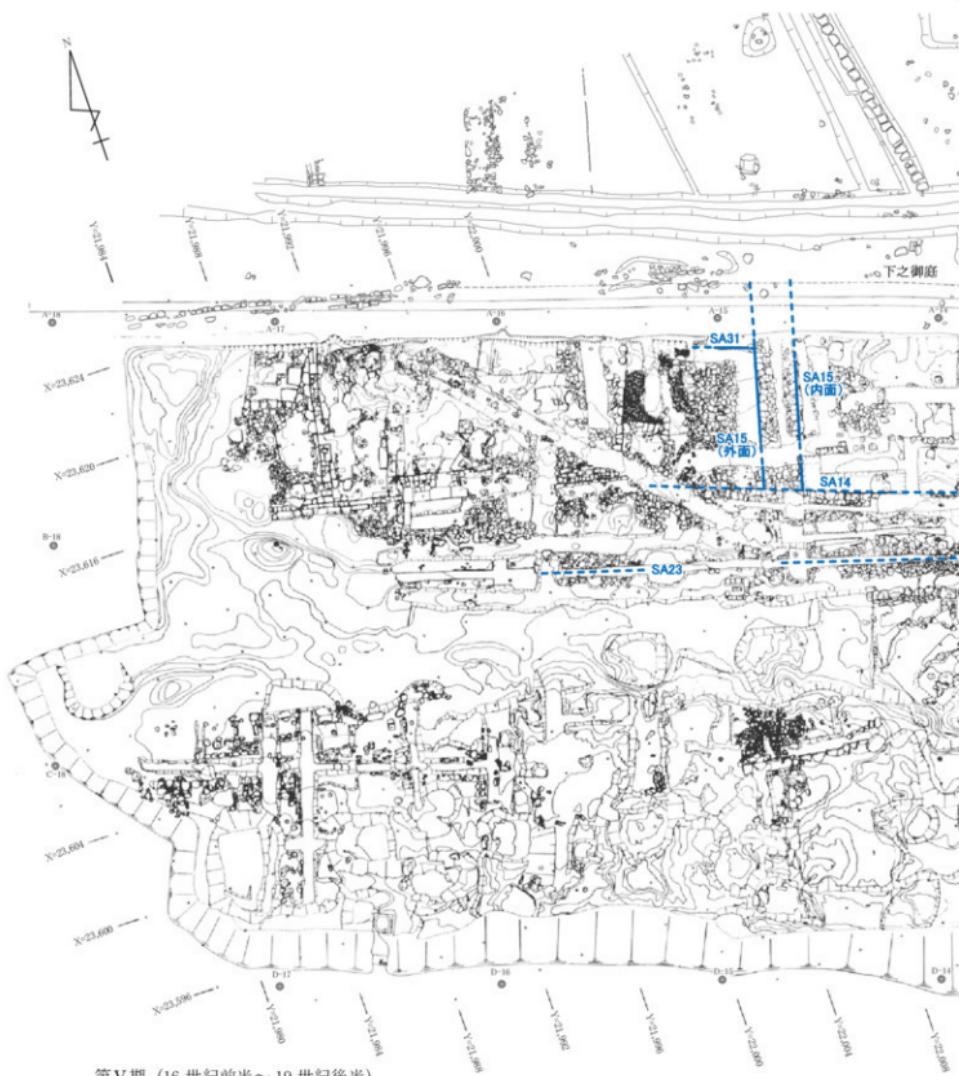
第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）の遺構  
 第Ⅴ期（16世紀前半～19世紀後半）の遺構  
 第Ⅵ期（19世紀終末～昭和58年）の遺構

第3図 遺構全体図









第V期（16世紀前半～19世紀後半）

石積みSA06（外面）、SA13（内面）、SA15、SA21、SA23、SA31

石敷きSS05

※当該期まで存続していたとみられる石積み遺構として、SA14が考えられる。

第4図 京の内北地区第V期（16世紀前半～19世紀後半）遺構の推定復元







### 第III章 遺 物

ホ、第V期（16世紀前半～19世紀後半）・（第4図～第7図、第11図～第44図）

当該期の遺構として、SA06、SA13（内面石積み）、SA14、SA15（内面石積み・外面石積み）、SA21、SA23、SA31、SS05の8基の遺構がある。これらの遺構の中で、SA13は東側を内側（内面）とする石積みを持つことが確認されていた為、外側（外面）の石積みを確認する目的でB-12・B-13のグリッド内に遺構確認のためのトレーンチを設定した。当該トレーンチから出土した遺物についても当該期に含めて報告した。なお、SA31の石積みから出土した遺物については細片が多く図化を省略して、第70表に示した。

以上、これらの遺構及びトレーンチ出土の遺物で当該遺構の時期に近似する時期の遺物や該当する遺物などの他に特殊なものや特徴的な遺物を抽出して以下に概要を記述する。その他に埠敷きSS05の項目に石敷きSS01から出土していた資料で、県内で初めて確認された線刻石器については本節で詳細に記載することにした。

石積みSA06からは、当該遺構の遺物として沖縄産の瓦質土器（第11図1・2）、中国産白磁（第12図2）、中国産華南彩釉陶器（同図3・4）、本土産陶器の薩摩焼（同図9）、沖縄産施釉陶器（同図10）などが出土している。その中で、沖縄産の瓦質土器については、瓦質土器の生産状況を示す資料が湧田古窯跡（註1）から「萬曆三十三年」・「りろ」の銘入りの鉢（若しくは窯道具）とみられる資料が得られている。「萬曆三十三年」は1605年にあたり、この年の前後から生産があったことを示す貴重な資料が得られていることから17世紀前後の時期から17世紀後半頃（註2）まで瓦質土器の存在が確認されているようである。沖縄産瓦質土器の登場時期については、明確ではないが湧田古窯跡（註3）で生産された明朝系瓦の生産時期が16世紀後半（註4）と想定されている。瓦生産の時期にあたる16世紀頃から17世紀後半頃まで沖縄産の瓦質土器が生産されていたと考えられるようである。

石積みSA13より出土した当該期の遺物としてタイ産褐釉陶器壺（第13図9）が唯一であった。

石積みSA14の出土遺物については、既に報告済み（註5）であることから割愛した。石積みSA14の東側から伸びてくる石積みSA06と当該遺構石積みSA14は連続した石積みとなるが、石積みSA14から出土した遺物には中国産陶磁器以外にグスク系土器、沖縄産施釉及び無釉陶器を含め高麗系屋瓦から近代の大和瓦の時期まで時代幅があり当該期の第V期の時期まで使用された石積みとして理解しているところである。

石積みSA15は中国産白磁（第18図4）・青花（同図5・6、8）、タイ産炻器（第21図3）、沖縄産無釉陶器（第22図1～3）などが得られている。その他に注目される資料として大和系鬼瓦の眉（左側の眉が庇状に飛び出し厚く波打っている）の破片（第15図7）が得られている。当該資料と近似するものが首里城跡の南側（100～200mの範囲内）に近接する崎山御嶽遺跡（註6）から出土している。京の内出土の大和系鬼瓦（眉）は崎山御嶽遺跡出土の鬼瓦などを模倣した可能性（素地が湧田古窯跡出土の灰色瓦や瓦質土器に類似し、湧田古窯跡からも大型の手捏の瓦質土器製の龍の角（註7）や獅子の膝（註8）などが出土している。）が高いものとして判断されるところである。因みに崎山御嶽遺跡出土の鬼瓦の時期と当該製品について那覇市市民文化部文化財課の島 弘副参考から教示を頂いたところ崎山御嶽遺跡の鬼瓦の時期を15世紀後半～以降、湧田古窯の土（色調・混入物）と酷似するのであれば16世紀前後の製品である可能性を示唆した（註9）。

石積みSA21から出土した当該期の遺物は、中国産白磁皿（第28図1・2）、中国産青花（同図3～8）、華南彩釉陶器（同図9・10）、中国産褐釉磁器（同図11）、中国産褐釉陶器（第29図9）、タイ産土器（第30図1）、本土産磁器（同図4）、沖縄産無釉陶器（同図5～9）などが得られている。

石積みSA23より出土した当該期に相当する遺物として、中国産青磁（第32図1）、中国産青花（同図3）、中国産褐釉陶器（同図4）、タイ産土器（同図5）などが出土している。

石積みSA31の遺構は、石積みSA15より上位にある造成土（石積みSA15の根石を安定させた造成土）に構築された石積み（註10）であり、明確な当該遺構出土の遺物は検出されていない。石積みSA31の構築時期から外れる下層からは屋瓦の高麗系平瓦の破片が2片の出土があった。なお、当該遺構の時期については石積みSA31が石積みSA15に接続して構築されていることや前述した石積みSA15の出土遺物から16世紀頃に構築されたようである。

埠敷きSS05から出土した当該期の遺物として、沖縄産陶質土器（第33図1・2）、沖縄産瓦質土器（同図3）、

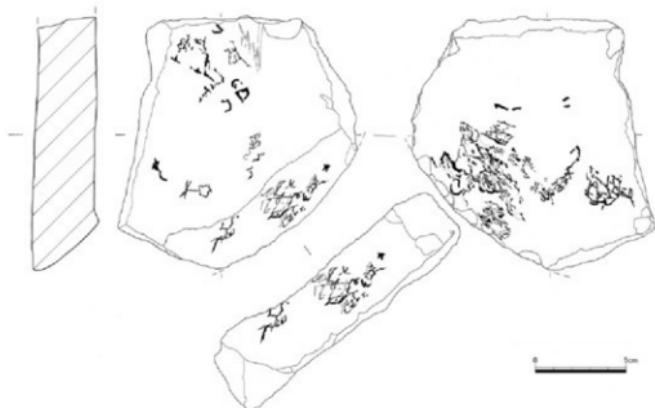
明朝系屋瓦(同図4)、埠瓦(第34図5・6)、中国産青花(第35図7~10)、華南彩釉陶器(第37図1~6)、中国産褐釉陶器(第38図6)、本土産磁器(第39図3)などが得られている。この中で特徴的なものとして第34図5に図示した埠瓦がある。この種の埠瓦は、湧田古窯跡(註11)からも出土していることからすると当該資料は湧田古窯で生産された埠瓦として考えられるようである。次に銭貨の第43図10に示した南宋の紹興元寶(初鋳造1131年)は折二銭の正規銭で、背面に三日月が鑄型から起こされている所謂、「背月」である。国内では報告例がないようである(註12)。当該銭貨と同一書体の篆書で背月(或いは「背上月」)の正規銭は韓国的新安海底沈没船から中国貨幣26.7トンを引き上げた銭貨から1枚の報告(註13)がされている。当該銭貨については、貴重性を他者に誇示するために使用する「威信財」とする見解もある(註14)。その他に埠敷きSS05は120cm四方と小規模な範囲で華南彩釉陶器(註15)の破片が36点と多く出土しているようである。

次に第5図~第7図、第41図3、図版1~図版4、図版33-3及び第4表に図示した砥石に描かれた線刻画について掲載する。以下、線刻石器と表記する。

線刻石器の表面(第5図、図版2、図版33-3、第4表)を右側に90度に向きを変えて観察をすると右隅近くに「荒波」と歪な綫長の台形状の帆が二枚重なって線刻されていることから「大型帆船(進貢船か)」とみられる。この大型帆船の下には、低平な波と一枚帆が線刻され、帆の中央に歪な四角形が表現されていることから「波と帆船(天馬船か)」とみられる。この一枚張り帆船から左側にも裏面で確認された鋸歯状の「荒波」が、表面では上下に並列する鋸歯状表現の「荒波」が線彫りで描かれている。上位の「荒波」の右端に菱形の中に目をいたれた「魚の頭部」とみられるものが描かれている。その他、「口」と「大」の字を組み合わせた合わせ文字とみられるものが観察できる。これに近い構図が野国總官の墓付近から採集の線刻石板(第5表a①)にみられ、仲原善忠は「甘諸の萌芽」として解釈を行っている。このことからすると当該合わせ文字は、甘諸を含めた植物の種子から四つ葉に発芽した「種子の萌芽」として考えられることから作物の豊穣を祈願した表現として解釈をしたい。この線刻石器は、線刻の幅も細く、線彫りが薄く施されているため、将来の分析や解析によつては、今回報告した以外に新たに線刻画が増えることが予想されるところである。

次に線刻石器裏面(第5図、図版2~図版4、図版33-3、第4表)の右下にある線刻が集中する部分(90度に向きを変えて観察)が気になって6~7cmの範囲内に絞って拓本による墨入れを行つたところ線刻が歪な三角形と半円形の組み合わせが確認できた。さらに拓本の陰影を反転させて再度の詳細な観察を実施した結果(第5図、図版2、第4表)、長方形となつた「旗」が二旗から三旗(一番下にある旗には、○を意識して線刻で刻んでいるが「コ」の字状となつてゐる。琉球王国の船舶に掲げられていた「太陽(テダ)」(沖縄県立図書館所蔵の1850年前後に描かれた『唐船図(進貢船図)』の中に描かれた琉球船に長方形の旗の中央付近に赤丸で太陽が描かれている。)を表現か)、三角形状に表現された「帆」、「マスト」、半円形状の「船体」と二本の「艤」、そして船の後方に三本の短沈線で「細波」が刻み込まれている。船体の左斜め下には低平な鋸歯状に表現された「荒波」と荒波から飛び出した「魚(魚の頭部と目玉を強調)」と「背鰭」を表現しているようである。この魚の後方(石器の中央寄り上)にひらがなの「い」の字が確認できる。上述の「荒波」と「魚」の下方にも線刻が確認でき、前述の帆船がある位置から石器中央より左寄りに歪な長方形と丸味のある低平な波を組み合わせた歪な「四角(船と天幕が合体)」の中に三角と丸で表現された「人物」三名を線刻と線彫りで描かれていることが確認できることから天幕を張つた天馬船(註16)に便乗した様子とみられる。恐らく中国への渡航の際に利用される進貢船を天馬船での見送りか、或いは迎えるかのいずれかを線刻や線彫りで表現した構図として考えられる。この天馬船の左側に線彫りと浮き彫りによる飛翔する鳳凰と簡素化された菊花三輪を描いてゐる。鳳凰は頭と尾羽根の位置から左側に大きく旋回した形を取り、旋回した肩曲部分に二重の菊花を描き、この二重菊花から右側に単独の菊花を描いてゐる。鳳凰は想像上の瑞鳥で麒麟・龍・亀と共に四靈(四瑞)とされ、天下の治世を知り、名君が出現し天下泰平となれば現れる。鳳凰は皇后の象徴とされ、龍文の次位の文様として扱われている(註17)。菊花は、秋を表象し長寿を意味する。梅・竹・蘭と共に四君子と称されている(註17)。また、鳳凰については、比嘉 実の『古琉球の思想』(註18)で次のように記載している「やはり、琉球の日輪双鳳凰文は一時期に形成されたものではなく、日輪雲文に尚真期に中国から将来された鳳凰文を組み合わせて琉球独自の文様として成立したと考えられる。(中略)尚真王時代建立された圓覚寺の放生池欄干に鳳凰、龍、亀の文様が刻印され、中国の四靈の觀念がすでに伝来して

いたことを示している。特に、鳳凰文が碑文に刻印されたのは、それが国家の安寧、豊穣、名君の出現として表象するからであった。中国伝来の四靈觀念、鳳凰觀が尚真期にすでに支配階級層に定着していたのである。(中略) 従来、このオモロは太陽賛歌として考えられていたが、オモロの謡われた契機に即していえば、「国王賛歌と訂正されるべき歌である。(中略) 言外に英明な国王への讃仰と国家繁栄が祈願されている。」と記していることから尚真王代(1477年～1526年)の頃から薩摩が琉球へ進攻した1609年以前までは、鳳凰文も国王の象徴であった。



第5図 線刻石器の線刻画配置図

以上のことからすると石器表面は沖合にある大型帆船(進貢船か)と天馬船などを描き、裏面が港(那覇港や泊港、或いは安謝港)に入港する進貢船の歓迎、或いは出港する進貢船を歓送する目的で天幕を張った天馬船に乗った様子と飛翔する鳳凰と菊花を線刻で描いたものとして考えられ、名君の出現と天下泰平および航海の安全祈願を描いたものとして考えられる。ところで從來の線刻石板(第5表a-②:嘉手納町字屋良後原表採資料)に船のマスト上に白鳥が線刻で描かれているが、白鳥は「おなり神の守護神」「兄弟を守護する姉妹の靈。航海などの出立にさいし手拭いや毛髪を持たせ、姉妹の靈は遠く離れた兄弟を救うため白鳥となって現地に飛ぶことがある」とされている。水稻・粟・麦などの播種や収穫の儀礼にさいしてもオナリ神の力が期待されている。姉妹が存在しない場合、その機能は通常父系親族内の女性に代行される。これは家族レベルをこえた上位祭祀集団の場にも見いだせる。根神と根人、ノロと接司、聞得大君と王の関係はそれであるとする(註19)。と解かれていることからすると、京の内出土の線刻石器に描かれた鳳凰文を国王の象徴として考えるのであれば、京の内での重要な儀式や国家の祭事には国王の「オナリ神」に相当する琉球王国の最高神女であった聞得大君(王女・王妃・王母が琉球王国の最高神女として即位。1677年から王妃に神職として固定される。(註20))を中心に執りおこなうことから、線刻石器を描いた石工は、飛翔する鳳凰文と菊花文(国王の長命・長寿)と交易船の航海安全祈願(註21)、そして琉球王国の作物の豊穣を意識して描いたのかも知れない。

更に線刻石器右下が斜位となる側面(第5図、図版3、第4表)にも線刻画があり、側面を右側方向に45度向きを変えて観察すると中央付近に「帆船(帆の左側面が鋸齒状となる。以下「進貢船」と表記。)」を線画で描き、その右側に帆船を追うように「魚」を描く。帆船からやや左上に渦潮(渦巻きを歪な四角形で表現)や「波」を描き、その上には船の竜骨とみられる残骸を「匁」字状に描いている。波や渦潮の周辺に難破(座礁)した

船の板材や溝漕などの表現がみられることからすると海の難所を航海する進貢船を描いたものとみられる。以上のことから各面に描かれた線刻画の構図に主題を冠するとすれば、表面は「進貢船航海及び作物豊穀図」、裏面が「鳳凰菊花進貢船歓送船舶図」、右側面の構図が「進貢船航海難所図」とも言える。この線刻画を製作する前にある程度の線刻画の構想や構図などを考えながら短期間に同一の人物〔首里王府の石奉行所（註22）の石工（註23）か同奉行所の役人が考えられる。特に砥石を利用した後者の石工が考えられる。〕が、砥石に線刻画を仕事の休憩時間を利用しながら鉄釘などの刃物で線刻や線彫りで完成させたようである。

当該線刻画が製作された時期を文献資料等で確認すると、唐船型馬艦船（マーラン船）が初めて造船された時期が1710年（註24）であり、それ以前は日本船型であったと考えられている（註25）。ことから、当該線刻画は薩摩進攻があった1609年以降から最後の進貢船が発出した1874年（明治7年）迄の265年間の間に製作されたものとして考えられる。時代幅を絞り込むために1609年～1874年までの間に京の内周辺で城内各施設の再建、改修の時期を調べてみると、1709年に首里城正殿・北殿・南殿が火災で炎上し、1712年に正殿・黄金御殿・北殿・南殿・番所・奉紙門・書院の7つの施設が集中的に再建（註26）されている時期が存在するようである。次に、当該線刻画の出土地点と出土層については、注記がC-11第1号埠敷第1層（石敷きSS01）となっていたが遺構番号の整理の中で埠敷はSS05の1基しか確認されていないことから石敷きSS01を埠敷SS05と勘違いを起こして埠敷SS05の遺物として紛れ込んだようである。〔本来ならばC-11の石敷きSS01の遺物で報告（註27）すべきではあったが、今回当該期の埠敷SS05で報告することになった。石敷きSS01の時期は、第IV期（15世紀後半～18世紀初頭）の遺構編（註28）及び遺物編（註29）を参照されたい。〕当該線刻画が出土した遺構の時期は石敷きSS01及びこれと直接関連する遺構としてSS02、SS03-B、SS04-Aの4基の遺構があり、15世紀後半～18世紀初頭が考えられる。この4基の遺構は、内側に礎石を二列に10個の礎石を配置していたことが推定されている。これらの礎石間の間隔は中国明代（14世紀～17世紀）の尺度である1尺が31.1cmで構築されていることや出土した遺物などから17世紀代の時期が想定されるところである。17世紀の時期から正殿・北殿・南殿が火災で炎上した18世紀初頭（1709年）までの時期に当該線刻画が製作されたものとして考えられる。当該SS01を含む4基の遺構も二次的な火災を受けていることからすると1709年の火災によって被災した可能性が高いようである。以上のような状況からすると線刻画は石敷き遺構の最後の時期にあたる17世紀頃から、石敷き遺構が火災によって火熱した18世紀初頭（1712年）以前までの時代を考えている。

この石敷き遺構については、最近になって回廊状に廻らされ、その内側に礎石があることから祖靈堂の可能性が高いことが判明した（註30）。当該線刻石器は、第9図に図示した石敷きSS01を初めとする回廊状の遺構が完成した後に石工が石敷きSS01周辺に埋めた可能性も考えられる。後世に建築された琉球大学法文学部の基礎工事などで石敷きSS01を初めとする回廊状の遺構の破壊（石敷きの回廊状遺構が基礎工事で寸断）を受けて、埋納されていた線刻石器が表層に上がってきた可能性もあり得るところである。この線刻画を製作した人物は前記したように石工か、石奉行所の役人と推定したところであるが石工と関連する資料が遺構編（註31）で報告した第9・10図の石敷きSS01・SS02、SS03-B、SS04-Aの石敷きと礎石には、鑿痕以外に礎石にアヒルの足跡様の記号があるものが1点と、敷石に「半円形」の刻印を施したもののが1点、合計2点が確認されている。

ところで県内で発見されている11個の線刻石板（註32）の中から当該石器に描かれた船の表現方法の類似する資料を求めたところ北谷町字上勢頭平安山伊森原で発見（註33）された線刻石板に刻み込まれた船の表現が最も近いことが確認できた。従来の線刻石板と異なり砥石である石器からの発見（註34・註35）である。砥石に彫り込まれた線は細く、線の幅が0.3～1mm程度刻まれていることから「細線刻石器」又は「線刻石器」と仮称したい。今後、グスクや集落遺跡から石器である砥石などからの発見に期待したいところである。

最後に第V期の遺物として、その他B-12・13北側トレンチ内より出土した遺物の中で主なものとして第44図1に図示した中国華南彩釉陶器の盤がある。このB-12・13北側トレンチ（註36）は、略南北方向に伸びる各期の石積み4基（第III期（15世紀中頃）の石積みSA32、第IV期（15世紀後半～16世紀初頭）の石積みSA07・SA11、第V期（16世紀前半～19世紀後半）の石積みSA13）の延伸状況を把握する目的で設置したが、石積み4基の内、第V期（16世紀前半～19世紀後半）の石積みSA13に関連する包含層からタイ産褐釉陶器壺把手（第13図9）が出土している程度であった。

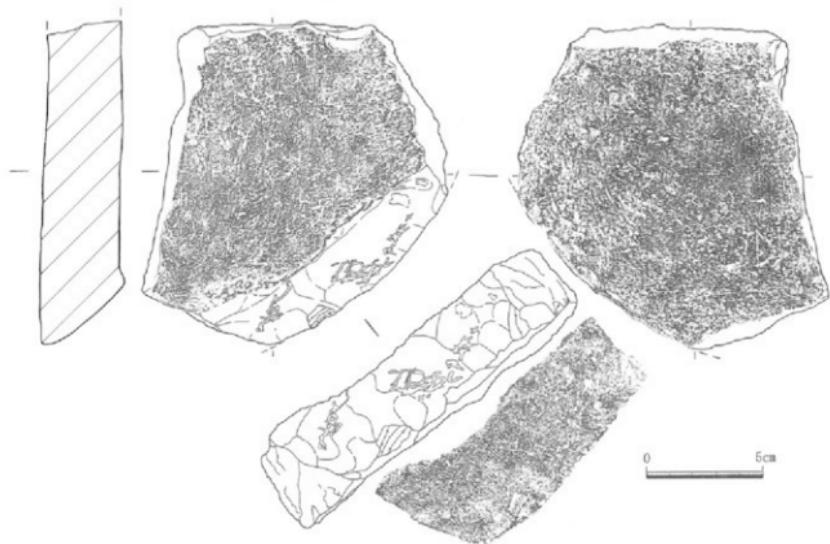
## 註文献

- 註1. 大城 慧・島袋 洋・金城亀信ほか『湧田古窯跡（Ⅰ）－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－』沖縄県教育委員会 1993年3月。
- 註2. 新垣 力「モデルとコピーの視点からみた窯業開始期の沖縄」『南島考古』第19号 沖縄考古学会 2000年6月。
- 註3. 註1と同じ。
- 註4-a. 上原 静「第3章 琉球王国時代の瓦」『琉球古瓦の研究』椿樹書林2013年9月。165頁に掲載された第1表 沖縄本島及び離島における軒瓦の推移には湧田古窯の編年的位置付けが1600年初頭から1700年代初頭までの時期が想定されている。
- 註4-b. 倉多郎 那覇市立鹿屋焼物博物館特別展・那覇市施行95周年記念事業 朝鮮人陶工来琉400年記念『一六一六年 琉球陶始400年』那覇市立鹿屋焼物博物館 2016年11月。62頁に「湧田村は15世紀後半に集落が形成され、18世紀から19世紀にかけて集落域が拡大していることが出土した遺物の量や質から分かりました。」と記載。15世紀後半頃まで沖縄産瓦質土器の製品は遡っていく可能性が高い。拙者としては首里城京の内跡SK01からも沖縄産瓦質土器の蓋が出土しているので1459年（15世紀中頃）前頃まで遡っていくものとして考えているところである。
- 註5. 金城亀信『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（V）－平成6年度調査の遺物編（2）』沖縄県立埋蔵文化財センター 2014年3月。石積みSA14の出土遺物については60頁～99頁に掲載。
- 註6. 島弘ほか那覇市文化財調査報告書第67集『崎山御嶽遺跡－首里崎山公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』那覇市教育委員会 2005年3月。第71図に大和系瓦の鬼瓦を図示。
- 註7. 註1と同じ。144頁の第94図51に龍の角を図示。
- 註8. 大城 慧・島袋 洋・金城亀信ほか『湧田古窯跡（Ⅱ）－県庁舎会議室棟建設に係る発掘調査－』沖縄県教育委員会 1995年3月。148頁の第70図78に獅子の膝を図示。
- 註9. 平成28年12月8日に那覇市市民文化部文化財課の島 弘訓参事より：鬼瓦の出土地点と肩位は、北地区1グリッドの第2層下部で、出土状況は、石灰岩の割れ目に堆積した大和系瓦集中部の下層より出土。第2層の時期は、当時は古く考えていたが、改め報告書を見直すと15世紀後半～以降か、との教示があったが首里城京の内跡の倉庫跡（1459年の火災で焼失）の近くに隣接するA-15の北壁沿いのトレンチ内の第9層が高麗瓦を多く含む堆積層が存在する状況からすると大和系瓦を15世紀後半とするよりも15世紀中頃より以前の15世紀前半頃まで遡ることが想定されるところである。
- 註10. 金城亀信『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－平成6年度調査の構造編』沖縄県立埋蔵文化財センター 2011年3月。316頁・317頁に構造観察表および平面図と順序を掲載・呈示。
- 註11. 註1と同じ。152頁の第100図1に埠瓦を図示。
- 註12. 永井 久美男『日本出土銭総覧 1996年版』兵庫埋蔵銭調査会 成友印刷株式会社 第2刷 1996年6月。
- 註13. 山口誠治（6. 中国古銭の科学的調査について）「第4章 出土銭をめぐる考察」永井 久美男『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫埋蔵銭調査会 株式会社ぎょうせい関西支社 1994年10月。
- 註14. 「池田栄史氏 琉球大学教授／祭事に使用か／中国・南宋の硬貨／線刻石器／首里城跡に貴重遺物／96年「京の内」出土／紹興元寶、国内初か」琉球新報 2017年（平成29年）2月4日土曜日社会面（29面）。
- 註15-a. 亀井明徳「明代華南彩釉陶をめぐる諸問題」三上次男博士喜寿記念論文集 陶磁編 1985年8月。
- 註15-b. 大分市歴史資料館 平成15年度秋祭（第22回）特別展「豊後府内 南蛮の彩り～南蛮の貿易陶磁器～」2003年10月。
- 註16. 東京国立博物館「海上の道－沖縄の歴史と文化－」読売新聞社 1992年1月発行の66頁・67頁に屏風図、解説は137頁に掲載された滋賀大学経済学部附属史料館 所蔵19世紀に描かれた『琉球貿易圖屏風』に布製とみられる天幕を張った大和型和船（天馬船）が描かれている。この屏風には、馬船（マーラン船）は天幕ではなく茅葺き屋根が描かれている。
- 註17-a. 同登貞治『新装普及版 文様の事典』株式会社東京出版 3版発行 平成10（1998）年2月。
- 註17-b. 早坂優子「日本・中国の文様事典」株式会社視覚デザイン研究所 平成18（2006）年8月。
- 註18. 比嘉 実「古琉球の思想」タイムス選書II●5 沖縄タイムス社 1991年5月。
- 註19. 植松明石「オナリ神」『沖縄大百科事典』上巻 沖縄大百科事典刊行事務局 沖縄タイム社 1983年5月。
- 註20. 宮城栄昌「開得大君」『沖縄大百科事典』上巻 沖縄大百科事典刊行事務局 沖縄タイム社 1983年5月。
- 註21. 金城亀信「線刻石器 県内で初出土／首里城京の内 三日月入り南宋錢も」沖縄タイムス 2017年（平成29年）2月4日土曜日 社会面（26面）
- 註22. 金城 弘「石奉行所」「王府時代の行政機関の一つで、申口方の泊地頭に所属する。石造物にたずさわる役所。漢名は綜石局、その長官は石奉行という。(中略) 1562年(尚元7)石木奉行として創設され、(中略)尚寧王代の万曆年間に石奉行として独立。1735年(尚敦23)木本奉行と合併して普請奉行所となり庵庵にいたる」『沖縄大百科事典』上巻 沖縄タイムス社 1983年5月。

- 註23.上江洲 均・仲地 洋「石工」「前略『琉球国旧記』には、1562年(尚元7)に初めて石奉行を任命したことが記載されている。そのもとに専門職として大工(石工)・脇大工が置かれた。後略」『沖縄大百科事典』上巻 沖縄タイムス社 1983年5月。
- 註24. 1701年(尚益元年)造馬艦・往来外島「球陽附卷2」『球陽』球陽研究会編 角川書店。
- 註25. 里井洋一「近世八重山における造船について—上納船を中心に—」『西表島 船浦スラ所跡—港湾施設用地工事等に伴う発掘調査—』沖縄県教育委員会 1991年3月。
- 註26-a. 真栄平房敬・又吉真三「首里城正殿」、又吉真三「首里城南殿」・「首里城北殿」『沖縄大百科事典』中巻 沖縄タイムス社 1983年5月。
- 註26-b. 財團法人 海洋博覧会記念公園管理財団「1. 首里城内外の各施設の創建年等」『平成7年度下之御庭周辺調査設計』第3回 委員会資料 平成8年5月17日。
- 註27. 註5と同じ。石敷きSS01から出土した遺物の観察と図・写真については130頁～163頁に掲載。
- 註28. 註10と同じ。石敷きSS01の遺構觀察は246頁に、図面が247頁～263頁、写真是264頁～268頁を参照。
- 註29. 註5と同じ。
- 註30. 平成29年1月10日(月)午前11頃に琉球大学の池田榮史教授から韓国の祖靈堂などは扉があって礎石の幅が狭くても問題はないのではとの御教示をいただいた。記して謝意を表したい。となると京の内の出入り口に扉のついた祖靈堂があり、祖靈神(アマミキヨ、シネリキヨ)、察度王などの歴代国王の名前を記した位牌か、或いは1枚板に記名されたものがあった可能性が高いものと考えている。
- 註31. 註10と同じ。石敷きSS01・SS02、SS03-B、SS04-Aの遺構に残存する駁痕や刻印石については、263頁の第56図に掲載。
- 註32. 知念勇「第III節 線刻石板」『北谷町史』第1巻 通史編 北谷町史編集委員会・北谷町教育委員会 2005年3月。
- 註33. 註32と同じ。
- 註34. 註14と同じ。
- 註35. 註21と同じ。
- 註36. 註10と同じ。B-12・13北側トレーナーの遺構観察表及び平面図と解説については、332頁・333頁に掲載。



図版 1 線刻石器

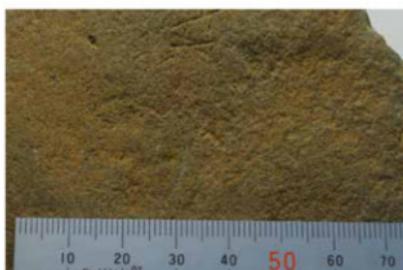
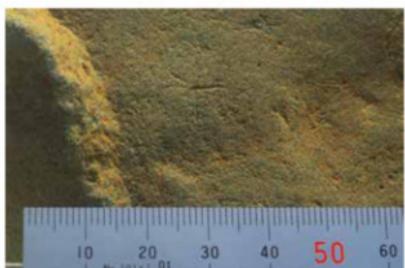


第6図 線刻石器の拓本

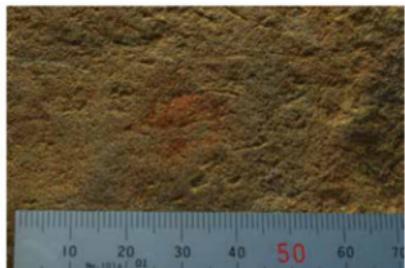


線刻石器（表面）  
1段目 左：帆船・波、右：波と魚  
2段目 左：小型帆船  
3段目 左：種子の萌芽、右：種子の萌芽実測図

線刻石器（裏面）  
4段目 左：帆船・波・人物、右：波と魚



図版2 線刻石器の拡大①



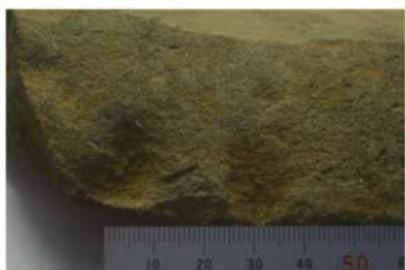
線刻石器（裏面）  
天幕のある和船・人物3名・船・波



線刻石器（裏面）  
鳳凰と菊花



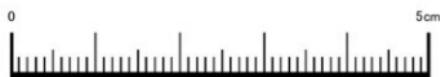
線刻石器（側面）  
帆船と魚



図版3 線刻石器の拡大②



図版4 線刻石器の拡大③（鳳凰部分）



第7図 線刻石器の鳳凰と菊花

第4表 線刻石器で確認された線刻文様の拡大写真及び線彫りの実測図と拓本の比較

表面				
拡大写真				
実測図				
拓本				
文様	帆船・波	小型帆船	波と魚(頭と目玉)	帆船(マスト・旗に「○」・ 艤)・波・人物
拓本・実 測図の 縮尺				

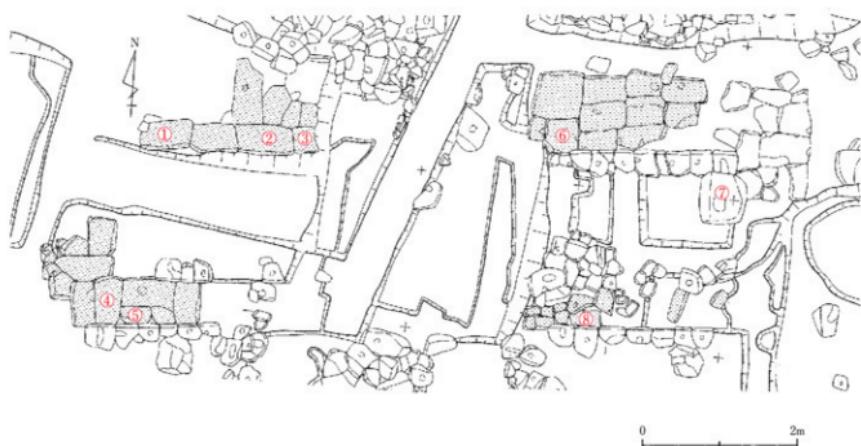
裏面		側面	
和船(天幕のある船)・ 人物3名・船・波	波と魚(頭と目玉、 背ビレ)	帆船と魚	渦潮と 船の竜骨
5cm			



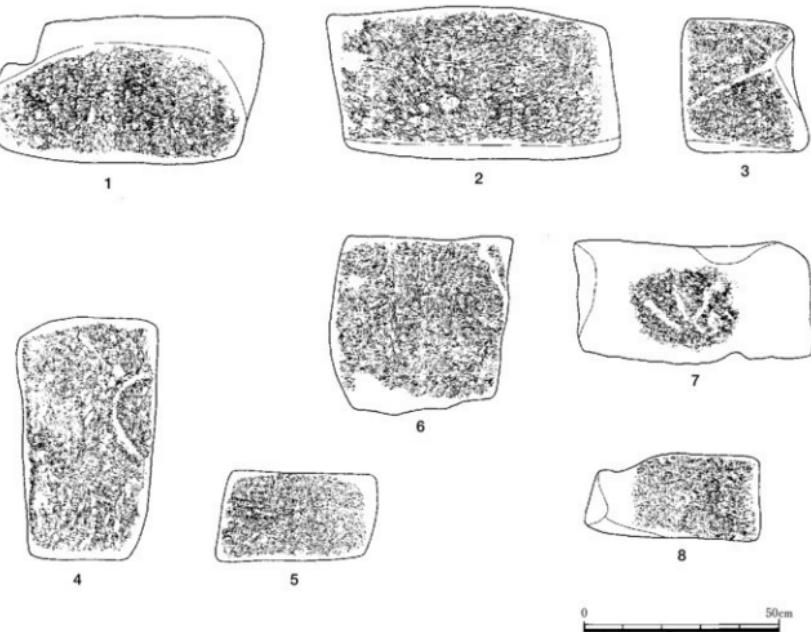




第8回 C-10・11 石敷き 1期 (SS01-02、SS03-B、SS04-A)・Ⅱ期 (SS02-SS04-A・B) の推定復元



第9図 C-10・11 石敷き SS01・02、SS03-B、SS04-A 遺構残存の鑿痕や刻印石の位置図



第10図 C-10・11 石敷き SS01・02、SS03-B、SS04-A 遺構残存の鑿痕（1～3：SS01、5：SS02、6：SS03-B、8：SS04-A）と刻印石（4：SS02、7：SS04-A）

第5表a 県内発見の線刻石板と京の内発見の線刻石器の事例と京の内線刻石器の推定時期(知念勇「第三節 線刻石」)

資料番号	発見年	発見場所等	文様等	発見点数	残存部のサイズ(拓本から求める)				推定期	
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
①	1933(昭和8)年4月3日頃	野国紹官の墓付近発見。熊本医大の山崎正董(やまさきまさただ)博士の旧蔵品。昭和8年4月3日に「野国紹官の墓」付近で採集したといわれている。山里永吉の説では、戦前発見された石板は2個で、1個は番号①、もう1個は昭和10年頃に嘉手納御城から採集されたが、沖縄戦で所在不明としてほぼ追訛化。	三島説:「船」「いかり」 仲原善忠説:「カマ」「甘藷の芽生え」	1	23	13	2	不明	石灰岩 不明	
②					1	30	19	5	3250	結晶片岩 不明
③	1960年頃	嘉手納町字屋良後原発見。嘉手納町屋良の齋藤盛安が屋敷後方斜面の松林から2点が発見・採集し、1961年に県立博物館に寄贈。	知念 勇:資料②は、複雑な構造を持つ「大型船(舵、マスト状、舷)」「鳥(長い鳥冠、長い尾羽、二枝に五指)」、二本マスト状に眼球状の装飾を竹管のような管状のもので磨った。資料③が「人」状の部分と「建物」+「宝珠を乗せた祥殿」、「模飾り鳥の頭部」。多和田真淳:「貿易船」「白鳥(おなり神の守護神)」「船のイカリ」「人家」「穀物倉庫」	1	30.5	27	4.5	不明	結晶片岩 不明	

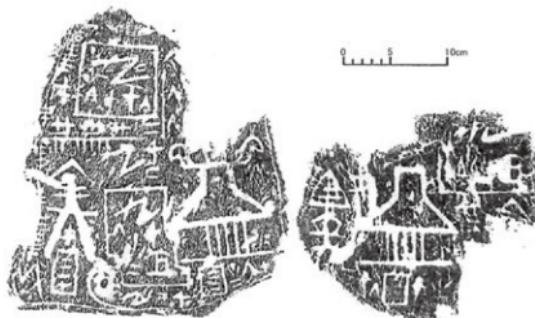
備 者

図版・写真等

考古学者三島 格が熊本市立博物館に山崎氏が寄贈された謎の遺物として保管されていた石版を1954年に再発見し、1955年の『琉球新報』に「眞者御教示を乞う」で寄稿(6月12日夕刊・6月13日朝刊掲載)。三島氏は「カマの刃のようなものは船でその上はいかりででもあろうか」と述べている。



表面採集地付近は、沖縄戦で破壊され擾乱を受け石板はティラジー(寺地、屋良後原の奇桃院跡)から何者かによって運ばれた。新田重清が地域住民の証言から戦前、ティラジーに石板の破片がいくつもあり、現地踏査で同質の結晶片岩の散在を確認。2点とも嘉手納町立民俗資料室に寄贈。







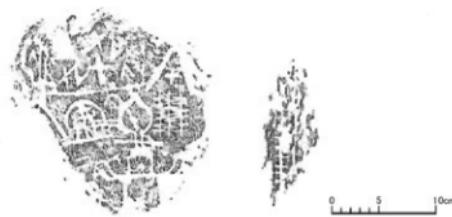
第5表b 県内発見の線刻石板と京内の発見の線刻石器の事例と京の内線刻石器の推定時期(知念勇「第三節 線刻石」)

資料番号	発見年	発見場所等	文様等	発見点数	残存部のサイズ(拓本から求める)					推定期
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	
④	1973年頃	発見地不明。1973年頃に県立博物館収蔵庫で1点の収納を新田重清が確認。	彫りや文様の種類・構成・配置は、喜手納町や北谷町で出土した資料②・③・⑤・⑥と類似。文様の一部は復元可能。	1	26	20	6	不明	結晶片岩	不明
⑤			知念勇:「渦巻き文」「宝珠」「建物」	1	33.5	25.5	4	不明	結晶片岩	不明
	1959年頃	北谷町字上勢頭の伊森原の黙認耕作地を耕作中に喜友名朝金が2点(⑤・⑥)を発見。石板は字吉原の高宮城実盛に渡り私藏していたが、1974年に県立博物館へ寄贈。								
⑥			知念勇:「船」の象形のあるタテ列の構成・配置は資料⑤と類似。	1	29	18.5	2	1750	結晶片岩	不明

## 備 考

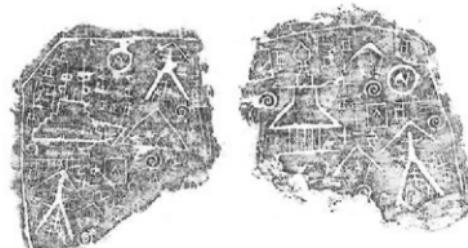
## 図版・写真等

1973年頃に県立博物館の収蔵庫の整理作業で確認。同資料の発見時の記録が一切なく、出所不明。刻文は片面と側面にあり。

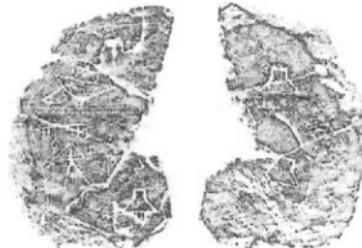


49 資料4（発見地不明）

上勢頭は標高45m前後の石灰岩台地上にあり、18世紀以降に屋取士族によって開発された。石板が発見された耕作地は戦前から廃屋で「仲地の古屋敷」と称された場所。唐旗をした先祖の伝承があるが石板との関係は不明。



50 資料5（北谷町字上勢頭平安山伊森原で発見）



51 資料6（北谷町字上勢頭平安山伊森原で発見）





第5表c 県内発見の線刻石板と京の内発見の線刻石器の事例と京の内線刻石器の推定時期(知念勇「第三節 線刻石」)

資料番号	発見年	発見場所等	文様等	発見点数	残存部のサイズ(拓本から求める)				推定期
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
⑦	1974(昭和49)年	1974(昭和49)年に読谷村座喜味城跡の史跡整備事業に伴う二の郭東側城壁内側の搅乱層から2片の石板が発見、2片は接合可能と判明。	知念勇:上部に「弧状」の文様は、資料⑤で復元可能。	1	27	16	5.7	2650	結晶片岩 不明
⑧		1978年に嘉手納町教育委員会の屋良グスクの発掘調査でイビガナシと称される拝所西側の搅乱層から出土。	知念勇:「模状の沈線」は強弱の刻み分け。「凸」の字状にみえる文様。「棘状の沈線」	1	11.5	6	1.1	75.5	結晶片岩 不明
⑨	1978年	1978年に嘉手納町教育委員会の屋良グスクの発掘調査でイビガナシと称される拝所西側の搅乱層から4片が出土し、接合される。	知念勇:「模状の沈線」は細く浅い、「略十字」の区分。「略十字」に区分された類似の文様構成は資料⑤にある。	1	23.5	13.8	2.4	836	結晶片岩 不明

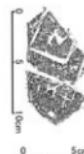
備 考

図版・写真等

座喜味城跡は標高120m前後の台地に立地。城の創建年代は15世紀前半頃。複数の拝所が二の郭にあったが現存しない。



55 資料7 (該谷村施喜味城跡で発見)



56 資料8  
(葛平納町屋良グスクで発見)

屋良グスクは標高40m前後の比謝川南岸に面した丘陵に立地し、屋良大川按司の居城の伝承があり、13世紀から14世紀頃のグスク跡。出土地の「イビガナジー」の拝所は『琉球国由来記』(1713年首里王府が編纂)に「屋良城之根」と記され、屋良集落の聖地。



57 資料9  
(葛平納町屋良グスクで発見)





第5表d 県内発見の線刻石板と京の内発見の線刻石器の事例と京の内線刻石器の推定期(知念勇「第三節 線刻石」)

資料番号	発見年	発見場所等	文様等	発見点数	残存部のサイズ(拓本から求める)					推定期
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	
⑩			知念 勇:「模状の沈線」はシャープで細くて浅い。両面の文様・構成・配置が類似。彫りのタッチや構成は、資料⑨に類似。	1	12.1	9.6	1.4	20	結晶片岩	不明
⑪	1979年	1979年に宜野湾市教育委員会の詳細道路分布調査で、米軍普天間飛行場内の神山テラガマ道路内の持所周辺から資料⑩と共に発見。	知念 勇:片面のみ彫刻。「模状の沈線」は刻み分けがあり鮮明。中央に「鉤状の直線」は資料③などの「方形文様」の一部とみられる。	1	16	9.5	2.7	40	結晶片岩	不明
⑫	1996(平成6)年10月6日	1996年の首里城京の内跡復元整備事業に係る発掘調査で南殿・番所近くの石敷造様SS01の第1層から出土。SS01の間違造様のSS03～SS04の石敷きや礎石にも半円形やアヒルの足跡のような刻印が確認されている。	表裏面及び側面に「帆船」、「小型帆船」、「波」、「魚」、「種子の萌芽」、「天幕のある和船」、「人物3名」、「體」、「鳳凰」、「菊花」、「渦潮」、「船の竜骨」	1	14.2	12.2	3.1	1080	細粒砂岩	17世紀～18世紀初頭

	点数	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
①～⑪までの平均サイズ(但し①、③～⑤は重量表示無し)	11	23.8	16.1	3.3	1,231
⑫京の内資料のサイズ	1	14.2	12.2	3.1	1,080

## 備 考

## 図版・写真等

神山テラガマ遺跡は標高106mの低平な丘陵上部に竪穴状に開口した洞窟で、戦前は神山集落の祭祀や個人的な厄払い儀礼(ハマウリ)をおこなう拝所であった。イベ(聖域)は洞口直下の小テラス脇にある石筍を背にした番炉付近から石板を採集。現地調査に先立つ聞き取り調査で「船・家・船等の象形文字の彫られた石が三個」、「高さ一尺～一尺五寸、幅七寸程度の平石が、香炉の後ろに三つ」建っていたとの証言が得られ、遺跡のほとんどは戦後の擾乱を受けていないため、発見された三片の証言の石板とみなされている。石板は二片が接合され駒状に整形されたほぼ完形。

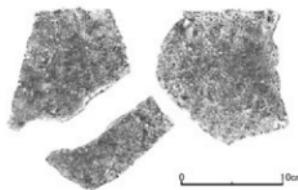


59 資料10 (宜野湾市神山テラガマ遺跡で発見)

首里城南殿・番所・奉神門、北殿、正殿が1709年に火災で炎上し、1712年に正殿を含む建造物群が再建される。石敷き遺構SS01も1709年の火災による二次的な火災を受けておりことや石敷き遺構が中国明代の度量衡(14～17世紀)で構築されていることから17世紀～18世紀初頭頃に王府の役人か石工が製作したものとみられる。



60 資料11 (宜野湾市神山テラガマ遺跡で発見)







中国・南宋の硬貨／線刻石器

## 首里城跡に貴重遺物



緹 挑 元 寶(背土月  
(南京)初鑄年1131年



〈琉球新報社提供〉

96年「京の内」出土

は「背卜月」といへ種類の三日月の上月」の出現数は出上例が少なく、の出上の可能性が高いとしている。

96  
紹興元寶、国内初か  
平教昭人教育長は「  
点の發達度で最も希望  
興味なものだ」とい  
ふべからず、  
認可園が一年で  
いたる點を徹底調査  
調査結果によれば、  
「浦沿いに立派な  
町並みが、航船での  
流れの風景が出ていた  
が、現在は改築され  
て古い建物は少しあ  
るが、ほとんどが新  
しい建物で、風情は  
失なれていた。無趣

『都御市』  
●苔原高  
京の内  
N

開いた道の内にいながら、中国・唐宋（12～13世紀）時代の繪本や「昭慶元寶」正規硬貨（15～17世紀）が現れる。小形の刀物なども絵が彫られた刀剣「唐刀」は、どのものか分からず、異種文化財セシターやおもてなしで、現地内での出店がある。

「青」は「青」という種類の四つの色が裏側に用ひられている。「青上」の正規色は井手柄が少ない、異種文化財セシターでは国内初の出店可能が嬉しい。

A map of Kyoto highlighting several locations related to the story. It includes labels for '那覇市' (Nagaoka City), '●首里高' (Nagoya High School), '●県立芸大' (Kyoto Prefectural University of the Arts), '首里城公園' (Nagoya Castle Park), '●首里城' (Nagoya Castle), '京の内跡' (Inner city ruins), and '●首里駅' (Nagoya Station). A red circle marks the 'Kuroda Kuranosuke's residence' and a red square marks the 'Site of execution'. An arrow points from the residence to the execution site.

池田 肇史氏 琉球大教授



今回、2点が出土した。其の内、  
内は漆器の底板で、漆器底板のみ  
でも結構珍しい。漆器底板のみ  
から祖先をまつる場所として使は  
れたと考えられる。(昭和元年)  
や、「漆器(器)」なら出典の少く、  
は、實物が京のものであつたかとい  
は、京内の祭事や面としての  
要素を示すらう?」

子が居た、たゞ、今回は、近づいて、つかひなん口器が祭事に使われた可能性もあるが、詳細は

貸である」

10

卷之三

は、京の内の堅實  
要窓を示すものだ

政治小説

でも整理しておき  
から祖先をまつる

毎回  
25分

祭事に使用か

あるいは、出立料が少ない。あるいは、裏表紙にしての使用。書籍を手抱きして渡さずする「威儀附」であったとされるが、今回出立したのは、「威儀附」ではない。なぜなら、書籍として使用されたため著者として「猪俣(猪俣)」が京の「文政元年正月」に記載されている。これは、猪俣(猪俣)の「新事」に由緒を使つて、改めたものだが、「由緒」はわざわざに題したもので、出立しない可能性があるからである。

## 圖版5 新聞資料①

# 線刻石器 県内で二日月入り南宋錢も出土

首里城京の内 二日月入り南宋錢も出土



（金城龜信所長）は3日、首里城京の内地区から帆船や魚が刻まれた線刻石器と、

三日月の模様が施された中國南宋の銭「紹興元寶」（1131年铸造）を発見したと発表した。いずれも県内で確認されたのは初めて。

石器は細粒砂岩で作られ、石器は細粒砂岩で作られた車さ約1.9mの砾石。15世紀末から17世紀ごろのものとみられ、両面と側面に帆船や船波、魚、人物などが細かく描かれている。

金城所長は、「航海安全を祈願して作られた『紹興元寶』は真珠約3.7g、重さ約2.5gの綱銭。出土した首里城京の内は、琉球王府の重要な祭祀を執り行った場だが、祭祀ごとの関連は分かつてない。金城所長は、「國內でみても確認されてきたが、石器は例がなかった。沖縄考古学会の知念顧問は、首里（考古学）は珍しいもの

ではない」と推測。紹興元寶はこれまでにも出土

したが、正式な銭であることを示す三日月が施されたものは初確認とい

う。「『背・肩文』が刻まれた



線刻石器と南宋銭出土現場



裏側に三日月模様が彫かれた  
「背・肩文」

で、今後の琉球資本帯研究の貴重な史料になる」と評価した。いずれも1994年から4年間の京の内地巡回調査で出土したもので、昨年12月に金城所長が調査報告書執筆時に発見した。21日から同センターで2点を含む「首里城京の内跡出土品展」が開かれる。5月14日まで。入場は無料。

とみられ、両面と側面に帆船や船波、魚、人物などが細かく描かれている。特徴的だ」と語る。金城所長は、図柄から「航海安全を祈願して作られた『紹興元寶』は真珠約3.7g、重さ約2.5gの綱銭。出土した首里城京の内は、琉球王府の重要な祭祀を執り行った場だが、祭祀ごとの関連は分かつてない。金城所長は、「國內でみても確認されてきたが、石器は例がなかった。沖縄考古学会の知念顧問は、首里（考古学）は珍しいもの

〈沖縄タイムス社提供〉

第6表 第V期 出土遺物状況

遺物名		出土地	SA06	SA13	SA15	SA21	SA23	SA31	SS05	B-12・13 北側 trench	合計	割合
中國產	青磁		19	10	163	72	5		22	10	301	5.84%
	白磁		6	3	15	16			1	1	42	0.82%
	青花		6	1	25	22	2		11	3	70	1.36%
	彩軸陶器		5	1		26			36	4	72	1.40%
	褐軸磁器					2					2	0.04%
	黒軸陶器		3		5	2					10	0.19%
中国産褐軸陶器			60	27	332	157	16	2	200	47	841	16.32%
ベトナム產	タイ産土器(半練)			1	6	1	1		1		10	0.19%
	タイ産炻器				1						1	0.02%
	タイ産陶器(パンブーン窯)				6						6	0.12%
	タイ産褐軸陶器		21	5	32	53	1		39	7	158	3.07%
	ベトナム産染付					1					1	0.02%
本土產	本土産磁器		1	1	2	10	3		24		1	0.82%
	本土産陶器		1		1				3		5	0.10%
屋瓦			165	11	600	1051	361	2	405	13	2608	50.62%
埠瓦			20		6	33	4		145		208	4.04%
沖縄產	グスク土器		8	7	12	8	1		7	10	53	1.03%
	瓦質土器		2	2	5	5	1		7		22	0.43%
	陶質土器			1	1	7			2		11	0.21%
	沖縄產施釉陶器		3		4	5	1		22	1	36	0.70%
	沖縄產無釉陶器		3		62	47	4		12	3	131	2.54%
	瓦質と無釉陶器の中間				1						1	0.02%
貝製品					2	2					4	0.08%
骨製品						2			1		3	0.06%
石・石製品			14	4	40	21	4		14	5	102	1.98%
円盤状製品			1		7	2			3		13	0.25%
金属製品			31	2	64	79	13		74	14	277	5.38%
錢貨			13	1	15	1	2		43	1	76	1.48%
鍛冶関連									1		1	0.02%
ガラス玉					7				1		8	0.16%
ガラス製品			2	2	4	14	9		2	1	34	0.66%
燒土					1						1	0.02%
プラスチックひねりこま									1		1	0.02%
木片					1		1				2	0.04%
合計			384	79	1422	1637	429	4	1077	121	5153	100%
割合			7.45%	1.53%	27.60%	31.77%	8.33%	0.08%	20.90%	2.35%		

第7表① 石積みSA06 出土遺物状況

種類	器種不明	輪部	B-12 SA06			B-12-13 SA06				B-13 SA06				合計			
			SD04 第3層b (外側コート ラル層)	第4層 (上部)	第4層	覆土	第1層a	第1層b	第4層 (下部)	第4層 (底石)	第1層a	第1層b	第4層 (一部 底石)				
			合計				0	0	0	4	0	0	1	2	0	0	
瓦質土器	糞	口縁部													2		
		合計					0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	
規則	共通系	平瓦	灰色	漆喰無し											2	2	
	大和(古)	丸瓦	灰色	漆喰無し											1	1	
	平瓦	灰色	漆喰無し												4	4	
	丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)												1	1	
	大和	平瓦	灰色	漆喰あり(背面)											2	2	
		丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)											6	6	
	大和(近代もの)	平瓦	灰色	漆喰あり(片面)											16	16	
		軒丸	褐色	漆喰無し											1	1	
		丸瓦	褐色	漆喰あり(片面)											1	1	
	明朝系	灰色	漆喰無し												2	2	
規則	丸瓦	褐色	漆喰無し												6	6	
		灰色	漆喰あり(片面)												2	2	
		褐色	漆喰あり(片面)												2	2	
		赤色	漆喰あり(片面)												9	9	
		灰色	漆喰あり(片面)												7	7	
		褐色	漆喰無し												6	6	
		灰色	漆喰あり(片面)												2	2	
		褐色	漆喰無し												3	3	
		平瓦	褐色	漆喰無し											27	27	
		赤色	漆喰あり(片面)												31	31	
	合計						0	0	0	0	0	0	0	0	146	146	
規則	Aa	灰色	漆喰無し	角1											2	2	
		赤色	漆喰無し	角1											1	1	
	Ab	灰色	漆喰無し	角1											1	1	
	Ba	灰色	漆喰無し	角1											1	1	
		灰色	漆喰無し	角1											1	1	
	形状不明a	赤色	漆喰無し	角無し											1	1	
	形状不明b	灰色	漆喰無し	角無し											2	2	
		赤色	漆喰無し	角無し											6	6	
		合計					0	0	0	0	0	0	0	0	10	10	
							2	1						1	1		
背磁	綱	口縁部	外反	無文											2	2	
		渡口	無文												1	1	
		輪部		無文											1	1	
		底部	a#77'	有文											4	4	
			b#77'	無文											1	1	
	皿	口縁部	外反	無文											1	1	
		底部	無文												1	1	
			渡口	無文											1	1	
			枝花	外彌(茎+片切頭)内面無文											1	1	
															1	1	
背磁	八角皿	口縁部～底部	外反	内面無文	内面有文										1	1	
		綱	口縁部	内面無文	内面有文										1	1	
		盤	口縁部	内面無文	内面有文										1	1	
		底部	a	印文											1	1	
			蓋	有文	不明										1	1	
		合計					2	0	0	0	6	0	3	1	0	5	5
							1	1						1	1		
														1	1		
														2	2		
														1	1		
背花	綱	口縁部	渡口												2	2	
		輪部	無文												2	2	
		底部	無文												1	1	
		合計					0	0	1	0	0	2	1	0	0	0	0
															2	2	
															1	1	
															1	1	
															1	1	
															1	1	
															1	1	
彩繪陶器	蓋	輪部													1	1	
		把手													1	1	
		輪部													1	1	
		馬形水注?													2	2	
彩繪陶器	綱	口縁部	渡口												2	2	
		蓋													1	1	
黑入皿	合計						0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0
															3	3	

第7表② 石積みSA06 出土遺物状況

種類	品目	B-12 SA06				B-12+13 SA06						B-13 SA06				合計
		S064 第3層 (外側3- フル層)	第4層 (上部)	第4層	覆土	第1層a	第1層b	第4層	第4層 (底石内)	第4層 (底石)	第1層a	第1層b	第4層	西側 駆り込み (一部 複数)		
		口縁部 方型 フタの字狀 彫刻		1				3					1	1	1	
中国產 鈎轄陶器	東	彫部						6	5	20	5	1	27	3	3	3
		有文						1						1	1	1
		底部						1					1	1	2	2
		不明								4					4	4
合 計		0	1	0	0	0	0	36	30	0	0	1	30	0	40	40
タイ産 鈎轄陶器	東	肩部												1	1	1
		胸部						1					1	17	19	19
		底部											1		1	1
合 計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	18	0	21	21
本土產 陶器	碗	胸部	近視											1	1	1
合 計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
本土產 陶器	瓶木綿	口縁部	謹厚										1		1	1
合 計		0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
沖繩花瓶軸 陶器	鍋	胸部											1			1
	魚形	胸部						1					1		2	2
合 計		0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	3
片輪形 骨軸陶器	漢	口縁部											1		1	1
	不明	胸部											2		2	2
合 計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
石磚or羽目板 石材	石磚砂岩(コ-セ)	破片											1			1
	石材	總紅砂岩(ド-セ)								2	1	1	1	5	10	10
河原石													2		2	2
合 計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	0	14
円盤狀 骨器		青磁											1		1	1
合 計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
工具類 生産用具 企画製品	丸刃	突形	中	鉄										2	2	2
		小	鉄											1	1	1
		先端部欠損	中	鉄									2		2	2
		油部欠損	不明	鉄									6	6	6	6
		突形	中	鉄									1		1	1
	角刃	大	鉄										1		1	1
		大or中	鉄										1		1	1
		中	鉄					1	1	2			4		4	4
		不明	鉄										3	3	3	3
		先端+ 油部欠損	大or中	鉄									2		2	2
武具	八寶金具	青銅						1							1	1
不明	不明	青銅							1				1		1	1
合 計		0	0	0	0	1	1	1	3	0	1	1	11	12	31	31
刀具製品	板ダラス	—											2		2	2
合 計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	2

第18表 石積みSA13 出土遺物状況

種類	層序	B-12		B-12+13		B-12		B-12+13		合計		
		SA13		SA13		SA13		SA13				
		第2層 (黄白色混 土練結)	第2層 (赤褐色 混土練結)	表様	L字状 直上 第1層d	L字状の 軸直上 第1層d	第2層 (赤褐色 混土練結)	第3層 (赤褐色 混土練結)	第2層 裏突	第3層 裏突	第3層 (赤褐色 混土練結)	第5層
グスク土器	垂	口縁部									1	1
	器種不明	腹部									6	6
	合 計	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	7
陶質土器	垂										1	1
	合 計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
瓦質土器	垂	腹部				1						1
	合 計	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0
灰瓦	明朝系	丸瓦	灰色 (漆喰有り(片面))								1	1
		灰色									7	7
		平瓦	漆喰無し		1						1	
		赤瓦		1							1	2
	合 計	0	2	0	0	0	0	0	0	9	0	11
青磁	仰	口縁部	内側	底頭文・腹肩有り		1					1	1
		腹部	有文								1	1
	直	口縁部	直口	蓮瓣・片切衝立	1		1				1	2
		底部	双魚文								1	1
	八角皿	腹部	無文	内面:有文乍明			1				1	
	盤	口縁部	舞紋	内面:蓮瓣文							1	1
		底部	無文	高台なし	1						1	
	花盆台?	持縁?・脚?				1					1	
	合 計	1	0	0	1	2	1	0	1	2	1	10
白磁	碗	口縁部	外反								1	1
		腹部					1				1	
	皿	底部							1		1	
	合 計	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0
青花	碗	口縁部	直口				1				1	
	合 計	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
影動陶器	鶴形水注	腹部				1					1	
	合 計	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
中国産 靴桶陶器	垂	頭部									1	1
		脚部									19	25
	不明	脚部	有文								1	1
	合 計	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	27
タイガ土器 (半袖)	垂	腹部			1							1
	合 計	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
タイガ 靴桶陶器	垂	耳									1	1
	合 計	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	4
本土産 埴跡	小瓶	口縁部	近頃								1	1
	合 計	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
石・石製品	石器片	細粒砂岩 (シーピー)						1				1
	石材	細粒砂岩 (コヒニ)									3	3
	合 計	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	4
金属 製品	工具類・ 生産用具	小型皆打鋤 完形 鉄 鉛金具	中 鉄 鉛								1	1
	合 計	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3
ガラス製品	瓶	腹部									2	2
	合 計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2

第9表① 石積みSA15 出土遺物状況

種類	基盤	形状	表面	寸法	材質	特徴	個数	東側ランチ								B-14 SA15				
								覆土	覆石内	第1層a	第2層	第3層a	第3層b 表面色 土層	第4層a	第5層a	第5層b	第6層a	第6層b	覆土 覆石内	第3層b (地表 内)
骨器	グスク土器	環	底部															2	3	
		四種不明	剥出																	
		合 計						0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	3	
陶質土器		縦	剥出																0	
		合 計						0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	
瓦質土器		鉢	口縁部																1	
		火炉	底部																1	
		蓋																	1	
		不明	剥出																0	
		合 計						0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	
瓦	高麗系	軒丸	灰色 褐色	漆喰無し																
		軒平	灰色 褐色	漆喰無し																
		丸瓦	灰色 (整形処理)	漆喰無し	5		0	7						0	12		3	2		
		平瓦	灰色 (整形処理)	漆喰無し	2		1	16						5	1			1		
		平瓦	灰色 褐色	漆喰無し			11	30				1	16	14		11	10			
	大和 (古)	丸瓦	灰色 褐色	漆喰無し			4	1					1	1					1	
		平瓦	灰色 褐色	漆喰無し			13					3	4	1	1	1	5			
	大和	漆張瓦	褐色 赤色	漆喰無し																
		丸瓦	灰色 褐色	漆喰無し			5	8												
		平瓦	灰色 褐色	漆喰無し			1													
		役瓦	黃褐色	漆喰無し																
明朝系	丸瓦	丸瓦	灰色 褐色 赤色	漆喰無し (片面)													1	1		
		丸瓦	灰色 褐色 赤色	漆喰無し (片面)			1										9			
		丸瓦	灰色 褐色 赤色	漆喰無し (片面)			2							7				2		
		平瓦	灰色 褐色 赤色	漆喰無し (片面)	1		0						10	1	11	1	3			
		平瓦	灰色 褐色 赤色	漆喰無し (片面)			1										1			
	平瓦	丸瓦	灰色 褐色 赤色	漆喰無し (片面)			4	1									0			
		丸瓦	灰色 褐色 赤色	漆喰無し (片面)			8	0	4	36	78	6	2	47	35	1	48	24	0	
		合 計																		
		I型	不明	赤色	漆喰無し	角1														
		Aa	灰色	漆喰無し	角無し															
博瓦	III型	Ab	灰色	漆喰無し	角1															
		形狀不明b	灰色	漆喰無し	角無し															
		形狀不明b	赤色	漆喰無し	角1															
		合 計						0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	
		博士	—					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	IV型	合 計						0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		口縁部	玉縁	c476	型押蓮弁文			1												
		外反			外面:無文 内面:文様不明			1												
		口縁部	直口		無文			1	2		1			0	2	2	2	2	7	
		玉縁			蓮弁・片切型 蓮弁・複葉型 (波状文・蓮弁) 雷文・片切型 無文															
	瓶	合 計						1	2	1	1	0	0	0	1	1	1	5	0	
		口縁部	玉縁	c476	型押蓮弁文			1												
		外反			外面:無文 内面:文様不明			1												
		口縁部	直口		無文															
		玉縁			蓮弁・片切型 蓮弁・複葉型 (波状文・蓮弁) 雷文・片切型 有文			1												
	瓶	合 計						1	2	1	1	0	0	0	1	1	1	5	0	
		口縁部	玉縁	c476	型押蓮弁文			1												
		外反			外面:無文 内面:文様不明			1												
		口縁部	直口		無文															
		玉縁			蓮弁・片切型 蓮弁・複葉型 (波状文・蓮弁) 雷文・片切型 有文			1												
	瓶	合 計						1	2	1	1	0	0	0	1	1	1	5	0	
		口縁部	玉縁	c476	型押蓮弁文			1												
		外反			外面:無文 内面:文様不明			1												
		口縁部	直口		無文															
		玉縁			蓮弁・片切型 蓮弁・複葉型 (波状文・蓮弁) 雷文・片切型 有文			1												
	瓶	合 計						1	2	1	1	0	0	0	1	1	1	5	0	
		口縁部	玉縁	c476	型押蓮弁文			1												
		外反			外面:無文 内面:文様不明			1												
		口縁部	直口		無文															
		玉縁			蓮弁・片切型 蓮弁・複葉型 (波状文・蓮弁) 雷文・片切型 有文			1												
	瓶	合 計						1	2	1	1	0	0	0	1	1	1	5	0	
		口縁部	玉縁	c476	型押蓮弁文			1												
		外反			外面:無文 内面:文様不明			1												
		口縁部	直口		無文															
		玉縁			蓮弁・片切型 蓮弁・複葉型 (波状文・蓮弁) 雷文・片切型 有文			1												
	瓶	合 計						1	2	1	1	0	0	0	1	1	1	5	0	
		口縁部	玉縁	c476	型押蓮弁文			1												
		外反			外面:無文 内面:文様不明			1												
		口縁部	直口		無文															
		玉縁			蓮弁・片切型 蓮弁・複葉型 (波状文・蓮弁) 雷文・片切型 有文			1												
	瓶	合 計						1	2	1	1	0	0	0	1	1	1	5	0	
		口縁部	玉縁	c476	型押蓮弁文			1												
		外反			外面:無文 内面:文様不明			1												
		口縁部	直口		無文															
		玉縁			蓮弁・片切型 蓮弁・複葉型 (波状文・蓮弁) 雷文・片切型 有文			1												
	瓶	合 計						1	2	1	1	0	0	0	1	1	1	5	0	
		口縁部	玉縁	c476	型押蓮弁文			1												
		外反			外面:無文 内面:文様不明			1												
		口縁部	直口		無文															
		玉縁			蓮弁・片切型 蓮弁・複葉型 (波状文・蓮弁) 雷文・片切型 有文			1												
	瓶	合 計						1	2	1	1	0	0	0	1	1	1	5	0	
		口縁部	玉縁	c476	型押蓮弁文			1												
		外反			外面:無文 内面:文様不明			1												
		口縁部	直口		無文															
		玉縁			蓮弁・片切型 蓮弁・複葉型 (波状文・蓮弁) 雷文・片切型 有文			1												
	瓶	合 計						1	2	1	1	0	0	0	1	1	1	5	0	
		口縁部	玉縁	c476	型押蓮弁文			1												
		外反			外面:無文 内面:文様不明			1												
		口縁部	直口		無文															
		玉縁			蓮弁・片切型 蓮弁・複葉型 (波状文・蓮弁) 雷文・片切型 有文			1												
	瓶	合 計						1	2	1	1	0	0	0	1	1	1	5	0	
		口縁部	玉縁	c476	型押蓮弁文			1												
		外反			外面:無文 内面:文様不明			1												
		口縁部	直口		無文															
		玉縁			蓮弁・片切型 蓮弁・複葉型 (波状文・蓮弁) 雷文・片切型 有文			1												
	瓶	合 計						1	2	1	1	0</								







第9表② 石積みSA15 出土遺物状況

種類	部位	文様	特徴	東側レシテ								B-14 SA15			
				覆土	覆土 裏石内	第1層a	第2層	第3層a	第3層b 褐色土層	第4層a	第5層a	第5層b	第6層b	覆土 裏石内	第3層b (時)裏石 (内)
備	頭部	e3(フ)	輪文・透かし・片切端・ 透かし文様・不明							1					
		d9(フ)	有文												
		g9(フ)	有文												
		h9(フ)	有文			1									
		高台なし	有文												
	底部	白(フ)	無文												
		高台なし	文様不明												
		白(フ)	有文							1					
		白(フ)	有文					1							
		h9(フ)	有文												
大綱	口縁部	口折	外面: 蓋か・片切端 内面: 無文			1									
		口縁部	外面: 透かし・片切端 内面: 無文												
		外反	無文			1									
		直口	外面: 透かし・片切端 内面: 透かし・片切端												
		桜花	文様不明												
	底部	頭部	外面: 透かし・片切端 内面: 無文												
		底部	無文												
		不規	高台のみ												
		タガ	外面: 無文 内面: 透かし・丸頭			1									
		状持縁	外面: 文様不明 内面: 透かし・丸頭												
青磁	口縁部	口折	外面: 無文 内面: 透かし・丸頭												
		タガ	外面: 透かし・丸頭 内面: 透かし・丸頭							1	1				
		状持縁	外面: 有文・不明 内面: 透かし・丸頭							1					
		桜花	外面: 無文 内面: 有文・不明												
		玉縁	文様不明 外面: 無文 内面: 透かし・丸頭												
	盤	頭部	外面: 無文 内面: 透かし・丸頭												
		口折	外面: 文様不明 内面: 透かし・丸頭												
		桜花	外面: 無文 内面: 有文・不明												
		玉縁	文様不明 外面: 無文 内面: 透かし・丸頭												
		不規	外面: 無文 内面: 透かし・丸頭												
酒合舟	頭部	a	印葉文												
		b	高台なし 印葉文												
		a	無文												
		b	文様不明												
		b	無文												
	底部	口縁部	外面: 透かし・丸頭 内面: 無文			1				1					
		頭部	外面: 透かし・丸頭 内面: 無文				1								
		底部	外面: 有文・不明 内面: 無文			1									
		高台	外面: 透かし・丸頭 内面: 無文												
		高台	高台												
瓶	口縁部	高台	無文												
	頭部	高台	文様不明									1			
	底部	高台	無文												
	蓋	高台	無文												2
香炉	口縁部	高台	無文												
	頭部	高台	無文												
大鉢	頭部	高台	無文												
	底部	高台	無文												
合計				1	9	10	1	7	3	1	8	5	3	13	22







第9表③ 石積みSA15 出土遺物状況

種類		部位		層位										B-14		SA15											
				復土		復土 裏石内		第1層a		第2層		第3層a		第3層a 暗褐色 土層		第4層a		第5層a		第6層b		復土 裏石内		第3層b (暗褐色 内)		第3層b (裏)	
				直	横	直	横	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r		
白磁	碗	口縁部	縦反刃																								
			直口																								
		内側																									
		胸部				1	1																				
		底部	a																								
	皿	口縁部	内側																								
		外反	1																								
青花	大鉢	口縁部	外反																								
		胸部																									
	瓶?	胸部																									
		合計				0	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0			
黒釉陶器	碗	口縁部	外反																								
			波瀾文																								
		直口																									
		接点-直口																									
		胸部																									
	皿	口縁部	直口																								
		大鉢	口縁部																								
馬上柄	瓶	胸部																									
		合計				0	3	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0			
中国度 褐釉陶器	碗	口縁部	方形	1																							
			玉縁状																								
		波字状																									
		フの字状																									
		その他																									
		口縁部～胸部	フの字状																								
		胸部																									
小瓶	瓶	直																									
		把手																									
		口縁部																									
		胸部																									
		不明																									
		合計				3	0	6	63	44	2	2	3	1	0	0	22	13	0	0	0	0	0	0	0		
タ(直土器 (平底)	蓋	端部	I																								
			Ⅱ																								
		Ⅳ																									
		その他																									
		不明																									
		柄部																									
		合計				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
タイ面付器	合	口縁部																									
		合計				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
タイ面 陶器	合	胸部																									
		合計				0	0	0	1	1																	
本土產 褐釉陶器	タイ面	口縁部	合計			0	0	0	2	7	0	0	1	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0		
			印判染付、型紙転写																								
		柄部																									
		胸部																									
		胸																									
		合計				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
本土產 陶器	黒	漆塗	柄部																								
		合計				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
沖縄產 褐釉陶器	画	口縁部																									
		直																									
		壺or瓶																									
		壺或瓶																									
		合計				0	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		

									B-14-15 SAIS						B-15 SAIS		合計
3層b 食塩外 石(内)	西側1シナ								東側 1シナ	西側1シナ						覆土 北側 第2層 培地化 土層	合計
	第1層a	第5層a	第5層g	第5層h	第6層a	第7層a	第7層b	第9層		第1層	第3層b (鉛石 内)	第4層a	第5層a	第5層g	第5層h		
1																	1
1										1							1
										1							1
1										1							1
0	2	1	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	15
																	1
																	1
																	8
																	1
																	5
																	4
																	1
																	2
																	1
																	1
0	0	0	1	0	4	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	25
																	5
0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
																	1
1																	6
1																	5
1																	1
																	3
																	1
																	7
2																	4
1																	2
59	25	10	1	30						8	1	9	7				283
																	2
1																	8
1																	2
																	1
																	1
																	5
0	66	27	15	1	32	0	0	0	0	9	1	10	9	0	3	0	332
																	1
																	1
																	1
																	1
																	1
0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	6
																	1
0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
1																	6
0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
																	1
																	1
																	2
5	1	3	0	4						1		1					23
3																	5
0	8	1	3	0	5	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	32
																	1
0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1





第9表④ 石積みSA15 出土遺物状況

種類		層位		東側セクター										層位 記号 (主)		
				覆土	覆土 裏石内	第1層a	第2層	第3層a 暗褐色 土層	第3層a 暗褐色 土層	第4層a	第5層a	第5層a	第6層a	覆土 裏石内	第3層b	
				合計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
沖縄産 無釉陶器	鉢	口縁部													1	1
			脚部												1	1
		底	底												1	1
			口縁部～頸部												0	0
	盃	口縁部													1	1
		脚部													0	0
		底													11	11
	甕	口縁部		1											8	8
	壺	脚部													12	4
	不明	脚部	1												1	1
瓦製品	合計			1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	43	6
	瓦製品	ヤコウガイ製有孔製品				1									0	0
	合計			0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	骨製品	骨頭	ジルダン(骨)												1	1
	用途不明	ジルダン	動骨												0	0
石・岩製品	合計			0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	砥石														1	1
	砥盤の木製品(敲打のみ)	織粒砂岩(シート)													0	0
	石材片	チャート													5	5
	石炭岩	織粒砂岩(シート)		2		1	3	2			1				1	1
円盤状 製品	合計			2	0	1	4	2	0	0	1	0	1	1	5	0
	青磁			1											1	1
	中国產鐵物陶器														0	0
	瓦														1	1
工具類・ 生産用具	合計			1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	丸刃	完形	中	熟											1	1
		先端+ 脚部欠損		熟											0	0
		完形	中	熟		1		1						1	1	
		先端部欠損	中	熟			1	3						1	1	
		脚部欠損	中	熟			1	1						1	1	
		先端+	中	熟			4	2						1	1	
		脚部欠損	小	熟		1		2						1	1	
		不明		熟			2							0	0	
		鍔の櫛歯													0	0
金属製品	武具	鋸角付の櫛歯													0	0
		札													0	0
		襷輪													2	2
		笠箭													0	0
		笠箭													0	0
		八叉金物													0	0
		板状製品(武具の一箇)													0	0
		繩	口縁部												0	0
		切羽													1	1
		不明													0	0
	合計			0	4	9	2	8	0	0	1	0	0	0	1	1
ガラス玉	II種														1	1
	IV種														0	0
	合計			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ガラス 製品	瓶														1	1
	イクラン														0	0
木片	板ガラス														1	0
	合計			0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0







第10表① 石積みSA21 出土遺物状況

種類	器形	色	表面	C-13				C-13・14				C-14				C-14				合計
				SA21		SA21		SA21		SA21		SA21		SA21		SA21				
				第1層d (表面色 上層)	裏石内 第2層a	第1層e	第1層d (覆土)	第2層a	裏石内 第2層a	赤瓦 青瓦	青瓦	赤瓦 青瓦	青瓦	青瓦	青瓦	青瓦	青瓦	青瓦		
グスク土器	縁付	黒	表面							1									1	
	縁	黒	表面			1													1	
	縁付	黒	表面			3				1									3	
	不明	不明	表面			1													1	
合計				0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
陶質土器	縁	黒	表面			1				1									2	
	縁	黒	表面			1													1	
	縁	黒	表面																1	
	火打	黒	表面			1													1	
	不明	黒	表面			1													2	
合計				0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
瓦質土器	縁	黒	表面			1													1	
	縁	黒	表面																1	
	不明	黒	表面			1													2	
	不明	不明	表面			1													1	
合計				0	1	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
屋瓦	高麗系	丸瓦	灰色	透吸無し		2					25	25							6	
		丸瓦	褐色	透吸無し		2	1												3	
		平瓦	灰色	透吸無し		3	10			30									46	
	大和(吉)	丸瓦	褐色	透吸無し		1													3	
		平瓦	褐色	透吸無し		2	15												17	
		麗巻瓦	褐色	透吸無し															1	
	大和	丸瓦	褐色	透吸無し		1	2				1								4	
		丸瓦	灰色	透吸無し		3													3	
		平瓦	褐色	透吸無し		17													17	
	軒瓦	軒丸	灰色	透吸無し		1	1												2	
		軒丸	褐色	透吸無し		1													3	
		軒平	灰色	透吸無し		1													1	
	明鏡系	丸瓦	褐色	透吸無し		3													3	
		丸瓦	灰色	透吸無し		17													17	
		平瓦	褐色	透吸無し		22	19				22	22							44	
	明鏡系	丸瓦	褐色	透吸無し		1	1												2	
		丸瓦	褐色	透吸無し		14	20				20								34	
		丸瓦	褐色	透吸無し		2	2				2								4	
	平瓦	褐色	透吸無し		11						11								11	
		褐色	透吸無し		1	6					6								12	
		褐色	透吸無し		57	113					99	1	1						271	
	屋瓦	褐色	透吸無し		10	5					5		5						21	
		褐色	透吸無し		20						14	3	3						30	
		褐色	透吸無し		167						119	127	10						309	
合計				0	92	321	0	0	0	274	19	35	0	0	0	0	0	0	382	
博瓦	I型	C	灰色	透吸無し	尚無し	1					1								2	
		不明	灰色	透吸無し	尚無し	1													1	
	I型orII型	平明	灰色	透吸無し	尚無し	1													1	
		一	灰色	透吸無し	尚無し	1													1	
	Ab	Aa	赤色	透吸無し	尚無し	1													1	
		Ab	灰色	透吸無し	尚無し	1													1	
	形状不明a	赤色	透吸無し	尚無し	1														1	
		灰色	透吸無し	尚無し	1														1	
	形状不明b	灰色	透吸無し	尚無し	20	8					8		1						29	
		赤色	透吸無し	尚無し	1														1	
合計				0	6	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33	
青磁	瓶	外反	無文		6	2					1								9	
		口縁部	波文		1														1	
		底	無文		2	1													1	
		瓶	片切(直井)		1	1													2	
	底部	無文			6	5					2	2							14	
		文様			1														1	
		有文			1														1	
		eTF			1														1	
		cTF			1														1	
		aTF			1														1	
小計				1	23	12	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	40	

第10表② 石積みSA21 出土遺物状況

種類	部位	文様	C-13		C-13+14		C-14		C-14		合計
			SAT21	SAT21	SAT21	SAT21	SAT21	SAT21	SAT21	SAT21	
			第3層d (黒褐色 土塗)	第2層a	第1層a	第1層d (塵土)	第2層a	第1層a	赤瓦 集巾部 第1層d	赤瓦 集巾部 第2層d	石積底下 第6層
青磁	口縁部	文様不明		1							1
		外面: 龍文+片切割の 内面: 有文+片切割の		1							1
		外反									1
		外面:無文		1							1
		内面: 文字不明									3
	直口	無文		2							2
		文様不明			1						1
		内面: 蓋小+片切割の					1				1
		内面: 無文						1			1
		蓮台+片切割						1			1
	脚部	無文		10							10
		無文				1					1
		無文			10			1			10
		無文					10				10
		無文						10			10
青白	口縁部	外面: 文字不明 内面: 黑分+丸頭		1							1
		内面: 花文+片切割の		1							1
		文様不明		2							2
		外反		1							1
	脚部	外面:無文		1							1
		内面: 無文+丸頭			1						1
		内面: 黑分+繩摺			1						1
		内面: 蓋文+片切割の			1						1
		有文: 文不明			1						1
	直口	文様不明		1	a		1				1
		蓮台+丸頭				1					1
		脚部						1			1
		蓋							1		1
		蓮台+片切割の他 花唐草文+片切割の							1		1
	大鉢	脚部				1					1
		脚部							1		1
		蓮文+片切割の					1				1
		脚部							1		1
		合計		1	88	16	0	0	6	0	0
白磁	口縁部	外反		1							1
		脚部		3	1		1				3
		その他			1						1
		口縁部					1	1			2
		内溝					2				2
	直口	脚部			1						1
		底部				2					2
		脚部				1					1
		底部		2			1				3
		馬上井+外			1				1		1
	合計		0	7	9	1	0	5	0	0	6
		脚部							0		0
		外反							0		0
		底部							0		0
		合計	0	7	9	1	0	5	0	0	6
青花	口縁部	外反		1							1
		脚部		1	2		2				5
		底部		3	3		1				7
		脚部		1		1					2
		蓋		1							1
	直口	脚部			2		1				3
		底部			1						1
		馬上井+外			1						1
		脚部				1					1
		合計	0	7	9	1	0	5	0	0	6
青釉陶器	瓶	脚部			2		2				4
		水滴			1						1
		鶴形水注			11		4				15
		不明					1				1
		魚形水注			1				1		2
	合計		0	2	14	0	0	7	0	0	20
		脚部							0		0
		合計	0	2	14	0	0	7	0	0	20
	合計	口縁部									0
		脚部									0
中国産 青釉陶器	蓋	外反		1							1
		脚部		2							2
		その他		1							1
		有文		1			4				5
		把手		1							1
	不明	底部		2							2
		脚部		6	1						7
		蓋			1						1
		合計	0	78	62	0	0	15	0	0	135
		タイ復土器 (半鐘)	蓋	鑿み				1			1
P(龍) 青釉陶器	蓋	合計	0	0	0	0	0	1	0	0	1
		口縁部		2							2
		脚部		2			1				3
		把手		1							1
		脚部		17	19		7		1		44
		底部			2		1				3
		合計	0	22	21	0	0	9	0	0	63

第10表③ 石積みSA21 出土遺物状況

施設	C-13		C-13+14		C-14 SA21				C-14 SA21		合計		
	SA21	SA21	第1層d (黒褐色 土層)	第2層a (黒褐色 土層)	第1層a	第1層d (塵土)	第2層a	第2層a (塵土)	赤瓦 基中部 第1層d	石積底下 第1層d	延長 第1層a	延長 第1層a (第1層d)	
施設名	ハトム造付	無	自然	15後~16中	1								1
	合計		0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
本土産 鶴羽	網	網	印判、網版軸等		1								1
	口縁部	縫付		1									1
	小網		印判造付、網版軸等		1								1
	網組		近境		1								1
	油燃み茶碗	底部	近境								1		1
	皿		染付		1								1
	蓋		炒山青磁		1								1
	口縁部	伊万里		1									1
	蓋		吹合墨(近境)		1								1
	蓋		近境					1					1
	合計		0	1	7	0	0	0	1	0	0	1	10
片岡産 黒釉陶器	小網		網部		1								1
	縫		網部	1									1
	蓋		網部		1								1
	急須		口縁部		1								1
	合計		0	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0
片岡産 黒釉陶器	皿		網部		1								1
	灯明皿		口縁部~底部	1									1
	口		口縁部	1	1								2
	鉢		網部		1								1
	皿		底部	2	2								4
	仕切		口縁部	1									1
	急須		口縁部	1									1
	急須		把手	1									1
	蓋		口縁部		1								1
	蓋		網部		1								1
	合計		0	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0
貝製品	貝		網部		1								1
	貝		口縁部	1									1
	貝		底部	2	2								4
	貝		把手	1									1
	貝		口縁部		1								1
	貝		網部		1								1
	貝		底部	2	2								4
	貝		把手	1									1
	貝		口縁部		1								1
	貝		底部	2	2								4
	合計		0	2	19	0	0	2	0	0	0	1	23
貝製品	貝		白色砂岩		1								1
	礁石	貝岩?	(新実用製品の可能性あり)		1								1
	石器片		網粒砂岩(=e)		1								1
		河原石		2	1								3
		砂岩		2									2
	石材		礫粒砂岩(=e)	6	6			2					12
		礁?	網粒砂岩(=e)	1									1
		礁?	網粒砂岩(=e)	1									1
		礁?	網粒砂岩(=e)	1									1
		礁?	網粒砂岩(=e)	1									1
	合計		0	6	11	0	0	4	0	0	0	0	21
円盤状陶器	円盤状陶器		中国青釉陶器		1								1
	合計		0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
工具・ 生産用具	丸刃		常形		3			5					8
			先端部欠損		1			1					1
			不明		1			1					1
			頭部欠損		1			2					3
			不明		1			1					1
	内刃		先端+頭部欠損		2			3					3
			完形		1			1					2
			頭部欠損		1			1					1
			不明		4			4					4
			先端+頭部欠損		3								3
	合計		0	2	35	0	0	39	1	0	1	1	29
武器	鉤		網部		2								2
	砲弾片		破片	12	12		11	1					36
	薙刀		鐵	4			4						8
	不明		鐵	2			2						2
	合計		0	0	10	0	0	4	0	0	0	0	14
ガラス製品	板ガラス		破片		4			2					6
	不明		破片		4			2					6
	合計		0	0	10	0	0	4	0	0	0	0	12

第11表 石積みSA23 出土遺物状況

種類	形態	色	順序			合計	
			C-15				
			第1層a	第2層b	第5層		
グスク土器	壺	底部		1	0	1	
	合 計		0	1	0	1	
瓦質土器	壺			1	1	2	
	合 計		0	1	0	1	
大和	丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)	1	1	1	
	平瓦	灰色	漆喰あり(片面)	9	9	9	
			(漆喰無)	16	16		
大和 (古代のもの)	丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)	1	1	1	
	軒瓦	赤色	(漆喰無)	1	1	1	
			漆喰あり(片面)	1	2	2	
	丸瓦	灰色	(漆喰無)	1	4	4	
			漆喰あり(片面)	58	27	11	
			(漆喰無)	14	3	2	
	明朝系	灰瓦	漆喰あり(片面)	2	2	2	
			(漆喰無)	9	8	17	
			漆喰あり(両面)	1	1	1	
	平瓦	褐色	漆喰あり(片面)	1	2	2	
			(漆喰無)	1	2	2	
		赤色	漆喰あり(片面)	30	30	60	
			(漆喰無)	56	39	95	
	合 計		202	114	45	361	
埴輪	形狀不明a	灰色	漆喰無	2	1	3	
	形狀不明b		角無し	1	1	1	
	合 計		3	1	0	4	
青磁	口縁部	外反	無文	1	1	1	
		直口	雷文・片切彫り	1	1	1	
	皿	口縁部	模花	内面:波文・茎葉・櫛彫り+牡丹唐草文・片切彫り	1	1	
		底部	蓮瓣文		1	1	
	酒呑壺	口縁部	無文		1	1	
	合 計		2	2	1	5	
青花	碗	口縁部	外反	外面:界線+花文 内面:界線のみ	1	1	
		直口	外面:界線+草花文 内面:界線のみ	1	1	1	
	合 計		2	0	0	2	
中國產 陶軸頭器	壺		胴部	11	4	15	
			底部	1	1	1	
	合 計		12	4	0	16	
タイ(土器)(平神)	瓶	壺部	IV		1	1	
	合 計		0	1	0	1	
タイ(陶軸頭器)	壺		胴部	1	1	1	
	合 計		1	0	0	1	
本土產器	円筒形容器	胴部	近縁		1	1	
	不明	胴部	近縁	2	1	2	
	合 計		2	1	0	3	
沖绳灰陶器	火炉		口縁部	1	1	1	
	合 計		1	0	0	1	
沖潤灰無軸頭器	壺		底部	2	2	2	
	壺or壺	胴部		1	1	1	
	不明	胴部		1	1	1	
	合 計		2	2	0	4	
石・石製品	右端片		細粒砂岩(二七)	1	1	1	
	石材		細粒砂岩(二七)	1	2	3	
	合 計		2	2	0	4	
金属製品	工具類・ 生産用具	先打	実燃	中	鉄	4	
			頭部欠損	中	鉄	1	
		角打	先端部欠損	中	鉄	1	
	武器		曲輪片		鉄	9	
	現代			1	1	1	
	分類不明	用途不明		鉄		1	
			骨頭	1	1	1	
	合 計		6	5	2	13	
ガラス製品	瓶		鋼部	1	1	2	
		板ガラス	破片	3	3	3	
		不明	破片	4	4	4	
	炭化した木片			1	1	1	
	合 計		0	1	0	1	

第12表 石積みSA31 出土遺物状況

種類	形態	色	順序			合 計	
			B-14				
			B-14	SA31	SA31		
東西ロング 第7層	平瓦	灰色	漆喰無	1	1	2	
赤色土層	合 計		1	1	2	2	
中国毛織軸頭器	壺	鉄部		2	2	2	
	合 計		0	2	2	2	

第13表① 埋敷きSS05 出土遺物状況

種類	分類	層序	C-12 SS05						C-D-12 SS05						合計	
			東側			西側			東側			西側				
			第1層 (理土)	第2層 (理土)	第3層 (理土)	第1層 (理土)	第2層 (理土)	第3層 (理土)	第1層 (理土)	第2層 (理土)	第3層 (理土)	第1層 (理土)	第2層 (理土)	第3層 (理土)		
ダスク土器	四種不明	樹脂		1			1	2		3					7	
	合計		0	1	0	1	2	0	0	1	0	0	0	0	7	
陶質土器	棒	口縁部											1	1	2	
	合計		0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2	
	棒	樹脂											1		1	
瓦質土器	繩	樹脂			1										1	
	火炉	樹脂			1										1	
	不明	樹脂		2			1								3	
	合計		0	4	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	7	
屋瓦	高麗系	平瓦	灰色	唐喰無し	1	5	1								8	
		丸瓦	灰色	唐喰無し	1			1							2	
		平瓦	灰色	唐喰無し	5			1							6	
	大和	丸瓦	灰色	唐喰あり(片面)		1									1	
				唐喰あり(片面)	4	12		3							19	
				唐喰無し	1	2									3	
		平瓦	灰色	唐喰あり(片面)	1										1	
				唐喰あり(片面)	2	11		1	2						16	
				唐喰無し	15		1	6	2						24	
		軒丸	灰色	唐喰無し			1								1	
		軒平	灰色	唐喰無し	1								1		2	
明朝系			灰色	唐喰あり(片面)	1										1	
		丸瓦	灰色	唐喰あり(片面)	3			2							5	
				唐喰無し	1	14	1	2							18	
		暗面		唐喰無し	4			1							9	
			赤色	唐喰あり(片面)	33		2	5							40	
				唐喰無し	6		2	1							9	
		平瓦	灰色	唐喰あり(片面)	1	4									5	
				唐喰あり(片面)	2	6									8	
				唐喰無し	11	40	4	7	4						66	
			褐色	唐喰無し	3										3	
埴瓦			灰色	唐喰あり(片面)	14										14	
				唐喰あり(片面)	6	50		7							63	
			赤色	唐喰無し	6	67	1	9	1						84	
		合計			36	299	1	12	46	9	0	0	1	0	0	405
	I類	不明	灰色	唐喰無し	角1					1					1	
			灰色	唐喰無し	角無し					1					1	
	II類	—	灰色	唐喰無し	角1	2				1					3	
		—	赤色	唐喰無し	角無し	4									4	
		Aa	灰色	唐喰無し	角1					1			1		1	
		Ab	灰色	唐喰無し	角1				2	2					4	
			赤色	唐喰無し	角無し	1	15	11							27	
		Ba	赤色	唐喰無し	角無し			1	2						3	
		Bb	灰色	唐喰無し	角1										1	
		形状不明a or 形状不明b	灰色	唐喰無し	角無し										1	
青磁			灰色	唐喰無し	角無し										4	
			灰色	唐喰無し	角無し										7	
			赤色	唐喰無し	角無し	5									5	
			灰色	唐喰無し	角1	5		1	6						12	
				唐喰無し	角1	7	11	24							43	
		形状不明b or 形状不明c	赤色	唐喰無し	角1	4		1	1				3		7	
				唐喰無し	角1	2		8	6						16	
		合計			1	42	0	0	41	58	0	0	1	0	0	145
			外反	無文									1		1	
			直口	雷文・片切り割れ		2									2	
白磁				連串・片切り割れ		1									1	
				直身・割れ		1									1	
				有文		1									2	
				無文		1	2								3	
				連串・片切り割れ		1									1	
				印花文											1	
				雷文・片切り割れ+沈澱文・片切り割れ+他											1	
				口縁部	タガ状鉢縁										1	
					内面:連串・丸頭										1	
					外面:無文										2	
					内面:連串・丸頭										1	
				高台なし		1									1	
			水注	把手											1	
		合計			2	10	0	0	1	0	0	2	3	0	0	22
		白磁	釉	口縁部	内壁								1		1	
				合計		0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1

第13表② 埠敷きSS05 出土遺物状況

種類	層序	C-12 SS05							C-D-12 SS05				合計
		東側		西側			東側		西側				
		第1層 (母土)	第2層 裏石内 第2層	第1層 (母土)	第2層	第2層 下部	第3層 埴瓦層	第5層	第2層 (母土)	第1層 (母土)	第2層		
青花	側	口縁部	外反	外:面:切妻脚+宝堂手 内:面:櫻梅	1							1	1
			直口	外:面:櫻梅+草花文								1	1
				底部	1	1				1	1	2	2
				胸足	1	2						1	1
				底足	1							1	1
				茎	1							1	1
合 計				1	4	0	0	3	0	0	0	2	0
彩繪陶器	瓶												11
													1
													2
													2
													3
												1	22
													3
													1
合 計				0	22	0	0	10	0	0	0	3	0
中型座施釉陶器	垂	口縁部		方形	2							1	2
				玉縁状	3							1	1
												1	1
				頸部	1							2	2
				胸部	14	7						1	22
				底部	1	1						1	1
合 計				0	22	0	0	10	0	0	0	3	0
タイ産土器(平縁)	蓋												1
													1
合 計				0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
タイ産 施釉陶器	垂											1	37
												2	2
合 計				0	25	0	1	7	5	0	0	0	1
本土產 施釉器	瓶	口縁部～底部											2
				加ム青磁									1
		口縁部	加ム青磁, 口平 <sup>1</sup> , 掛け付 <sup>2</sup> , 細引染付	近視	1								1
		胸部	白引染付										1
		底部	加ム青磁	1									1
	小瓶	胸部	印押染付, 漆痕転写										1
		胸部	加ム青磁	1									1
		底部	印押染付(タリ <sup>3</sup> ・鉛張?)										1
	皿	胸部	印押染付, 鋼紙										1
		底部	印押染付(型紙転写)と <sup>4</sup>										1
	小皿	胸部	印押染付, 漆痕転写	1									1
	鉢	胸部	近視	1									1
	香炉 <sup>5</sup>	胸部	加ム青磁	1									1
	内筋形容器	底部	近視	2									2
實物(鳥形)				1									1
車 <sup>6</sup>	車	底部											1
		口縁部	口平 <sup>7</sup> , 印押染付										1
		胸部	近視	3									4
	不明		近視	1									1
合 計				1	16	0	0	1	0	0	0	0	23
本土產 圓 <sup>8</sup>	垂												1
	便											1	1
	不明											1	1
合 計				0	2	0	0	0	0	0	0	0	3
沖縄產 施釉陶器	瓶												3
													1
													1
	皿	口縁部											1
	鉢	口縁部											2
	垂	口縁部											1
	鍋	口縁部											1
	急速	胸部											1
	大型急須(アソビン)	底部										1	1
	酒器	底部										1	1
沖縄產 無釉陶器	火鉢	底部										1	1
		合 計			0	14	0	0	1	0	0	3	0
		陶管	口縁部		1								1
		紙or網	底部		1								1
不明				胸部	6	1	1	1	0	0	0	0	10
合 計				2	7	0	1	1	0	0	0	0	13

第13表③ 埋敷きSS05 出土遺物状況

種類	遺物品	形状	部位	C-12 SS05						C-D-12 SS05						合計	
				東側			西側			東側			西側				
				第1層 (埋土)	第2層	裏石内 第2層	第1層 (埋土)	第2層	裏2層 下部	第3層 埴瓦部	第5層	第2層 (埋土)	第2層	第3層 (埋土)	第2層		
骨製品	複数骨製品	ラン	肋骨?					1								1	
石・石製品	礫片	合 計		0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	
		私板岩			1											1	
	砂岩				1											1	
		軽石片	細粒砂岩(ニセ)			1										1	
陶製品	河原石	細粒砂岩(ニセ)						3	3							7	
		河原石			1	3										4	
	合 計	合 計		1	6	0	0	3	3	0	0	0	0	0	1	14	
		中国産動物陶器			1											1	
金銀製品	質品	沖縄産無釉陶器			1											1	
		合 計		1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
	工具類・ 生産用具	丸釘	完形		中	鉄			1							2	
			頭部欠損		中	鉄	1	1								2	
	角釘	完形			中	鉄		3								3	
			先端部欠損		中	鉄	1		1							1	
	釘 (形狀不明)	先端+頭部欠損	小	小	鉄											4	
		頭部欠損	木明	木明	鉄			4								4	
	生活用具	先端+頭部欠損	木明	木明	鉄			4								4	
		瓢箪	口縁部	鉄				1								1	
	武具	瓢箪	柄部	鉄				2								2	
		札	鉄													4	
	武器	槍	鉄													1	
		複輪	青銅		1											1	
	不明	砲弾片	青銅		9			1								10	
		不明	青銅		3			4								7	
	近現代	不明	青銅		3		1	4			1					9	
		金具	不明					1								1	
	合 計			1	22	0	2	22	0	0	12	0	0	0	0	74	
ガラス製品	ガラス	瓶	底部		1											1	
		板ガラス			1											1	
	合 計			0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
ガラス玉	目鏡	合 計	青色													1	
		目鏡														1	
歴史関連	鉄薄片	合 計	鉄		1											1	
		合 計		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
アラステラ(ヒメノヒメ)二重		合 計		1												1	
		合 計		1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	

第14表 B-12・13北側トレンチ 出土遺物状況

種類	層序	B-12		B-12・13		B-13				合計	
		北側トレンチ		北側トレンチ		北側トレンチ		北側トレンチ			
		第1層c (裏葉石内 成黄白色 砂層)	第1層d	第1層e	第1層d	第1層d	第1層d 西端岩盤 周辺	第1層e	第5層 (暗褐色 土層)	第5層 西端 岩盤周辺)	
グスク土器	鍋	底部					1			1	
	壺	口縁部					1			1	
	器種不明	胴部					2	2	4	8	
合 計		0	0	0	0	4	2	0	4	0	
瓦	明朝系	丸瓦	灰色	漆喰無し		5				5	
			褐色	漆喰無し		2				2	
		平瓦	灰色	漆喰無し		6				6	
	合 計		0	0	13	0	0	0	0	0	
青磁	碗	直口	蓮弁・鉢形引		1					1	
		口縁部	外反	無文	1					1	
		玉縁		無文			1			1	
	皿	胴部		無文	2				2	4	
		口縁部	直口	無文		1				1	
	盤	胴部	外面:無文 内面:蓮弁・型起し			1				1	
		底部	印花文	高台なし		1				1	
		合 計		0	0	4	0	3	1	0	
白磁		碗	胴部			1				1	
合 計		0	0	0	0	1	0	0	0	0	
青花	碗	口縁部	直口		1					1	
		胴部						1		1	
	合 計		0	0	1	0	1	0	0	0	
彩釉陶器	盤	口縁部			1					1	
		林	口縁部					1		1	
	鶴形水注	胴部			1				1	2	
	合 計		0	0	2	0	0	0	1	0	
中国産 褐釉陶器	壺	口縁部			1					1	
		頸部			3					3	
		胴部			30	1	2		7	1 41	
	合 計		0	0	2	0	0	0	7	1 42	
タイ産 褐釉陶器		口縁部			36	1	2	0	0	7 47	
		頭部							1	1	
		耳						1		1	
		胴部					1	2		3	
		底部								1	
合 計		0	0	2	0	0	1	0	4	0	
本土座器 (紹の具風)		-	(砥部焼?)近現						1	1	
合 計		0	0	0	0	0	0	0	1	0	
片渦足施釉陶器		碗	胴部		1					1	
合 計		0	0	1	0	0	0	0	0	1	
片渦足無釉陶器		不明	胴部		2					3	
合 計		0	0	3	0	0	0	0	0	3	
石材	黒色千枚岩									1 1	
	繊粒砂岩(二七)				1	2				3	
自然石	河原石	中粒砂岩	北部地域		1					1	
	合 計		0	1	3	0	0	0	0	1 5	
金属 製品	工具類・ 生産用具	先端部欠損	中 鉄	1	2			1	1	5	
		先端+ 頭部欠損	中 鉄		4				3	7	
	武具	座金具	青銅						1	1	
	武器	弾丸	鉄	1						1	
合 計		1	0	7	0	0	1	0	5	0 14	
ガラス製品	板ガラス	破片							1	1	
合 計		0	0	0	0	0	0	0	1	0 1	

(1) 石積みSA06の出土遺物 (第11図・第12図、第15表~第22表、図版7・図版8)

石積みSA06から出土した遺物の種類は、第6表に示したように総計で384点(=100%)が得られている。出土遺物の内訳は、グスク土器8点(2.08%)、瓦類(屋瓦・埠瓦)185点(48.18%)、青磁19点(4.95%)、白磁6点(1.56%)、青花6点(1.56%)、華南彩釉陶器5点(1.30%)、中国産褐釉陶器60点(15.63%)、黒釉陶器3点(0.78%)、タイ産褐釉陶器21点(5.47%)、本土産磁器1点(0.26%)、本土産陶器1点(0.26%)、沖縄産施釉陶器3点(0.78%)、沖縄産無釉陶器3点(0.78%)、金属製品31点(8.07%)、ガラス製品2点(0.52%)などの20種類が確認されている。輸入陶磁器(中国産、タイ産)の占める割合は、31.25%(120点)であった。

当該遺構の時期に伴う遺物として呈示ができる資料は、沖縄産の瓦質土器(第11図1・2)、中国産白磁(第12図2)、中国産華南彩釉陶器(第12図3・4)、本土産陶器の薩摩焼(第12図9)、沖縄産施釉陶器(第12図10)などが出土している。

なお、出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的に大きな破片資料や特徴的な資料を図示(第11図・第12図)した。

石積みSA06の西側延長線上にある石積みSA14の出土遺物については、既に報告済み(註1)であることから割愛した。この石積みSA14の東側から伸びてくる石積みSA06と石積みSA14は連続した石積みとなるが、石積みSA14から出土した遺物には中国産陶磁器以外にグスク系土器、沖縄産施釉及び無釉陶器を含め高麗系屋瓦から近代の大和瓦の時期まで時代幅があり当該期の第V期の時期まで使用された石積みとして理解しているところである。

### 註 文 献

註1. 金城龜信『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書(V)－平成6年度調査の遺物編(2)』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成26年3月に報告済み(石積みSA14の出土遺物については60頁~99頁に掲載)。

第15表 石積みSA06 瓦質土器・青磁出土状況

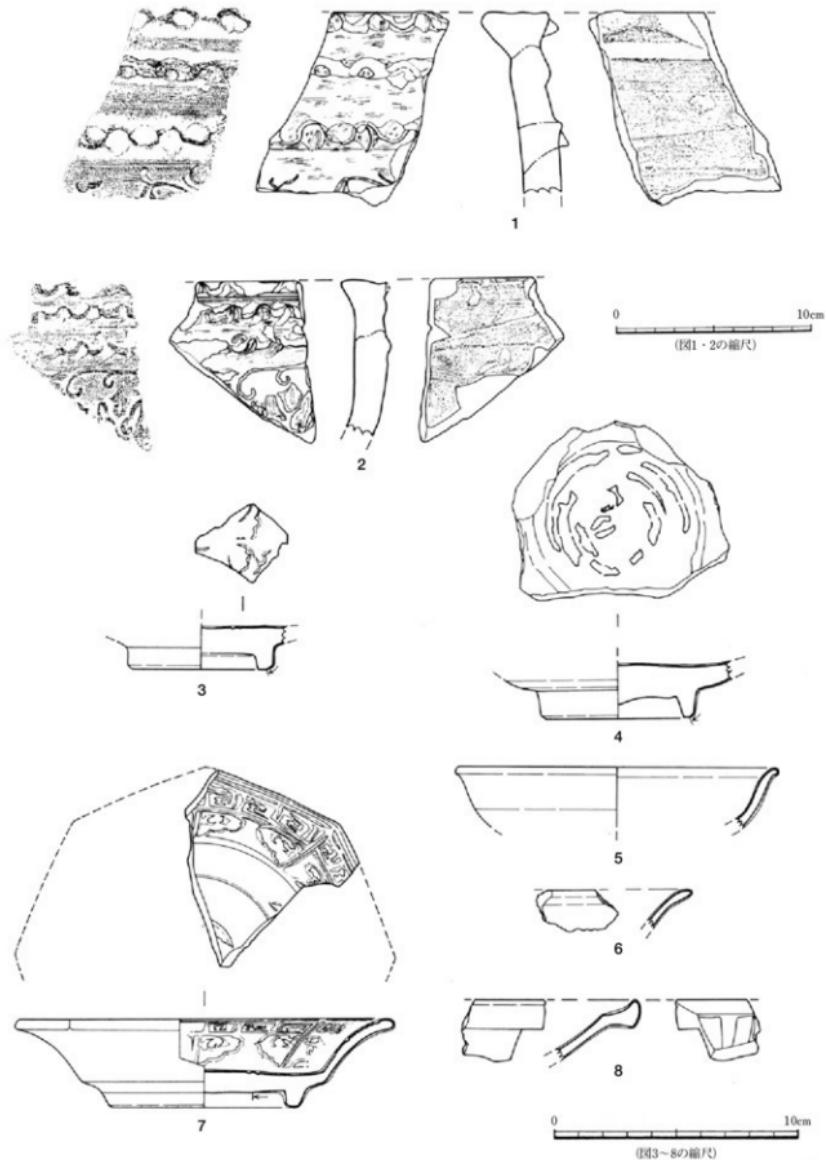
種類	層序	B-12	B-12+13			B-13		合計
		SA06	SA06			SA06	SA06	
		SD04 第3層b (外側コ ーラル層)	第1層a	第4層	第4層 (栗石内)	第4層 (横石)	第1層b	第4層
瓦質土器	鉢				2			2
青磁	碗	口縁部			0	0	2	2
		外反	無文		2			1
		直口	無文		1			1
		胸部	無文			1	1	1
		底部	aタイプ	有文		1		1
			bタイプ	無文		1		1
		皿	口縁部	外反:蓮弁・片切彫り 内面:無文		1		1
			外反	無文		1		1
			直口	無文	1			1
			稜花	外反:蓮弁・片切彫り 内面:刻花文		1		1
	八角皿	口縁部~底部	外反	外面:無文 内面:有文	1			1
	盤	口縁部	跨縁	外反:無文 内面:蓮弁・丸頭		1		1
		胸部	無文				1	1
		底部	a	印花文			1	1
		蓋	有文不明				1	1
合計				2	6	3	1	19

第16表 石積みSA06 瓦質土器・青磁観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第11図 図版7 1	瓦質土器	鉢	口 縁 部	器形: 内側に内傾する大振りの植木鉢。口唇部を幅広(33~38mm)に成形し、口唇部を内側に突出させ肥厚部とする。文様: 外面に指圧(一部に爪痕がみられる)による波状凸帯を口縁部から胴上部に三条廻らす。波状凸帯下部に浮文の蔓唐草がみられる。器面調整: 内外面とも回転擦痕がみられる。器厚: 15.1~25.4mm。胎土: 泥質の繊粒子。混入物: 粗細な石英を多量に含む。1.5mm前後の茶褐色の物質が僅かにみられる。色調: 外面は茶褐色を主体とし、口縁部と口唇部が淡茶色を帯びる。内面が灰褐色を主とするが部分的に黄茶色や茶色となる。焼成: 良好で堅い。	B-12・13 SA06 第4層
				器形: 内側にやや内傾する小振りの植木鉢。口唇部を幅広(23~25mm)に成形し、内側の口唇部を突出させ肥厚部とする。文様: 外面に指圧(一部に爪痕がみられる)による波状凸帯を口縁部から胴上部に三条廻らす。波状凸帯下部に浮文の牡丹蔓唐草文がみられる。器面調整: 外面は粗密のある回転擦痕がみられる。内面は擦痕とナデが施されている。器厚: 15.1~18.8mm。胎土: 泥質の繊粒子。混入物: 微細な石英を多く含む。少量ながら1mm前後の灰褐色や暗褐色の物質が混入する。色調: 両面は灰褐色を帯びる。焼成: 良好で堅い。	B-12・13 SA06 第4層
				高台分類aタイプ。高台内割りがほぼ垂直で外底面を平坦に成形する。文様: 見込みに印花花文を施す。素地: 淡灰色の粗粒子で、微細な黒色鉱物を僅かに含んでいる。釉色: 淡緑灰色の釉を内面と高台外面に施釉。豊付に僅かに釉が付着するが基本は露胎である。両面に粗い貫入がみられる。中国南部の窯。14c終末~15c初頭。	B-12・13 SA06 第4層
〃 〃 3	碗	底部	6.0	高台分類bタイプ。無文碗の底部とみられる。内底面には雜な輪輻痕がみられる。文様: 見込みに構図不詳の印花花文を施す。素地: 淡灰色の粗粒子で、微細な石英と黒色鉱物を多く含んでいる。釉色: 淡緑灰色の釉を内面と高台外面に施釉。豊付は露胎である。貫入はない。中国南部の窯。14c終末~15c初頭。	B-12・13 SA06 第4層
				器形: 無文の直口口縁皿で口縁部が僅かに外反する。素地: 淡灰白色の微粒子。釉色: 淡青緑色の釉を両面に施釉。微細な気泡痕が多くみられる。貫入はない。龍泉窯系14c後半~15c中頃。	B-12 SA06-SD04 第3層b(外側コール層)
〃 〃 5	青 磁	皿	13.2	器形: 無文外反口縁皿。素地: 淡灰色の粗粒子で、微細な石英や黒色鉱物を多く含んでいる。釉色: 淡緑灰色の釉を両面に施釉。貫入はない。中国南部の窯。14c終末~15c前半。	B-12・13 SA06 第1層a
				器形: 復元可能な八角皿で、口唇部を八角形に面取りする。腰下部は「く」の字形に屈曲する。所謂、腰折れで腰下部から口縁に向かって外側に大きく開いて外反する。文様: 内体面は八角の頂点から口唇に沿うように又状の線彫りの沈線を横位と縦位に施し、口縁に反時計回りの雷文を施描き、その直下を横位の又状の区画沈線で閉じる。胴部から腰下部には八角の頂点から底面に向かって縦位の又状工具による区画沈線を施し、この区画線を挟んで左右対照となるように籠描きの垂下雲文を描く。見込みに圓線と印花花文を施す。素地: 灰白色の微粒子。微細で歪な気泡痕が僅かにみられる。釉色: 淡青緑色の釉を両面に施した後に外底面の釉を輪状(蛇ノ目状)に釉を搔き取った可能性が高いに搔き取って露胎とする。露胎した面に重ね焼きの目痕(胎土目)がみられる。龍泉窯系。14世紀終末~15c中頃。	B-12 SA06-SD04 3層b(外側コール層)
〃 〃 7	八 角 皿	口 縁 部 り 底 部	15.6 3.6 7.8	器形: 調理盤。口縁部を上方に撮み上げて成形する。口縁内面を浅く窪ませている。文様: 内体面に幅広の丸窪で蓮弁文を描く。素地: 灰白色の繊粒子。微細な石英や黒色鉱物が少量混入する。釉色: 黄緑色の釉が両面に施されている。貫入はない。中国南部の窯。14c終末~15c。	B-12・13 SA06 第4層
〃 〃 8	調 理 盤	口 縁 部	—	器形: 調理盤。口縁外端部を上方に撮み上げて成形する。口縁内面を浅く窪ませている。文様: 内体面に幅広の丸窪で蓮弁文を描く。素地: 灰白色の繊粒子。微細な石英や黒色鉱物が少量混入する。釉色: 黄緑色の釉が両面に施されている。貫入はない。中国南部の窯。14c終末~15c。	B-12・13 SA06 第4層

注 「-」:計測不可



第11図 石積みSA06出土品① 瓦質土器：1・2、青磁：3～8

第17表 石積みSA06 白磁・彩釉陶器・黒釉陶器・中国産褐釉陶器・本土産陶器・沖縄産施釉陶器・円盤状製品出土状況

種類		層序		B-12			B-12・13			B-13			合計	
		SA06		SA06			SA06			SA06				
		第4層 (上部)	第4層	第1層a	第4層	第4層 (栗石内)	第4層 (根石)	第1層a	第1層b	第4層	第1層a	第1層b		
白磁	碗	口縁部					1			1		1	1	
		胴部										1	2	
	皿	口縁部	外反	1	1							2	2	
		底部			1								1	
	合計		0	1	0	2	1	0	0	1	1	6		
彩釉陶器	盤	頭部				1							1	
		把手			1								1	
	鶴形水注	胴部									1	1		
	鳥形水注?				1	1							2	
	合計		0	0	2	2	0	0	0	0	1	5		
黒釉陶器	碗	口縁部	V型				2					2		
		茶入れ臺	胴部			1						1		
	合計		0	0	0	1	2	0	0	0	0	3		
中国産 褐釉陶器	壺	口縁部	方形	1		1						2		
		フの字状										1	1	
		頸部										3	3	
		胴部			6	5	3	5	1	27	47			
		有文			1							1		
		底部			1							1	2	
	不明		胴部				4					4		
	合計		1	0	0	9	9	3	5	1	32	60		
本土産 陶器	植木鉢	口縁部	薩摩					1					1	
	合計		0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	
沖縄産施釉 陶器	鍋	胴部								1		1		
	急須	胴部			1					1		2		
	合計		0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	3	
円盤状 製品	青磁											1	1	
	合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	

第18表 石積みSA06 金属製品出土状況

種類		層序		B-12・13			B-13			合計	
		SA06		SA06			SA06				
		第1層a	第1層b	第4層	第4層 (栗石内)	第1層a	第1層b	第4層	西側 埋り込み (一部 複数)		
金属製品	丸釘	完形	中	鉄						2	2
		小	鉄							1	1
		先端部欠損	中	鉄					2	2	
	角釘	頭部欠損	不明	鉄						6	6
		完形	中	鉄				1		1	
		大	鉄				1			1	
	先端部欠損	大or中	鉄				1			1	
		中	鉄	1	1	2				4	
		不明	鉄						3	3	
	先端 + 頭部欠損	大or中	鉄					2		2	
		中	鉄				2			2	
武具	八双金具		青銅		1						1
不明	不明		青銅			1		1			2
	鉄					1		2			3
	合計		1	1	1	3	1	1	11	12	31

第19表 石積みSA06 二次的火熱溶解鉄貨

鉢名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
不明鉄貨	1片	1.29	判読不可	B-12・13 SA06 第4層
	11or12枚	44.05	判読不可	B-12・13 SA06 第4層(栗石内)
	1片	1.99	判読不可	B-12・13 SA06 第4層
合計	13or14			

第20表① 石積みSA06 白磁・彩釉陶器・黒釉陶器・中国産褐釉陶器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層	
第12図 図版8 1	白磁	口 縁 部	17.4	器形:胴下部から外側に開き丸味を保持しながら口縁部に移行する外反口縁の碗。文様:なし。素地:淡黄白色の細粒子。粗縞で歪な気泡痕が多くみられる。釉色:淡黄白色の釉が両面に残存する。両面に細かい貫入がみられる。福建省閩清窯。14c終末~15c初頭。	B-12 SA06 第4層	
			—			
〃 2		底 部	—	器形:見込みが浅く窪んだ外反皿の高台破片とみられる。文様:なし。素地:淡灰白色の微粒子。粗縞で歪な気泡痕が多くみられる。釉色:淡灰白色の釉を両面に縦軸後に高台外面途中から高台内面上端までの釉を搔き取って露胎とする。両面に細かい貫入がみられる。中国産地不明窯。15c後半~16c。	B-12・13 SA06 第4層	
			6.4			
〃 3	彩 釉 陶 器 ?	鳥 形 水 注 ?	?	器形:型物の鳥形水注?の尾部とみられる。尾部の先端は突起状となり、露胎する。内面に起伏のある輪郭様の指圧痕がみられる。文様:外面上面に文様の一郎とみられる粘土紐を貼り付けている。外面に羽(沈線文)を型で起こしている。鋳型の型合わせとなる接合面から割れている。素地:男開面の外側が黃白色で、中央部分が茶灰色を帯びた細粒子。細かい黒色物や石英が僅かにみられる。釉色:外面に緑色の釉を施すが、尾部の端近くで黃茶色の釉がみられる。微細な貫入がみられる。中国南部(福建・広東)の窯。15c後半~16c。	B-12・13 SA06 第4層	
			—			
			—			
〃 4		鳥 形 水 注 ?	?	器形:型物水注。鶴形か鴨形の羽の先端と尾部の破片。尾部は四角錐に尖らせた先端となる。文様:外面の羽(長沈線文と短沈線文を組み合わせて表現)を型で起こしている。型の接合面から割れがされている。内面に指紋のある指圧痕がみられる。素地:黄白色の細粒子。微細な茶褐色の鉱物が僅かにみられる。釉色:外面に緑色の釉を施す。微細な貫入がみられる。中国南部(福建・広東)の窯。15c後半~16c。	B-12・13 SA06 第1層a	
			—			
〃 5	黒 釉 陶 器	碗	口 縁 部	器形:V型。口縁部がひねり返しにより軽く外反する。口唇部は丸味を持たせながら尖らせていている。素地:灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物を多く含む。男開面から微細な気泡痕が僅かに観察できる。釉色:両面に黒色の釉を施した後に茶褐色の釉(鶴斑)を口唇から内外面の口縁部に二度掛けする。福建省閩侯県南嶺窯。14c終末~15c。	B-12・13 SA06 第4層 (栗石内)	
			—			
〃 6	中 国 産 褐 釉 陶 器	壺	口 縁 部	器形:口縁部の縱断面が「フ」の字状に折り曲げて口唇部を幅広(16.2mm)成形したナデ肩の壺。文様:頭部に縱位の把手を貼付している。また、頸部には二条一組の輪形彫りの沈線(1.3mm幅)で界線とする。素地:灰白色の粗粒子で、粗い石英を多く含み、稀に茶褐色の鉱物がみられる。釉色:黄茶色の釉を外面頸下部から内面まで施した後に口唇部から内面の釉を搔き取って露胎とする。貫入:微細な貫入がみられる。中国南部の窯。15c~16c。	B-13 SA06 第4層	
			—			
			—			
〃 7		胴 部	—	器形:上記、6のタイプの胴部破片。文様:龍の背鱗と鰐みられる文様を型で起こしている。素地:灰白色の粗粒子で、粗い石英を多く含み、稀に茶褐色の鉱物がみられる。釉色:緑茶色の釉が外面にのみみられる。内面には茶褐色の釉の搔き取られ帶状に残っている。貫入:微細な貫入がみられる。中国南部の窯。15c~16c。	B-12・13 SA06 第4層	
			—			

注 「-」:計測不可

第20表② 石積みSA06 中国産褐釉陶器・本土産陶器・沖縄産施釉陶器・円盤状製品観察一覧

単位:cm/g

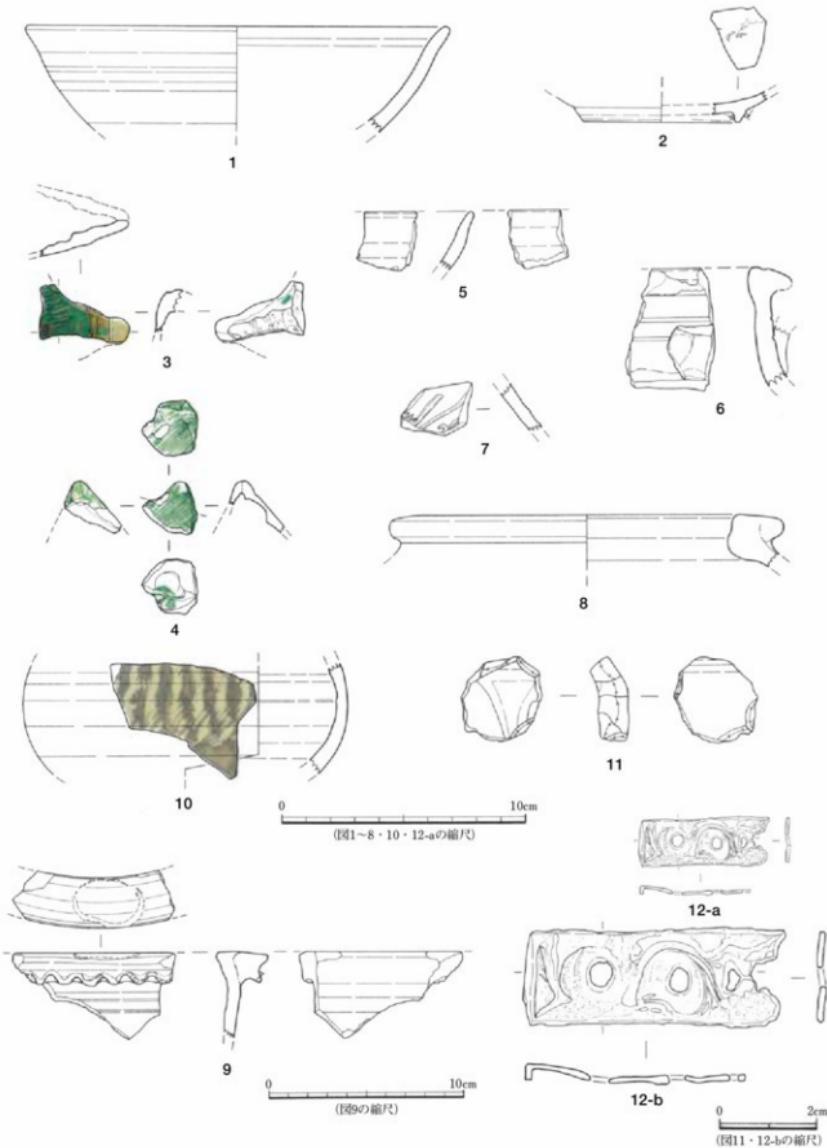
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第12回 図版8 8	褐釉陶器 中國產	壺	口 縁 部 16.2 — —	器形: 口縁部の縦断面が壺丸方形形状となる壺。文様:なし。素地: 淡灰色の素粒子で、粗繊な石英を多く含む。釉色: 両面に茶褐色の釉を施すが、外面の頭部で帯状に白濁した釉色となる。貫入: 外面に微細な貫入がみられる。内面には二次的な火熱を受けて微細な気泡痕がみられる。中國南部の窯。15c~16c。	B-12・13 SA06 第4層
〃 9	陶器 本土產	植木鉢	口 縁 部 — — —	器形: 肥厚する口縁の縦断面が「フ」の字状となる薄手(器厚5.4~5.6mm)の植木鉢とみられるもので、口唇部が幅広(26.8mm)となる。文様: 口縁の肥厚帯中央を深く丸彫様に壓ませてから肥厚帯下端に指圧を加えて調目文を表現する。頭上部に不鮮明な二条一組の界線を施す。口唇部には重ね焼きの際に利用した貝殻(二枚貝)の目痕がみられる。素地: 灰褐色の粗粒子で、粗繊な石英を多量に含む。なお、開口面に麦とみられる圧痕がみられる。釉色: 口唇部のみ露胎し、両面には茶褐色の釉を施す。貫入: ない。薩摩焼(苗代川系の串木野窯)。17c前半。	B-12・13 SA06 第4層 (根石)
〃 10	施 沖 縹 陶 器 產	急須	胴 部 — — —	器形: 三島手の急須の胴部破片。内面に丁寧な輪郭痕がみられる。文様: 外面の胴下部から上位に並んだ櫛目(左下から右斜め上がり)を入れて陶土を搔き取った櫛目に白土を詰めて文様とする。素地: 淡灰色の細粒子で、微細な黒色の鉱物が少量混入する。釉色: 外面にのみ茶灰色の釉を施す。	B-12・13 SA06 第1層a
〃 11	円盤状 製品		縦1.72 横1.66 厚20.53 重量2.2	中国産の外反する青磁蓮弁文皿(龍泉窯系14c終末~15c中頃)の頭下部から胴部に掛けた割れた碎片に打削調整を両面から加えて円盤状に成形した製品。外周面(破損面と加工面)の観察からすると摩滅が少ないとから使用頻度は低いといったようである。外面に青緑色の釉を施す。素地は灰白色の微粒子で、混入物はみられない。	B-13 SA06 第4層

注「-」:計測不可

第21表 石積みSA06 金属製品観察一覧

単位:mm/g

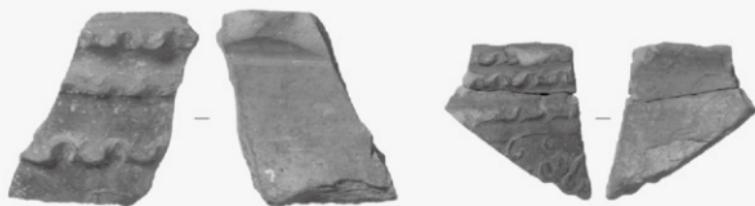
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称・仮称	材質	残存長(縦) 残存幅(横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観察事項	出土地点 出土層
第12回 図版8 12	武具 八双金具	青銅 製品	18.74 53.5	1.03 0.88 7.0	八双金具の左側の屈曲部と右下の尾鱗状の部分が損失する。二次的な火熱の影響を受けて溶解したり、或いは綠青の影響でアバタ状となる。外面に樹花唐草文を深く打ち込んで浮き立せている。魚々子繋は部分的に観察できる。新留めの孔は外側から穿孔されている。左の孔は、歪な亀甲状を呈し、長軸4.9mm、短軸4.0mmを測る。右側の孔は歪な隅丸三角形状で、長軸4.3mm、短軸3.6mmを測った。裏面は綠青の影響で全体的に浸食がみられアバタ状となる。左側の孔には縫割れがみられる。	B-12・13 SA06 第1層b



第12図 石積みSA06出土品② 白磁：1・2、彩釉陶器：3・4、黒釉陶器：5、  
中国産褐釉陶器6～8、本土産陶器：9、沖縄産施釉陶器：10、円盤状製品：11、金属製品：12

第22表 石積みSA06 出土遺物状況(図版外)

種類	器種不明	胸部	層序				B-12・13 SA06			B-13 SA06			合計	
			櫻土	第1層a		第4層	第4層 (栗石内)		第4層 (根石)		第1層a	第1層b		
				0	4	0	1	0	0	1	2	0	2	0
グスク土器														
		合計		0	4	0	1	0	0	1	2	0	2	0
瓦														
	高麗系	平瓦	灰色	塗喰無し									2	2
		丸瓦	灰色	塗喰無し						1			1	
	大和(古)	平瓦	灰色	塗喰無し						1			3	4
		丸瓦	灰色	塗喰めり(片面)							1		8	9
	大和	平瓦	灰色	塗喰めり(両面)								2	2	
		丸瓦	灰色	塗喰めり(片面)								6	6	
	大和(近代もの)	平瓦	灰色	塗喰めり(片面)						1		3	16	18
		軒丸	褐色	塗喰無し		1							1	1
		丸瓦	灰色	塗喰めり(片面)								2	2	
	明朝系	褐色	塗喰無し									6	6	
		赤色	塗喰めり(片面)									2	2	
		平瓦	灰色	塗喰無し								9	9	
		褐色	塗喰無し									2	2	
		赤色	塗喰めり(片面)									7	7	
		平瓦	灰色	塗喰無し								1	1	
		褐色	塗喰無し									6	6	
		赤色	塗喰めり(片面)									1	1	
		平瓦	灰色	塗喰無し								4	3	35
		褐色	塗喰めり(片面)									1	1	
		赤色	塗喰無し									5	5	
		平瓦	灰色	塗喰めり(片面)								31	31	
		褐色	塗喰無し									2	12	14
		合計		1	0	0	2	2	8	6	146	165		
埴瓦														
	Aa	灰色	塗喰無し	角1								2	2	
		赤色	塗喰無し	角1								1	1	
	Ab	灰色	塗喰無し	角1								1	1	
	Ba	灰色	塗喰無し	角1								1	1	
	形状不明a	灰色	塗喰無し	角1								1	1	
		赤色	塗喰無し	角1								1	1	
	形状不明b	灰色	塗喰無し	角1								2	2	
		赤色	塗喰無し	角1								6	6	
		合計		0	0	0	0	0	2	0	18	20		
青花		碗	口縁部	直口							2		2	
			胸部								1		2	3
		皿	底部			1							1	
		合計		0	1	0	0	0	3	0	2	6		
タイ座 輪軸陶器		壺	肩部									1	1	
			胸部									1	17	19
			底部									1	1	
		合計		0	0	1	0	0	0	2	18	21		
本土産 磁器		碗	胸部	近現								1	1	
		合計		0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	
沖縄産 無輪陶器		甕	口縁部									1	1	
		不明	胸部									2	2	
		合計		0	0	0	0	0	0	0	3	3		
石・石製品	石碑or羽目板	繊粒砂岩(二七)	破片								1		1	
	石材	繊粒砂岩(二七)									1		5	10
		河原石									1		2	3
		合計		0	0	0	2	2	2	1	7	14		
ガラス製品	板ガラス	—										2	2	
	合計			0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	



1

2



3

4



5



6



7

8

図版7 石積み SA06 出土品① 瓦質土器：1・2、青磁：3～8



図版8 石積み SA06 出土品② 白磁:1・2、彩釉陶器:3・4、黒釉陶器:5、中国産褐釉陶器:6~8、本土産陶器:9、沖縄産施釉陶器:10、円盤状製品:11、金属製品:12

(2) 石積みSA13の出土遺物 (第13図、第23表~第29表・図版9)

石積みSA13から出土した遺物の種類は、第6表に呈示したように総計で79点(=100%)が得られている。出土遺物の内訳は、グスク土器7点(8.86%)、瓦類11点(13.92%)、青磁10点(12.66%)、白磁3点(3.80%)、青花1点(1.27%)、中国産褐釉陶器27点(34.18%)、タイ産(土器・褐釉陶器)6点(7.59%)、銭貨1点(1.27%)などの16種類が確認されている。輸入陶磁器(タイ産、中国産)の占める割合は、60.76%(48点)であった。

当該遺構の時期の遺物としてタイ産褐釉陶器壺(第13図9)が唯一であった。

第23表 石積みSA13 グスク土器・青磁・白磁・タイ産褐釉陶器出土状況

種類	層序		B-12	B-12・13		B-12	B-12・13			合計	
			SA13	SA13		SA13	SA13				
	第2層 (黄白色混 土疊層)	第2層 (赤褐色 混土疊層)	L字状 直上	L字状の 直上 第1層d	北側 レンチ	北側 レンチ	第2層 裏栗	第3層 裏栗	第3層 (赤褐色 混土疊層)		
グスク土器	壺	口縁部								1	
	器種不明	胴部								0	
	合 計		0	0	0	0	0	0	0	1	
青磁	碗	口縁部	内側	波頭文・模彫り		1				1	
		胸部	有文							1	
		無文		1		1				2	
	皿	口縁部	直口	蓮弁・片切彫り				1		1	
		底部	双魚文				1			1	
	八角瓶	胸部	外面:無文			1				1	
		内面:有文不明								1	
	盤	口縁部	鈕紋	内面:蓮弁文				1		1	
		底部	無文	高台なし	1					1	
	花盆台?	柄鍵?・脚?			1					1	
	合 計		1	0	1	2	1	1	1	10	
白磁	碗	口縁部	外反							1	
		胸部				1				1	
	皿	底部						1		1	
	合 計		0	0	0	0	1	0	1	3	
タイ産 褐釉陶器	壺	耳							1	1	
		胴部		1						0	
	合 計		0	1	0	0	0	1	0	5	

第24表 石積みSA13 金属製品出土状況

種類	層序		B-12・13	合計			
			SA13				
	北側 レンチ	第3層 裏栗	第5層				
金属 製品	工具類・ 生産用具	小型皆折釘	完形	中 鉄	1 1		
		飾金具		青銅		1	1
	合 計				1 1	2	

第25表 石積みSA13 二次の火熱溶解錢貨

錢名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
輸錢(初鑄年不明)	1片	0.01	-	B-12・13 SA13 北側 レンチ 第5層
合 計	1			

第26表 石積みSA13 土器・青磁・白磁・タイ産褐釉陶器観察一覧

単位: cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第13図 図版9 1	土器	壺	口 縁 部	器形: 口頭部が「く」の字状に屈曲するタイプの壺。口縁が外側に大きく開き外傾する。器面調整: 口唇部は平坦に削った後に丁寧なナデ調整を加えている。また、口唇部の内外端部を削って面取をする。外面は頸部付近から口縁に向かって雑な削りを加え、口縁部で横位のナデを施している。内面には削りを加えた後にナデを加えている。器厚: 6.2~7.8mm。胎土: 砂泥質で粗手触りが悪くざらざらとする。混入物: 細かい石英を多く含み、稀に微細な黒色鉱物と細かい黒色や茶褐色の物質がみられる。色調: 両面とも橙白色を主体とするが外面の口縁が僅かに暗茶色を呈する。焼成: 増緘。	B-12-13 SA13 北側トレチ 第3層(赤褐色 泥土疊層)
				—	
				—	
II II 2		碗	口 縁 部	器形: 内樽口縁碗。文様: 口縁部に3本単位の櫛状の工具で波頭文を描き、その直下に線彫の界線を施して文様を区画する。この界線より下には本来ならば継ぎの蓮弁文を施すが当該資料からは確認ができなかった。素地: 黄白色の粗粒子で、微細な黒色鉱物が多くみられる。釉色: 黄緑色の釉が両面にみられる。細かい貫入がみられる。中国南部の窯。15c中頃~15c後半。	B-12-13 SA13 L字状の畦 直上第1層
				—	
				—	
II II 3		皿	口 縁 部	器形: 有文の直口口縁皿。口縁端部近くで玉縁状の肥厚を造るが微弱で釉が厚く目立たない。文様: 玉縁状の肥厚帯直下で片切彫りで弁先の尖った蓮弁文を描く。素地: 淡灰白色の微粒子。釉色: 淡青緑色の釉が両面にみられる。貫入はない。龍泉窯系。14c後半~15c中頃。	B-12-13 SA13 北側トレチ 第2層
				—	
				—	
II II 4		青 磁	皿	器形: 口折皿の高台破片。高台の内外面を斜位に削り取った為、疊付の幅1mm前後と狭い。文様: 見込みに双魚文を刻印する。素地: 淡灰色の粗粒子で、微細な石英を多く含み稀に粗い石英がみられる。釉色: 淡青緑色の釉を両面に施釉した後に高台外缘途中から疊付までの釉を焼き取って露胎とする。粗い貫入が両面にみられる。中国南部の窯。14c後半~15c中頃。	B-12-13 SA13 北側トレチ 第2層
				—	
				—	
II II 5		盤	口 縁 部	器形: 檻縁の盤で、鍔を強く上方に折り曲げて口縁を形成する。文様: 内体面に蓮弁文を7本櫛(1本の櫛幅は2mm前後)とみられるもので描いている。素地: 淡灰白色の粗粒子で、少量ながら粗細な石英や細かい黒色鉱物が含まれている。釉色: 濃黄緑色の釉が両面に施されている。両面に粗い貫入がみられる。中国南部(福建・廣東系)の窯。14c終末~15c中頃。	B-12-13 SA13 北側トレチ 第3層裏裏
				—	
				—	
II II 6		花 盆 台 ?	桟 縁 ? ・ 脚 ?	器形: 花盆台や香炉下部の脚部や脚部を割りぬいて底座とすることからこれらの桟縁の破片か香炉の飾りとして考えられる。文様: 外面に片切彫りで構図不詳(垂下三葉文の可能性が高い)の文様がみられる。素地: 淡灰白色の微粒子で、微細な黑色鉱物(気泡)が少量ながら観察できる。釉色: 淡灰緑色の釉が両面にみられる。貫入が両面にみられる。龍泉窯系。14c後半~15c中頃。	B-12-13 SA13 L字状の畦 直上第1層
				—	
				—	
II II 7		碗	口 縁 部	器形: 外反口縁碗で、口頭部で器厚(4.2mm)が極端に薄く(器厚2.7mm)なる。文様はないが、外側の輪幅痕が顯著である。素地: 光沢のある灰白色の微粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色: 淡灰白色のガラス質の透明釉が両面にみられる。貫入はない。福建省閩清窯。14c終末~15c初頃。	B-12-13 SA13 北側トレチ 第3層(赤褐色 泥土疊層)
				—	
				—	
II II 8		皿	底 部	器形: 直口口縁皿の高台破片(二次的な火熱を受けて煤けている。)とみられる。高台の横断面が「ハ」の字状に形成し、疊付を幅広(5mm)とする。見込みに重ね焼きの際の目痕(当該箇所のみの露胎)がみられる。文様はない。素地: 白色の微粒子。釉色: 黄白色の釉を内面から高台脇まで施す。細かい貫入がみられる。中国南部(福建・廣東系)の窯。14c終末~15c中頃。	B-12-13 SA13 北側トレチ 第2層
				—	
				—	
II II 9	褐 釉 陶 器 タ イ 産	壺	耳	器形: 大型壺の把手破片。文様はない。素地: 茶紫色の粗粒子で、僅かながら細かい石英と茶褐色の鉱物がみられる。釉色: 条褐色の釉が内外面にみられる。内面は二次的な火熱を受けて茶白色に変色し微細な気泡痕がみられる。シーサッチャナライ窯。15c~16c前半。	B-12-13 SA13 北側トレチ 第2層
				—	
				—	

注 「-」:計測不可

第27表 石積みSA13 金属製品観察一覧

単位:mm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称・仮 称		材質	残存長(縦) 残存幅(横)		残存最大厚 残存最小厚 残存重量		頭部 縦 横	観察事項	出土地点 出土層
	生工具 用類 具・	釘		鉄 製 品		4.53 1.28 5.5				
第13図 図版9 10	生工具 用類 具・	釘	鉄 製 品	63.0 5.54		4.53 1.28 5.5		-	9.9	B-12・13 SA13 北側レンチ 第3層裏 栗
# # 11	生工具 用類 具・	飾 金 具	青銅 製 品	33.5 5.0		0.55 0.41 0.6		-	-	B-12・13 SA13 北側レンチ 第5層

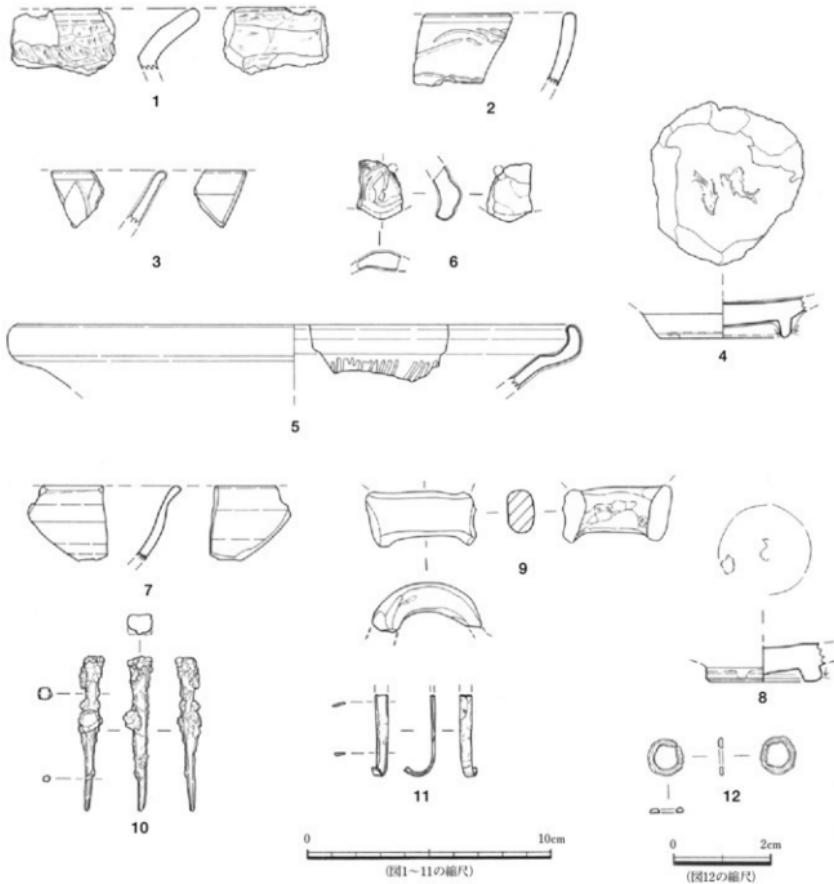
注「-」:計測不可

第28表 石積みSA13 銭貨観察一覧

単位:mm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	銅 錢 種 類	初 鋤 年	素 材	読 み 方	状 態	肉郭 外径 A B	肉郭 内径 C D	方穿 E F	断面計測部位			重量	観察事項	出土地点 出土層	
									①	②	③				
第13図 図版9 12	輪 銭	模 鋤 銭	時代 不詳	銅 錢	不明	破 損	不 明	7.43 —	4.61 —	—	0.73 —	—	0.01	面・背が不詳で器厚も0.5mmと薄く脆い。全体的に緑青がみられる。サイズや素材などから銭一枚としての利用を考えるよりも何十枚も連ねて繩(縄錢)に結び一定の重量にして封印して流通させたものとして考えられる。	B-12・13 SA13 北側レンチ 第5層

注「-」:計測不可



第13図 石積みSA13出土品 土器：1、青磁：2～6、白磁：7・8、タイ産褐釉陶器：9  
金属製品：10・11、錢貨：12

第29表 石積みSA13 出土遺物状況(図版外)

種類		層序 SA13	B-12	B-12+13 SA13	B-12			B-12+13 SA13			合計
			表掲 第2層 (赤褐色 混土縁層)	北側レンチ			北側レンチ				
				第2層	第3層 (赤褐色 混土縁層)	第3層 裏栗	第3層 裏栗	第3層 (赤褐色 混土縁層)	第5層		
陶質土器	蓋								1	1	
	合計		0	0	0	0	0	0	1	0	
瓦質土器	擂鉢	胴部		1						1	
	蓋				1					1	
	合計		0	1	0	1	0	0	0	2	
屋瓦	明朝系	丸瓦	灰色	塗噴有り(片面)					1	1	
		灰色							7	7	
		平瓦	褐色	塗噴無し	1					1	
		赤色							1	2	
	合計		2	0	0	0	0	0	9	11	
青花	瓶	口縁部	直口			1				1	
	合計		0	0	1	0	0	0	0	1	
彩釉陶器	鶴形水注	胴部			1					1	
	合計		0	0	1	0	0	0	0	1	
中国產 彩釉陶器	壺	頭部							1	1	
		胴部				3	3		19	25	
	不明	胴部	有文						1	1	
合計			0	0	0	3	3	0	21	0	
タイ座土器 (半壺)		蓋	胴部	1						1	
合計			1	0	0	0	0	0	0	1	
本土產 磁器	小碗	口縁部	近現						1	1	
									0	1	
合計			0	0	0	0	0	0	1	1	
石・石製品	石器片	細粒砂岩(±-ビ')				1				1	
		石材		細粒砂岩(±-ビ')					3	3	
合計			0	0	0	1	0	0	3	0	
ガラス製品	瓶	胴部							2	2	
	合計		0	0	0	0	0	0	2	2	



図版9 石積みSA13出土品 土器：1、青磁：2～6、白磁：7・8、タイ産褐釉陶器：9、  
金属製品：10・11、銭貨：12

### (3) 石積みSA15の出土遺物 (第14図～第25図、第30表～第49表、図版10～図版19)

石積みSA15から出土した遺物の種類は、第6表に示したように総計で1,422点(=100%)が得られている。出土遺物の内訳は、グスク土器12点(0.84%)、瓦類(屋瓦・埠瓦)606点(42.61%)、青磁163点(11.46%)、白磁15点(1.05%)、青花25点(1.76%)、黒釉陶器5点(0.35%)、中国産褐釉陶器332点(23.35%)、沖縄産施釉陶器4点(0.28%)、沖縄産無釉陶器62点(4.36%)、タイ産褐釉陶器32点(2.25%)、ガラス玉7点(0.49%)、銭貨15点(1.05%)などの29種類が確認されている。輸入陶磁器(タイ産、中国産)の占める割合は、41.14%(585点)であった。

当該遺構の時期に伴う遺物として呈示ができる資料は、中国産白磁(第18図4)・青花(第18図5・6・8)、タイ産炻器(第21図3)、沖縄産無釉陶器(第22図1～3)などが得られている。

時期はことなるが注目される資料として大和系鬼瓦の眉(左側の眉で底状に飛び出し厚く波打っている)の破片(第15図7)が得られている。当該資料と近似するものが崎山御嶽遺跡(註1)から出土している。京の内出土の大和系鬼瓦(眉)は素地が湧田古窯跡から出土する灰色瓦や瓦質土器と類似することから崎山御嶽遺跡出土の鬼瓦を模倣した可能性が高い。なお、湧田古窯跡からも大型の手捏の瓦質土器製の龍の角(註2)や獅子の膝(註3)などが出土していることから判断して可能性は高いものと思慮されるところである。

### 註文献

- 註1. 島 弘ほか那覇市文化財調査報告書第67集『崎山御嶽遺跡一首里崎山公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告書一』那覇市教育委員会2005年3月。第71図に大和系瓦の鬼瓦が図示。
- 註2. 大城 慧・島袋 洋・金城亀信ほか『湧田古窯跡(Ⅰ)－県庁合行政棟建設に係る発掘調査－』沖縄県教育委員会 1993年3月。144頁の第94図51に龍の角を図示。
- 註3. 大城 慧・島袋 洋・金城亀信ほか『湧田古窯跡(Ⅱ)－県庁合議会棟建設に係る発掘調査－』沖縄県教育委員会 1995年3月。148頁の第70図78に獅子の膝を図示。



第30表 石積みSA15 屋瓦出土状況

種類		軒丸 軒平 丸瓦 (整形処理) 平瓦	灰色 褐色	漆喰無し	層序							B-14 SA15		
					東側レンチ									
					覆土	第1層a	第2層	第3層a	第4層a	第5層a	第5層g	第6層b	覆土 栗石内	第3層b
屋瓦	高麗系	軒丸	灰色	漆喰無し					1					
		軒丸	褐色	漆喰無し					1					
		軒平	灰色	漆喰無し										
		軒平	褐色	漆喰無し	5	4	7			4	12		3	2
		丸瓦	灰色	漆喰無し	2	1	16			5	1			1
	大和(古)	平瓦	灰色	漆喰無し										
		平瓦	褐色	漆喰無し		11	30	1	14	14			11	10
		丸瓦	灰色	漆喰無し		4	1		1	1				1
		丸瓦	褐色	漆喰無し		5	8				1			1
		平瓦	灰色	漆喰無し				13		3	4	1	1	5
明朝系	大和	雁脛瓦	褐色	漆喰無し								1		
		丸瓦	灰色	漆喰無し			1				1			
		丸瓦	褐色	漆喰無し			1							
		丸瓦	赤色	漆喰あり(片面)				1						
		平瓦	灰色	漆喰無し									1	
	平瓦	役瓦	黄褐色	漆喰無し					1					
		丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)									1	1
		丸瓦	褐色	漆喰無し			2			7			9	
		丸瓦	赤色	漆喰あり(片面)									2	
		平瓦	灰色	漆喰あり(片面)									1	
合計					8	4	36	78	2	47	35	1	48	24

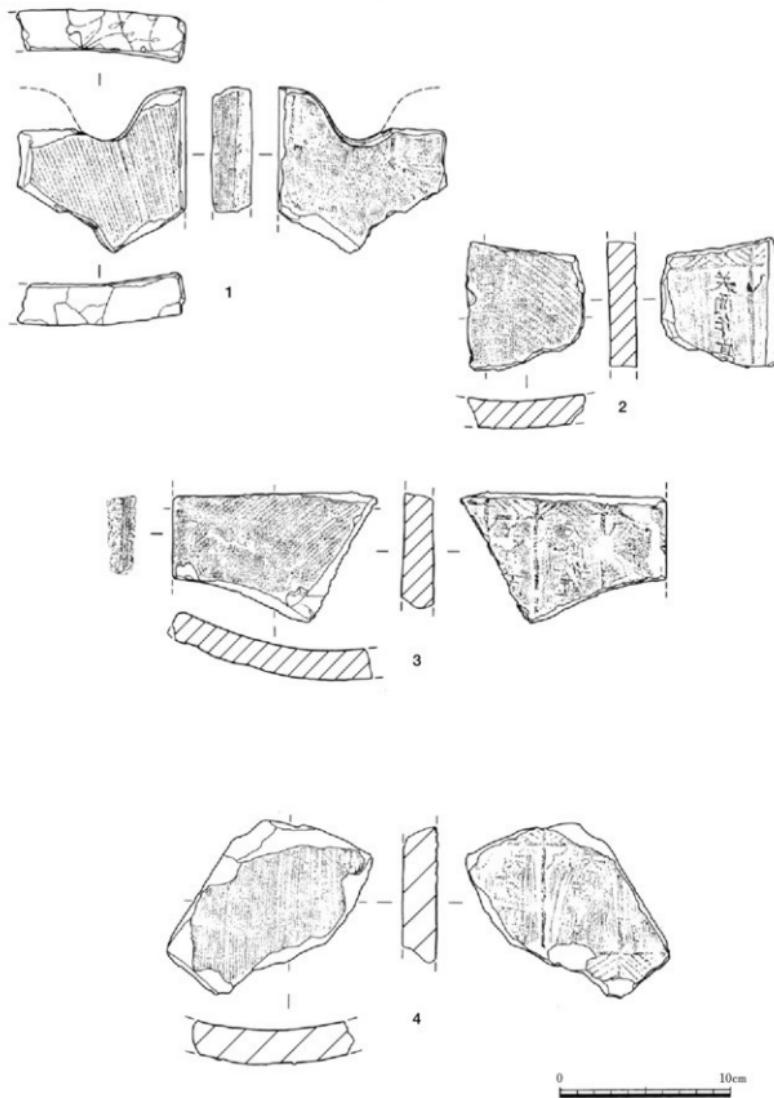
							B-14・15				B-15		合計		
							SA15				SA15				
西側レンチ							東側 レンチ	西側レンチ							
第4層a	第5層a	第5層g	第5層h	第6層a	第7層b	第9層	第4層a	第3層b	第3層b (珪藻石 内)	第4層a	第5層a	第5層g	第5層h	北側 第2層 灰褐色 土層	
														2	
														2	
														4	
														1	
13		8	13	2				12		4		14		103	
1		1	1			1		1		3	1	4		39	
												3		3	
14	1	11	20	7			1	29	1	4		29	2	3	213
				1				1	1						11
12	2	2	1							16					48
		2													2
5	10		5							7		4			58
	2														5
	1											1			2
1			1							4					1
										1					3
															6
															2
															1
															1
															21
										2					1
										1					2
															1
4			4						2						40
															1
2			2						2						8
									1						3
			3						1						13
52	4	37	35	28	2	1	1	43	9	41	1	58	2	3	600



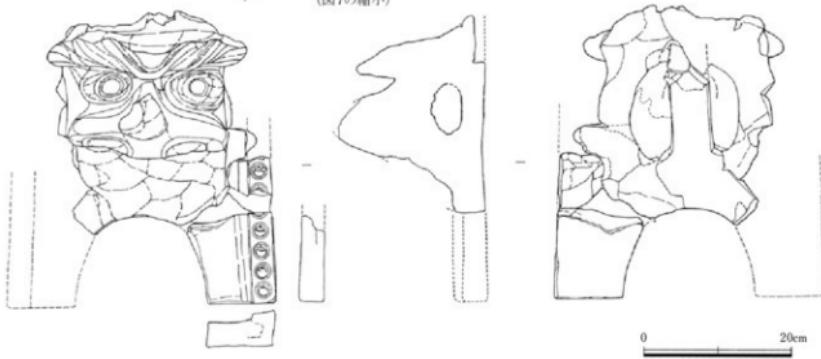
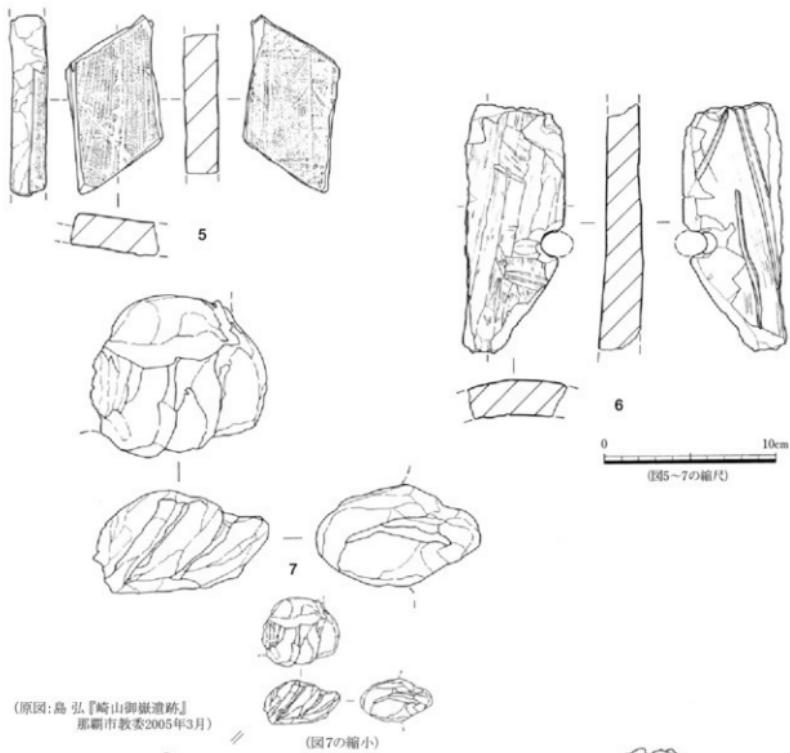


第31表 石積みSA15 屋瓦観察一覧

揮出番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	観察事項	出土土地 出土層
第14図 図版10 1	平瓦	軒平瓦の上面右隅部分の破片。平瓦の上辺から右隅が鶴尾様に鎌などの工具で削り取られてたか。或いは壘に割れたのかどうかは判然しないが、右上の端部が尖っていることから製品であれば特殊な用途でもって加工されたものとみられる。器面調整:凹面は布目痕と糸切り痕が鮮明にみられる。分割破口面(側面)には鎌などで切り離し瓦刀痕で平滑な面がみられる。凸面には「癸酉年高麗瓦匠造」の在銘が入るが、当該製品は「高」の一文字の一部が僅かに残存する程度である。器厚:22.8mm。胎土:泥質で細かい。混入物:微細な石英が多くみられ、稀に粗い石英が観察できる。色調:凹面は灰色で凸面が灰褐色を帯びる。凸面の左側面が帶状の灰黒色となる。焼成:堅軟。	B-14 SA15 西側レンチ 第5層h
〃 〃 2	平瓦	在銘の平瓦破片。凹面の左半分に布目痕がみられ、右半分は布目痕と糸切り痕の両者が確認できる。凸面には「癸酉年高麗瓦匠造」の在銘が入るが当該製品では「癸酉年高」の4文字が残存する。その他に有軸の羽状文がみられる。器厚16.8mm。胎土:泥質で細かい。混入物:微細な石英が多くみられ、稀に粗い茶褐色の物質と石英が観察できる。色調:凹面は明灰色で凸面が淡灰色を帯びる。凸面の左側面が帶状の灰黒色となる。焼成:良好で堅い。	B-14 SA15 東側レンチ 第5層g
〃 〃 3	屋瓦・ 高麗系 平瓦	〃。凹面の左側面が分割破口面で瓦刀痕で平滑な面と分割の際の剥離痕がみられる。凹面の下半分に布目痕がみられ、上半分には布目痕と糸切り痕の両者が併存する。凸面には「癸酉年高麗瓦匠造」の在銘が入るが当該製品では不鮮明ながら「癸口年」、「麗口匠」の4文字が残存する。「麗口匠」の「口」に「年」の一文字が重なって本来あるべきの「瓦」の一文字が打ち消されている。打捺具の銘入り文字が重なって打ち消されたことを示す資料として考えられた。その他に有軸の羽状文がみられるが、この文様と在銘の棒線も左側で上方にずれている。器厚17.7mm。胎土:泥質で細かい。混入物:微細な石英が多くみられ、稀に粗細な茶褐色の物質が散発的に観察できる。色調:両面とも明灰色を帯びる。焼成:良好で堅い。	B-14 SA15 東側レンチ 第5層g
〃 〃 4	平瓦	〃。凹面には布目痕がみられる程度である。凸面には「癸酉年高麗瓦匠造」の在銘が入るが当該製品では不鮮明ながら①「癸口年高」②「癸酉□口」の4文字がくすんで確認できるが①「癸口年高」の「口」に「匠」の一文字が確認され、本来あるべきの「酉」の一文字が「匠」の字に打ち消されている。その他に有軸の羽状文が重なり菱形の格子目状となる。器厚20.1mm。胎土:泥質で細かい。混入物:微細な石英が多くみられ、稀に粗細な茶褐色の物質と粗い石英が観察できる。色調:両面とも明灰色を帯びる。焼成:良好で堅い。	B-14 SA15 東側レンチ 第4層a
第15図 図版10 5	平瓦	在銘の平瓦。凹面の右半分には布目痕がみられ、左半分に糸切り痕が観察できる。凸面には「大天」の在銘が入る。その他に有軸の羽状文が文字区画の上下で観察できる。器厚19.5mm。胎土:泥質で細かい。混入物:微細な石英が多くみられ、稀に粗細な茶褐色の物質がみられる。色調:両面とも明灰色を帯びる。焼成:良好で堅い。	B-14 SA15 西側レンチ 第5層g
〃 〃 6	大屋和瓦系・ 丸瓦	大和系の丸瓦。凸面の右側面近くに釘孔がみられる。釘孔の復元された径は長軸が19.0mm、短軸13.1～15.0mmが求められた。器面調整は縱位方向に粗い錐削りをナデ消すように細かい錐削りを加えている。凹面には布目痕と桶に巻かれた布の織が痕跡として残っているようである。器厚20.3～22.6mmを測る。胎土・混入物:泥質で細く精選されたようであり、均一的に微細な石英を多く含む。色調:両面とも暗灰色を帯びるが凹面の一部は灰色となる。焼成:良好で堅い。	B-14 SA15 東側レンチ 第2層
〃 〃 7	大役和瓦系・ 鬼瓦	大和系の鬼瓦。陶土の接着面から外れた鬼瓦の左眉毛の部分とみられる。眉は右斜め上がりに半円形に形成した陶土を3個貼付けて立体的(突出)表現をしている。器面調整:全体的に複雑なナデを主体とし、部分的に指圧痕を施す(突出した半円形の部分は複数のナデと指圧)。左側の眉毛端は眉間近くにあたり手前から奥に向かって同一方向のナデが集中。)。サイズ:縦58.2mm、横104.4mm、厚み:93.1mm。胎土:泥質で細かい。混入物:微細な石英・雲母を多く含み、その他に粗細な石灰質の砂粒を含んでいる。色調:黄褐色を帯びる。焼成:良好で堅い。	B-14 SA15 東側レンチ 第4層a



第14図 石積みSA15出土品① 屋瓦：1～4



石積SA15出土の大和系鬼瓦模倣の脛と  
崎山御城遺跡出土の大和系鬼瓦の脛

第15図 石積みSA15出土品② 屋瓦:5~7



第32表 石積みSA15 青磁出土状況

種類	出土地	玉縁	cフリ	型押落弁文	層序								B-14 SA15				
					覆土	覆土 裏石内	第1層a	第2層	第3層a	第3層a 暗青色土層		第4層a	第5層a	第6層a	第6層b	覆土 裏石内	第5層b
										重ね1枚							
銅	口縁部 底部	外反		外面:無文 内面:文様不明			1										
				有文													
				無文													
		直口	落印-片切開刃														
			落印-直口	(落文-落印)													
			落印-片切開刃														
		玉縁	無文														
			型押落弁文														
			無文														
		胸部	外面:無文 内面:無文														
			落印-直口														
			落印-片切開刃														
			有文														
銅鋳-底部	底部	eフリ	銅鋳 文様不明 片切開刃	銅鋳 文様不明													
			dフリ	有文													
			gフリ	有文													
		高台	hフリ	有文													
			高台(左)	有文													
			iフリ	無文													
		直口	高行(左)	文様不明													
			高行(右)	文様不明													
			bフリ	有文													
銅 青磁	底部	口折	外面:落印-片切開刃	内面:無文													
			外面:直口	内面:直口													
			外反	内面:落印-片切開刃													
		櫻花	直口	内面:落印-片切開刃													
			外面:無文														
			無文														
		底部	外面:直口	内面:直口													
			外面:落印-片切開刃	内面:無文													
			平明	無文													
青磁	底部	口縁部	外面:無文 内面:落印-片切 内面:文様不明 内面:落印-片切	無文													
			外面:直口	内面:直口													
			外反	内面:落印-片切開刃													
		櫻花	直口	内面:落印-片切開刃													
			外面:無文	内面:無文													
			無文														
		玉縁	外面:無文 内面:落印-片切	無文													
			外面:直口	内面:直口													
			玉縁	無文													
酒呑壺	底部	胸部	外面:無文 内面:落印-片切	無文													
			外面:直口	内面:直口													
			外面:落印-片切	無文													
		底部	外面:無文	内面:無文													
			外面:直口	内面:直口													
			外面:落印-片切	無文													
		瓶	外面:無文 内面:落印-片切	無文													
			外面:直口	内面:直口													
			外面:落印-片切	無文													
香炉	大体	胸部	外面:無文														
			外面:落印-片切	無文													
合計					1	9	10	1	2	2	1	8	30	2	130	2	





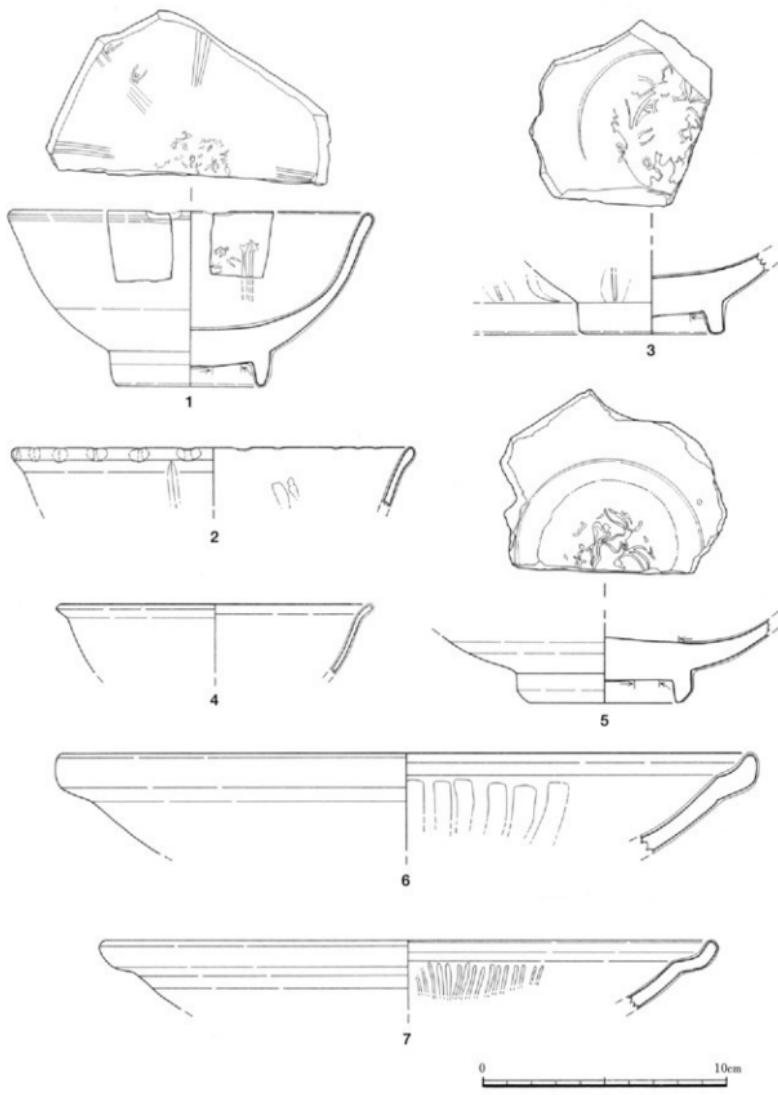


第33表① 石積みSA15 青磁觀察一覧

単位:cm

捕団番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第16図 図版11 1		口 底縁 部部 下	15.0 7.2 6.2	高台分類cタイプ。器形: 口縁が微弱に玉縁状に肥厚する型押蓮弁文碗。文様: 口唇部の一部を削りとて刻目の輪花状とし、弁先を表現するが弁先の枚数についてでは判断しづらいが、内面に残る弁軸か弁先の枚数を推定すると8枚程度が考えられる。内面は型押しによる陽蓮弁文が腰下部から口縁近くまで2本一组の弁軸と陰刻の花文とみられる文様が施されている。見込みに印花花文が施されることは判然しないが、内面に残る輪花状の輪郭線が複数ある。素地: 光沢のある淡灰白色の細粒子で、微細な石英や黒色の物質が僅かにみられる。釉色: 淡青緑色の両面に施釉後に外底面の釉のみを輪状に焼き取って露胎とする。両面に細かい貫入がみられる。口縁部の劈開面の一部に釉薬が二次的火熱を受けて溶解凝固した釉がみられる。中国福建系。14c後半~15c前半。	B-14 SA15 東側トレチ 栗土 栗石内
# # 2	碗	口 縁部	16.6 — —	器形: 口縁が玉縁状に肥厚する型押蓮弁文碗。文様: 口唇部の一部を削りとて刻目の輪花状とし、口縁の肥厚直下に幅広の弁軸のみを丸彫りで施されている。内面の胴上部には不鮮明な丸彫りで幅広で斜位の沈線様の文様を施すが構図は不詳。素地: 光沢のある灰白色の細粒子で、微細な石英や黒色の物質が多くみられる。釉色: 淡灰緑色で、貫入はない。中国福建系。14c後半~15c中頃。	B-14 SA15 東側トレチ 第5層g
# # 3		底 部	— — 6.0	高台分類dタイプ。器形: ラマ式蓮弁文碗か雷文帶碗の高台。文様: 外面の高台脇から脚部に掛け付て片切彫の蓮弁文の弁先が2箇所でみられ、弁尻と弁尻の間に片切彫で垂下三葉文の一部とみられるものを描いている。見込みに圓線と草花文が施されている。素地: 光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色: 明緑色を両面に施した後に外底面の釉を焼き取って露胎とする。貫入はない。龍泉窯系。14c後半~15c中頃。	B-14 SA15 東側トレチ 第3層a 暗褐色土層
# # 4		口 縁部	13.0 — —	薄手(器壁が2.4~2.9mm)の外反口縁碗。器形: 非常に薄造りの無文碗とみられ、口縁部が外側に緩く外反させる。素地: 淡灰色の細粒子、微細な黒色鉱物が僅かにみられる。釉色: 灰白色の釉が両面にみられる。貫入はない。中国南部の窯。14c終末~15c。	B-14 SA15 東側トレチ 第5層a
# # 5		底 部	— — 6.2	高台分類gタイプ。器形: 所謂、セ敷タイプと称される碗。文様: 見込みに圓線を施す。見込みの釉を円形状に焼き取って露胎させた印花花文を施す。素地: 淡灰白色の細粒子で、微細な石英と黒色鉱物が多く含まれている。釉色: 灰緑色の釉を絶縁後に見込みの釉と外底面の釉を蛇口状に焼き取って露胎とする。両面に細かい貫入がみられる。中国南部の窯。14c終末~15c初頃。	B-14 SA15 西側トレチ 第3層b
# # 6	盤	口 縁部	29.0 — —	鈙縁盤。器形: 口縁を外反させた後に口縁端部を上方に摘み上げて仕上げるため、口縁内部が僅かに窪む。その為、口頭部に不鮮明な稜線がある。文様: 内面に幅広(最大幅8.5mm)の丸彫で蓮弁文を施している。素地: 淡灰白色の微粒子で、微細な気泡痕が多くみられる。釉色: 灰緑色で、粗細な貫入が両面でみられる。龍泉系。14c後半~15c中頃。	B-14 SA15 東側トレチ 第1層a
# # 7			25.4 — —	鈙縁盤。器形: 薄手(器厚が6mm)の鈙で成形が難で外面にカンナ目がみられる。口縁外端を外側に開き気味に仕上げる。口頭部に深い輪縁痕があり、内面口縁が浅く窪む。文様: 内面に7本櫛(1本の櫛幅が最大で2.0mm)で蓮弁文を描く。素地: 灰白色の微粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色: 明黄緑色で、貫入はない。中国南部の窯。14c終末~15c前半。	B-14 SA15 東側トレチ 第3層a 暗褐色土層
第17図 図版11 8			— — —	鈙縁盤。器形: 鈙を平坦に成形し、内面口縁一部を丸彫で削て輪花を表現する。文様: 外面に圓線二条が施されている。内面は口縁端部近くと頭部近くに丸彫りで浅く圓線を施す。内体面上に片切彫りと櫛描きで波状文を描く。素地: 淡白色の微粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色: 明黄緑色で、貫入はない。龍泉系。14c後半~15c初頃。	B-14 SA15 東側トレチ 第5層a
# # 9		底 部	— — 7.6	高台分類bタイプ。器形: 外面の高台近くに成形時のカンナなどの削り傷(横9.5mm、縦3.6mm)がみられる事から粗製品として考えられる。外底面を深く削り取って基筋底状に高台を造る。内底から腰下部近くまで輪縁痕が観察できる。文様: 軸上や劈開面からは文様が観察ができない。素地: 橙褐色の細粒子で微細な石英が多くみられる。釉色: 黄茶色の釉を両面施釉後に外底面の釉を焼き取って露胎とする。両面に細かい貫入がみられる。中国南部の窯(福建、廣東?)。14c終末~15c中頃。	B-14 SA15 西側トレチ 第5層a
# # 10	酒 会 壺	口 縁部	16.0 — —	器形: 口縁部を垂直に成形し、口唇部を内側に尖り気味に仕上げた酒会壺。口縁部と頭部を深く削り取って口縁部に直角な方形状の肥厚を造る。文様: 残存部に文様はない。素地: 淡灰白色の微粒子で、微細な気泡痕が多くみられる。釉色: 淡明緑色の釉が両面に施した後に口唇部の釉を焼き取って露胎とする。貫入はない。龍泉窯。14c?	B-14 SA15 東側トレチ 第3層a 暗褐色土層

注「-」:計測不可



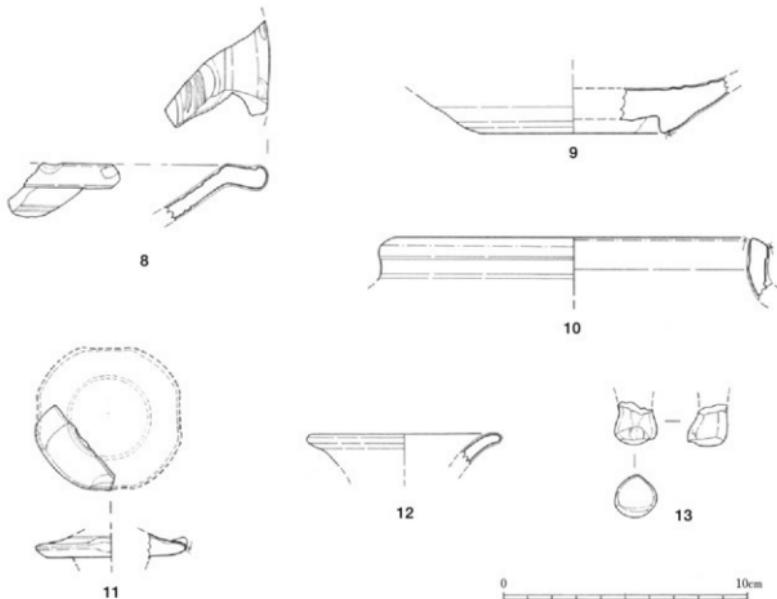
第16図 石積みSA15出土品③ 青磁：1～7

第33表② 石積みSA15 青磁観察一覧

単位: cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土点 出土層
第17図 図版11 11	蓋	外径 6.2 内径 (5.3)	器形:瓶の蓋とみられる。蓋甲下周(鋸際上部)から鋸縁が残存し、鋸縁の一部を押上げて波状とする。内面に身を受ける際の突起部の立ち上がり切が僅かに残存する。文様:蓋甲下周付近の刃開面に僅かに片切彫りが観察できる程度である。素地:灰白色の微粒子で微細な気泡痕が少量観察できる。釉色:貫入のない明青緑色の釉を外面にのみ施釉。龍泉窯系。14c中頃～15c初頭。	B-14 SA15 東側 レンチ 第5層g	
〃 〃 12	瓶	口 縁 部	8.0 — —	器形:口縁部が外側に大きく外反する瓶の口縁破片。口唇部を舌状に形成。文様:我存部には文様が確認できない。素地:光沢のある灰白色の微粒子で微細な気泡痕が僅かに観察できる。釉色:明緑色の透明な釉が両面に施されている。両面に粗い貫入がみられる。龍泉窯系。14c終末～15c中頃。	B-14 SA15 西側 レンチ 第6層a
〃 〃 13	香 炉		— — —	器形:三足香炉の脚部(獸足を立体的に表現)。獸足となる脚部底面は平面觀が隅丸三角形状となり、足と脚の折り曲げ部分も丁寧に形成する。文様:足の指先部分に片切彫りで斜位の短沈線が施されている。脚部と指先を区別する目的で筆による削りが確認できる。素地:光沢のある灰白色の微粒子。釉色:貫入のない明青緑色の釉が厚く純釉されている。龍泉窯系。14c中頃～15c初頭。	B-14 SA15 東側 レンチ 第1層a

注 「-」:計測不可、( ) :推定



第17図 石積みSA15出土品④ 青磁:8～13

第34表 石積みSA15 白磁・青花出土状況

種類	層序	B-14										B-14-15		合計		
		SA15										SA15				
		東側レンチ				西側レンチ						西側レンチ				
		覆土 栗石内	第1層a	第2層	第5層a	覆土 栗石内	第3層b	第4層a	第5層a	第5層g	第6層a	第7層b	第1層	第3層b (地栗 石内)		
白磁	碗	端反り 口縁部 直口 内彫 胸部 底部 a				1				1					1	
	皿	内彫 外反 口縁部 外反							1				1		1	
	大鉢	口縁部 直口								1					1	
	瓶?	胸部				1									1	
	合 計		2	1	1	2	2	0	2	1	0	0	2	2	0	15
	青花	外反 口縁部 直口 波譲文 棱花・直口 胸部 底部 直口				1									1	
			2	2		2	1						1		8	
					1	1	1				2				5	
					1	2					1				4	
							1								1	
		口縁部 直口													1	
		馬上杯	胸部 底部									1	1		2	
合 計			3	0	5	0	8	1	0	0	1	4	0	1	2	25

第35表① 石積みSA15 白磁観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)						出土地点 出土層
第18図 図版12 1	碗	口縁部	—	器形: 直口口縁碗。文様: 口縁部に片切彫りで2本一組の波譲文、若しくは蓮弁文の弁先を描く。口縁近くに團繩を一条施している。素地: 淡黄白色の微粒子。半磁胎で焼成が悪い。釉色: 黄白色の釉が両面に残る。細かい貫入が両面にみられる。中国南部の窯(福建・廣東?)。15c中～15c後半。						B-14 SA15 西側レンチ 第4層a
			—	器形: 外反口縁の大鉢。外側の腹壁痕は顕著であり、口縁に指圧を加えて外反させている。内面の口頭部に明瞭な梭が入る。文様: 無文。素地: 淡黄白色の微粒子で繊細な気泡痕が少量みられる。半磁胎で焼成が悪い。釉色: 淡灰白色の釉が両面に施され、細かい貫入が両面にみられる。中国南部の窯(福建・廣東?)。14c終末～15c代。						B-14 SA15 西側レンチ 第4層a
			—	器形: 外底面の見込みの釉を蛇ノ目状に搔き取った碗。高台下端部を斜位に削り取って高台を形成するが高台外底面の内側には浅く雑である。文様: 見込みに印花文(吉祥字款)一文字を花弁で囲む。字款の文字は不明)を施す。素地: 灰白色の微粒子で微細な石英や粗細な黒色氷物が少量ながら観察できる。釉色: 貫入のないガラス質で透明な淡灰白色の釉を外面が胴下部から高台脇まで施す。内面は内底面の釉を蛇ノ目状に搔き取って露胎とする。福建省閩清窯。14c終末～15c中頃。						B-14 SA15 西側レンチ 覆土栗石 内
〃 〃 2	大鉢	口縁部	—	器形: 外反口縁の大鉢。外側の腹壁痕は顕著であり、口縁に指圧を加えて外反させている。内面の口頭部に明瞭な梭が入る。文様: 無文。素地: 淡黄白色の微粒子で繊細な気泡痕が少量みられる。半磁胎で焼成が悪い。釉色: 淡灰白色の釉が両面に施され、細かい貫入が両面にみられる。中国南部の窯(福建・廣東?)。14c終末～15c代。						B-14 SA15 西側レンチ 第4層a
			—	器形: 口縁部を欠いた薄手(器厚1.3～2.8mm)の瓶、若しくは小杯とみられる。文様: なし。素地: 光沢のある白色の微粒子。釉色: 両面に淡灰白色の釉がみられる貫入はない。景德鎮窯系。16c～17c初。						B-14 SA15 東側レンチ 第2層
			—							
〃 〃 3	碗	底部	—							
			—							
			4.8							
〃 〃 4	瓶?	胸部	—							
			—							
			—							

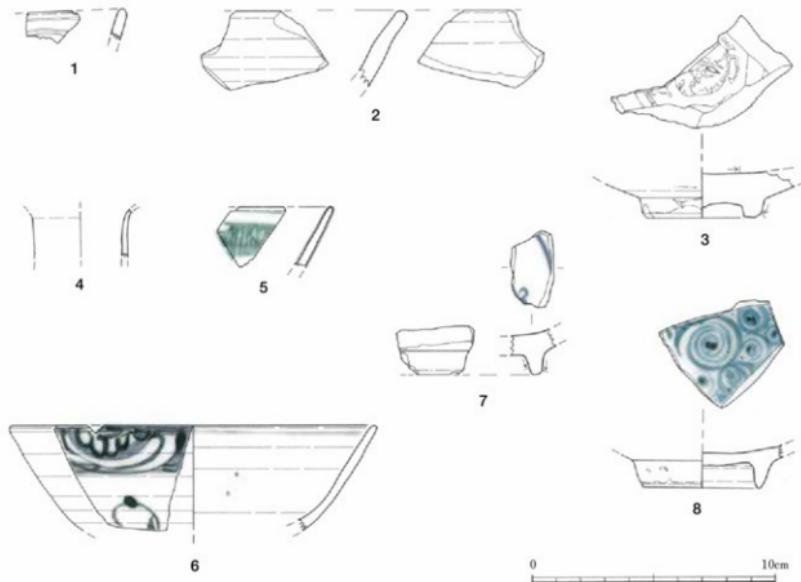
注「-」:計測不可

第35表② 石積みSA15 青花觀察一覧

単位:cm

捕番号 図版番号 遺物番号	名称・ 板称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第18図 図版12 5		口 縁 部	—	器形: 直口口縁碗。文様: 外面口縁部に細な花唐草文をダミ技法で描き、その直下に一条の界線を施す。口唇部にも具須を施している。素地: 光沢のある白色の微粒子。釉色: 淡青白色の釉を両面に施す。貫入: なし。福建・広東系。16c後半~17c代。	B-14 SA15 東側レンチ 第2層
			15.1	器形: 直口口縁碗。文様: 外面口縁部に簡素化された花唐草文を描き、その上下に各一条の界線を施す。胴部に宝文とみられる文様を描いている。内面口縁部に幅広の界線を一条廻らす。素地: 灰白色の細粒子で、微細な石英や黒色の物質が多くみられる。釉色: 灰白色の釉が両面にみられる。貫入: なし。福建・広東系。16c後半~17c代。	B-14 SA15 西側レンチ 第3層b
			—	器形: 高台内外面の下端部と疊付の釉を搔き取って露胎とする碗。文様: 見込みに具須で圓線と如意頭雲文(蘆之雲)か梅月文の一部とみられる文様がみられるが判然しない。素地: 白色の微粒子。釉色: 淡青白色の釉が両面にみられる。貫入: 両面に粗い貫入。景德鎮窯。15c前半~15c中頃。	B-14 SA15 西側レンチ 第6層a
〃 〃 6	碗	底 部	—	器形: 疊付を尖り気味に成形するため露胎となる。疊付の幅が1mm前後と狭い。文様: 見込みの花芯を渦巻文で大きく描き、周辺の花弁を丸文や渦巻文などで描いている。素地: 光沢のある淡灰白色的微粒子。釉色: 淡青白色。粗細な貫入が両面にみられる。景德鎮窯系。16c中頃~後半。	B-14 SA15 西側レンチ 覆土栗石 内
			4.8	器形: 疊付を尖り気味に成形するため露胎となる。疊付の幅が1mm前後と狭い。文様: 見込みの花芯を渦巻文で大きく描き、周辺の花弁を丸文や渦巻文などで描いている。素地: 光沢のある淡灰白色的微粒子。釉色: 淡青白色。粗細な貫入が両面にみられる。景德鎮窯系。16c中頃~後半。	B-14 SA15 西側レンチ 覆土栗石 内

注「—」:計測不可



第18図 石積みSA15出土品⑤ 白磁:1~4、青花:5~8

第36表 石積みSA15 中国産褐釉陶器・タイ産土器(半線)・タイ産炻器・タイ産褐釉陶器出土状況

種類	層序	B-14										B-14-15										合計		
		SA15										SA15												
		東側レンチ					西側レンチ					西側レンチ					(地 面 石 内 部)							
覆土		第1層 a	第2層 a	第3層 a	第4層 a	第5層 g	第6層 a	第7層 b	第8層 a	第9層 a	第10層 g	第11層 h	第12層 a	第13層 a	第14層 a	第15層 b	第16層 b	第17層 a	第18層 b	第19層 a	第20層 g	6		
褐 釉 中 國 陶 器	垂	方形	1	3	1							1											6	
		玉縁状		1	1							1		1									6	
		逆L字状												1									1	
		フの字状	1																				1	
		その他		1		1					1												3	
		口縁部～胴部				1																	1	
		口縁部																					1	
		肩部	1	3	1						1		1										7	
		耳				1						2	1										4	
		胴部	1	5	54	39		3	1	16	12	59	25	10	1	30	8	1	9	7	2	283		
		有文				1																	2	
	小 甕	底部				1				2	1	1	1	1	1	1							8	
		把手				1				1													2	
		口縁部	1										1										1	
		胴部																					1	
		胸部							2	1	1												5	
		不明																					1	
		合計	3	6	63	44	2	2	3	1	22	13	66	27	15	1	32	9	1	10	9	3	332	
	タイ 炻 器 ～ 半 燒 土 器	I															1						1	
		III																					1	
		IV																					1	
		その他															1						1	
		不明																					1	
		胴部																1					1	
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	1	0	2	0	6	
タイ 炻 器	垂	口縁部															1						1	
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	
		口縁部																1					1	
		頭部			1	1											1						1	
		肩部		1	5		1		1		5	1	3		4	1		1					23	
		胸部				1					1	3											5	
		底部																					5	
		合計	0	0	2	7	0	0	1	0	1	2	8	1	3	0	5	1	0	1	0	0	32	

第37表① 石積みSA15 中国産褐釉陶器観察一覧

単位:cm

捕団番号 國版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第19図 国版13 1		口 縁 部	12.8 — —	器形: 口縁を玉縁状に肥厚させたナデ肩の壺。肥厚帯下端に丸窓状の工具で調整して肥厚を強調する。文様:なし。器面調整: 外面は釉で覆われて観察できない。内面は口縁部のみ丁寧に仕上げている。素地: 淡灰色の粗粒子で、粗細な石英を多く含み、稀に粗い茶褐色や灰黒色の物質が少量観察できる。釉調: 茶褐色の釉が外面から内面口縁まで施されている。焼成: 壓織。中国南部の窯。14c~15c。	B-14 SA15 東側トレチ 第3層a
			11.6 — —	器形: 口縁を歪な隅丸方形状に肥厚させたやや怒り肩となる壺。肥厚帯下部に稜線があり、その直下に丸窓状の工具で調整して肥厚を強調する。文様:なし。器面調整: 外面は釉で覆われて観察できない。内面は釉上からの観察では、口縁部に粗い刷毛目様のナデがみられ、口縁から胴部にかけて丁寧な回転擦痕が施されている。素地: 淡灰色の粗粒子で、粗細な石英を多く含み、稀に粗い茶褐色や灰黒色の物質が観察できる。釉調: 茶褐色の釉が外面から内面まで施されているが、内面の釉は色調が薄く、雑である。焼成: 慢焼。中国南部の窯。14c~15c。	B-14 SA15 西側トレチ 第4層a
			— — 20.3	器形: 壺の底部で、底面の器厚は5mm前後と薄い。底面から立ち上がりで内側に一端くびれさせた後に外側に開き気味に若干反りながら胴部に移行する。文様:なし。器面調整: 両面とも比較的に丁寧に仕上げている。外面は回転擦痕で内面が擦痕とナデがみられる。素地: 淡灰色の粗粒子で、粗細な石英を多く含み、稀に粗い茶褐色や灰黒色の物質が少量観察できる。釉調: 外面の胴下部に白濁した釉が垂れていて一部は外底面まで及んでいる。内面には茶褐色の泥釉が散見できる。焼成: 壓織。中国南部の窯。14c~15c。	B-14 SA15 西側トレチ 第5層g
〃 2		壺	10.8 —	器形: 肩の無い内傾する蓋付きの小振りの壺とみられる。口縁に小さな肥厚を造り、口唇を尖り気味に形成する。文様:なし。器面調整: 外面は釉で覆われているが、胴部に頗るな擦痕が観察できる。内面は回転擦痕と擦痕がみられる。素地: 淡灰色の粗粒子で、粗細な石英を多く含み、稀に微細な茶褐色や灰黒色の物質が少量観察できる。釉調: 茶褐色の釉が外面から内面口縁まで施されている。焼成: 壓織。中国南部の窯。15~16c。	B-14 SA15 東側トレチ 第2層
			— —	器形: 怒り肩の小振りの壺。口縁に小さな三角形状の肥厚を造り、口唇を尖り気味に形成する。文様:なし。器面調整: 外面の口縁下端から頸下部の釉を粗い刷毛目様の工具で搔き取って露胎とする。内面に回転擦痕と雜なナデがみられる。素地: 灰色のやや細かい粒子で、粗細な石英を少量含み、稀に微細な黒色物質が僅かにみられる。釉調: 茶褐色の釉が外面から内面口縁まで施された後に外側の口頸部の釉を搔き取っている。焼成: 壓織。中国南部の窯。15c~16c。	B-14 SA15 東側トレチ 第2層
〃 5	小壺	口 縁 部	10.4 — —	器形: 口縁部の肥厚が「フ」の字状となるナデ肩の壺。口唇部を幅広(幅1.6mm)に成形成する。文様: 頸部に二条一組の界線を丸窓(幅1.3~1.5mm)状の工具で施す。界線の上から縦位の把手を貼り付けている。器面調整: 外面は釉上からの観察では丁寧な擦痕成形とみられる。内面は回転擦痕と雜なナデがみられる。素地: 淡灰色の粗粒子で、粗細な石英が少量みられ、その他に茶褐色や灰黒色の物質も僅かに観察できる。釉調: 茶褐色の釉が外面から内面口縁まで施した後に口唇部と内面口縁の釉を搔き取って露胎とする。焼成: 壓織。中国南部の窯。14c~15c。	B-14 SA15 東側トレチ 第1層a
			19.1 — —	器形: 口縁部の肥厚が「フ」の字状となるナデ肩の壺。口唇部を幅広(幅1.1mm)に成形成する。文様: 頸部の中央と頸部下部に二条一組の界線を丸窓(幅0.8~1.5mm)状の工具で施す。界線の上から縦位の把手を貼り付けている。把手には三条の幅広(幅1.7~3.4mm)の縱溝線文を施す。器面調整: 外面は釉上からの観察では丁寧な擦痕成形とみられる。内面は口縁部に僅かに擦痕とナデがみられる。また、胴部には把手を貼り付ける際に内面から深い指圧を加えたため、指圧痕とナデが観察できる。素地: 淡灰色の粗粒子で、粗細な石英が少量みられ、その他に粗細な茶褐色や灰黒色の物質も僅かに観察できる。釉調: 黄緑色の釉が外面から内面口縁まで施した後に口唇部と内面口縁の釉を搔き取って露胎とする。焼成: 壓織。中国南部の窯。14c~15c。	B-14 SA15 東側トレチ 第1層a
第20図 国版14 7		壺	18.1 — —	器形: "。肥厚部の縦断面が丸味を帯びている。口唇部を幅広(幅11.2mm)に成形成する。文様: 頸部の中央と頸部下部に二条一組の界線を丸窓(幅0.8~1.5mm)状の工具で施す。界線の上から縦位の把手を貼り付けている。把手には三条の幅広(幅1.7~3.4mm)の縱溝線文を施す。器面調整: 外面は釉上からの観察では丁寧な擦痕成形とみられる。内面は口縁部に僅かに擦痕とナデがみられる。また、胴部には把手を貼り付ける際に内面から深い指圧を加えたため、指圧痕とナデが観察できる。素地: 淡灰色の粗粒子で、粗細な石英が少量みられ、その他に粗細な茶褐色や灰黒色の物質も僅かに観察できる。釉調: 黄緑色の釉が外面から内面口縁まで施した後に口唇部と内面口縁の釉を搔き取って露胎とする。焼成: 壓織。中国南部の窯。14c~15c。	B-14 SA15 東側トレチ 第4層a

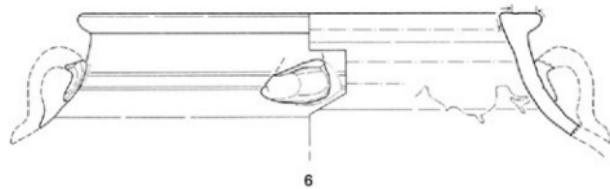
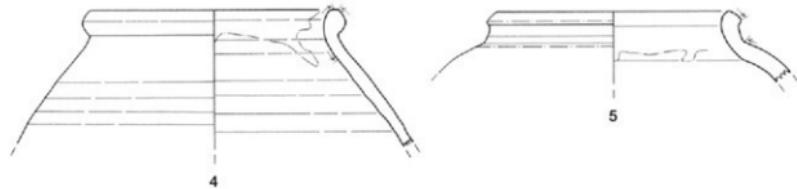
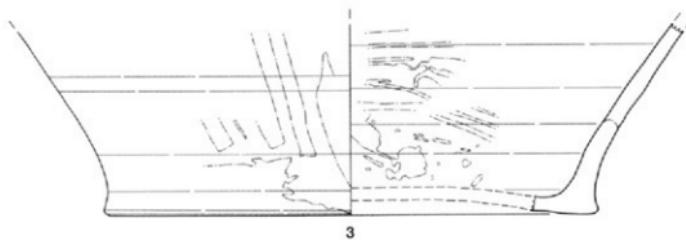
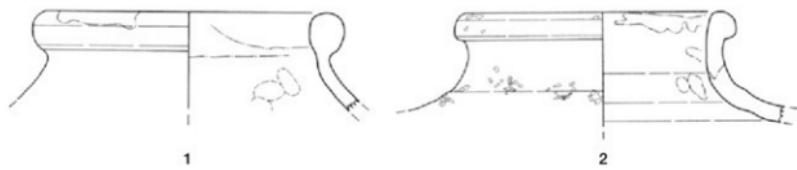
注「-」:計測不可

第37表② 石積みSA15 中国産褐釉陶器観察一覧

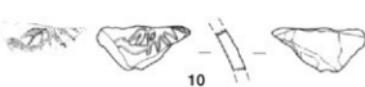
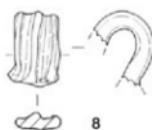
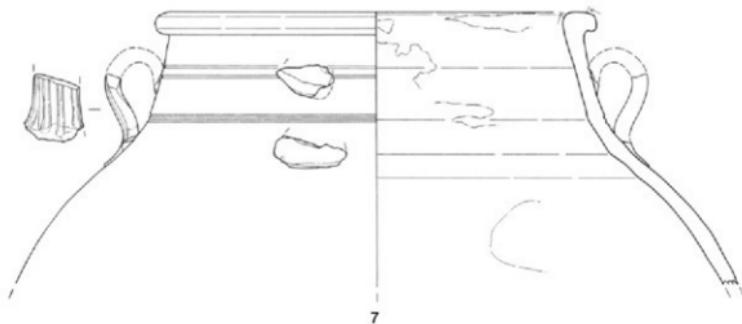
単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第20図 図版14 8	把手	—	器形:怒り肩の壺に貼り付けられた把手。文様:把手に4mm前後の丸窪で深く擬沈線文を施す。器面調整:内面は丁寧なナデを主体とし部分的に指圧痕が確認できる。素地:橙色の粗粒子で、粗繊な石英が少量みられる。他に白色の陶土が歪な帯状に入っている。釉調:黄茶色の釉が全面に残っている。焼成:良好で堅い。中国南部の窯。14c~15c。	B-14 SA15 東側レンチ 第3層a 暗褐色土層	
〃 〃 9	壺	16.0	器形:怒り肩の壺、肥厚部の縦断面が歪な「て」の字状となり、口唇部も幅広(幅16.6mm)に成形する。文様:なし。器面調整:外面は釉が掛かり観察できない。内面は口縁部が雑で粗い刷毛目様の調整で、頭下部から下は粗密なナデがみられる。素地:灰白色の粗粒子で、粗繊な石英が少量みられる。稀に粗い茶褐色の鉱物がみられる。釉調:白色(白濁)の釉を外表面から内面口縁まで施した後に口唇部と内面白縁部の釉を雑に搔き取っている。焼成:良好で堅い。中国南部の窯。14c~15c。	B-14 SA15 東側レンチ 第4層a	
〃 〃 10	胴部	—	器形:同図7の胴部とみられる。文様:外面上に浮文の罫(鼈と鶴)を型で起こしている。器面調整:外面は釉で不明。内面に敷密な回転擦痕がみられる。素地:淡灰色の粗粒子で、粗い石英を主体に粗い茶褐色の物質と灰黒色鉱物が少量観察できる。その他に劈開面から素地中に灰白色の陶土が帯状に挟まっている。釉調:黄緑色の透明釉を外表面に施す。内面に釉が垂れている。焼成:堅緻。中国南部の窯。14c~15c。	B-14 SA15 東側レンチ 第3層a 暗褐色土層	
〃 〃 11	把手	—	器形:同図7のナデ肩タイプの壺に貼付られた把手の被片。側面の成形は雑で右側面で一部の陶土が食み出している。文様:把手の外面上に丸彫りで獅子面を描いている。器面調整:内面は指圧をナデ消している。素地:淡橙白色の粗粒子で、細かい石英と黒色や茶褐色の物質が僅かにみられる。稀に粗い石英も観察できる。釉調:両面に黄茶色の釉がみられる。中国南部の窯。14c~15c。	B-14 SA15 西側レンチ 第4層a	

注 「—」:計測不可



第19図 石積みSA15出土品⑥ 中国産褐釉陶器 (1) : 1~6



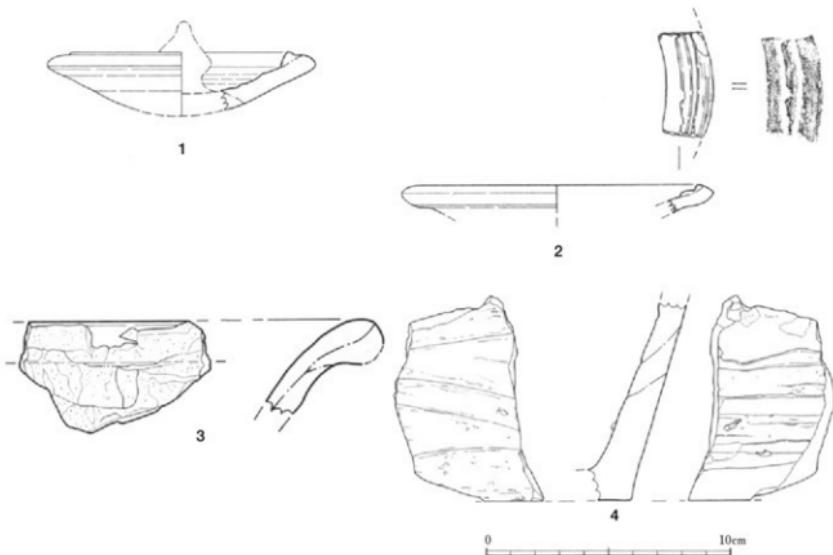
第20図 石積みSA15出土品⑦ 中国産褐釉陶器（2）：7～11

第38表 石積みSA15 タイ産土器(半練)・タイ産炻器・タイ産褐釉陶器観察一覧

単位: cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称・部 位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層	
第21図 図版15 1	タイ (半 練) 土 器	蓋 類	端部径 11.0	器形: 蓋縁分類のIII類。蓋端部近くの縱断面が歪な三角形状の突起を造る落とし蓋であるが部分的に歪な方形状の突起を造る。端部の推算直径: 11.0cm。推定復元高: 3.9cm。器面調整: 上面は突起及び周辺に丁寧なナデを施し、突起下部から中央に掛けて雑な指ナデを加えている。下面是全体的に籠様の工具で削り調整後に雑なナデを施している。下面の中央寄りに指ナデがみられる。素地: 淡灰白色の粗粒子で、細かい石英や黒色の鉱物を多く含む。色調: 上面は灰色で、下面が灰黒色を帯びている。焼成: 良好で堅い。15c~16c。	B-14 SA15 西側レンチ 第5層a
〃 2				器形: 蓋縁分類から外れたタイプの落とし蓋。蓋端部近くの突起に丸彫りで圓線を施している為、突起が二重となる。文様: 上面突起部に丸彫りの圓線。端部での推算直径: 12.8cm。器面調整: 上面は丁寧なナデ調整で、下面是上面より雑なナデで仕上げている。素地: 灰色の細粒子で、細かな鉱物(石英、茶褐色の物質、黒色鉱物)を多く含む。色調: 上下面とも橙白色。焼成: 良好で堅い。15c~16c。	B-14 SA15 西側レンチ 第5層g
〃 3	炻 器 タイ 産	壺	口 縁 部	器形: 口縁部がラバ状に開く玉縁口縁の壺。文様: なし。器面調整: 外面は器面が剥離して不明。内面も全体的に剥離するが部分的に丁寧なナデがみられる。素地: 淡灰白色の細粒子で、粗細な石英を少量含み、僅かに粗細な有色(灰褐色、茶褐色)の物質や黒色鉱物が観察できる。焼成: 悪く脆い。パンプーン窯産。15c後半~16c。	B-14 SA15 西側レンチ 第5層g
〃 4	褐 釉 陶 器 タイ 産	壺	底 部	器形: 底面から内側に閉じ気味に直線的に立ち上がる底部破片。素地: 濃茶紫色の細粒子で、細かい石英と茶褐色の鉱物が少量ながら含まれている。色調: 外面の胴下部に茶褐色の釉が施されている。内面には部分的に茶褐色の釉が垂れている。シーサッチャナライ窯かコノイ窯。15c。	B-14 SA15 西側レンチ 第3層b

注「-」: 計測不可



第21図 石積みSA15出土品⑧ タイ産土器(半練) : 1・2、タイ産炻器 : 3、タイ産褐釉陶器 : 4

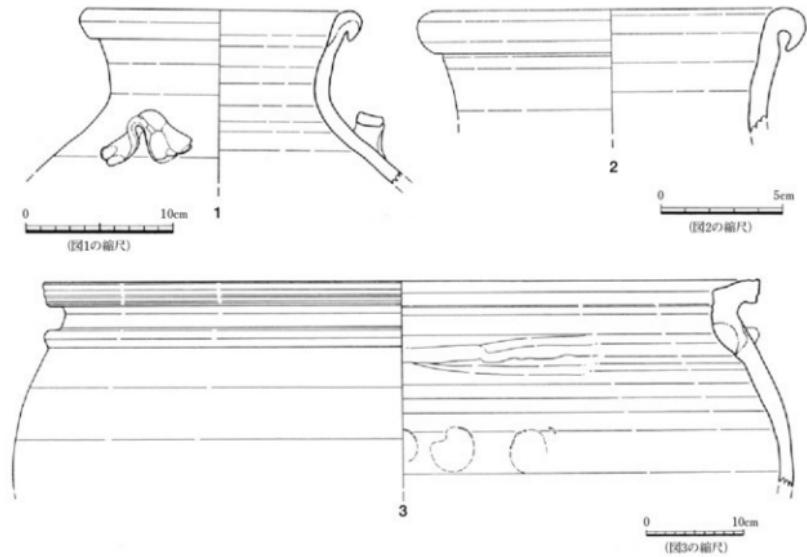
第39表 石積みSA15 沖縄産無釉陶器出土状況

種類	層序	B-14						B-14-15		合計	
		SA15						SA15			
		東側レンチ			西側レンチ			西側レンチ			
覆土	覆土 栗石内	第2層	覆土 栗石内	第3層b	第6層a	第3層b (栗石内)	第4層a				
沖縄産 無釉陶器	鉢	口縁部				1				1	
		脇部				1				1	
		底部				1				1	
	壺	口縁部				4				4	
		口縁部～頸部				1				1	
		頸部				4				4	
	甕	脇部		1	11		1	3	1	17	
		口縁部	1							1	
		脇部		1	8			1		10	
	壺or甕	口縁部	1		13	4		2	1	21	
		底部			1					1	
合計			1	1	2	43	6	1	6	2	62

第40表 石積みSA15 沖縄産無釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)				出土地点 出土層
第22図 図版16 1	壺	口 頸縁 部	19.2 — —	器形: 口頸部で軽く外反し、口縁を玉縁状の肥厚とする。肥厚部は陶土を折り曲げて玉縁状に形成する。文様: 頸下部に横位方向に幅広の陶土を貼付けて把手とする。器面調整: 外面は茶褐色の釉が掛かるが袖上からの観察では丁寧なナデ? で仕上げたようである。内面は部分的に露胎する部分があり、当該箇所から観察では丁寧で細かい回転擦痕が施されている。素地: 光沢のある茶紫褐色の微粒子で、粗い石英が僅かにみられる。劈開面から白色の陶土が細く織状に入る部分がみられる。色調: 茶褐色の釉を両面に施している。焼成: 堅緻。				B-14 SA15 西側 レンチ 覆土栗石 内
〃 2	壺	口 縁 部	15.8 — —	器形: 口頸部が微弱に外側に外傾する玉縁口縁の壺。肥厚部は上記1と同様に陶土を折り曲げているが、屈曲が弱く肥厚帯の裏側の空洞が大きくなっている。文様: なし。器面調整: 外面の肥厚帯下端部に棘状痕による微弱な隆起がみられる。頭部は袖上からの観察では丁寧に仕上げている。内面も袖上からの観察では丁寧である。素地: 明橙色で、粗細な石英が僅かにみられる。劈開面から白色の陶土が織状となっている部分が多くみられる。色調: 茶褐色の釉を両面に施す。焼成: 良好で堅い。				B-14 SA15 西側 レンチ 覆土栗石 内
〃 3	甕	口 縁 部	73.7 — —	器形: 大型の水瓶の口縁破片。口唇部を逆「L」状に幅広(幅48.2mm)に形成する。文様: 丸彫りの工具で肥厚帯下端と内面口縁部に界線を施す。口唇の外周部に幅3.3mmの丸彫りの工具で外縁に削りを加えて形成する。頸下部に縦断面が台形状の凸帯(幅10.3~20.2mm)を造る。器面調整: 外面は袖が掛けられ観察が出来ないが、器面の状況から内面よりも丁寧に仕上げられている。内面は外面の凸帯裏側から陶土を離き足している為、当該部はナデが徹底していない。口縁部と脇部に回転擦痕が顕著にみられ、部分的に円形の当て具痕がみられる為、外面凸帯の裏側から実施されている。素地: 明橙色の粗粒子で、粗い石英を主体とし、稀に細かい茶褐色の物質や粗い黒色の物質がみられる。色調: 外面に茶褐色の釉を掛けている。口唇部と内面には露胎し茶褐色を帯びている。焼成: 良好で堅い。				B-14 SA15 東側 レンチ 覆土栗石 内

注「—」:計測不可



第22図 石積みSA15出土品⑨ 沖縄産無釉陶器：1～3

第41表 石積みSA15 貝製品・骨製品・石・石製品・円盤状製品出土状況

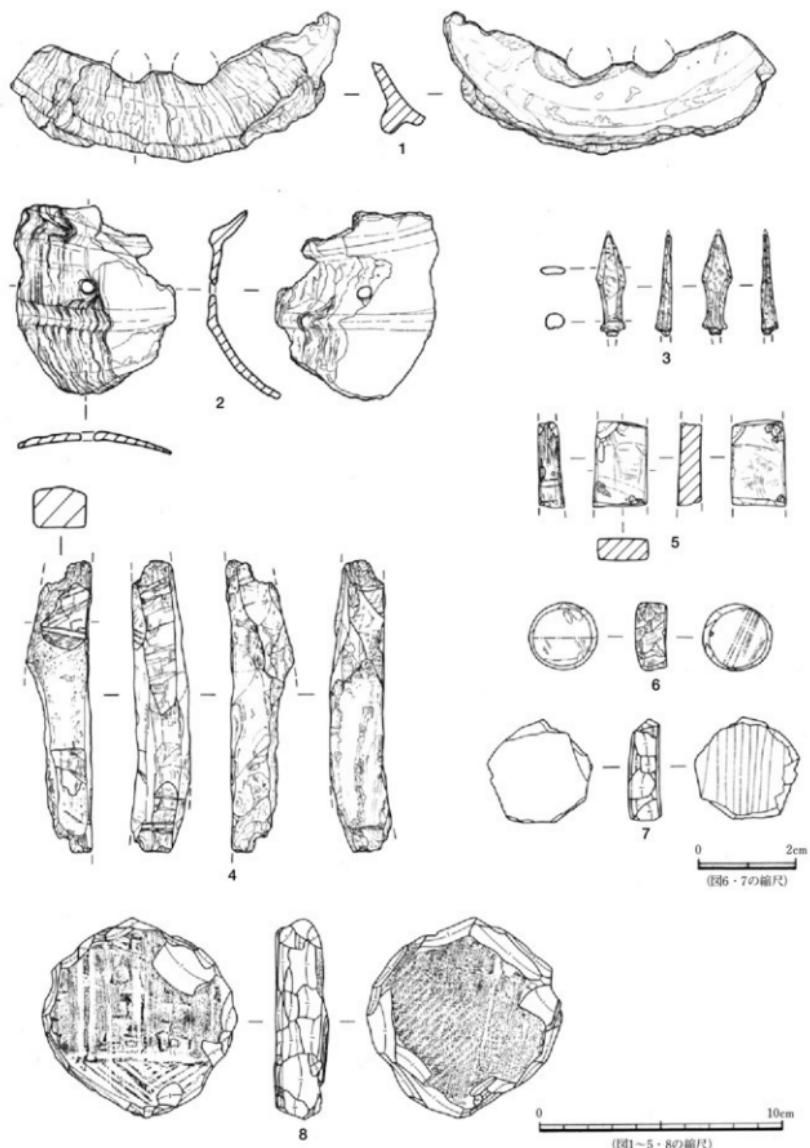
種類	層序	B-14 SA15												B-14-15 SA15				合計
		東側ハンチ						西側ハンチ										
		覆土	第1層a	第2層	第3層a	第3層a 褐色土層	第5層a	第6層b	覆土 裏石内	第3層b	第4層a	第5層a	第5層b	第6層a	第6層b (時窓 内)	第4層a (時窓 内)		
貝製品	ヤツカガイ貝有孔貝品		1															
	合計		0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
骨製品	骨盤	ジヌマウガウ																1
	用途不明	ジヌマウ	切骨															1
	合計		0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
石・石製品	礁石								1									1
	礁塗の木製品 (敲打のもの)	細粒砂岩(ニセ)																1
	石材片	チャート																1
	細粒砂岩(ニセ)	2	1	3	2		1			5	7	3	1	1	2	5	34	
円盤状 製品	石灰岩								1	1								3
	合計		2	1	4	2	0	1	1	1	5	7	3	1	1	3	2	40
	青磁																	1
	中国產燒釉陶器																	2
	其																	1
	合計		1	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	3

第42表 石積みSA15 貝製品・骨製品・石製品・円盤状製品観察一覧

単位:cm/g

押団番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	残存長(縦) 残存幅(横)	残存厚 重量	観察事項	出土地点 出土層
第23図 図版17 1	貝製品 ヤコ孔ガガイ製	3.75 13.6 孔左1.65 〃右1.97	— 87.2	サザエ科ヤコウガイの殻から蠑螺繕工のために上部縁辺の中央付近に粗孔2箇所と右縁辺近く小孔に2箇所の計4箇所の孔が外側から穿孔されている。下部縁辺部にも小孔を3箇所程度穿ったようである。これらの孔を基準にして蠑螺の切り離しが実施され、切り離しの面は研磨様となり平坦な面となる。研磨様の切り離しの面は上部と下部の縁辺部にそれぞれ2箇所の計4箇所で確認できる。その他、外周縁辺部は剥離や破損面の摩耗が著しい。	B-14 SA15 東側レンチ 第3層a 暗褐色土層
〃 2		7.75 6.65 孔横0.53 〃横0.57	— 23.5	サザエ科ヤコウガイの殻で用途不明の製品。外側の殻が剥離して真珠層のみが露呈する。内面中央付近に内側から穿孔されている。孔の平面觀は重な溝丸三角形状となる。外周縁辺部は剥離や破損面の摩耗が著しい。	B-14 SA15 東側レンチ 第1層a
〃 3	骨織 骨織	4.1 鐵身最大幅1.2 鐵身基端1.9 茎部直径4.6	鐵身最大厚 0.64 1.7	ジュゴン、若しくはウシの骨を利用した製品で、茎部が欠落する。鐵身先端部と右上の縁辺部が破損する。製品加工は表面裏面とも刃物で丁寧に削り出しているが、裏面は骨質部が多く器面部が粗粒に見える。鐵身下半分は両側から抉り取った後に丁寧に削って仕上げている。	B-14 SA15 東側レンチ 第3層a 暗褐色土層
〃 4	骨製品		12.0 2.5	ジュゴンの肋骨部に刃物に削りや刃物傷がみられるもので、骨鐵や賽子などの製品の素材として切り取った後に廃棄されたか。或いは製作途中の未製品なのか判然としない。削りによる加工痕は表面上部に集中し、横断面が長方形状となる。表面下半部にも部分的に削り痕が観察できる。	B-14 SA15 西側レンチ 第4層a
〃 5	石製品 砥石		3.5 2.2	硯の海部の破片を砥石として転用した製品。表面の右上と左下に墨汁の塊が付着している。横断面の観察から上面が左(最大厚9.5mm)から右(最大高7.5mm)に緩やかに傾斜する。平面觀は重な長方形状を呈し、正面の左側面が硯本来の側面で、右側面も硯本来の側面と見まがうほど平滑な砥面となっている。裏面は硯体の下面である。砥石としての使用面は主に正面であり、微弱に横走する刃物類(小型の刃物が想定される)の研磨や線状痕(筋)以外に縦走方向の線状痕(筋)や削り痕などがみられる。右側面は主に研面として利用された為、微細な線状の使用痕が縦走方向に満遍なくみられる。左側面と裏面には刃物類の刃先で線状の傷がみられる程度である。石質は頁岩。	B-14 SA15 東側レンチ 第2層
〃 6		1.36 1.34	0.62 1.6	楕円陶器の胴部片を円盤状に丁寧に加工した円盤状の道具で厚さが5.2~6.2mmを測る。加工面は外周縁間に打割面を磨り消すように微細な線状痕が満遍なくみられる。表面には製品成形時の研磨の痕跡を示す微弱な線状痕がみられる程度である。裏面への加工の痕跡はなく暗褐色の釉が薄く半分程度塗布されている。素地:淡橙色の繊維粒子で、粗細な石英と茶褐色の氷片が少量混入する。	B-14 SA15 西側レンチ 第5層h
〃 7	円盤状製品		2.1 2.15	中国産の青磁盤(内面に5本の櫛目を確認。14c後半~15cの龍泉窯系の製品とみられる)の破片を利用した製品で、縁辺部に打割調整を加えて成形している。打割は主に表面から実施されている。打割による剥離面が外周縁面にみられるが、磨面は認められない。素地は淡灰白色の微粒子で、微細な黒色氷片?とみられるものが僅かに観察できる程度である。釉色は淡青緑色の釉が両面にみられる。細かい貫入がみられる。	B-14 SA15 東側レンチ 覆土
〃 8		8.2 8.0	1.8 132.4	高麗系平瓦の「癸酉年高麗瓦匠造」の在銘瓦の破片(厚さ17.9~18.8mm)を使用した遊具。凸面の字款は右側に「〇〇年高」、左に「龍瓦匠造」が打捺されるが「龍」の一文字のみ上半分が欠落する。更に右端近くに「年高」の字款が僅かに残存する。在銘の区画から下には羽状の叩きが打捺されている。打割調整は主に凸面側から実施され、凹面からは2回程度打割をおこなっているようである。凹面には布目庄痕が主体的にみられ部分的に糸切り痕がナデ消されているように残っている。素地は灰白色の繊維粒子で、微細な石英を主体に茶褐色や黒色の物質を少量含む。	B-14 SA15 西側レンチ 第3層b

注「-」:計測不可



第23図 石積みSA15出土品⑩ 貝製品：1・2、骨製品：3・4、石製品：5、円盤状製品：6～8

第43表 石積みSA15 金属製品出土状況

種類	部位	B-14 SA15										B-14-15 SA15			合計	
		東側レンチ					西側レンチ					西側レンチ				
		覆土 裏石内	第1層a	第2層	第3層a	第5層a	覆土 裏石内	第3層b (時変 石内)	第4層a	第5層a	第6層a	第1層	第3層b (時変 石内)	第4層a	第5層a	
工具類・ 生産用具	丸釘	先端 頭部欠損	中	鉄									1	1	2	
		先端 頭部欠損	中	鉄	1		1	1							1	
		先端 頭部欠損	中	鉄		1	3					2			5	
		先端 頭部欠損	中	鉄		1	1	1			1	1	2	3	11	
		先端 頭部欠損	中	鉄	4	2					1		1	1	5	
	角釘	先端 頭部欠損	小	鉄	1								1	1	2	
		先端 頭部欠損	不明	鉄	2										2	
		鍔の鑑座		青銅	1										1	
		絶角形の鑑座		青銅								1			1	
		鍔		青銅										1	1	
武器	刀	札		鉄								1	1		2	
		舟輪		青銅			2							1	3	
		笠鉢		青銅								1			1	
		笠鉢		青銅								1			1	
		八重金物		青銅	1										1	
	板状製品(武具の一語?)	板状製品(武具の一語?)		鉄											1	
		鏡	口縫部	鉄	1										1	
		武器	切羽	青銅											1	
		不明		鉄	2	1		1		2	1			7	7	
		不明		青銅									2		2	
合計			6	9	2	8	1	6	1	1	7	3	5	1	6	12

第44表① 石積みSA15 金属製品観察一覧

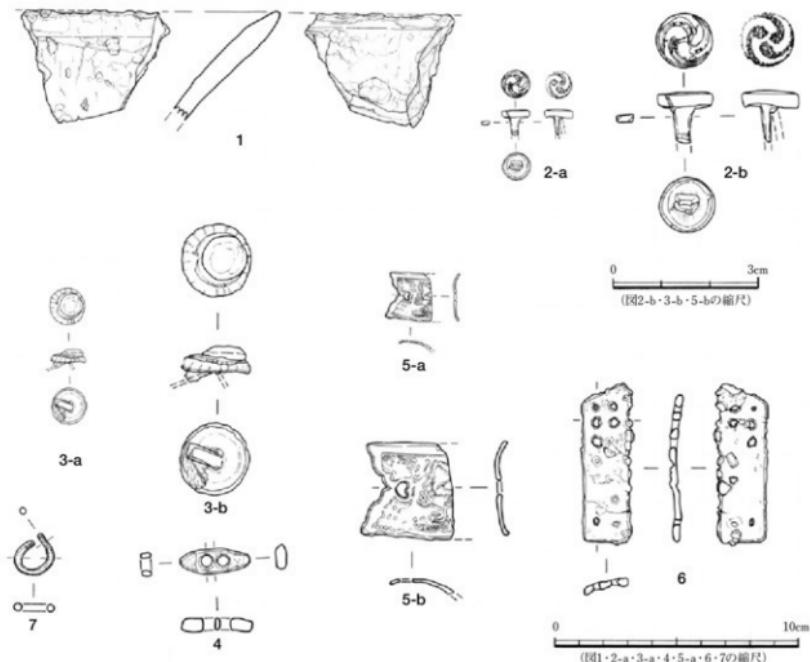
発掘番号 図版番号 遺物番号	分類・名 称・仮称	材質	残存長(縦) 残存幅(横)		大振りの鉄錫の口縫破片とみられる。口縫部は尖り気味で成形されている。表面に鋒が付着し、裏面の口縫部に鋒汁によって鉄化した木片が取り込まれている。劈開面からの観察では、器面の形状に沿うような形で板状の剥離が確認できる。		観察事項	
			残存最大厚	残存重量			B-14 SA15 東側レンチ 第1層a	
第24回 図版18 1	生活 用具	口鉄 錆錫 部・ 鉄 製品	46.0	61.0	8.72	3.20	55.74	
" "	" "	笠 鉢	10.3 3.2		3.21			
" "	2		頸部上部 11.3 " 下部 10.8		1.47			
" "			身部長 8.5 " 厚 3.2		1.71			
" "	3	青銅 製品	14.7 11.0	-	-	2.30		
" "	4	鎧 の 鎧座	10.0 30.0	4.19 3.71 3.60	緩やかに湾曲した笠鉢。全体的に緑青がみられ、鋒汁に砂粒が付着する。紐通しの孔のサイズは左側が4.9~5.3mmで、右側が4.9~5.0mmを測る。左側の孔が僅かに大きいようである。			

注「-」:計測不可

第44表② 石積みSA15 金属製品観察一覧

単位:mm/g

捕獲番号 図版番号 遺物番号	分類・名 称・仮称	材質	残存長(縦) 残存幅(横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観察事項	出土地点 出土層
第24回 図版18 5	八 双 金 物	青 銅 製 品	19.31 18.82	1.03 0.74 1.95	半菊文と花弁の一部が右側に残存する八双金物。左隅を魚尾状に表面から抜り、魚尾状の根元近くにハート形に表面から蟹で打ち抜いて透かし文様を造る。文様は蟹で鑿彫りし区画沈斬を施し、区画内に円錐状の鎧で魚々子を区画沈斬や半菊文や花弁の周辺に打ち付けたようであるが、魚々子の大半が鍛造による跡などと不鮮明である。裏面の1/3程度の範囲内には緑青の鎧が附着して微細な気泡や気泡の破裂痕が観察できる。	B-14 SA15 東側レンチ 覆土栗石内
〃 〃 6	武 具	鉄 製 品	65.02 18.93	2.02 1.91 11.31	底上札。完形の底上札であるが3孔通しの孔の配列は2行13孔(札の左隅には孔を穿たない)を基本とするが、当該製品は左隅の孔が1孔(左隅の孔)多い2行14孔となっていることから孔数からすると基石頭伊予札となる。底上札に基石頭伊予札の孔数を打ち抜いた可能性が高い札である。14孔の内で6孔が開いているのみで残り8孔は鉛で埋まっていたり鉛で覆われたりしている。	B-14 SA15 西側レンチ 第3層b (畦栗石内)
〃 〃 7	總 角 付 の 鎧座	青 銅 製 品	17.5 16.0	2.7 2.0 1.53	兜鉢の後背に取り付けられた総角付(笠印付)の鍛金された鎧座とみられる。鎧座が取り付けられた切子頭から外れた際に変形したもののとみられる。鎧座の端の一部には鉛で切り落とした際に生じたとみられ尖っている。他の端は先端が磨滅したようであり、丸味を帯びている。当該部分のみ身部がやせ細っていることから切子頭の中に入っていた可能性が高く鍛金も剥落している。鎧座の長軸外径16.4mm、短軸内径11.2mm、短軸外径14.0mm、短軸内径8.4mm。	B-14 SA15 西側レンチ 第4層a



第24図 石積みSA15出土品⑪ 金属製品：1～7

第45表 石積みSA15 二次的火熱溶解銭貨

銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
開元通寶(唐621年初鑄) or (唐845年初鑄) or (南唐960年初鑄)	1片	0.60	「開」の一字が残存	B-14・15 SA15 西側レンチ 第4層a
開元通寶(南唐960年初鑄)	1枚	3.77	完形	B-14 SA15 東側レンチ 第5層g
至和元寶(北宋1054年初鑄) or 至和通寶(北宋1054年初鑄)	1片	1.02	「至」の一字が残存	B-14 SA15 西側レンチ 覆土栗石内
元祐通寶(北宋1086年初鑄)	1片	2.47	「元」・「通」・「寶」の三字が残存	B-14 SA15 西側レンチ 第4層a
聖宋元寶(北宋1101年初鑄)	1片	0.95	「聖」の一字が残存	B-14 SA15 西側レンチ 覆土栗石内
政和通寶(北宋1111年初鑄)	1片	0.93	「政」の一字が残存	B-14 SA15 西側レンチ 覆土栗石内
永樂通寶(明1408年初鑄)	1片	3.00	「樂」・「通」の二字が残存	B-14 SA15 西側レンチ 第4層a
	1片	1.34	「永」・「寶」の二字が残存	B-14 SA15 東側レンチ 覆土栗石内
無文銭(初鑄年不明)	1片	0.84	-	B-14 SA15 西側レンチ 第4層a
不明銭貨	1片	1.04	「寶」の一字が残存	B-14 SA15 西側レンチ 第4層a
	1片	0.99	「通」の一字が残存	B-14 SA15 西側レンチ 覆土栗石内
	1片	0.99	「寶」の一字が残存	B-14 SA15 西側レンチ 第3層b(埴栗石内)
	1片	1.36	「寶」の一字が残存	B-14・15 SA15 西側レンチ 第3層b(埴栗石内)
	1片	1.31	判読不可	B-14・15 SA15 西側レンチ 第4層a
	1片	0.60	判読不可	B-14 SA15 西側レンチ 覆土栗石内
合計	15			

第46表 石積みSA15 ガラス玉出土状況

種類	層序		B-14	B-14・15	合 計
	ガラス玉	II類	SA15	SA15	
		IV類	西側レンチ	西側レンチ	
			第5層g	第4層a	
II類 淡青色				6	6
IV類 青色			1		1
合計			1	6	7

第47表 石積みSA15 錢貨観察一覧

単位:mm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	銭種類	铸造年	素材	読み方	状態	書体	肉郭外径		内郭外径	方穿	断面計測部位			重量	観察事項	出土地点 出土層
							A B	C D			①	②	③			
第25回 図版19 1	開元通寶 公鑄銭	南唐 960年	銅錢	対読	完形	隸書 (真書)	25.44 25.23	20.65 20.68	6.84 7.06	1.30	0.84	1.18	3.77	面の肉郭の幅が1.9~2.4mmを測る。字款は「寶」の一文字のみ不鮮明で鋳型の影響で文字が流れ摩滅した状況にある。背の肉郭は面上より不鮮明である。緑青は背面に半分近く広がっている。	B-14 SA15 東側 レンチ 第5層g	
〃 2	元祐通寶 不明	北宋 1086年	銅錢	回読	破損	行書	24.78 —	20.73 —	— 7.18	1.24	0.89	1.10	2.47	「祐」の字款部分が欠損する。残存する「元」・「通」・「寶」の3文字は緑青による浸食を受けて不鮮明である。肉郭の幅は面(1.8~2.4mm)よりも背(3.1~3.8mm)が幅広くなっている。	B-14 SA15 西側 レンチ 第4層a	
〃 3	永樂通寶 公鑄銭	明 1408年	銅錢	対読	破損	行書	— —	— —	5.33 5.59	1.59	0.75	1.19	3.00	「永」と「寶」の字款が半分程度欠損する。字款の文字は深く鋳造されているが緑青の錆汁が砂(角の取れた石英の細粒)を多く取り込んでいて不鮮明となる。背よりも面が緑青が多く残存する。	B-14 SA15 西側 レンチ 第4層a	
〃 4	永樂通寶 模鑄銭	明 1408年	銅錢	対読	破損	楷書	— —	— —	— —	0.96	0.75	1.03	1.34	「永」と「寶」の字款のみが残存する。字款の文字は深く鋳造されている。青は緑青の浸食により全体的にアバタ状の器面となっている。面の字款を除く厚さが0.6mmと薄く鋳造されている。	B-14 SA15 東側 レンチ 覆土栗石 内	

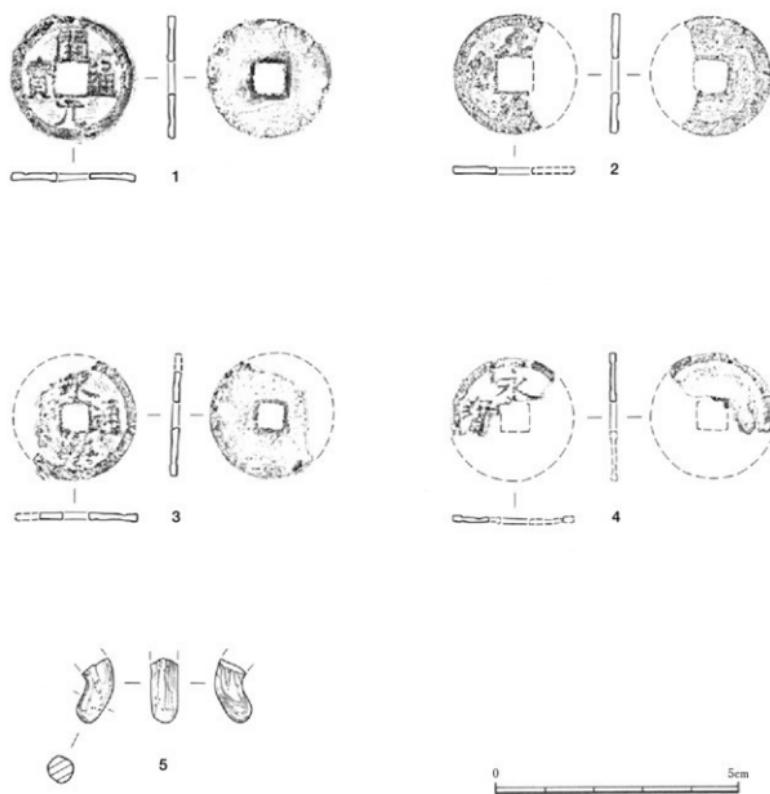
注「—」:計測不可

第48表 石積みSA15 ガラス玉観察一覧

単位:mm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	形状分類	色調	素材	製作技法	長軸 短軸 厚さ	孔径 最大 最小	重量	観察事項		出土地点 出土層
								孔径 最大 最小	重量	
第25回 図版19 5	IV 類	青色	ガラス	型物成形	13.0 5.34 5.53	— — —	0.80	頭部が欠落した勾玉の尾部。尾部の先端部に素材ガラスの鋳型に流し込んで切り離した部分が滴巻き様の微細な溝が確認できる。全体的に微細な気泡痕が多くみられる。		B-14 SA15 西側 レンチ 第5層g

注「—」:計測不可



第25図 石積みSA15出土品⑫ 錢貨：1～4、ガラス玉：5

第49表 石積みSA15 出土遺物状況(図版外)

種類	層序					
	東側トレチ					
	覆土	覆土 栗石内	第1層a	第2層	第3層a	第4層a
グスク土器	壺	底部				
	器種不明	胴部				1
	合 計		0	0	0	1
陶質土器	鍋	胴部				
	合 計		0	0	0	0
瓦質土器	鉢	口縁部				
	火炉	底部				
	蓋					1
	不明	胴部			1	
	合 計		0	0	1	0
埴瓦	I 類	不明	赤色 漆喰無し	角1		
		Aa	灰色 漆喰無し	角無し		1
		Ab	灰色 漆喰無し	角1		
	III 類	形狀不明b	灰色 漆喰無し	角1		1
			赤色 漆喰無し	角無し		1
				赤色 漆喰無し	角1	
	合 計		0	0	0	1
燒土		-				
	合 計		0	0	0	0
黒釉陶器	碗	胴部				1
	合 計		0	0	0	0
タイ産陶器 (バンブー窯)	壺	胴部			1	1
	合 計		0	0	1	0
本土産 磁器	碗	口縁部	印判染付、型紙転写			
	小碗	胴部	近現			
	合 計		0	0	0	0
本土産陶器	甕	薩摩	胴部			
	合 計		0	0	0	0
沖縄産 施釉陶器	碗	口縁部			1	
	皿	胴部		1		
	壺or鉢	胴部				1
	袋物	胴部		1		
	合 計		0	2	0	1
沖縄産瓦質と 無釉陶器の中間	壺	胴部	1			
	合 計		1	0	0	0
ガラス 製品	瓶	胴部				
	インクピン	完形				
	板ガラス	破片			1	
	合 計		0	0	1	0
木片						
	合 計		0	0	0	0

B-14 SA15								B-14・15 SA15			合計
	第5層g	覆土 栗石内	第3層b	西側レンチ				第3層b (攪乱)	西側レンチ		合計
				第4層a	第5層g	第5層h	第6層a	第7層b	第4層a	第5層g	
									1		1
		2	3				4			1	11
0	0	2	3	0	0	0	4	0	0	1	12
1											1
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
		1									1
				1							1
			1								2
											1
0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	5
				1							1
					1						1
						1					1
									1		1
0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	6
					1						1
0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
						1	2				5
0	0	1	0	0	0	1	2	0	0	0	5
						1	2				6
0	1	0	0	1	2	0	0	0	0	0	6
							1				1
											1
0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	2
								1			1
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
											1
											1
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
											1
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
					1						1
								1			1
							1				2
0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	4
								1			1
0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1

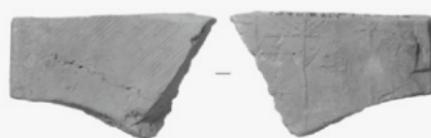




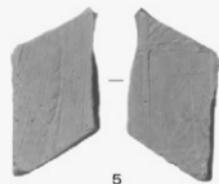


1

2



3



5



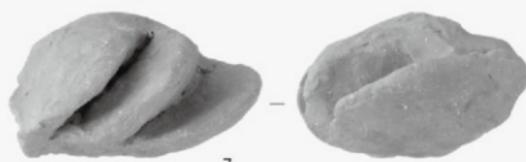
4



6

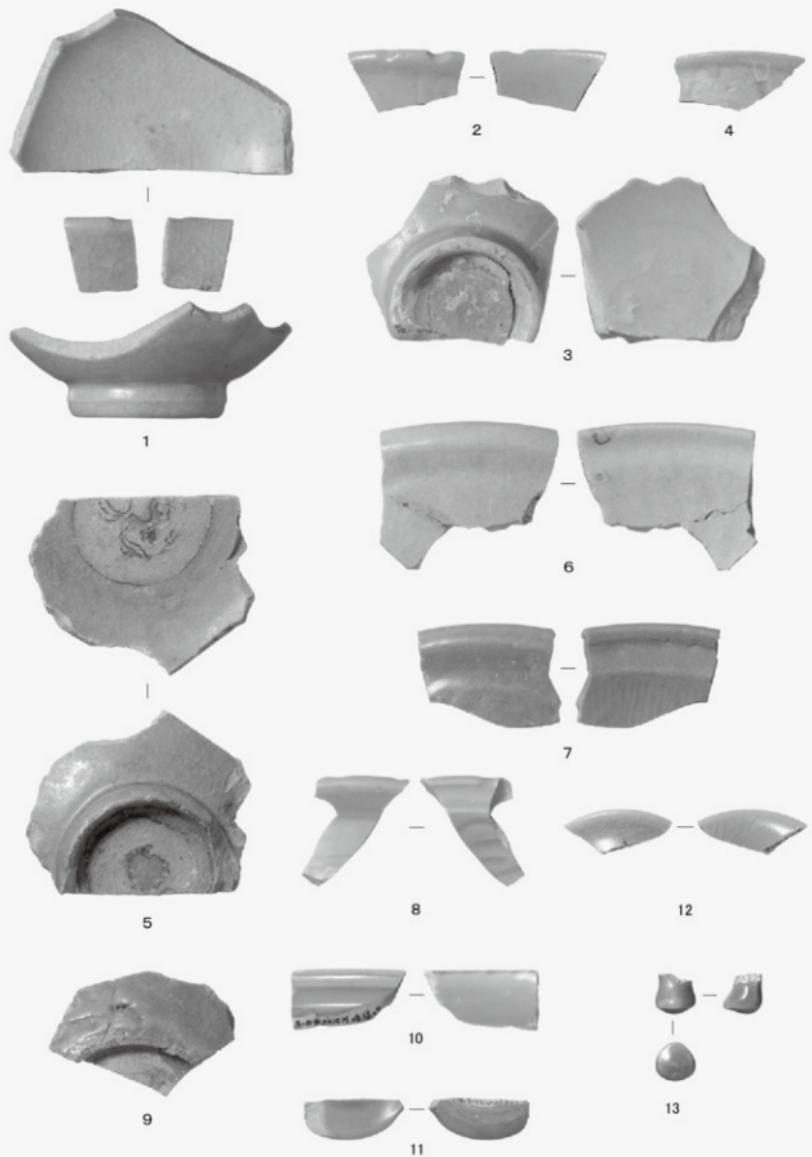


1

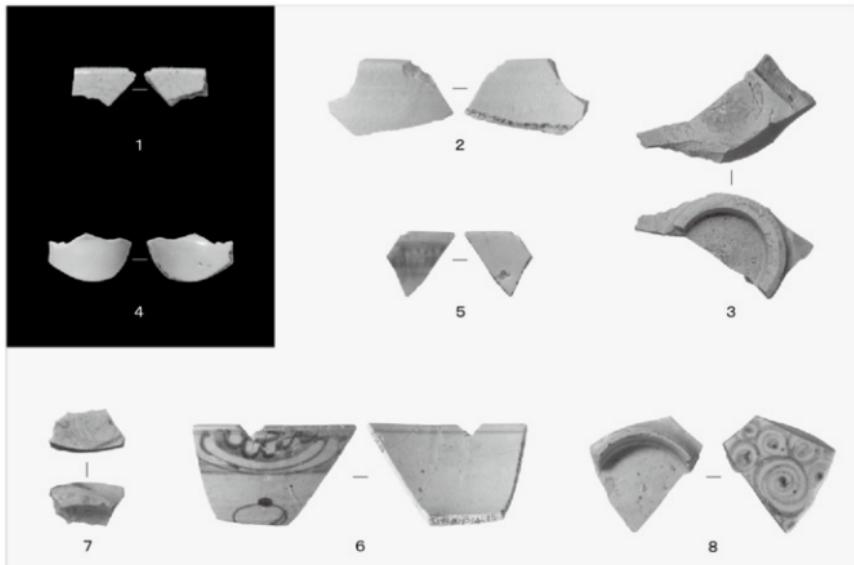


7

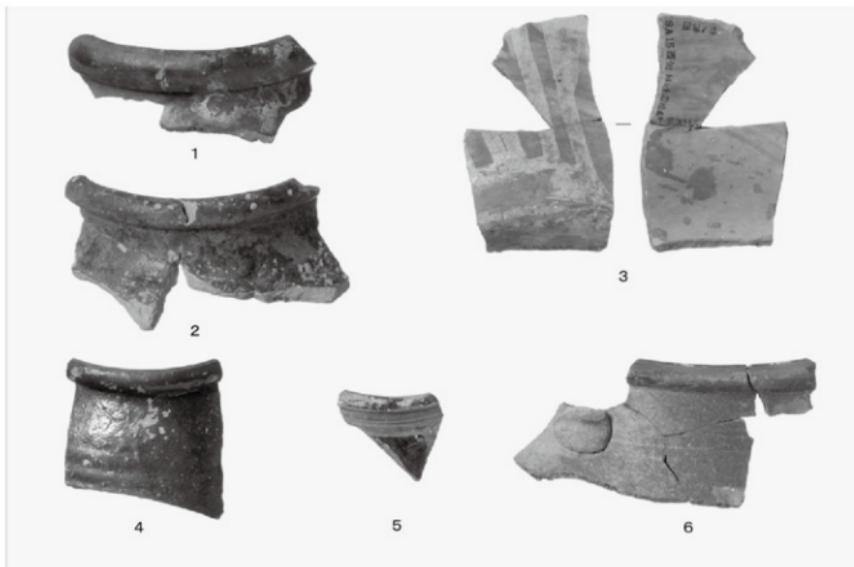
図版 10 石積み SA15 出土品①・② 屋瓦 : 1~7



図版 11 石積み SA15 出土品③・④ 青磁 : 1 ~ 13



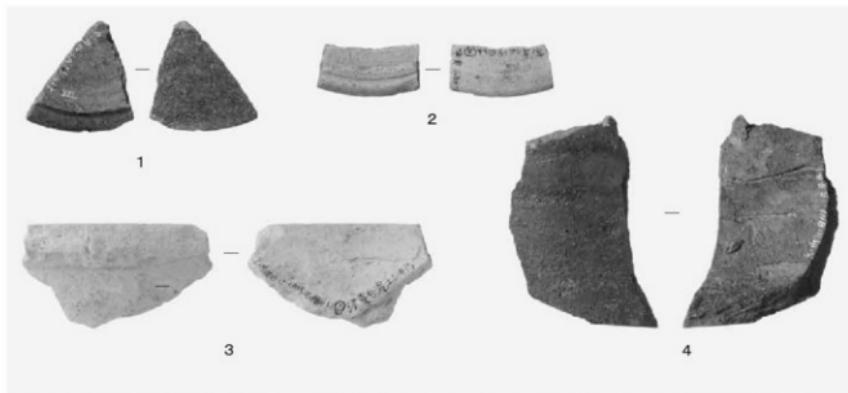
図版 12 石積み SA15 出土品⑤ 白磁 : 1~4、青花 : 5~8



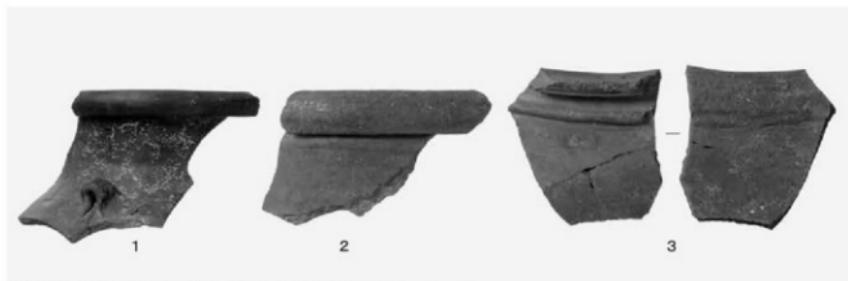
図版 13 石積み SA15 出土品⑥ 中国産褐釉陶器 : 1~6



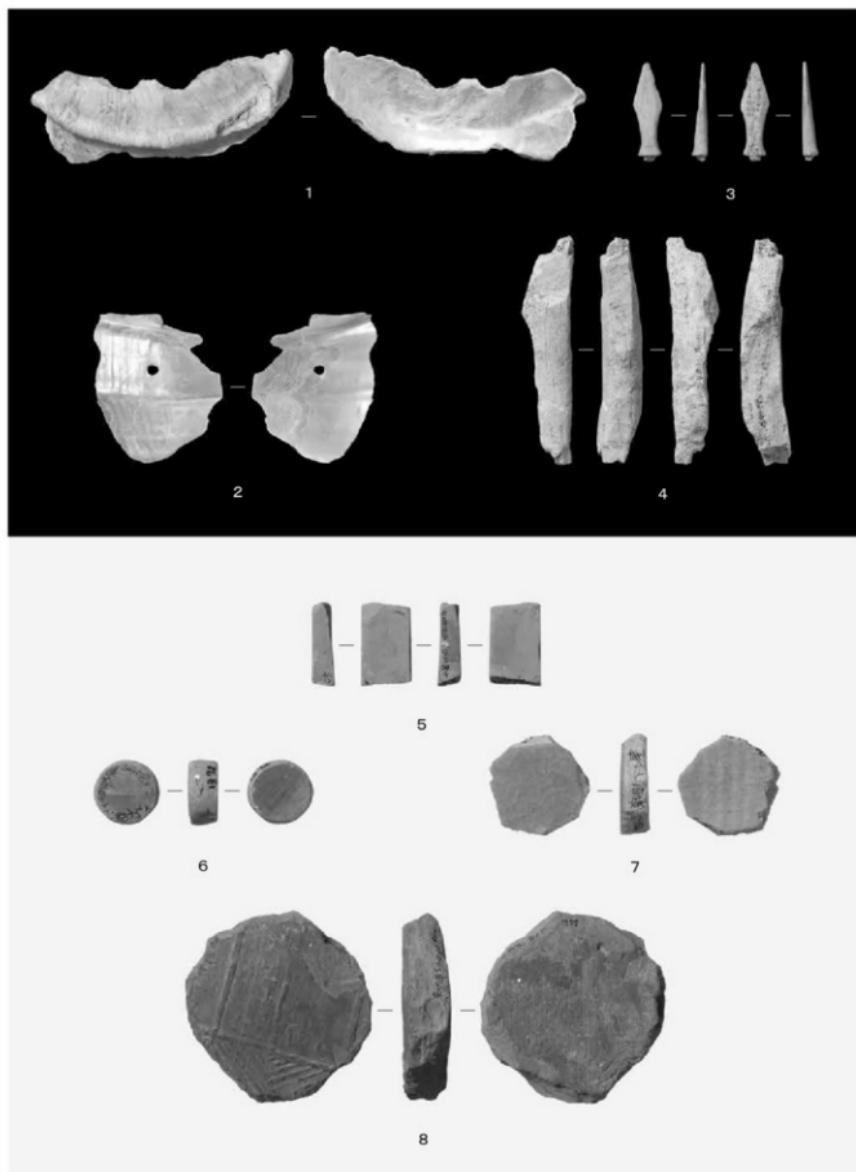
図版 14 石積み SA15 出土品⑦ 中国産褐釉陶器 : 7~11



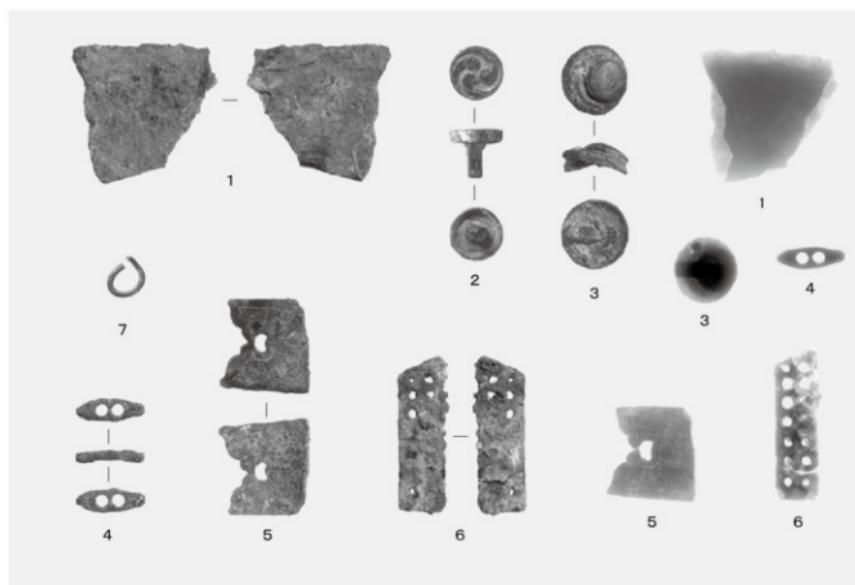
図版 15 石積み SA15 出土品⑧ タイ産土器（半練）：1・2、タイ産炻器：3、タイ産褐釉陶器：4



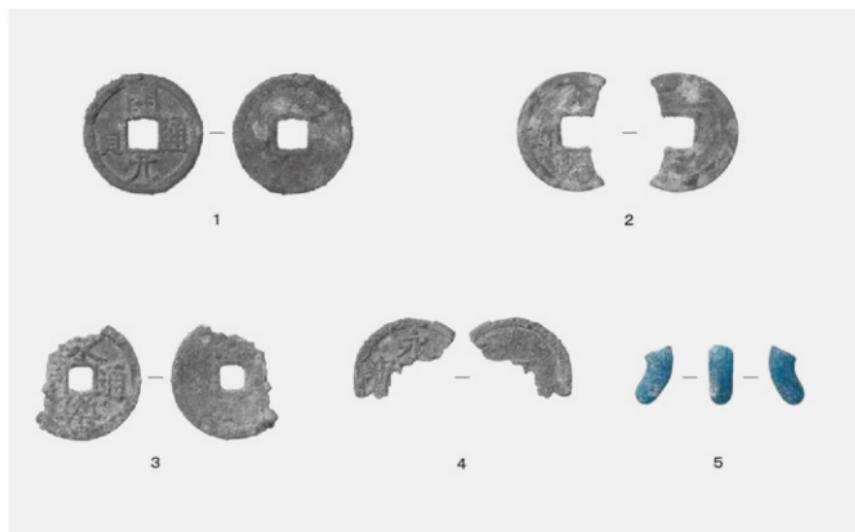
図版 16 石積み SA15 出土品⑨ 沖縄産無釉陶器 : 1~3



図版 17 石積み SA15 出土品⑩ 貝製品：1・2、骨製品：3・4、石製品：5、円盤状製品：6～8



図版 18 石積み SA15 出土品⑪ 金属製品：1～7（右側：1・3・4～6 軟X線写真）



図版 19 SA15 出土品⑫ 錢貨：1～4、ガラス玉：5

(4) 石積みSA21の出土遺物 (第26図～第31図、第50表～第64表、図版20～図版25)

石積みSA21から出土した遺物の種類は、第6表に示したように総計で1,637点(=100%)が得られている。出土遺物の内訳は、グスク土器8点(0.49%)、瓦類(屋瓦・埠瓦)1,084点(66.22%)、青磁72点(4.40%)、青花22点(1.34%)、白磁16点(0.98%)、華南彩釉陶器26点(1.59%)、中国産褐釉陶器157点(9.59%)、黒釉陶器2点(0.12%)、沖縄産無釉陶器47点(2.87%)、タイ産(土器・褐釉陶器)54点(3.30%)、金属製品79点(4.83%)などの24種類が確認されている。輸入陶磁器(タイ産、ベトナム産、中国産)の占める割合は、21.50%(352点)であった。

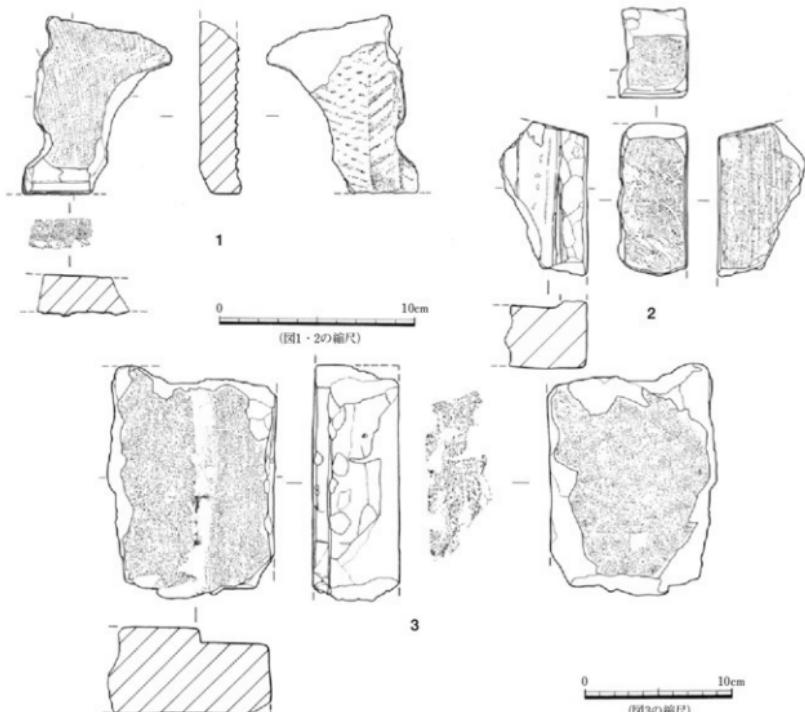
当該遺構の時期を示す遺物として、中国産白磁皿(第28図1・2)、中国産青花(同図3～8)、華南彩釉陶器(同図9・10)、中国産褐釉磁器(同図11)、中国産褐釉陶器(第29図9)、タイ産土器(第30図1)、本土産磁器(同図4)、沖縄産無釉陶器(同図5～9)などが得られている。

第50表 石積みSA21 屋瓦・埠瓦出土状況

種類	層序	C-13・14 SA21		C-14 SA21			C-14 SA21		合計	
		裏石内 第2層a	第1層a	裏石内 第2層a	埠瓦 裏中部 第1層d	埠瓦 裏中部 第2層a	石積直下 第4層	西側レンガ 壁長 裏石内 第3層d		
高麗系	丸瓦	灰色	漆喰無し		2	2	2		6	
		褐色		2	1				3	
平瓦	灰色	漆喰無し		3	10	33			46	
		褐色			1		2		3	
大和(古)	丸瓦	灰色	漆喰無し		1	2	1		4	
	平瓦	灰色	漆喰無し	2	15				17	
大和	埠瓦	褐色	漆喰無し				1		1	
		灰色	漆喰あり(片面)		3				3	
	丸瓦	褐色	漆喰無し				1		1	
	平瓦	灰色	漆喰あり(片面)		17	7	2		26	
埠瓦	軒丸	灰色	漆喰無し		1	1			2	
		褐色	漆喰無し		1	2			3	
	軒平	灰色	漆喰無し			2			2	
		褐色	漆喰無し						1	
	丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)	2	4	4			10	
		褐色	漆喰無し	14	39	30			83	
		赤色	漆喰あり(片面)		1	1			2	
		灰色	漆喰無し	2	2	3			7	
		赤色	漆喰あり(片面)	41	30		1		72	
			漆喰無し	11	6	17			36	
明鏡系	丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)			1			1	
		褐色	漆喰あり(片面)	3	6	5			12	
		灰色	漆喰無し	57	113	99	1	1	271	
		赤色	漆喰あり(片面)			1			1	
	平瓦	灰色	漆喰あり(片面)			2			2	
		褐色	漆喰無し	10	5	3	3		21	
		赤色	漆喰あり(片面)	57	14	3	1	1	76	
			漆喰無し	167	119	12	10	1	309	
		灰色	漆喰無し							
		褐色	漆喰無し							
合計				97	521	374	19	35	1,051	
埠瓦	C	灰色	漆喰無し	角無し		1	1		2	
	不明	灰色	漆喰無し	角I			1		1	
		赤色	漆喰無し	角無し	1				1	
	I型or II型	不明	灰色	漆喰無し	角無し		1		1	
		—	灰色	漆喰無し	角I				1	
	II型	—	赤色	漆喰無し	角I	1			1	
		Aa	灰色	漆喰無し	角無し	1			1	
		—	赤色	漆喰無し	角I	1			1	
	Ab	灰色	漆喰あり(片面)	角I	1	1			2	
		赤色	漆喰無し	角無し	1				1	
III型	形状不明a	灰色	漆喰無し	角無し	1	1			2	
		赤色	漆喰無し	角I	1				1	
		灰色	漆喰無し	角無し	3				3	
	形状不明b	灰色	漆喰無し	角I	1	1			2	
		赤色	漆喰無し	角無し	3	8	1		12	
合計				6	19	8	0	0	33	

第51表 石積みSA21 屋瓦・埴瓦観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	観察事項	出土土地 出土層
第26図 図版20 1	高屋 麗瓦 系・ 平瓦	平面端部の破片。凹面は布目痕と糸切り(糸引きは右側から左方向に切り離しを実施)が観察できる。凹面端部は鎌などの刃物による面取が実施され、下端面は鎌削りで仕上げている。凸面は有軸の羽状文が彫り込まれたき口具で強く深めに打捺をしている。部分的に羽状文が交差し菱形の格子となる。素地:灰褐色の繊粒子で、微細な石英が多く含んでいる。色調:凹面は灰褐色を主体とし部分的に灰黒色を帯びている。凸面が灰色。焼成:堅緻。	C13-14 SA21 栗石内 第2層a
〃 2	埴 瓦 I 類	組み合わせ式の埴瓦。右隅の角が四角形の角ではなく鈍角(104度)をなす破片。組み合わせのためのタガ状の段がみられるが段の上面は破損している。表面は摩耗した微弱な起伏の面となっている。裏面は型枠底面の板目が圧着し、粗密のある籠ナデ様となる。右側面は滑面となり縦に微密なナデがみられる。素地:灰白色の粗粒子で、粗繊な有色の物質(茶褐色、灰褐色、黒色など)を多く含み稀に微細な石英が僅かにみられる。色調:表面のみ明灰色で、上側及び右側面が灰色を帯びる。裏面は灰褐色を呈す。焼成:良好で堅い。	C-14 SA21 栗石内 第2層a
〃 3		〃。段差の稜線が微弱に弓状に曲がっている。段差の面はアバタ状となった磨面で右側が滑らかな面となっている。右側面は平坦な面であったが剥離が生じた磨面となる。裏面は滑面(型枠底面)。素地:明茶色の泥質の繊粒子であるが、粗い石英や粗繊な有色の物質(茶褐色、黄白色、黒色など)を多く含み稀に7mmサイズの繊粒砂岩(二ーピ)がみられる。色調:表面と右側面が明茶色で、裏面は茶褐色を帯びる。焼成:不良で軟質。	C-13-14 SA21 栗石内 第2層a



第26図 石積みSA21出土品① 屋瓦：1、埴瓦：2・3

第52表 石積みSA21 青磁出土状況

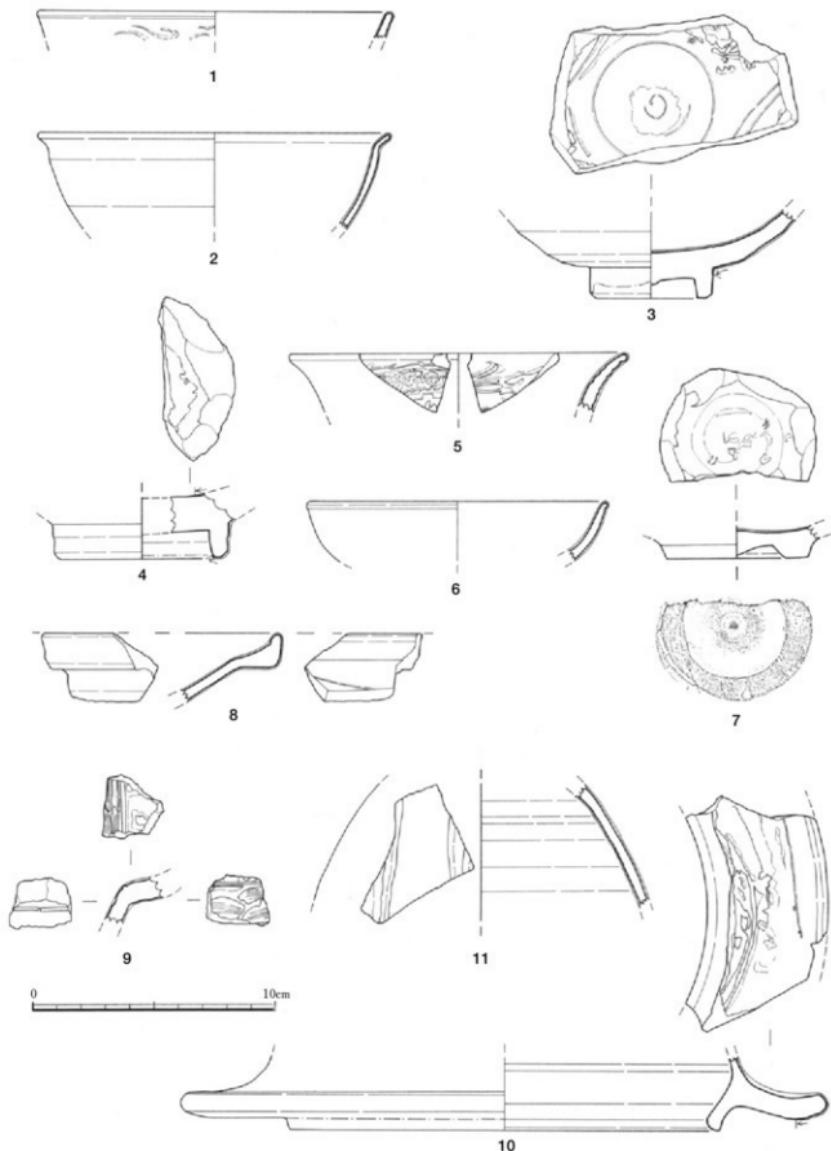
種類		層序	C-13	C-13・14	C-14			合計		
			SA21	SA21	SA21					
			第3層d (黒褐色 土層)	栗石内 第2層a	第1層a	栗石内 第2層a	赤瓦 集中部 第2層a			
碗	青磁	口縁部	外反	無文	6	2	1	9		
			波頭文		1			1		
			波状文			1		1		
			無文		3	1		4		
			蓮弁	鑄	1	1		2		
				片切り彫り		1	1	2		
				線彫り		1		1		
			胴部	無文	6	5	1	14		
				文様不明	1			1		
			底部	有文	aタイプ		1	1		
				cタイプ		1		1		
				cタイプ		1		1		
				無文	eタイプ			1		
				hタイプ		1		1		
				口折	文様不明	1		1		
		皿	外反	外面:龍文・片切彫り 内面:有文不明・片切彫り		1		1		
				外面:無文 内面:有文不明		1		1		
			直口	無文	3			3		
				文様不明		1		1		
			玉縁	内面:蓮弁・片切彫り 外面:無文			1	1		
				蓮弁・片切彫り			1	1		
				無文	2			2		
				無文		1		1		
		盤	胴部	無文	2		1	3		
			底部	無文	2			2		
			口縁部	外面:文様不明 内面:蓮弁・丸窓		1		1		
				内面:刻花文・片切彫り		1		1		
				文様不明	2			2		
				無文	1			1		
		酒食器	胴部	外面:無文 内面:蓮弁・丸窓		1		1		
				外面:無文 内面:蓮弁・櫛描		1		1		
				内面:雷文・片切彫り		1		1		
				有文不明	1			1		
			底部	文様不明 a			1	1		
			胴部	蓮弁・丸窓		1		1		
			蓋	蓮弁・片切彫り他 花唐草文・片切彫り			1	1		
			大鉢	胴部	無文		1	1		
			瓶or水注	胴部	蓮弁文・片切彫り		1	1		
合計					1	46	16	3		
								72		

第53表 石積みSA21 青磁觀察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 高器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第27図 図版21 1		口 縁 部	14.7	器形:直口口縁の碗。口縁端部近くに削りを入れて微弱な玉線状の肥厚を造るが目立たない。文様:外面口縁に篦描きで波状文とみられる文様を描いている。素地:光沢のある淡灰色の微粒子で、微細な石英や黒色の物質が少量含まれている。釉色:明灰綠釉が両面に施されている。貫入:ない。中国南部の窯。15c中頃~15c後半。	C-14 SA21 第1層a
			14.6	器形:外反口縁の碗。口縁端部近くを轆轤引きによる指圧を加えて外側に外反させる。文様:なし。素地:灰色の繊粒子で、稀に細かい石英と黒色の物質が観察できる。釉色:淡青灰釉が両面に施されている。貫入:ない。中国南部の窯。14c終末~15c。	C-14 SA21 第1層a
			5.0	高台分類cタイプ。器形:高台脇から立ち上がりが大きく外側に開かせてから内側に緩やかに丸味を持たせて形成する。文様:内面の見込みに圓線を施し、腰下部に片切彫りで刻花文とみられる文様を描く。素地:灰白色の繊粒子で、胎身への不純物は観察できない。釉色:黄緑色の釉を高台脇から内面まで施釉。貫入:両面に細かい貫入がみられる。中国南部の窯。14c終末~15c中頃。	C-13-14 SA21 栗石内 第2層a
3		碗 底部	7.2	高台分類cタイプ。器形:所謂、佐藤タイプの碗。見込みの釉を搔き取って露胎とする。高台内側には深い。高台外面を竹節状に篦削りで成形。文様:なし。素地:灰色の粗粒子で、粗細な石英や黒色物、茶褐色の物質が多量に含まれている。釉色:濃黄緑色の釉を両面に施した後に見込みの釉を搔き取り、外面は豊付まで施釉。貫入:粗細な貫入が両面にみられる。中国南部の窯。14c終末~15c初頭。	C-13-14 SA21 栗石内 第2層a
			14.0	外反口縁皿。器形:口縁を全体的に外傾させてラバ状に開いている。文様:外面に片切彫りで龍文(青龍)と胴体の一部が残す)を描き、内面にも片切彫りで文様を描いているが構図が不詳である。素地:灰白色の繊粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色:青緑色の釉が両面に施されている。貫入:ない。龍泉窯系。14c中頃~15c中頃。	C-13-14 SA21 栗石内 第2層a
5		口 縁 部	12.4	玉口口縁皿。器形:胴部から口縁に掛けて丸味を持たせた後に口縁端部近くに削りを入れて微弱な玉線状の肥厚を造る。文様:なし。素地:灰白色の繊粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色:青緑色の釉が両面に残る。貫入:なし。龍泉窯系。14c後半~15c前半。	C-14 SA21 第1層a
			6.2	高台分類aタイプ。器形:豊付を幅広(6.9~10.9mm)に成形する蛇ノ目高台で、高台内側には誰がいる。豊付に糸切り痕(左から糸があり右側で切り離し)の痕跡がみられる)がみられる。文様:なし。素地:橙色の粗粒子で、粗い茶褐色の物質を多く含む。僅かに粗細な石英と黒色物を少量含む。釉色:黄緑色の釉が外面にのみ残存。貫入:粗い貫入が観察できる。泉州窯系。14c後半~15c前半。	C-13-14 SA21 栗石内 第2層a
6		底 部	14.0	外反口縁皿。器形:口縁を全体的に外傾させてラバ状に開いている。文様:外面に片切彫りで龍文(青龍)と胴体の一部が残す)を描き、内面にも片切彫りで文様を描いているが構図が不詳である。素地:灰白色の繊粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色:青緑色の釉が両面に施されている。貫入:なし。龍泉窯系。14c中頃~15c中頃。	C-13-14 SA21 栗石内 第2層a
			12.4	玉口口縁皿。器形:胴部から口縁に掛けて丸味を持たせた後に口縁端部近くに削りを入れて微弱な玉線状の肥厚を造る。文様:なし。素地:灰白色の繊粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色:青緑色の釉が両面に残る。貫入:なし。龍泉窯系。14c後半~15c前半。	C-14 SA21 第1層a
7		底 部	14.0	外反口縁皿。器形:口縁を全体的に外傾させてラバ状に開いている。文様:外面に片切彫りで龍文(青龍)と胴体の一部が残す)を描き、内面にも片切彫りで文様を描いているが構図が不詳である。素地:灰白色の繊粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色:青緑色の釉が両面に施されている。貫入:なし。龍泉窯系。14c後半~15c前半。	C-13-14 SA21 栗石内 第2層a
			12.4	玉口口縁皿。器形:胴部から口縁に掛けて丸味を持たせた後に口縁端部近くに削りを入れて微弱な玉線状の肥厚を造る。文様:なし。素地:灰白色の繊粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色:青緑色の釉が両面に残る。貫入:なし。龍泉窯系。14c後半~15c前半。	C-14 SA21 第1層a
8		盤 口 縁 部	14.0	鈙縁盤。器形:口縁を屈曲させてから鈙を造り、鈙端を上方に軽く撮み上げて口縁部を造る。内面の口縁端部近くに丸彫りで削りを入れて微弱な肥厚を造る。文様:片切彫りで刻花文の一部とみられる文様を描いているようである。素地:灰白色の繊粒子で、微細な石英を少量含む。微細な気泡痕が目立っている。釉色:黄緑色の釉が両面に施釉。貫入:両面に粗い貫入がみられる。中国南部の窯。14c終末~15c。	C-13-14 SA21 栗石内 第2層a
			14.0	鈙縁盤。器形:口縁部が欠落するが、口縁部を「く」の字状に屈曲させて鈙を造る。文様:内面は鈙上面に片切彫りで雷文の一部とみられる文様を片切彫りで描いているようである。胴部には片切彫りと篦描きで波状文を描いている。素地:光沢のある白色の繊粒子で、微細な気泡痕が目立っている。釉色:明緑色の釉を両面に施釉。貫入:両面に粗い貫入がみられる。龍泉窯系。14c後半~15c中頃。	C-13-14 SA21 栗石内 第2層a
9		盤 胴 部	14.0	鈙縁盤。器形:口縁部が欠落するが、口縁部を「く」の字状に屈曲させて鈙を造る。文様:内面は鈙上面に片切彫りで雷文の一部とみられる文様を片切彫りで描いているようである。胴部には片切彫りと篦描きで波状文を描いている。素地:光沢のある白色の繊粒子で、微細な気泡痕が目立っている。釉色:明緑色の釉を両面に施釉。貫入:両面に粗い貫入がみられる。龍泉窯系。14c後半~15c中頃。	C-13-14 SA21 栗石内 第2層a
			14.0	蓋甲下周の破片。器形:蓋縁の鈙は上方に僅かに反っている。内面に身を受ける為の出脚部は内側に閉じ気味に形成する。内面の鈙には重ね焼成の胎土目の目痕(幅0.5~1.5mm)が曲線を引いたような形で残存する。文様:外側の蓋甲下周から蓋縁の鈙には片切彫りで唐草文とみられる文様を描いている。素地:光沢のある灰白色の繊粒子で、僅かに微細な気泡痕がみられる程度である。釉色:淡緑色の釉が外側口縁から内面の鈙縁近くまで施されている。龍泉窯系。14c中頃~15c中頃。	C-14 SA21 赤瓦集中 部 第2層a
10	酒会壺	蓋	14.0	蓋甲下周の破片。器形:蓋縁の鈙は上方に僅かに反っている。内面に身を受ける為の出脚部は内側に閉じ気味に形成する。内面の鈙には重ね焼成の胎土目の目痕(幅0.5~1.5mm)が曲線を引いたような形で残存する。文様:外側の蓋甲下周から蓋縁の鈙には片切彫りで唐草文とみられる文様を描いている。素地:光沢のある灰白色の繊粒子で、僅かに微細な気泡痕がみられる程度である。釉色:淡緑色の釉が外側口縁から内面の鈙縁近くまで施されている。龍泉窯系。14c中頃~15c中頃。	C-14 SA21 赤瓦集中 部 第2層a
			14.0	瓶の胴部破片。形状などから類推すると玉壺春瓶の可能性が高いようである。器形:胴上部で丸味を帯びている。文様:外面に片切彫りで花弁を一枚ずつ丁寧に蓮弁文を描いているようである。その為、花弁間に間隔が開いている。素地:光沢のある灰白色の繊粒子で、粗細な気泡痕が少量化ながら観察できる。釉色:淡緑色の釉を外側から内面まで施すが内面の釉は薄く釉を施しているため黄緑色となる。龍泉窯系。14c後半~15c中頃。	C-13-14 SA21 栗石内 第2層a
11	瓶 or 水注	胴 部	14.0	瓶の胴部破片。形状などから類推すると玉壺春瓶の可能性が高いようである。器形:胴上部で丸味を帯びている。文様:外面に片切彫りで花弁を一枚ずつ丁寧に蓮弁文を描いているようである。その為、花弁間に間隔が開いている。素地:光沢のある灰白色の繊粒子で、粗細な気泡痕が少量化ながら観察できる。釉色:淡緑色の釉を外側から内面まで施すが内面の釉は薄く釉を施しているため黄緑色となる。龍泉窯系。14c後半~15c中頃。	C-13-14 SA21 栗石内 第2層a

注「-」:計測不可



第27図 石積みSA21出土品② 青磁：1~11

第54表 石積みSA21 白磁・青花・彩釉陶器・褐釉磁器・黒釉陶器・中国産褐釉陶器出土状況

種類		層序	C-13・14		C-14				C-14		合計	
			SA21		SA21				SA21			
			栗石内 第2層a	第1層a (櫻土)	第1層d	第2層a	栗石内 第2層a	赤瓦 集中部 第1層d	石積底下 第4層	延長 第1層a	延長 栗石内 第1層d	
白磁	碗	口縁部	外反	1								1
		胸部		3	1			1				5
	小碗	底部	その他			1						1
		口縁部	外反					1	1			2
	皿	口縁部	内溝					2				2
		胸部			1							1
		底部		2		1		1				4
		合計		6	3	1	0	5	1	0	0	16
青花	碗	口縁部	外反		1			1				2
		直口		1	2			2				5
	皿	胸部		3	3			1				7
		底部		1		1						2
	馬上杯or杯	口縁部		1								1
		胸部		1				1				3
		合計		7	9	1	0	5	0	0	0	22
彩釉陶器	瓶	瓶	胸部			2			2			4
		水滴	底部	1								1
	鶴形水注	胸部		1	11			4				2
		不明						1				18
	魚形水注	胸部			1				1			1
												2
		合計		2	14	0	0	7	0	1	0	26
褐釉磁器	碗	口縁部	外反	1				1				2
		合計		1	0	0	0	1	0	0	0	2
黒釉陶器	碗	口縁部	IX類					1				1
		胸部						1				1
		合計		0	0	0	1	1	0	0	0	2
中国産 褐釉陶器	壺	直口			1							1
		方形		3				1				4
		その他		1								1
		有文		1				4				5
				64	59			10				134
		把手		1								1
		底部		2								3
		不明		6	1							7
		胸部			1							1
		合計		78	62	0	0	15	0	0	1	157

第55表① 石積みSA21 白磁観察一覧

単位:cm

捕団番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)						出土地点 出土層			
第28図 図版22 1		皿	底部	—	器形: 番付が尖り気味に形成された皿。文様:なし。器面調整:両面とも丁寧に形成されていて輪上からの観察では輪縫痕が観察できない。素地:光沢のある白色の微粒子で微細な気泡痕が僅かに観察できる。釉色:淡灰白色の釉が両面に施した後に高台外面下部から高台内面下部の釉を搔き取って露胎とする。景德鎮窯系。15c後半~16c代。						C-13・14 SA21 栗石内 第2層a		
				—									
2				8.0									
				—									
				—									
				6.8									
					器形: 皿の高台外面下部に釉の搔き取りを兼ねて削りを加えるため番付の幅が1mmと狭くなる。その為、番付の位置が内側にずれて歪な形状となる。文様:なし。器面調整:釉上からの観察では内面に輪縫痕が観察できる。外面は釉が厚く施され観察ができる。素地:光沢のある白色の微粒子で微細な気泡痕が僅かに観察できる。釉色:淡灰白色の釉が両面に施した後に高台外面下部から高台内面下部の釉を搔き取って露胎とする。景德鎮窯系。15c後半~16c代。						C-14 SA21 栗石内 第2層a		

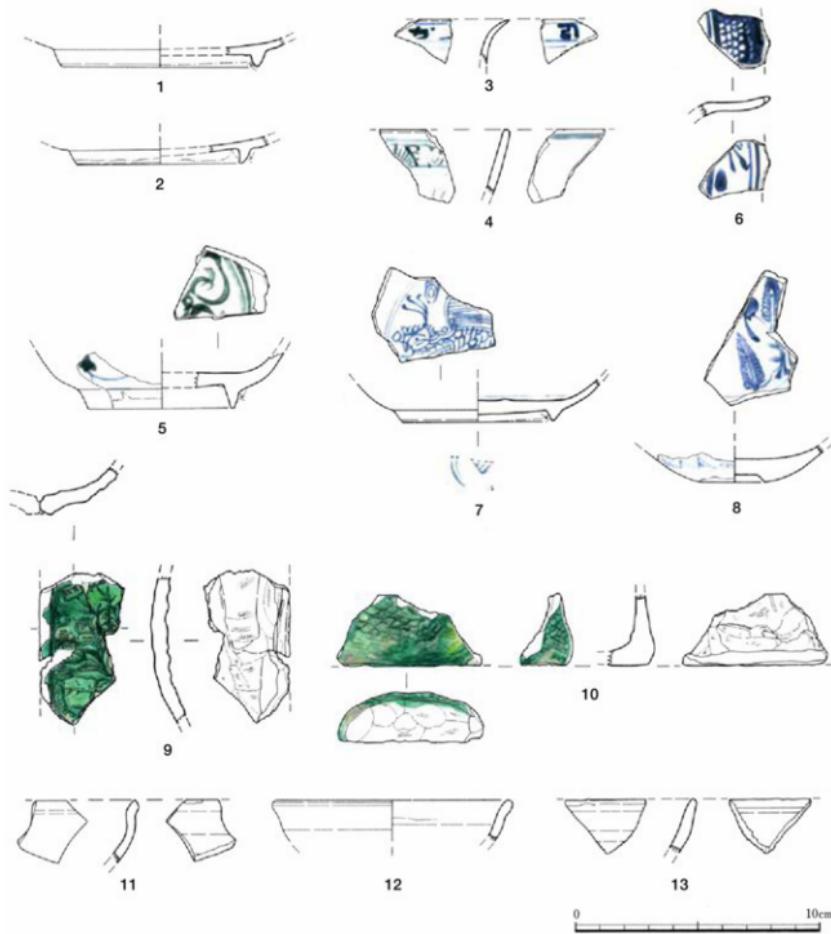
注:「-」:計測不可

第55表② 石積みSA21 青花・彩釉陶器・褐釉磁器・黒釉陶器観察一覧

単位:cm

攝図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第28図 図版22 3	碗	口 縁部	—	器形:外反口縁端で口唇部を尖り気味に成形する。文様:外面口縁は上位に一条の團線と下位に二条の團線で区画線を描き区画内に吉祥の字款を描いている。内面口縁にも外面と同様に團線で区画線を描き区画内に梵字様文を描く。素地:光沢のある白色の微粒子。釉色:淡灰白色の釉が両面に施されている。景德鎮窯系。15c後半~16c代。	C-14 SA21 第1層a
			—	器形:直口口縁碗。文様:外面口縁は上位と下位に二条・組の團線で区画線を描いている。内面には梅文とみられる文様を斜めに施している。内面口縁端部近くに太めの團線一条を描いている。素地:灰白色の微粒子で、粗細な気泡痕が少量化されている。釉色:淡黃白色の釉が両面に施されている。福建・広東系。18c。	C-14 SA21 第1層a
		底部	—	器形:腰下部で丸味を帯びた碗。文様:外面の胸部分にアラベスク文を描いている。内面の見込みに十字花文と二重の團線を描いている。素地:灰白色の微粒子で、粗細な気泡痕が少量化されている。釉色:外側は具須頭が濃青色を帶び、具須の上から青白い釉を施している。内面の具須は青白色で文様を描き具須の上に淡灰白色の釉を施している。高台外腹途中から高台内面までは露胎し、他は施釉されている。外面のみ粗い質人がみられる。福建・広東系。17c。	C-13~14 SA21 栗石内 第2層a
			6.0	器形:口唇部を波花状に成形した跨縁皿。文様:外面口縁は上位に二条の團線と下位に一条で太めの團線で区画線を描き区画内に背草文とみられる文様を具須で描いている。内面口縁には太めの團線一条と細めの團線を施して区画帯を作り、区画内に龍文の一部とみられる鱗が粗密に描かれている。素地:光沢のある白色の微粒子。釉色:淡灰白色の釉が両面に施されている。景德鎮窯系。15c後半~16c代。	C-13~14 SA21 栗石内 第2層a
H H 6	皿	口 縁部	—	器形:高台脇から丸味を持たせた胸部分に移行する皿。文様:見込みに線描で鳳凰と二重の團線を描く。外底面は二重團線と省略された字款とみられるものと描いている。素地:光沢のある灰色の微粒子。釉色:両面に釉を施した後に疊付の釉を引き取って露胎とする。景德鎮窯。16c後半~17c初頭。	C-14 SA21 第1層a
			—	器形:基筒皿。疊付の外側に浅目の雜な割りを入れて高台を意識している。文様:外面に團線と蕉葉文を描く。内面の見込みに二重團線と蕉葉文を描いている。素地:光沢のある灰白色の微粒子。釉色:淡青白の釉を両面に施した後に疊付及び周辺の釉を引き取って露胎とする。景德鎮窯。15c後半~16c前半。	C-14 SA21 第1層a
		底部	6.1	器形:高台脇から丸味を持たせた胸部分に移行する皿。文様:見込みに線描で鳳凰と二重の團線を描く。外底面は二重團線と省略された字款とみられるものと描いている。素地:光沢のある灰色の微粒子。釉色:両面に釉を施した後に疊付の釉を引き取って露胎とする。景德鎮窯。16c後半~17c初頭。	C-14 SA21 第1層a
H H 8	彩 釉 陶 器	胸 部	—	器形:鶴形の型物水注。鶴形水柱の正面右側胸部分の破片。文様:外面は花を咲き終えた桜の部分で型で起されている。内面は雜な指ナードで調整し、型の接合面となる側面には隙間から入った緑色の釉が挟まっていたり、櫛目様の工具で陶土を引っ張った部分がみられる。素地:淡黄白の粗粒子で、粗細な気泡痕や微細な黒色の斑物が僅かにみられる。釉色:緑色の釉が両面にのみ施されている。質人:細かい質人がみられる。中国南部(福建・広東)の窯。15c後半~16c。	C-14 SA21 西側レシチ 延長栗石内 第1層d
			—	器形:三彩高仙人形水滴の底部破片で、底面の開閉面には型同士を合わせる接合部とみられる部分から剥離する。又軸:外面に魚の前脚と胸部分の鱗が型で起されている。内面は胸下部と底面を組合した際の指印痕と指ナードが雜に施されている。外底面は雜で指印痕と指ナードが複数個で施されている。素地:淡灰色の細粒子で、微細な石英と黒色の斑物が僅かにみられる。釉色:緑色の釉が両面にのみ施されている。質人:細かい質人がみられる。中国南部(福建・広東)の窯。15c後半~16c。	C-13~14 SA21 栗石内 第2層a
H H 10	彩 釉 陶 器	三 彩 水 滴	底部	褐釉磁器の碗。口頭部を捻り返して外反させて口縁に小さな玉筋の肥厚を造る。釉上からの観察では、肥厚部の口唇近くが暈であり、それ以外は丁寧な成形となっている。素地は灰白色の微粒子で、粗細な石英と粗い黑色や茶褐色の斑物が多く含む。茶褐色の釉が両面に施されている。中国南部の窯。16c。	C-14 SA21 栗石内 第2層a
H H 11	褐 釉 磁 器	碗	—	褐釉磁器の碗。口頭部を軽く外反させた外反口縁の小碗で、口唇部と口縁端部は面取成形となる。釉上からの観察では、全体的に丁寧な成形となっている。素地は白濁色の微粒子で、粗細な石英と粗い黑色や茶褐色の斑物が多く含む。茶褐色の釉が両面に施されているが、二次的な火熱を受け釉が脱色して白濁した釉となる部分がみられる。釉上に微細な気泡痕がみられる。中国南部の窯。16c。	C-14 SA21 栗石内 第2層a
H H 12			9.8	褐釉磁器の小碗。口頭部を軽く外反させた外反口縁の小碗で、口唇部と口縁端部は面取成形となる。釉上からの観察では、全体的に丁寧な成形となっている。素地は白濁色の微粒子で、粗細な石英と粗い黑色や茶褐色の斑物が多く含む。茶褐色の釉が両面に施されているが、二次的な火熱を受け釉が脱色して白濁した釉となる部分がみられる。釉上に微細な気泡痕がみられる。中国南部の窯。16c。	C-13~14 SA21 栗石内 第2層a
H H 13	黑 釉 陶 器	碗	口 縁部	器形:IX種。口縁部で丸味を保持した状態で、口縁近くで輪縁引きによる押さえを軽くしている。口唇部は尖るが丸味のある純角をしている。素地:光沢のある灰白色の細粒子で、緻密で微細な黒色斑物が多量に観察できる。釉色:茶褐色の釉が両面に施されている。福建省閩侯縣鷺尾窯。14c後半~15c。	C-14 SA21 第2層a

注「-」:計測不可



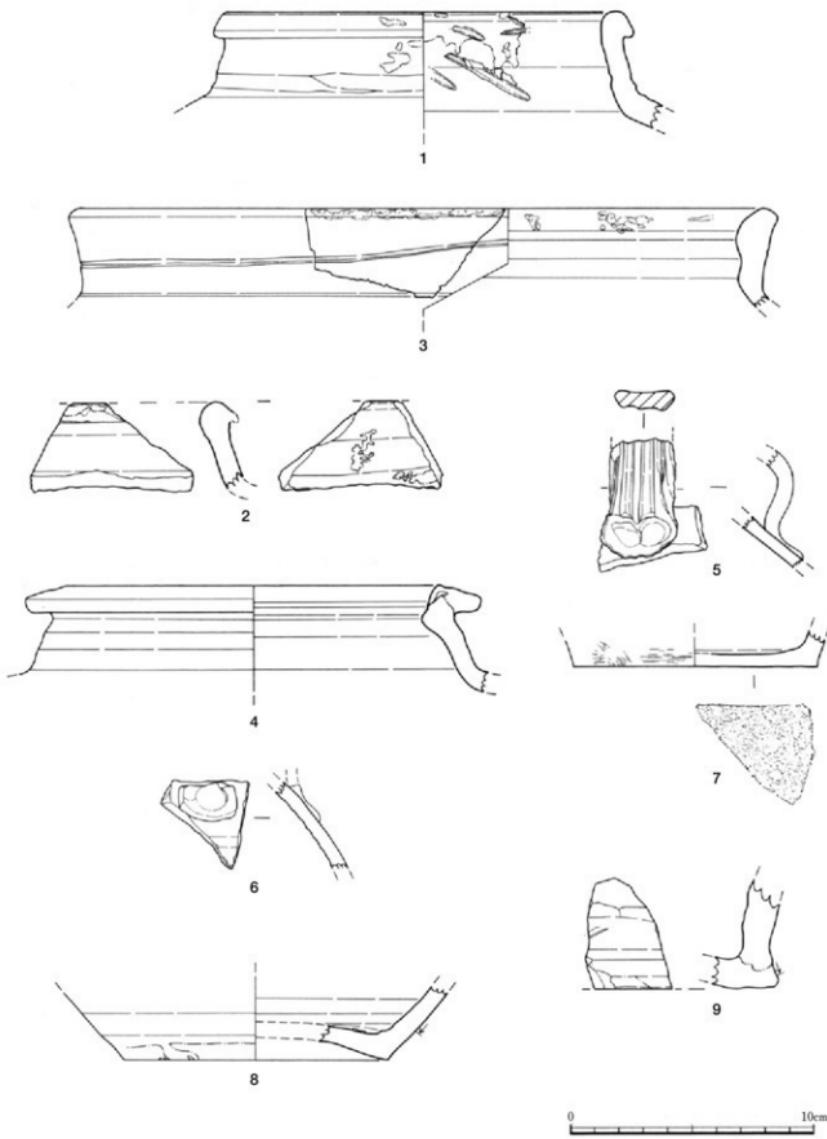
第28図 石積みSA21出土品③ 白磁：1・2、青花：3～8、彩釉陶器：9・10、褐釉磁器：11・12  
黒釉陶器：13

第56表 石積みSA21 中国産褐釉陶器観察一覧

単位: cm

捕団番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第29回 図版23 1		口縁部	17.2 — —	器形: 口縁部に直な隅丸方形の肥厚を有する怒り肩の壺。口縁の肥厚部を軽く回転擦痕で面取をし、肥厚帯下端を丸味を持たせて形成する。器面調整: 外面には釉薬を塗布した際の刷毛目が横位にみられる程度である。内面には左斜面上が他の成形時の傷が3~4箇所確認出来る。文様: 外面の頸下部に丸彫り様の工具で幅広(幅4.4mm)の界線を入れて頸部を強調する。素地: 灰色の細粒子で、粗緻な石英と黑色鉱物を多量に含む。釉色: 光沢のある茶褐色の釉を両面に施すが難である。中国南部の窯。14c~15c。	C-13~14 SA21 栗石内 第2層a
				器形: 口縁部に直な三角形の肥厚を有する怒り肩の壺。口縁の肥厚帯下端を突出させて肥厚部を強調させて、口唇部に丸味を持たせて形成する。器面調整: 外面の肥厚帯直下には釉薬を塗布した際の刷毛目が横位に僅に確認できる。内面にも釉薬を塗布した際の筆ナデ様の痕跡が不鮮明であるが存在する。文様: なし。素地: 光沢のある暗灰色の微粒子で、粗緻な石英と黑色鉱物を多量に含む。稀に粗い石英(最大1.8~3.5mm)も観察できる。釉色: 光沢のある赤茶色の釉を両面に施すが内面にのみ釉掛けが難である。中国南部の窯。14c~15c。	C-13~14 SA21 栗石内 第2層a
				器形: 直口縁の怒り肩の壺。口縁が外側に僅かに外傾する。内面の口縁が丸味を持って大きく肥厚させ、肥厚直下に輪轍引きによる輪轍痕が深く入っている。器面調整: 外面には釉上から観察できないが筆ナデは寧ろ薄である。内面は粗緻な輪轍痕が口唇から頸部近くにみられる。文様: 外面の口縁部に丸彫りの工具(幅1.4~2.0mm)で下から右斜め方向に沈文を入れて口縁部を強調する。素地: 茶灰色の細粒子で、粗緻な石英を多く含む。その他のに粗い黒色鉱物が少量化されている。釉色: 光沢のある茶黒色の釉を両面に施す。口部と外口縁に細かい石英を含む砂質土目の目痕がみられる。中国南部の窯。14c~15c。	C-14 SA21 第1層a
〃 2		29.2	— — —	器形: 口縁部の綻断面が直な隅丸方形状となる怒り肩の壺。劈開面の観察から陶土の継ぎ足しが肥厚帯下端で確認できる。この継ぎ足しの陶土で口縁と口唇部を成形している。文様: なし。頸部に顯著な輪轍痕がある。素地: 茶灰色の細粒子で、粗い石英と氣泡痕が僅かに観察できる。釉色: 茶黒色の釉が両面に施す。微細な貫入が両面にみられる。中国南部の窯。15c~16c。	C-13~14 SA21 栗石内 第2層a
				器形: 口縁部の綻断面が直な隅丸方形状となる怒り肩の壺。劈開面の観察から陶土の継ぎ足しが肥厚帯下端で確認できる。この継ぎ足しの陶土で口縁と口唇部を成形している。文様: なし。頸部に顯著な輪轍痕がある。素地: 茶灰色の細粒子で、粗い石英と氣泡痕が僅かに観察できる。釉色: 茶黒色の釉が両面に施す。微細な貫入が両面にみられる。中国南部の窯。15c~16c。	C-13~14 SA21 栗石内 第2層a
				器形: 残存する把手と胴部の頸き具合からナデ肩壺の把手として判断できる。文様: 把手の正面に指先で筆ナデの沈線文を二条施し、把手根元には胴部との貼付と文様を兼ねて深い指圧を加えている。裏側面は丸彫りの工具で縁に沿うように下から上に向かって押し引きによる沈線文を施す。裏面には複数の指圧痕と刷毛目様の工具で下から上に向かって施されている部分が観察できる。素地: 淡灰色の微粒子で、粗緻な石英と粗い黒色鉱物、茶褐色の細かい物質を少量ながら含んでいる。中国南部の窯。14c~15c。	C-13~14 SA21栗石内 第2層a
〃 3		把手	— — —	器形: 残存する把手の根元部分把手と胴部の頸き具合からナデ肩壺の把手として判断できる。文様: 把手の正面に指先で筆ナデの沈線文を二条施し、把手根元には胴部との貼付と文様を兼ねて深い指圧を加えている。裏側面は丸彫りの工具で縁に沿うように下から上に向かって押し引きによる沈線文を施す。裏面には複数の指圧痕と刷毛目様の工具で下から上に向かって施されている部分が観察できる。素地: 淡灰色の微粒子で、粗緻な石英と粗い黒色鉱物、茶褐色の細かい物質を少量ながら含んでいる。中国南部の窯。14c~15c。	C-13~14 SA21栗石内 第2層a
				器形: 残存する把手の根元部分把手と胴部の頸き具合からナデ肩壺として判断できる。文様: 把手の根元部分は胴部との貼付と文様を兼ねて深い指圧を加えている。器面調整: 外面の輪轍痕が剥落し、観察が容易である。外面は丁寧な細密な回転擦痕がみられる。把手周辺には斜位や輻位方向の筆ナデとみられるものがみられる。裏面には複数の輪轍痕が観察できる。素地: 淡灰色の細粒子で、粗い石英と粗い石英(茶色や黒褐色)が少量化される。釉色: 外面にのみ施していたようであるが釉の半が二次火熱を受け、その影響で剥落したようである。釉には微細な気泡痕がみられ白濁した釉が僅かに残っている。中国南部の窯。14c~15c。	C-13~14 SA21栗石内 第2層a
				器形: 壺の底部破片。底面の成形は難で微細な起伏があり、不明瞭な筆ナデ?と指圧痕が観察できる。外面は底面から立ち上がる部分に筆ナデを施す。内面は筆ナデを施すが難である。外底面の縁沿いで稜筋の圧痕が複数できる。素地: 上記3と同じ陶土を使用し、混入する鉱物も同じであるがやや粗い石英が目立っている程度である。釉色: 外面は露胎し、内面の底面に僅かに茶黒色の釉が垂れている。中国南部の窯。14c~15c。	C-13~14 SA21 栗石内 第2層a
〃 4		胴部	— — —	器形: 壺の底部破片。底面が上方に向かって大きめ丸味を持つ盛り上がる。文様: なし。器面調整: 両面に施されているが、外面の釉は内面も薄い。外面は回転擦削剂。内面は輪轍痕と筆ナデがみられる。内底面は丁寧に成形されているが、釉が垂れて小枝状に固まる部分がみられる。素地: 淡橙白色の細粒子で、微細な石英を多量に含んでる。稀に粗い石英と茶褐色の鉱物がみられる。釉色: 両面とも茶褐色の釉を施しているが、外側の釉は薄く底面近くまで掛かっている。中国南部の窯。14c~15c。	C-13~14 SA21 栗石内 第2層a
				器形: 壺の底部破片。底面が上方に向かって大きめ丸味を持つ盛り上がる。文様: なし。器面調整: 両面に施されているが、外面の釉は内面も薄い。外面は回転擦削剂。内面は輪轍痕と筆ナデがみられる。内底面は丁寧に成形されているが、釉が垂れて小枝状に固まる部分がみられる。素地: 淡橙白色の細粒子で、微細な石英と鉱物(黒色や茶褐色の鉱物)が多く観察できる。その他、石英の鱗片(サイズ3.3~7.2mm)も含まれている。釉色: 茶褐色の釉が外側に施されているが半が剥落している。微細な貫入が両面にみられる。中国南部の窯。15c~16c。	C-13~14 SA21 栗石内 第2層a
				器形: 上記4の怒り肩タイの壺の底部。この種の壺の特徴である底面が上方に向かって大きく盛り上がっている。外面は底面からの立ち上がり切端びれさせながら外側に間に気味に胴下部に移行する。両面とも起伏のある輪轍痕がみられ、特に内面は輪轍痕の起伏が顕著である。文様: なし。素地: 灰色の細粒子で、微細な石英と鉱物(黒色や茶褐色の鉱物)が多く観察できる。その他、石英の鱗片(サイズ3.3~7.2mm)も含まれている。釉色: 茶褐色の釉が外側に施されているが半が剥落している。微細な貫入が両面にみられる。中国南部の窯。15c~16c。	C-14 SA21 西側レジン 延長第1層a

注「-」:計測不可



第29図 石積みSA21出土品④ 中国産褐釉陶器：1～9

第57表 石積みSA21 タイ産土器(半練)・タイ産褐釉陶器・本土産磁器・沖縄産無釉陶器出土状況

種類	地名(市町)	基	蓋	C-13-14		C-14		C-14		合計	
				SA21		SA21		SA21			
				裏石内 第2層a	第1層a	裏石内 第2層a	赤瓦 集中部 第1層d	石積み丁 第4層	西側ハーフ 第1層a		
タイ産 褐釉陶器										1	
本土産 磁器										1	
沖縄産 無釉陶器										1	
合計				0	0	1	0	0	0	1	
口縁部				2						2	
腹部				2		1				2	
肩部				1						1	
胸部				17	19	7		1		44	
底				2	1					3	
合計				22	21	9	0	1	0	53	
印判、刷毛軸等					1					1	
金付				1						1	
印判染付、刷毛軸等					1					1	
近縁					1					1	
刷毛					1					1	
金付					1					1	
加ム青緑					1					1	
伊万里					1					1	
吹き墨(近縁)					1					1	
近縁						1				1	
合計					7	0	1	0	1	10	
皿					1					1	
灯明皿					1					1	
口縁部					1					1	
口縁部					1					1	
鉢					1					1	
鉢部					2	2				4	
瓶					1					1	
口縁部					1					1	
急須					1					1	
把手					1					1	
口縁部					1					1	
瓶					1					1	
急須					1					1	
茶or便					2					2	
便					1					1	
不明					9	7	1			17	
底部					1					1	
合計					22	19	2	0	0	42	

第58表① 石積みSA21 タイ産土器(半練)・タイ産褐釉陶器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称、 仮称	部位	口径 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第30回 図版24 1	( 半練 ) 器	蓋	摘 み	器形: 宝珠形の撮みを有する落し蓋。器面調整: 上面及び撮みの部分は丁寧なナデを施しているが、混入物が多く表面に露出しているため粗雑な趣となる。下面是微細な刷毛目様の工具でナデを粗雑に施している。素地: 淡灰白色の粗粒子で、繊かい石英を多く含む。稀に繊かい黒色や茶褐色の飴物が混入される。色調: 上下面とも黄白色や橙色の釉を帯びているが、部分的に暗褐色となる部分が両面で観察できる。焼成: 良好で堅い。15c~16c。	C-14 SA21 栗石内 第2層a
II 2	タイ 土器	壺	底部	器形: 底面から内側に閉じ気味に直線的に立ち上がる壺の底部破片。器面調整: 内面は丁寧なナデ調整を主体とするが陶土の継ぎ足し部分が表面に現れ、横位方向に隙間が空く。底面は平坦な面で釉が掛かり器面調整は不明である。素地: 淡茶色の粗粒子で、繊細な石英を主体に多く含み茶褐色や黒色の飴物が僅かにみられる。釉色: 両面と露胎で、外面は茶黒色で内面が灰褐色を帯びている。外底面のみ茶紫色の釉が掛かっている。シーサッチャナライ窯かコノイ窯。15c。	C-14 SA21 栗石内 第2層a
II 3	タイ 産 褐 釉 陶 器	壺	底部	器形: "。器面調整: 外面は施削り後にナデ消しているが部分的に削りのナデ消しを忘れたようである。内面は丁寧なナデ調整を主体とするが陶土の継ぎ足し部分が表面に現れ、横位方向に隙間が空く。底面は平坦な面で釉が掛かっている。器面調整は不明である。素地: 明茶紫色の粗粒子で、繊細な石英を主体に多く含み茶褐色や黒色の飴物も多く含まれている。釉色: 両面と露胎であるが、外面上に微細な貫入のある茶褐色の釉が垂れている。外底面には焼成時の剥離剤として使用されたとみられる繊かな飴物(石英、茶色や黒色)が多量に付着している。シーサッチャナライ窯?。15c。	C-14 SA21 第1層a

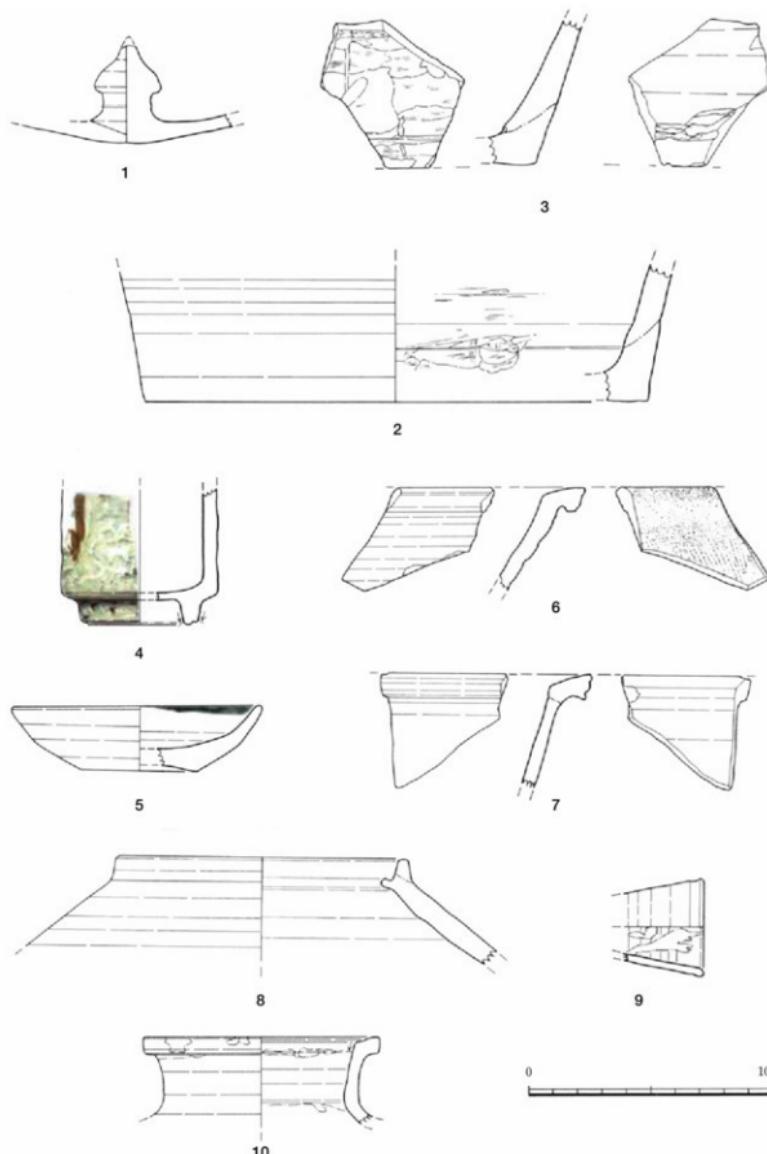
注「-」:計測不可

第58表② 石積みSA21 本土産磁器・沖縄産無釉陶器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層	
第30図 図版24 4	本土 産 磁 器	湯 飲 み 茶 碗	底部	— — 4.8	近現代の円筒形の湯飲み茶碗。外面に人物の左肩から左側の胴体分までが残存する円形状の型を貼り付けている。円盤状の貼付部分の胴部から高台外面まで幾何学様の文様が浮文で型で起こされているようである。高台の外面下端近くに片彫りの溝が入っている。疊付も面取されて成形されている。内面は丁寧に成形されて型物と見分けられる。高台内面から外底面に内割りの痕跡である削り痕が観察できる。素地は光沢のある微粒子で不純物はみられない。	C-14 SA21 西側 レンチ延長 第1層a
〃 〃 5		灯 明 皿	口 縁 部 と 底 部	口 10.3 高さ:右 2.75 高さ:左 2.5 底 4.6	直口縁の灯明皿。底は上げ底で盛り上がっている。外面は口縁部のみ丁寧な回転擦痕が胴部から底辺近くまで軸擦痕がナデ消しているが消えきってない。内面は丁寧な回転擦痕と指捺印がみられる。内面の口唇部から口縁部に煤が帶状に固着している。素地:茶紫色の織粒子で、微細な石英が少量ながら含まれている。色調:外面は暗茶色や茶褐色を呈するが、部分的に自然釉(茶紫色の釉)が口縁部から底面まで掛かっている。二次的な火熱を受けて粗い気泡痕が底面までみられる。	C-13・14 SA21 栗石内 第2層a
〃 〃 6		擂 鉢	口 縁 部	— — —	器形:胴上部から口縁部が外傾し、口頭部で「く」の字形に屈曲させて口唇部と肥厚部を形成する。肥厚部下端から下端を範割りで面取をする。文様:内面に8条1組の櫛で擣目を左から右方向に向かって斜位に施している。素地:光沢のある茶紫色の微粒子で、微細な石英を僅かに含むが、粗い石英や細かい茶褐色の物質が僅かに観察できる。色調:外面は赤茶色で、内面が明茶色となる。焼成:焼成は良好で堅い。	C-13・14 SA21 栗石内 第2層a
〃 〃 7		鉢	口 縁 部	— — —	器形: "。肥厚部に丸窓(幅2.5mm)で二条一組の界線を施している。肥厚部下端を丸窓を持たせて削り出して成形する。口唇部は陶土の垂ぎ足しを行って幅広(幅16.5mm)に仕上げている。外面の頭下部から下は丁寧なナデ仕上げで、内面の胴部は軸擦痕をナデ消すが徹底しない。素地:茶紫色の織粒子で、微細な石英を僅かに含む。僅かに石英が観察できる。色調:外面は茶褐色で、内面が暗茶色となる。焼成:焼成は良好で堅い。	C-13・14 SA21 栗石内 第2層a
〃 〃 8	沖 縄 産 無 釉 陶 器	急 須	口 縁 部	12.0 —	内傾する器形で蓋付のある急須。外面は全体的に茶紫色の自然釉がみられ、露胎部分から丁寧な回転擦痕があることが判る。内外面の口縁部も丁寧な回転擦痕がみられる。内面の蓋受けの突出部分と口縁部に接する箇所には丸彫り様の工具で溝を掘りを蓋裏にある突起部を受けやすくしている。内面は粗目の回転擦痕を施しているが、起伏のある軸擦痕は消えきっていない。素地:濃い茶紫色の微粒子で、微細な石英を少し含み、稀に細かい茶褐色の物質と粗い石英がみられる。劈開面から白色の陶土が僅かに観察できる。色調:外面は暗褐色で茶紫色の自然釉が掛かる、内面が灰褐色を帯びている。焼成:良好で堅い。	C-13・14 SA21 栗石内 第2層a
〃 〃 9		把手	—	急須の把手。把手は中空きの筒型で、器壁が2.6~3.3mmと薄い造りである。把手の端部近くが微弱に玉縁状となる部分で復元直径が4.0cmと求められた。茶褐色の薄い釉が外面に施されたようであるが、二次的な火熱を受けて微細な気泡痕が多くみられる。外面の成形は丁寧である。端部近くの玉縁状の肥厚部は丸彫りによる削りを加えて強調する。内面は把手の胴部近くから端部に向かって難な軸擦痕成形から丁寧な成形へと変化しながら仕上げている。素地:灰色の微粒子で、粗細な石英が僅かに含まれている程度である。焼成は良好で堅い。	C-13・14 SA21 栗石内 第2層a	
〃 〃 10		壺	口 縁 部	9.7 — —	器形:口頭部で閉まり口縁部を「く」の字形に折り曲げて万形状の肥厚とする小型の壺。文様:なし。器面調整:外面は釉上からの観察では丁寧な成形である。内面は釉も薄く観察が容易で横走する丁寧な回転擦痕が頭部にみられ、口縁部と口唇部に軸擦痕による溝が生じている。素地:灰色の微粒子で、劈開面から白色の陶土が縮状に多く入っている。稀に微細な石英が観察できる。色調:外面と口唇部は黄緑色の釉で微細な貫入がみられ、内面が暗褐色の化粧土を施している。焼成は堅緻。	C-14 SA21 西側 レンチ延長 第1層a

注「-」:計測不可



第30図 石積みSA21出土品⑤ タイ産土器（半練）：1、タイ産褐釉陶器：2・3、本土産磁器：4  
沖縄産無釉陶器：5～10

第59表 石積みSA21 貝製品・石・石製品・円盤状製品出土状況

種類		層序	C-13・14	C-14		合計	
			SA21	SA21			
			栗石内 第2層a	第1層a	栗石内 第2層a		
貝製品					2	2	
合計		0	0	2	2		
石・石製品	硯	白色砂岩			1	1	
	砥石	頁岩？(非実用製品の可能性あり)		1		1	
	石器片	繊粒砂岩(ニーピ)			1	1	
	河原石		2	1		3	
	石材	砂岩		2		2	
		繊粒砂岩(ニーピ)	4	6	2	12	
		焼けた繊粒砂岩(ニーピ)		1		1	
	合計		6	11	4	21	
円盤状製品	中国産褐釉陶器			1	1	2	
合計		0	1	1	2		

第60表 石積み SA21 金属製品出土状況

種類		層序	C-13・14	C-14			C-14 SA21 西側レンチ 延長 第1層a	合計	
			SA21	SA21					
			栗石内 第2層a	第1層a	栗石内 第2層a	赤瓦 集中部 第1層d	石積直下 第4層		
金属製品	丸釘	完形	中	鉄		3	5		8
		中	鉄			1			1
		先端部欠損	不明	鉄		1			1
		頸部欠損	中	鉄	1	2			3
	工具類・ 生産用具	不明	鉄		1				1
		先端+頭部欠損	不明	鉄		3			3
		完形	中	鉄	2	1			3
		小	鉄		1	1			2
		頭部欠損	中	鉄		1			1
		不明	鉄			4			4
	角釘	先端+頭部欠損	中	鉄	3				3
		釘(環状の受け金具)	完形	鉄				1	1
	武具	座	青銅				1		1
	生活用具	針金	鉄		1				1
			青銅			1			1
武器	砲弾片		鉄	2	12	11	1		26
			青銅		4	4			8
	薬莢		鉄		1				1
	不明		鉄		2				2
不明			青銅		4	4			8
		合計		2	35	39	1	1	79

第61表 石積みSA21 貝製品・石製品・円盤状製品観察一覧

単位:cm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	残存長(縦) 残存幅(横)	残存厚 重量	観察事項	出土点 出土層
第31図 図版25 1	貝製品	10.4 頭部 7.89 7.50	— 171.4	サザエ科ヤコウガイの殻の外周縁を粗削後に麻痺された最終段階の形態。正面左側に螺鈿を切り取る際の最後に穿たれた粗孔(推定直径6mm)が外側から穿たれている。この孔以外に穿孔の痕跡は確認できない。その他、螺塔部の打削された縁辺沿いには金属製の工具(ヤスリや歯など)によって切断や磨り切られた部分が2・3箇所、切断面(真珠層が切断面が揃って階段状となる)と磨面が確認できる。殻軸の下端部は欠落する。	C-14 SA21 栗石内 第2層a
				サザエ科ヤコウガイの殻を利用した貝具などの未製品とみられる。加工の痕跡は殻の表裏面の打削された外周縁部を研磨を施しているが研磨面は途切れながら観察できる。穿孔の痕跡は上部両側の縁辺部に穿孔されていて、粗孔は内面左側でみられ外側から穿孔されている。内面右側の小孔は2孔有り、2孔は両面から穿孔されているが、小孔の直下に内側から打削している。	
〃 〃 2	石製品	硯	6.4 4.1	サザエ科ヤコウガイの殻を利用した貝具などの未製品とみられる。加工の痕跡は殻の表裏面の打削された外周縁部を研磨を施しているが研磨面は途切れながら観察できる。穿孔の痕跡は上部両側の縁辺部に穿孔されていて、粗孔は内面左側でみられ外側から穿孔されている。内面右側の小孔は2孔有り、2孔は両面から穿孔されているが、小孔の直下に内側から打削している。	C-14 SA21 栗石内 第2層a
〃 〃 3	石製品	硯	4.39 2.24	硯の海部と岡部付近が残存。正面の岡部から海部に向かって緩やかに傾斜するが、岡部寄りに横位置方向の刃物などによる細縫(幅0.3~0.6mm)が2本彫り込まれている。裏面左側は側面沿うように微弱な段差のある縁を造る縁の幅は8.8~9.1mmを測る。器面の保持が悪く脆い。墨を塗った痕跡が確認できない。軟質素材の上から墨など塗布して製品としたようである。その痕跡は右側面に僅かに残っている。軟質の白色砂岩。	C-14 SA21 栗石内 第2層a
〃 〃 4	円盤状 製品	遊具	2.48 0.6 2.35 5.0	中国産褐釉陶器壺の有文(丸彫りで線刻)の胴部片を利用した遊具。打削調整は主に外面から実施され、内面からの打削は2・3箇所と少ない。研磨を実施した部分が側面に僅かに残存するが研磨は徹底せず剥離面に近い状態である。素地:光沢のある茶褐色の微粒子で、粗細な石英を主体とし粗い茶褐色や黒色の鉱物が少量みられる。表面に黄緑色の釉を施釉する。釉に微細な貫入がみられる。中国南部の窯。14c~15c。	C-14 SA21 栗石内 第2層a

注「-」:計測不可

第62表 石積みSA21 金属製品観察一覧

単位:mm/g

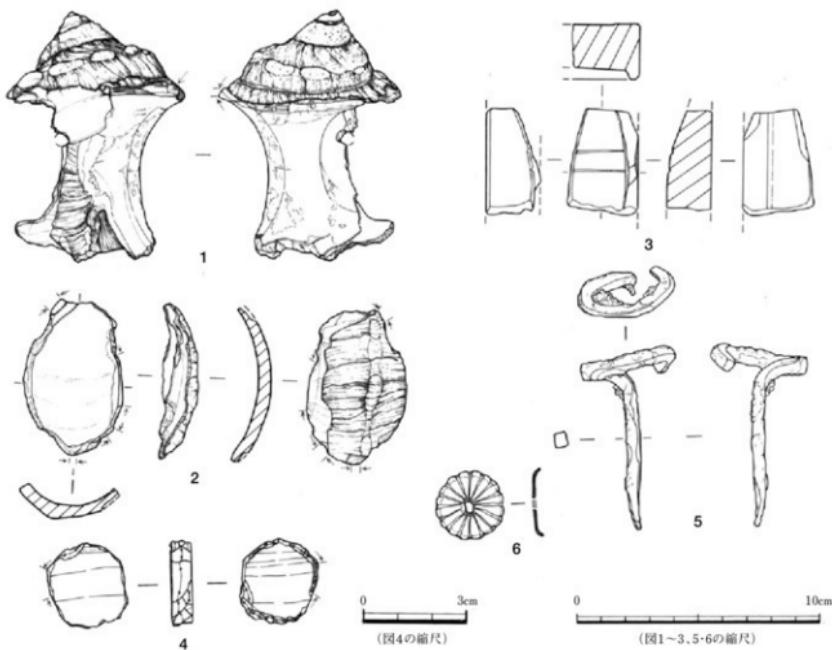
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類・名稱・ 仮称	材質	残存長(縦) 残存幅(横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観察事項	出土点 出土層
第31図 図版25 5	生工具類 具・ 釘	鉄 製品	74.96 40.19	5.08 1.90 18.5	鑓状の受け金具。柱や環などに固定して利用された受け金具とみられる。金具の頭部は変形し、頭部の端が身部から離れています。頭部の厚さは4.71mm、幅が5.46mm身部中央付近での厚さは5.17mm、幅が5.25mmを測った。鍔は全体的にみられ鍔によろ剥離があらわれる。身部から頭部へ移行して鑓状の輪を作るが輪の根元近くで4~5mm程度の石英粒が挟まれている。	C-14 SA21 西側レバ 延長第1層 a
〃 〃 6	武具	座 青銅 製品	27.8 27.8	0.40 0.37 1.8	薄造りの菊座。花弁一枚一枚が盛り上がった16花弁の菊花を型で押抜したプレス加工の製品とみられる。花芯の中央に横2.99mm、縦4.47mmの重な長方形の方孔が内側から蟹で穿孔している。表面に鍍金が施されている。重量が2g以下で軽量であることから近世現代の製品の可能性もある。	C-14 SA21 石積直下 第4層

第63表 石積みSA21 二次的火熱溶解銭貨

錢名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
無文銭(初跡年不明)	1片	1.51	-	C-14 SA21 第1層a
合計	1			

第64表 石積みSA21 出土遺物状況(図版外)

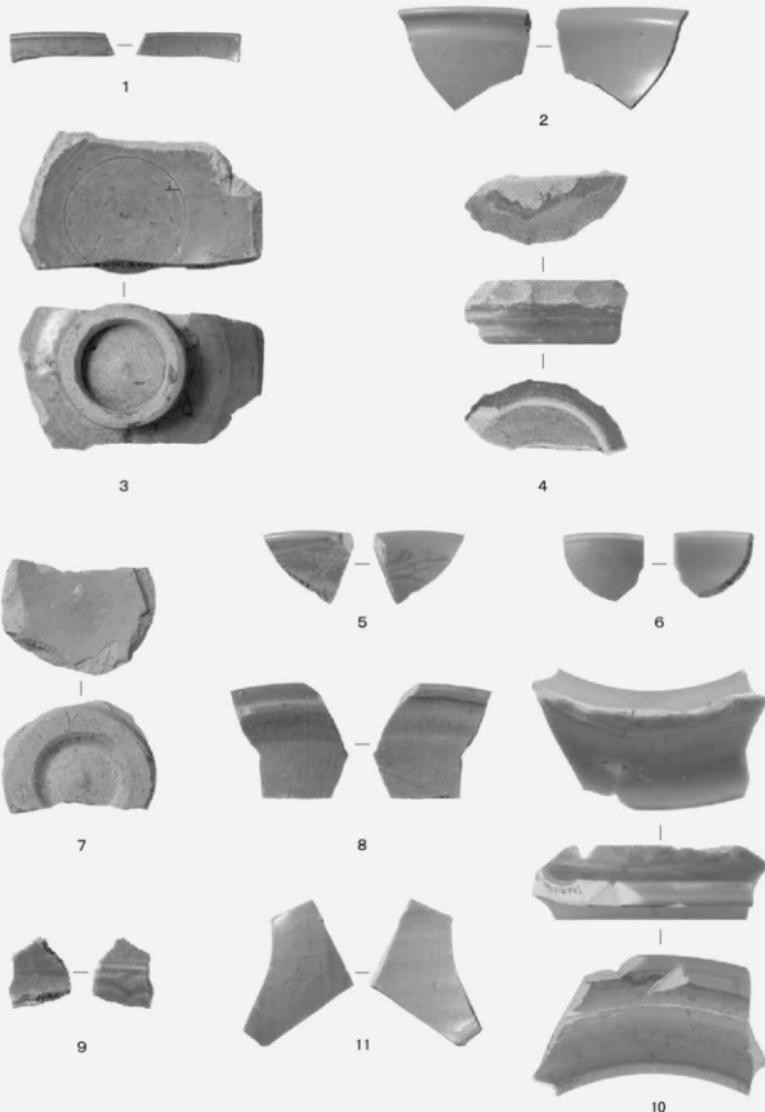
種類	層序		C-14				合計
			SA21				
	栗石内 第2層a	第1層a	栗石内 第2層a	赤瓦 集中部 第1層d	赤瓦 集中部 第2層a	赤瓦 集中部 第2層a	
ガスク土器	鍋or鉢	底部			1		1
	壺	頸部		1			1
	不明	胴部	3	1		1	5
	不明		1				1
合計			0	5	2	0	8
陶質土器	鍋	胴部		1	1		2
	鉢	胴部		1			1
	壺	底部			1		1
	火炉	胴部		1			1
	不明	胴部	1	1			2
合計			1	4	1	1	7
瓦質土器	鉢	脚部		1			1
	蓋				1		1
	不明	胴部		1	1		2
	不明		1				1
合計			1	2	2	0	5
ヘトナム染付	皿	底部	15後~16中		1		1
合計			0	1	0	0	1
沖縄產 施釉陶器	小碗	胴部		1			1
	鍋	胴部	1				1
	壺	胴部		1			1
	急須	口縁部		1			1
	急須	胴部		1			1
合計			1	4	0	0	5
ガラス製品	瓶	胴部		2			2
	板ガラス	破片		4	2		6
	不明	破片		4	2		6
合計			0	10	4	0	14



第31図 石積みSA21出土品⑥ 貝製品：1・2、石製品：3、円盤状製品：4、金属製品：5・6



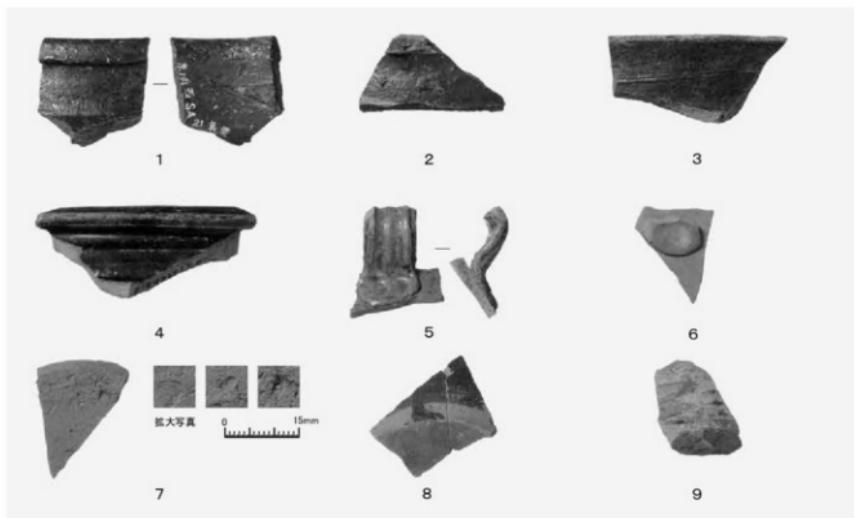
図版 20 石積み SA21 出土品① 屋瓦：1、埴瓦：2・3



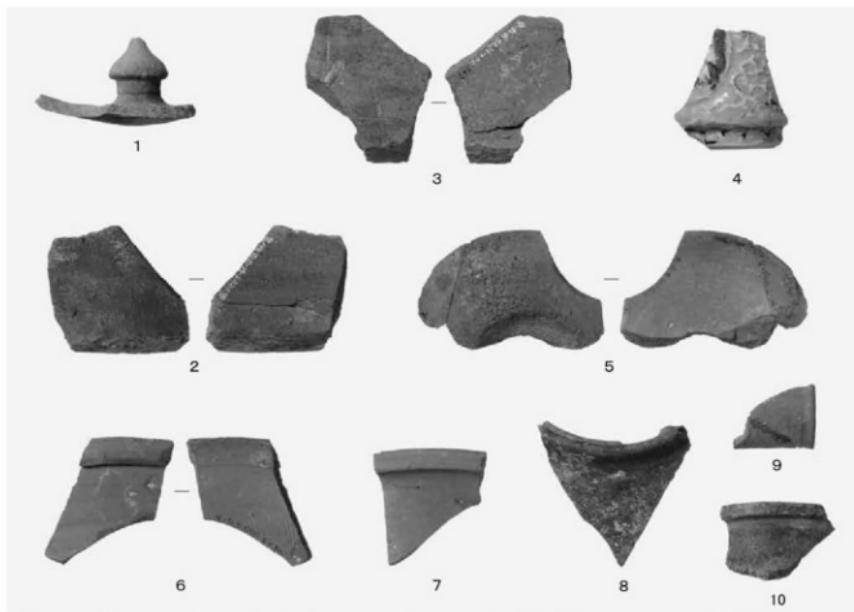
図版 21 石積み SA21 出土品② 青磁 : 1~11



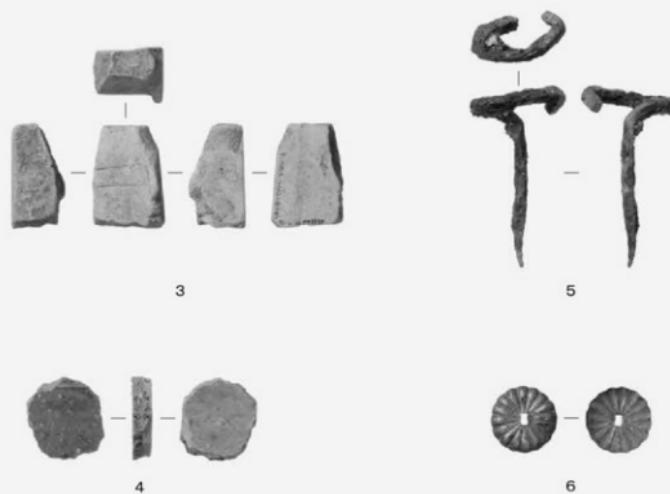
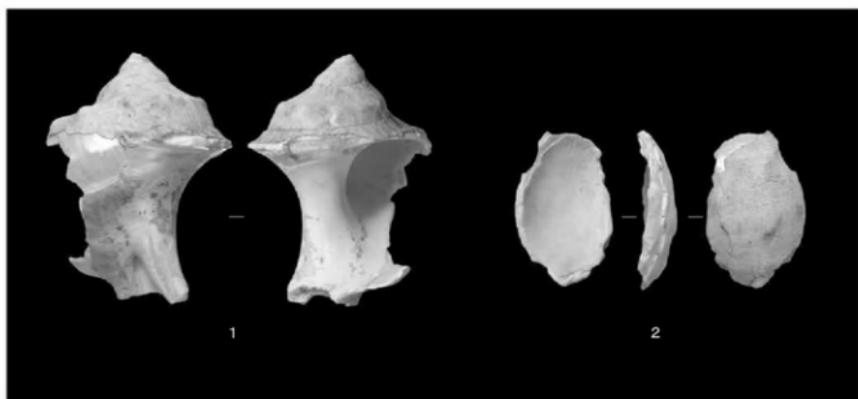
図版 22 石積み SA21 出土品③ 白磁：1・2、青花：3～8、彩釉陶器：9・10、褐釉磁器：11・12  
黒釉陶器：13



図版 23 石積み SA21 出土品④ 中国産褐釉陶器 : 1~9



図版 24 石積み SA21 出土品⑤ タイ産土器（半練）：1、タイ産褐釉陶器：2・3、本土産磁器：4、沖縄産無釉陶器：5～10



図版 25 石積み SA21 出土品⑥ 貝製品：1・2、石製品：3、円盤状製品：4、金属製品：5・6

(5) 石積みSA23の出土遺物 (第32図、第65表~第69表、図版26)

石積みSA23から出土した遺物の種類は、第6表に呈示したように総計で429点(=100%)が得られている。出土遺物の内訳は、グスク土器1点(0.23%)、瓦類(屋瓦・埠瓦)365点(85.08%)、青磁5点(1.17%)、青花2点(0.46%)、中国産褐釉陶器16点(3.73%)、沖縄産施釉陶器1点(0.23%)、タイ産(土器・褐釉陶器)2点(0.47%)、金属製品13点(3.03%)などの17種類が確認されている。輸入陶磁器(タイ産、中国産)の占める割合は、5.83%(25点)であった。

当該遺構に相当する時期の遺物として、中国産青磁(第32図1)、中国産青花(同図3)、中国産褐釉陶器(同図4)、タイ産土器(同図5)などが出土している。

第65表 石積みSA23 青磁・青花・中国産褐釉陶器・タイ産土器(半練)出土状況

種類					層序	C-15			合計	
						SA23				
						第1層a	第2層b	第5層		
青磁	碗	口縁部	外反	無文		1			1	
			直口	雷文・片切彫り		1			1	
	皿	口縁部	稜花	内面:波状の蓮弁・繩描+牡丹唐草文・片切彫り			1		1	
			底部	蓮弁文				1	1	
青花	酒会壺	口縁部		無文			1		1	
			合 計			2	2	1	5	
	碗	口縁部	外反	外面:界線+花文 内面:界線のみ		1			1	
			直口	外面:界線+草花文 内面:界線のみ		1			1	
合 計						2	0	0	2	
中国産 褐釉陶器		壺		胸部	11	4			15	
			底部		1				1	
合 計						12	4	0	16	
タイ産土器(半練)		蓋	端部	IV			1		1	
合 計						0	1	0	1	

第66表 石積みSA23 青磁・青花・中国産褐釉陶器・タイ産土器(半練)観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土点 出土層
第32図 図版26 1	青磁	皿	口縁部	棗花皿。口唇部をラマ式蓮弁の弁先様に浅く抉りを入れて棗花とする。文様: 内面は口唇に沿うような形で3本一組の櫛描きで波状の蓮弁文を描き、その直下に片切り彫りで牡丹唐草文の一部が描かれている。素地: 灰色の細粒子で、微細な気泡痕が多くみられる。釉色: 濃青緑の釉が両面に残存する。二次的な火熱を受けて釉上に微細な気泡痕がみられる。両面に粗い貫入がみられる。外反口縁龍泉窯系。15c中頃～16c前半。	C-15 SA23 第2層b
				蓮弁文皿。豊付の幅が1.51mm前後と狭く側面襯が尖り気味の形状となる。文様: 外面の高台脇から幅広の丸壺状の工具で陶土を削り取って蓮弁文を表現する。素地: 光沢のある灰白色の微粒子で、不純物がみられない精選された陶土である。釉色: 青緑色の釉を全面施釉後に高台外面途中から高台内面途中までの釉を搔き取って露胎とする。貫入はない。龍泉窯。14c中頃～15c前半。	
				外反口縁碗。文様: 外面は口縁に幅広の界線を眞須で描き、その直下に宝相華唐草文を描いたようであるが花文のみが残存する。内面には眞須で細書きの界線を2条施している。素地: 白色の微粒子で、不純物はみられない。景德鎮窯系。16c。	
ノ ノ 2	青花	碗	口縁部	怒り肩の壺の底部とみられ、外底面が盛り上がる揚げ底となるタイプ。底面からの立ち上がりの部分で一端くびれさせてから外側に軽く外傾させながら直線的に胴下部に移行する。外底面の周縁部に砂胎土目(1～3mm程度の石英粒が付着)の目痕がみられる。素地: 淡灰白色の細粒子で、粗細な石英を主体に微細な黒色や茶褐色の鉱物が少量含まれている。釉色: 茶褐色の釉が両面に施されている。微細な貫入が多くみられる。中国南部の窯。15c～16c。	C-15 SA23 第5層
				中国産 褐釉陶器	
ノ ノ 4	タイ産 土器 (半練)	壺	底部	蓋鋸緣分類のIV類。蓋の撮みは、残存する破片の形状(器壁の厚さや端部の形態など)から慢頭形で推定復元を試みたところ器高が3.1cmを測った。器形: 蓋縁近くで粘土を付け足して口唇部と内面口縁の歪な方形状の肥厚を造る。器面調整: 外面は輪輪目様の微弱な起伏がそのまま放置されている。口縁近くに丁寧なナデを施している。内面が口唇部から肥厚部までは丁寧なナデを施す。肥厚帯下端近くに箆ナデを加えて縁治いに微弱な肥厚を造り、肥厚帯下端にも箆ナデを加えて面取りする。内面の肥厚帯下端から蓋の下半分は若干、器面の保持は悪いが肥厚帯下端に箆ナデを、下部分には箆削後にナデを加えたようである。素地: 灰白色の粗粒子で、細かい石英が多く含んでいる。その他に細かな黒色鉱物や茶褐色の物質が少量ながら含まれている。色調: 両面とも淡橙色。焼成: 脱く悪い。15c～16c。	C-15 SA23 第1層a
				蓋	
ノ ノ 5	タイ産 土器 (半練)	蓋	端部径 13.6	蓋鋸緣分類のIV類。蓋の撮みは、残存する破片の形状(器壁の厚さや端部の形態など)から慢頭形で推定復元を試みたところ器高が3.1cmを測った。器形: 蓋縁近くで粘土を付け足して口唇部と内面口縁の歪な方形状の肥厚を造る。器面調整: 外面は輪輪目様の微弱な起伏がそのまま放置されている。口縁近くに丁寧なナデを施している。内面が口唇部から肥厚部までは丁寧なナデを施す。肥厚帯下端近くに箆ナデを加えて縁治いに微弱な肥厚を造り、肥厚帯下端にも箆ナデを加えて面取りする。内面の肥厚帯下端から蓋の下半分は若干、器面の保持は悪いが肥厚帯下端に箆ナデを、下部分には箆削後にナデを加えたようである。素地: 灰白色の粗粒子で、細かい石英が多く含んでいる。その他に細かな黒色鉱物や茶褐色の物質が少量ながら含まれている。色調: 両面とも淡橙色。焼成: 脱く悪い。15c～16c。	C-15 SA23 第2層b

注 「-」: 計測不可

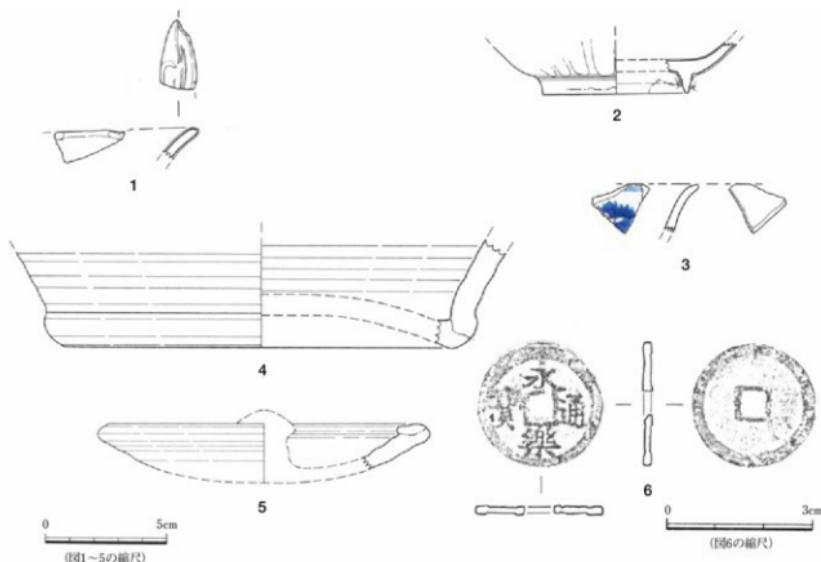
第67表 石積みSA23 銭貨観察一覧

単位:mm/g

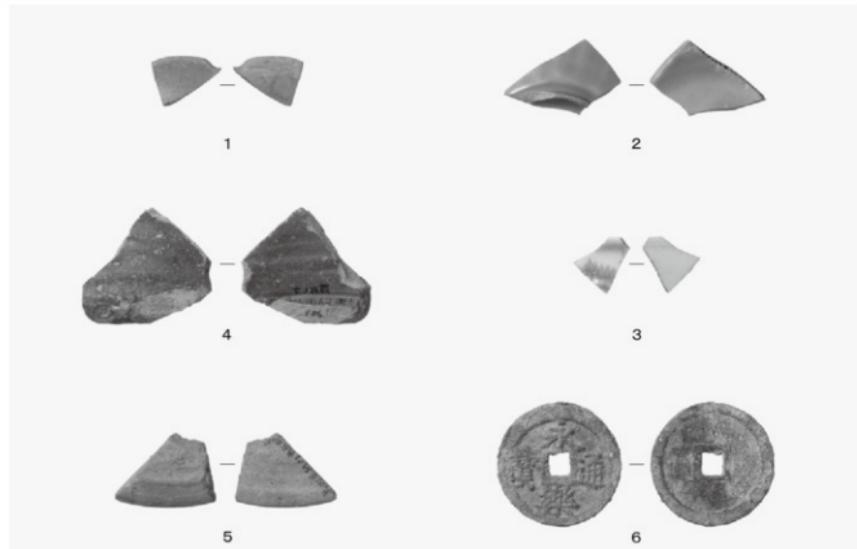
挿図番号 図版番号 遺物番号	銅 種 類	初 鋳 年	素 材	読 み 方	状 態	書 体	肉郭 外径 A B	肉郭 内径 C D	方穿 E F	断面計測部位 ① ② ③	重量	観察事項	出土点 出土層
第32図 図版26 6	永 通 寶	明 1408 年	銅 錢	対 読	完 形	楷 書	25.70 25.62	20.83 20.07	4.95 5.55	1.58 0.94	1.48 4.84	面の字款は深めに鋳造されているが全体的に縁青や鋸により微細なアバタ状となりやや不明瞭な字款となっている。背は面上りも縁青の影響を半分程度受けている。面と背の孔の鋲型が上下にずれて孔の内側の上下で鋳造時のバリがみられる。	C-15 SA23 第1層a

第68表 石積みSA23 二次の火熱溶解銭貨

錢名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
熙寧元寶(北宋1068年初鋳)	1片	2.21	「熙」・「寧」の二字が残存	C-15 SA23 第1層a
永楽通寶(明1408年初鋳)	1枚	4.84	完形	C-15 SA23 第1層a
合計	2			



第32図 石積みSA23出土品 青磁：1・2、青花：3、中国産褐釉陶器：4、タイ産土器（半練）：5  
錢貨：6



図版 26 石積み SA23 出土品 青磁：1・2、青花：3、中国産褐釉陶器：4、タイ産土器（半練）：5、  
錢貨：6

第69表 石積みSA23 出土遺物状況(図版外)

種類		層序	C-15			合計	
			SA23				
			第1層a	第2層b	第5層		
ダスク土器	壺	底部		1		1	
	合 計		0	1	0	1	
瓦質土器	蓋			1		1	
	合 計		0	1	0	1	
屋瓦	大和	丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)	1		
		平瓦	灰色	漆喰あり(片面)	9	9	
				漆喰無し	16	16	
	大和 (近代のもの)	丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)	1		
		軒平	赤色	漆喰無し	1		
		丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)	1	2	
			灰色	漆喰無し	4	4	
	明朝系	丸瓦	赤色	漆喰あり(片面)	58	27	
				漆喰無し	14	3	
		平瓦	灰色	漆喰あり(片面)	2		
			灰色	漆喰無し	9	8	
			褐色	漆喰あり(両面)	1		
			褐色	漆喰あり(片面)	1		
			褐色	漆喰無し	2	1	
			褐色	漆喰あり(両面)		2	
			褐色	漆喰あり(片面)	30	30	
			褐色	漆喰無し	56	29	
	合 計				202	114	
						45	
						361	
埴瓦	Ⅲ類	形状不明a	灰色	漆喰無し	角無し	2	
					角1	1	
		形状不明b				1	
	合 計				3	1	
						0	
						4	
タイ座樹軸陶器	壺	胸部		1			
	合 計			1	0	0	
						1	
本土產磁器	円筒形容器	胸部	近現		1		
	不明	胸部	近現	2		2	
	合 計			2	1	0	
沖縄產施釉陶器	火鉢	口縁部		1			
	合 計			1	0	0	
						1	
沖縄產無釉陶器	壺	底部		2			
	壺or甕	胸部		1			
	不明	胸部		1			
	合 計			2	2	0	
石・石製品	石器片	繩粒砂岩(ニーピ)		1			
	石材	繩粒砂岩(ニーピ)		1	2	3	
	合 計			2	2	0	
						4	
金屬製品	工具類・ 生産用具	丸釘	完形	中	鉄	4	
			頭部欠損	中	鉄	1	
	角釘	先端部欠損	中	鉄		1	
						1	
	武器	砲弾片			鉄	4	
						4	
	現代	鉄片			鉄	1	
						1	
	分類不明	用途不明			鉄	1	
					青銅	1	
	合 計			6	5	2	
						13	
ガラス製品	瓶	胸部		1	1		
	板ガラス	破片		3		3	
	不明	破片		4		4	
	合 計			8	1	0	
						9	
炭化した木片					1		
	合 計			0	1	0	
						1	

(6) 石積みSA31の出土遺物 (第70表)

石積みSA31から出土した遺物の種類は、第6表に呈示したように総計で4点(≒100%)が得られている。出土遺物の内訳は、中国産褐釉陶器2点(50.0%)、高麗系屋瓦2点(50.0%)の計4点の出土があった。当該遺構の時期を示す遺物の出土はなかった。

第70表 石積みSA31 出土遺物状況(図版外)

種類	層序		B-14	B-14・15	合 計
			SA31	SA31	
	7層 赤色土層	東西トレンチ 第7層 赤色土層			
屋瓦	高麗系	平瓦	灰色	漆喰無し	1 1 2
				合 計	1 1 2
中国産褐釉陶器		壺	胸部		2 2
				合 計	0 2 2

(7) 埋敷きSS05の出土遺物(第33図～第43図、第71表～第92表、図版27～図版35)

埋敷きSS05から出土した遺物の種類は、第6表に示したように総計で1,077点(=100%)が得られている。出土遺物の内訳は、グスク土器7点(0.65%)、瓦類(屋瓦・埠瓦)550点(51.07%)、青磁22点(2.04%)、白磁1点(0.09%)、青花11点(1.02%)、華南彩釉陶器36点(3.34%)、中国産褐釉陶器200点(18.57%)、沖縄産施釉陶器22点(2.04%)、タイ産褐釉陶器39点(3.62%)、銭貨43点(3.99%)などの25種類が確認されている。輸入陶磁器(タイ産、中国産)の占める割合は、28.78%(310点)であった。

当該遺構の時期に伴う遺物として呈示ができる資料は、沖縄産瓦質土器(第33図1・2)、沖縄産瓦質土器(同図3)、明朝系屋瓦(同図4)、埠瓦(第34図5・6)、中国産青花(第35図7～10)、華南彩釉陶器(第37図1～6)、中国産褐釉陶器(第38図6)、本土産磁器(第39図3)などが得られている。この中で特徴的なものとして第34図5に示した埠瓦がある。この種の埠瓦は、湧田古窯跡(註1)からも出土していることからすると当該資料は湧田古窯で生産された埠瓦として考えられる。次に銭貨の第43図10に示した南宋の紹興元寶(初鑄造1131年)は折二銭の正規銭で、背面に三日月が鑄型から起こされている所謂、「背月」、或いは「背上月」と称されている資料である。国内では報告例がないようである(註2)。当該銭貨と同一書体の篆書で背月(或いは「背上月」)の正規銭については、韓国の新安海底沈没船から引き上げた銭貨から1枚のみが報告(註3)されているようである。

次に第41図3の砥石裏面右下にある線刻が集中する部分に「帆」・「船体」・「船(2本)」・「旗(三旗の内一旗に「太陽(テダ)」)」・「細波」を細線彫りで描き、船体の左斜め下に「荒波」・「背鱗」・「魚の頭部」を刻んでいる。この「荒波」の下方にも細線彫りで歪な「四角(簡素な天幕)」とその中に「人物(3名)」を確認できた。県内で発見されている線刻石板(註4)11点の中から線刻画で類似の表現方法を探し求めたところ北谷町字上勢頭平安山伊森原で発見(註5)された線刻石板に刻み込まれた船の表現が最も近いことが判明した。当該資料は從来発見されている線刻石板(結晶片岩製)と異なり、細粒砂岩製でしかも小さな砥石からの発見であった。石器である砥石に刻まれていることから線刻石器と仮称したい。

その他に埋敷きSS05の規模は120cm四方と小規模な範囲内であり、この範囲内から華南彩釉陶器(註6)の破片が36点と多く出土しているようである。

#### 註 文 献

註1. 大城慧・島袋洋・金城亀信ほか『湧田古窯跡(1) -県庁舎行政棟建設に係る発掘調査-』沖縄県教育委員会 1993年3月。

註2. 永井久美男『日本出土銭總覧 1996年版』兵庫埋蔵銭調査会 成友印刷株式会社 第2刷 1996年6月。

註3. 永井久美男『中世の出土銭一出土銭の調査と分類-』兵庫埋蔵銭調査会 株式会社ぎょうせい関西支社 1994年10月。

註4. 知念勇『第III節 線刻石板』『北谷町史』第1巻 通史編・北谷町史編集委員会・北谷町教育委員会 2005年3月。

註5. 註4と同じ。

註6-a. 亀井明徳『明代華南彩釉陶をめぐる諸問題』三上次男博士喜寿記念論文集 陶磁編 1985年8月。

註6-b. 大分市歴史資料館 平成15年度秋季(第22回)特別展『豊後府内 南蛮の彩り~南蛮の貿易陶磁器~』2003年10月。

第71表 塗敷きSS05 陶質土器・瓦質土器・屋瓦・埴瓦出土状況

種類	陶質土器	鉢	口縁部	層序		C-D-12 SS05				C-D-12 SS05		合計			
				東側		西側		東側							
				第1層 (覆土)	第2層 (第2層)	栗石内 (覆土)	第1層 (覆土)	第2層 (第2層下部)	第2層 (第2層)						
				0	0	0	0	0	0	1	1	2			
瓦質土器	合計	鉢	胴部							1	1	2			
		擂鉢	胴部					1				1			
		鍋	胴部	1								1			
		火炉	胴部	1								1			
		不明	胴部	2			1					3			
屋瓦	高麗系	平瓦	灰色	漆喰無し	1	5	1				1	8			
		丸瓦	灰色	漆喰無し	1			1				2			
		平瓦	灰色	漆喰無し	5			1				6			
		丸瓦	灰色	漆喰あり(両面)	1							1			
	大和	丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)	4	12		3				19			
		丸瓦	灰色	漆喰無し	1	2						3			
		平瓦	灰色	漆喰あり(両面)	1							1			
		平瓦	灰色	漆喰あり(片面)	2	11		1	2			16			
	明朝系	軒丸	灰色	漆喰無し	15		1	6	2			24			
		軒平	赤色	漆喰無し			1					1			
		丸瓦	灰色	漆喰あり(両面)	1							1			
		丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)	3		2					5			
		暗褐	灰色	漆喰無し	1	14	1	2				18			
		赤色	灰色	漆喰無し	4			1				5			
		赤色	灰色	漆喰あり(両面)	1							1			
		赤色	灰色	漆喰あり(片面)	33		2	5				40			
		平瓦	灰色	漆喰無し	6		2	1				9			
		平瓦	灰色	漆喰あり(両面)	1	4						5			
埴瓦	I類	丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)	2	6						8			
		丸瓦	灰色	漆喰無し	11	40	4	7	4			66			
		褐色	灰色	漆喰無し	3							3			
		褐色	灰色	漆喰あり(両面)	14							14			
		褐色	灰色	漆喰あり(片面)	6	50		7				63			
		褐色	灰色	漆喰無し	6	67	1	9	1			84			
		合計			36	299	1	12	46	9	1	1			
		不明	灰色	漆喰無し	角1					1		1			
		不明	灰色	漆喰無し	角無し					1		1			
		赤色	灰色	漆喰無し	角無し					1		1			
III類	II類	一	灰色	漆喰無し	角1	2				1		3			
		一	灰色	漆喰無し	角無し	4				1		4			
		Aa	灰色	漆喰無し	角1					1	1	2			
	Ab	灰色	灰色	漆喰無し	角1				2	2		4			
		赤色	灰色	漆喰無し	角無し	1		15	11			27			
		Ba	赤色	漆喰無し	角1			1	2			3			
	Bb	灰色	灰色	漆喰無し	角1	1						2			
		形状不明a or 形状不明b	灰色	漆喰無し	角無し				1			1			
		形状不明a	灰色	漆喰無し	角1	4						4			
	形狀不明b	灰色	漆喰無し	角無し	7							7			
		赤色	漆喰無し	角無し	5							5			
		灰色	漆喰無し	角1	5		1	6				12			
		灰色	漆喰無し	角無し	1	7		11	24			43			
		赤色	漆喰無し	角1	4			1	1			7			
合計					2		8	6				16			
					1	42	0	0	41	58	1	2			
												145			

第72表 埋敷きSS05 陶質土器・瓦質土器・屋瓦・埴瓦観察一覧

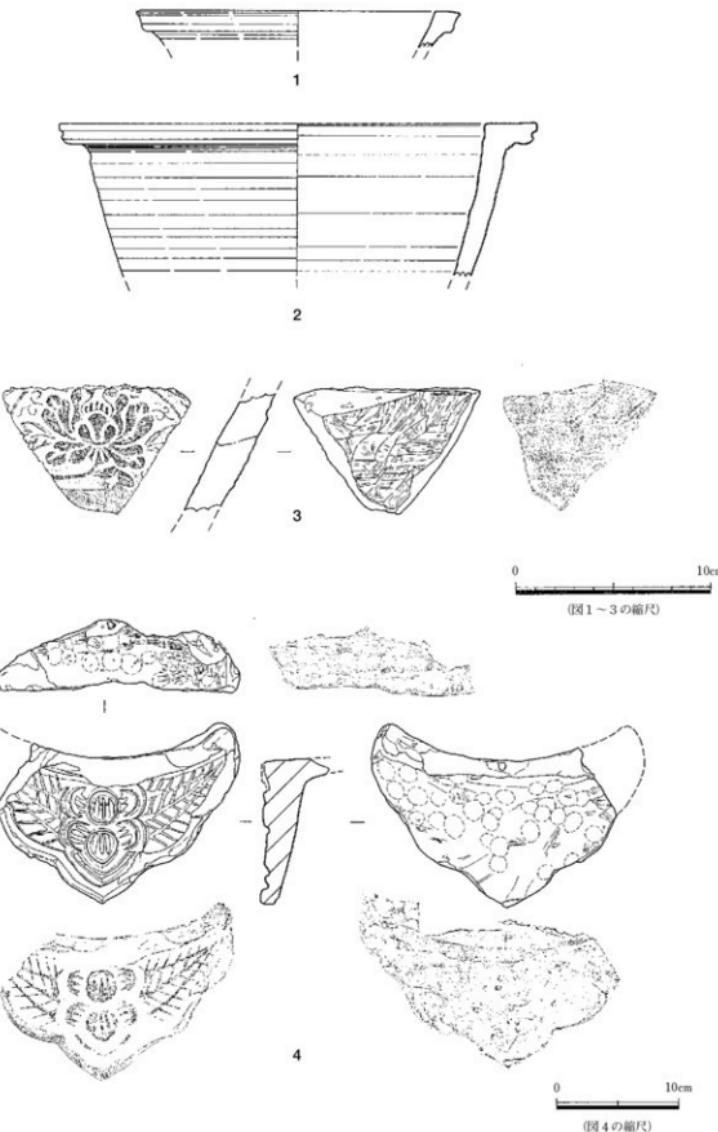
単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第33図 図版27 1	陶質土器 鉢	口縁部	16.5 — —	器形:肥厚口縁の浅鉢。若しくは蓋とみられる。器面調整:外面は口縁部が丁寧な回転擦痕がみられ、肥厚帶下端から脣部は雑で粗密のある条痕様の箇所削りがみられる。口縁部は平坦に仕上げられた丁寧なナデを施している。内面は全体的に雑である。口縁近くに箇所削りをナデ消しているが雑な仕上げである。素地:淡赤茶色の細粒子で、微細な石英を少量含み、稀に粗い茶褐色の鉱物がみられる。色調:外面は茶褐色を呈し、内面が明橙色を帯びる。焼成:悪く脆い。	C-D-12 SS05 第2層
			24.5 — —	器形:口縁部が幅広(26.2mm)となり、口縁も外側に突出した方形形状の肥厚する。文様:肥厚部は丸彫りで沈線を一条施し、沈線直下を面を見るように斜位に仕上げている。肥厚帶と頸部の間に棒状の丸龜の地工具で沈線を～5本を螺旋状に施している。器面調整:外面は口縁部が丁寧な回転擦痕で、肥厚部下端は回転擦痕がみられる。頸部から脣部は雑で調整が粗密で棘輪痕を擦痕でナデ消すが徹底しない。口縁部は平坦で主にナデを加えて仕上げてあるが、口縁部内端近くに刷毛目様の調整痕がみられる。内面は全体的に雑で棘輪痕を回転擦痕でナデ消すが消えきっていない。素地:淡黄白色の細粒子で、微細な石英や雲母を多量含み、稀に粗い茶褐色の物質(2mm前後。最大5mm)がみられる。色調:外面は赤茶色を呈し、内面が明橙色を帯びる。焼成:良好で堅い。	C-D-12 SS05 東側 第2層
〃 2	瓦質土器 鉢	脣部	— — —	器形:植木鉢の有文脣部。文様:外面に円筒形の箇に彫り込まれた牡丹唐草文を右から左方向に回転させて施す。器面調整:内面に横位の擦痕と雑な指ナデが施されている。素地:灰白色の細粒子で、微細な石英や粗い鉱物(黒色の鉱物、石英)を少量含む。色調:両面とも灰黑色を帯びる。焼成:良好で堅い。	C-D-12 SS05 東側 第2層
			— — —	器形:花弁が上下に二つ分かれた赤色系の軒平瓦。瓦当部の大半が残存する。瓦当面の中央には簡略化された花文と葉型を起している。花文は格子目の中の花文と花芯直下に枯の種状(3本櫛)の花文、そして最下段には扁平な「V」字状の開いた葉型がみられる。花弁も簡略化され3本の葉脈となる。葉脈も簡略化された葉脈とヒゲが融合した文様を起している。器面調整:凹面は布目痕をナデ消しているが消えきっていない。瓦当接続部分にナデと指圧を加え調整を行っている。瓦当の裏面は雑で指圧とナデで調整する。器厚:瓦当部は13.4～29.8mm、瓦本体は15.9mmを測る。胎土:泥質で細かい。混入物:微細な石英と粗い茶褐色の物質、石灰質の砂粒以外に河口干潟マングローブ域に生息する貝貝のツナリ科キバウミニナの幼貝とみられるものが混入している。幼貝の殻長は20.1mm、殻径6.15mmを測った。色調:両面とも橙色を帯びる。焼成:良好で堅い。	C-D-12 SS05 東側 第2層
第34図 図版27 5	明屋 朝瓦 系・ 埴瓦	軒 平	— — —	花芯が上下に二つ分かれた赤色系の軒平瓦。瓦当部の大半が残存する。瓦当面の中央には簡略化された花文と葉型を起している。花文は格子目の中の花文と花芯直下に枯の種状(3本櫛)の花文、そして最下段には扁平な「V」字状の開いた葉型がみられる。花弁も簡略化され3本の葉脈となる。葉脈も簡略化された葉脈とヒゲが融合した文様を起している。器面調整:凹面は布目痕をナデ消しているが消えきっていない。瓦当接続部分にナデと指圧を加え調整を行っている。瓦当の裏面は雑で指圧とナデで調整する。器厚:瓦当部は13.4～29.8mm、瓦本体は15.9mmを測る。胎土:泥質で細かい。混入物:微細な石英と粗い茶褐色の物質、石灰質の砂粒以外に河口干潟マングローブ域に生息する貝貝のツナリ科キバウミニナの幼貝とみられるものが混入している。幼貝の殻長は20.1mm、殻径6.15mmを測った。色調:両面とも淡茶白色を帯びる。焼成:悪く脆い。	C-D-12 SS05 東側 第2層
			II類	平面形態が確定しない埴瓦。器面調整:木枠の型に入れて製作された埴とみられる上面を除いて酸化鉄が各面を覆って赤茶色となるが、表面は他の面よりも丁寧に仕上げられた平坦面である。上面は傷など多い平坦面で、右側面が型枠の影響を受けたとみられ下端部で微弱でルーズな段差がみられる。裏面に粘土が礫となって現れている。裏面は他の面よりも微弱な起伏のある平坦面となっている。胎土:粘土質で灰褐色の微粒子。混入物:微細な石英や茶褐色の鉱物がみられる。稀に粗い黄白色や茶褐色、黒色の物質がみられる。焼成:悪く脆い。	C-D-12 SS05 東側 第2層
〃 6	形 状 不 明 b III類	— — —	平面形態が確定しない埴瓦。器面調整:木枠の型に入れて製作された埴とみられる上面を除いて酸化鉄が各面を覆って赤茶色となるが、表面は他の面よりも丁寧に仕上げられた平坦面である。上面は傷など多い平坦面で、右側面が型枠の影響を受けたとみられ下端部で微弱でルーズな段差がみられる。裏面に粘土が礫となって現れている。裏面は他の面よりも微弱な起伏のある平坦面となっている。胎土:粘土質で灰褐色の微粒子。混入物:微細な石英や茶褐色の鉱物がみられる。稀に粗い黄白色や茶褐色、黒色の物質がみられる。焼成:悪く脆い。	C-D-12 SS05 第2層	

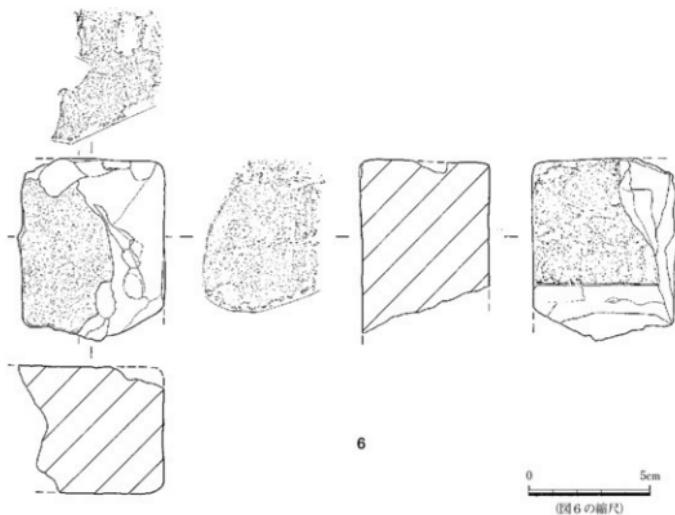
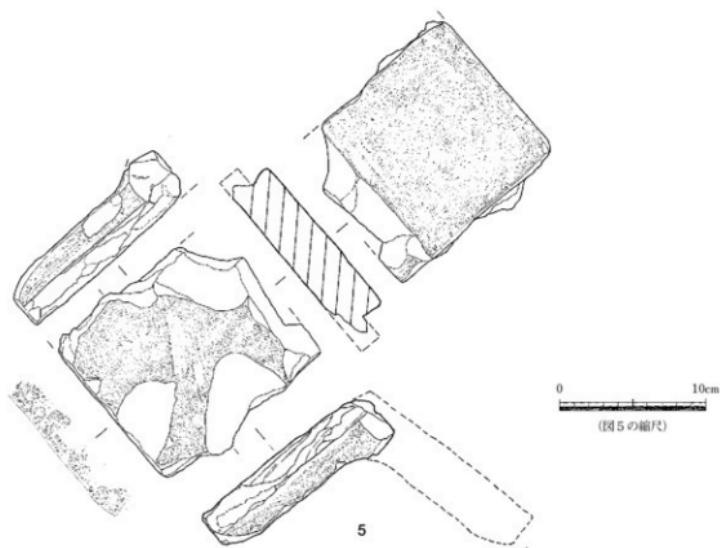
注「—」:計測不可

## 註文献

註1. 沖縄県文化財調査報告書 第111集『湧田古窯跡(1)』県庁舎行政棟建設に係る発掘調査―沖縄県教育委員会 1993年3月。



第33図 塚敷きSS05出土品① 陶質土器：1・2、瓦質土器：3、屋瓦：4



第34図 塚敷きSS05出土品② 塚瓦：5・6

第73表 埋敷きSS05 青磁・白磁・青花出土状況

種類	層序	C-12 SS05				C-D-12 SS05				合計	
		東側		西側		東側	西側	第2層	第2層		
		第1層 (覆土)	第2層	第2層	第5層						
青磁	碗	口縁部	外反 直口	無文 雷文・片切り彫り				1		1	
					2					2	
				蓮弁・片切り彫り	1					1	
	皿	胴部		蓮弁・彫影	1					1	
				有文		1	1			2	
				無文	1	2	1		2	6	
青磁	皿	胴部		蓮弁・片切り彫り	1					1	
			底部	印花菊文				1		1	
		胴部		雷文・片切り彫り+沈線文・彫影+他				1		1	
	盤	口縁部	タガ状縁	内面: 蓮弁・丸窓						1	
				外面: 無文						1	
			底部	内面: 蓮弁・丸窓	1					2	
青磁	盤	a		印花文	1					1	
			高台なし	不明	1					1	
		帯or水注		把手				1		1	
	合計				2	10	1	2	3	42	
		白磁	碗	内構					1	1	
				合計	0	0	0	0	1	0	
青花	碗	口縁部	外反	外面: 斜面線+賞口手 内面: 縁線		1				1	
			直口	外面: 圓線+草花文					1	1	
			底部		1	1			1	2	
	皿	胴部			1	2				3	
			底部		1					1	
		胴部			1					1	
青花	合計			合計	1	4	3	0	1	2	
									0	0	
										11	

第74表① 埋敷きSS05 青磁観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)					出土地点 出土層
第35回 図版28 1	碗	口 縁 部	—	器形: 無文の外反口縁碗。口頭部で外側に軽く外反させている。文様: なし。素地: 淡灰白色の微粒子で、微細な黒色鉱物や気泡痕が観察できる。釉色: 両面とも淡青緑色の釉を施している。貫入: なし。龍泉窑系。14c終末～15c中頃。					C-D-12 SS05 東側 第2層
〃 2	八 角 皿	胴 部	—	器形: 八角皿。口縁部は欠落する残存部からすると緩やかに大きく外側に外反するようである。文様: 内面の口縁近くに片切彫りで反時計回りの雷文を描き、その直下と左側に又状の線彫り沈線文で区画沈線文を描く。横位に施された区画沈線文の直下に片切彫りで垂下葉文、若しくは瑞雲文とみられる文様を描いている。素地: 光沢のある淡灰白色の微粒子で、不純物はみられない。釉色: 淡緑色の釉を施している。貫入: なし。14c後半～15c中頃。					C-D-12 SS05 東側 第2層
〃 3	皿	底 部	—	器形: 皿の底部。文様構成や諸特徴などから無文の外反口縁皿と一致する。高台外面途中から付着の途中までが破損する。文様: 見込みに不鮮明ながら印花菊文の花卉の一一部が僅かに確認できる。また、外周にルーズで低平な圓圈線を施している。素地: 淡灰色の繊維粒子で、微細な黒色鉱物や粗い気泡痕が僅かに観察できる。釉色: 両面とも黄緑色の釉を施して、疊付のみ露胎。貫入: 両面に細かい貫入がみられる。中国南部の窯。14c終末～15c中頃。					C-D-12 SS05 東側 第2層
〃 4	盤	口 縁 部	39.0	器形: 厚手(器厚が10.5～11.6mm)の大振りの鉛錆盤。外面の口縁部に幅広削りを入れた為、口頭部が片切彫り様の縁線となっている。内面口縁の肥厚部下端は片切彫りで成形する。文様: 胴部には幅広(12.3～14.4mm)丸窓の工具で丁寧に蓮弁を描いているが、一部で弁間に空白が生じている。素地: 光沢のある淡灰白色の微粒子。不純物はみられない。釉色: 淡緑色の釉を施している。貫入: なし。龍泉窑。14c後半～15c中頃。					C-D-12 SS05 第2層
〃 5	壺or 水注	把 手	—	器形: 青磁の壺。若しくは水注の把手。横断面が扁平梢円形となる把手で外面には縱位の縱沈線を5本櫛で施しているようである。素地: 淡黄白色の繊維粒子で、微細な石英と黒色鉱物、細かい気泡痕が観察できる。釉色: 両面とも青緑色の失透釉を施している。二次的な火熱を受けて両面に微細な気泡痕が広がっている。細かい貫入がみられる。中国南部の窯。14c終末～15c中頃。					C-12 SS05 西側 第5層

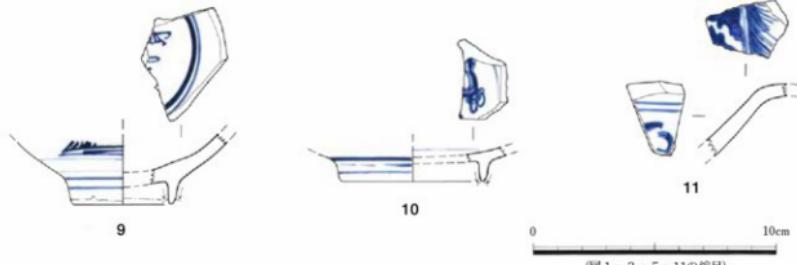
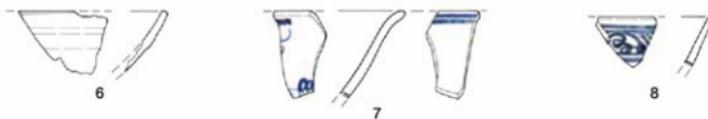
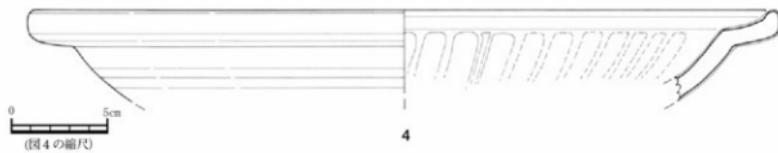
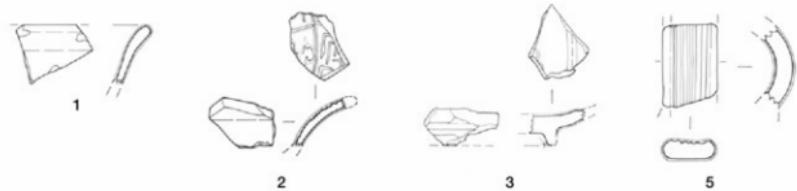
注「-」:計測不可

第74表② 埋敷きSS05 白磁・青花観察一覧

単位:cm

掲図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第35図 図版28 6	白 磁	碗	口 縁 部	器形:薄手の内側口縁碗。外面の成形が雑で軸轍痕が容易に観察できる。文様:なし。素地:淡灰白色の微粒子で、微細な黒色鉱物や気泡痕が観察できる。釉色:両面とも灰白色の透明な釉を施している。貫入:なし。中国南部の窯。14c後半~16c。	C-D-12 SS05 東側 第2層
〃 〃 7			口 縁 部	器形:反口縁碗。文様:外面口縁に呉須で太めの短巻線(雲文の一部)を描き、その下から雲堂手文(雲文、樹木)を描いている。内面の口縁部に二条一组の巻線を描いている。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色:淡灰白色の釉が両面に施されている。貫入:なし。景德鎮窯系。15c前半~16c中頃。	C-12 SS05 東側 第2層
〃 〃 8			口 縁 部	器形:直口口縁碗。文様:外面口縁に簡素化された草花文を呉須で描き、その上下に二条一组の巻線を描いている。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子で、微細な黒色の鉱物が僅かにみられる。釉色:淡灰白色の失透釉が両面に施されている。貫入:なし。福建・広東系。16c後半~17c前半。	C-D-12 SS05 西側 第2層
〃 〃 9	青 花	碗	底 部	器形:底面が窪む所謂、蓮子碗。文様:外面脇部に草花文を呉須で描き、その直下に界線で区画する。高台部から高台外面途中までの間に三条の界線を描いている。内面に太めと細めの巻線を描き、見込みに簡素化された草花文とみられる文様を描く。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子で、微細な黒色の鉱物が僅かにみられる。釉色:淡灰白色の釉を両面に施釉後に高台外面下端近くから高台内面下端までの釉を搔き取って露胎とする。貫入:なし。福建・広東系。16c中頃~後半。	C-D-12 SS05 東側 第2層
〃 〃 10			底 部	器形:底面が浅く窪む碗。文様:外面の高台脇に太めの界線を施し、高台外面に二条の界線を描いている。内面には細線の巻線と見込みに簡素化された満花文とみられる文様を描く。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色:淡灰白色の釉を両面に施釉後に疊付の釉を搔き取って露胎とする。貫入:なし。景德鎮窯系。16c中~後半。	C-D-12 SS05 西側 第2層
〃 〃 11		盤	胴 部	器形:口縁端部を欠いた鍔縁盤。文様:外面の胴部に二条の界線を描き、その直下に草花文を描く。内面の口縁部には細線描きの草花文と胴部に雲堂手文(雲文?)とみられる文様を描く。素地:灰白色の微粒子。釉色:淡青白色の釉が両面に残存する。貫入:なし。景德鎮窯系。15c前半~15c中頃。	C-12 SS05 東側 第1層 (覆土)

注「-」:計測不可



第35図 塚敷きSS05出土品③ 青磁：1～5、白磁：6、青花：7～11

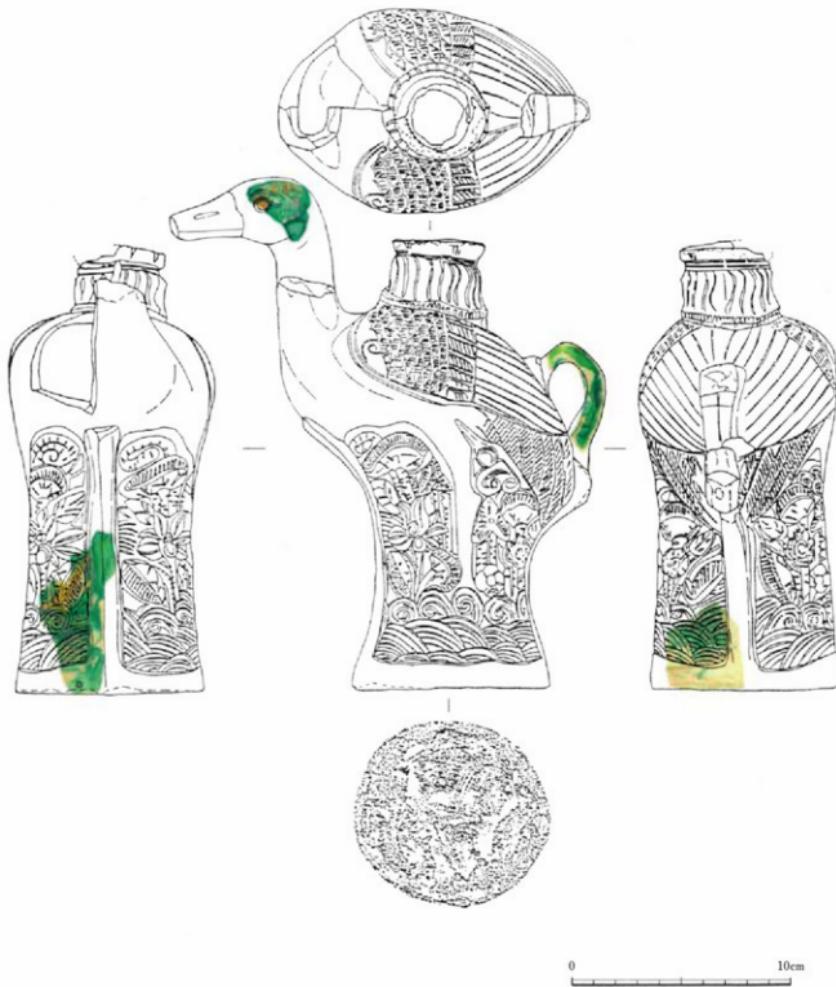
第75表 埋敷きSS05 彩釉陶器出土状況

種類	層序	C-12		C-D-12		合計	
		SS05		SS05			
		東側	西側	東側	西側		
	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層		
彩釉陶器	瓶	胸部	2			2	
		頸部	1	1		2	
		把手	1	1	1	3	
	鶴形水注	胸部	14	7	1	22	
		底部	1	1	1	3	
	鶴形・鶴形水注	口縁部	1			1	
	魚形水注	胸部	2			2	
	盤	底部		1		1	
	合 計		22	10	3	36	

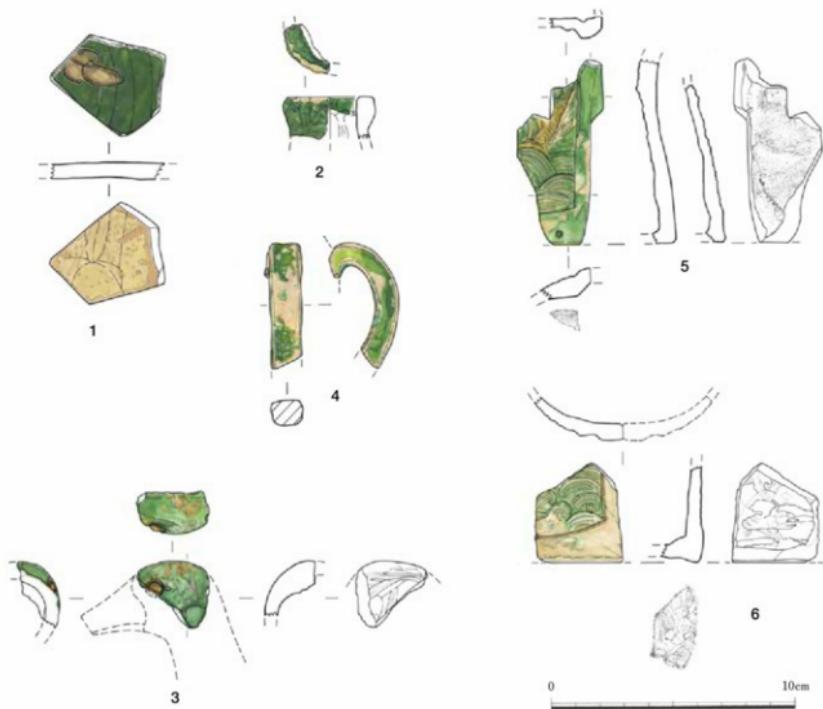
第76表 埋敷きSS05 彩釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第37図 図版29 1	盤	底部	—	器形:輪轉成形の華南三彩刻花文盤の底面破片。外面は微弱に輪轉痕が残りしている。内面は外面と比較して丁寧にナデ?で仕上げている。文様:線彫りで見込みに簡素化された刻花文の葉の部分が残存している。素地:砂質の陶土で硬質である。灰黒色の繊粒子で、粗緻な石英と細かい黒色鉱物が多量に含まれる。釉色:外面は緑色の釉を主体とするが文様の部分のみ黄緑色を施している。裏面には黄白色の化粧土が塗布されている。貫入:表面に微細な貫入がみられる。焼成:堅緻。中国南部(福建・広東)の窯。15c後半~16c。	C-12 SS05 西側 第2層
〃 〃 2	鶴形水注	口縁部	3.6 — —	器形:鶴形、若しくは鶴形水注の液体注入口の破片。文様:外面には陽文の間弁のうちある蓮弁とその直下に陰文による沈線(長短有り)と点刻文を組み合わせた二条一組の界線を型で起している。内面は口縁端近くにナデがみられ、ナデの直下に指圧痕がみられる。口縁部は窓で削られた平坦面となるが削りは稚である。素地:黄白色の繊粒子で、微細な石英が多く含まれている。釉色:緑色の釉が外面から内面口縁の途中まで施釉。貫入:微細な貫入がみられる。中国南部(福建・広東)の窯。15c後半~16c。	C-12 SS05 東側 第2層
〃 〃 3		頭部	— — —	器形:鶴形、若しくは鶴形水注の液体排出口近くの頸部破片。文様:外面に陰文の鳥の左目を型で起している。内面にはナデと指圧痕がみられる。劈開面には型同士を併せた部分が観察でき陶土同士を接合するに左上がりの沈線様の傷を入れている。素地:黄白色の繊粒子で、微細な茶褐色の鉱物が僅かに確認できる程度である。釉色:緑色の釉を主体とするが文様のある目の部分のみ黄茶色の釉を施している。貫入:微細な貫入がみられる。中国南部(福建・広東)の窯。15c後半~16c。	C-D-12 SS05 東側 第2層
〃 〃 4		把手	— — —	器形:鶴形水注の把手。陶土を細長く方柱に仕上げてそれを折り曲げて把手とする。丁寧なナデ調整で仕上げるが、左側面の右縁沿いに溝状の皺が発生している。文様:なし。上部の劈開面には把手と身部を貼り付けるために陶土の一部が幅広く外側に開いている。素地:黄白色の繊粒子で、粗緻な石英が僅かに観察できる。釉色:各面に緑色の釉を施しているが半分程度釉が剥落して下地の白化粧土が露出している部分も観察できる。貫入:微細な貫入がみられる。中国南部(福建・広東)の窯。15c後半~16c。	C-D-12 SS05 東側 第2層
〃 〃 5	鶴形水注	底部	— — —	器形:鶴形水注の底部の破片。文様:外面に波状文と蓮の花を型で起している。内面には稚なナデと指圧痕がみられる。劈開面には型同士を併せた部分から剥離した面が観察できる。素地:黄白色の繊粒子で、微細な石英が少量観察できる。稀に微細な茶褐色や黒色の鉱物が確認できる程度である。釉色:緑色の釉を主体とし、蓮の花の部分のみ黄茶色の釉を施している。貫入:微細な貫入がみられる。中国南部(福建・広東)の窯。15c後半~16c。	C-D-12 SS05 東側 第2層
〃 〃 6			— — —	器形:鶴形水注の底部の破片。文様:外面に波状文が型で起されている。内面には稚なナデと指圧痕がみられる。型同士を接合した箇所から剥離する。素地:黄白色の繊粒子で、粗緻な石英が少量観察できる。稀に1mm程度の石英が確認できる。釉色:波状文の部分のみ緑色で、文様から除外される縁部や底部は黄茶色の釉を施していたようであるが大部分の釉が剥落し、黄白色の化粧土が露出している。貫入:微細な貫入がみられる。中国南部(福建・広東)の窯。15c後半~16c。	C-12 SS05 東側 第2層

注「-」:計測不可



第36図 塗敷きSS05出土品 鶴形水注の実測図はめ込み図



第37図 塹敷きSS05出土品④ 彩釉陶器：1~6

第77表 塹敷きSS05 中国産褐釉陶器出土状況

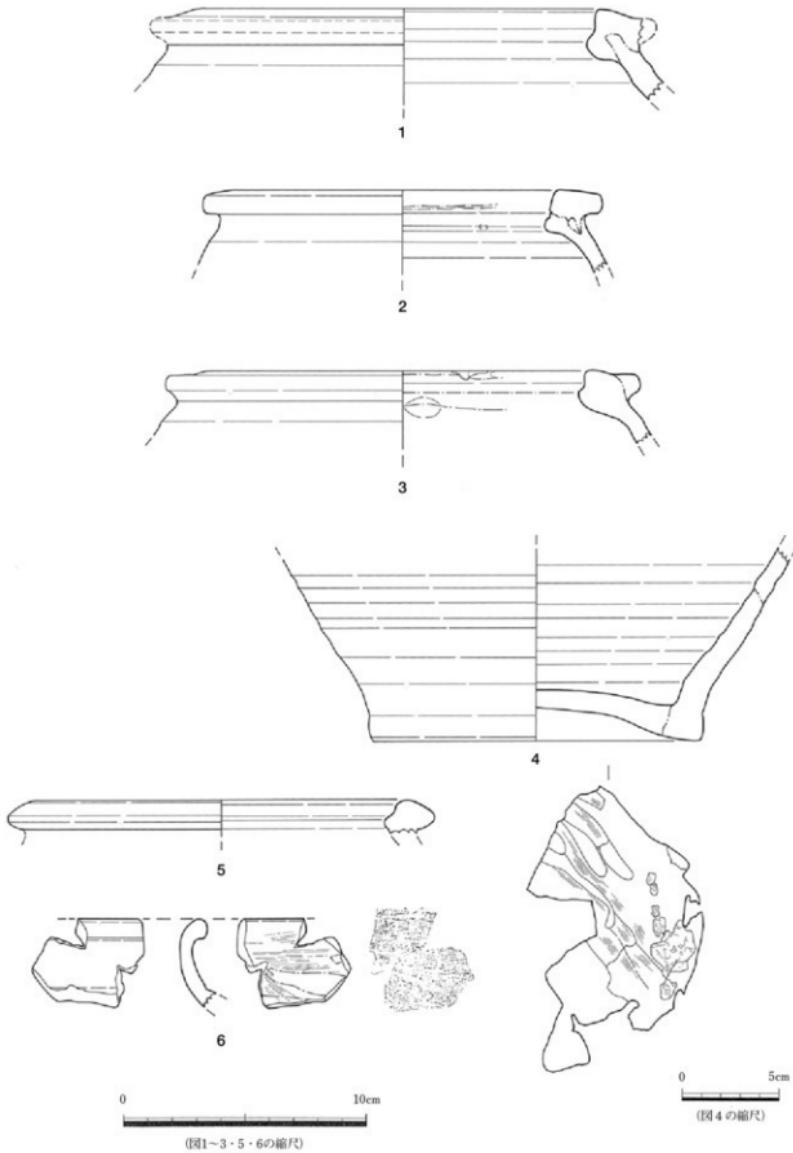
種類	層序	C-12					合計	
		SS05						
		東側		西側				
		第1層 (覆土)	第2層	第1層 (覆土)	第2層	第5層		
中国産 褐釉陶器	壺	口縁部 方形	2	3		1	1	7
		玉縁状					1	1
	耳						1	1
							2	
	頭部		2					2
	胴部		103	3	13	8	54	181
	底部		1				5	6
	不明	胴部		2				2
合計			2	111	3	13	62	200

第78表 埋敷きSS05 中国産褐釉陶器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第38図 図版30 1		口 縁 部	(20.8) — —	器形: 口縁部の縦断面が直角四形状となる怒り肩の壺。口縁部の肥厚部(陶土の継ぎ足し部分から破損)が欠落する。外面に輪轍痕が頗著にみられる。内面の口縁近くから肥厚部を深く窪ませている。この窪みが蓋を受ける際の蓋受けとなる。文様:なし。素地:淡茶紫色の繊粒子で、細かい石英と粗い鉱物(茶褐色、石英)を少量含んでいる。釉色:茶黒色の釉が両面に施されている。内面に粗い貫入がみられる。中国南部の窯。14c~15c。	C-12 SS05 東側 第2層
			16.5 — —	器形: "。口縁部に陶土の継ぎ足しが劈開面から観察できる。外面に深い輪轍痕が頗著にみられる。内面の口縁近くから肥厚部を深く窪ませている。この窪みが蓋を受ける際の蓋受けとなる。文様:なし。素地:灰白色の繊粒子で、微細な石英と粗い鉱物(茶褐色、石英)を少量含んでいる。釉色:茶褐色の釉が両面に施されている。両面に細かい貫入がみられる。中国南部の窯。14c~15c。	C-12 SS05 東側 第1層 (覆土)
			19.6 — —	器形: "。外面に浅目の輪轍痕が頗著にみられる。内面の口唇部を浅く窪ませているが、口縁近くから肥厚部は鋭角に深く窪ませている。この窪みが蓋を受ける際の蓋受けとなる。文様:なし。素地:明茶紫色の繊粒子で、微細な石英と粗い鉱物(茶褐色、石英)を少量含んでいる。釉色:茶褐色の釉が両面に施されている。両面に細かい貫入がみられる。中国南部の窯。14c~15c。	C-12 SS05 東側 第2層
" " 4		壺	底 部	器形: 上記、図1~3の怒り肩の壺の底部。外底面の縁沿いに砂胎土との目跡がみられる。底面からほぼ垂直に立ち上がり、外側に開き気味に開かせながら胴部へ直線的に移行する。胴下部の劈開面には焼成時に陶土内に残った空気が膨張して大きな空洞となっている。外面に輪轍痕が頗著にみられる。内面は難な輪轍痕と指圧痕がみられる。外底面には指ナデが僅かにみられる。文様:なし。素地:淡茶紫色の繊粒子で、微細な石英と粗い鉱物(茶褐色、石英)を少量含んでいる。釉色:茶褐色の釉が両面に施されている。外底面にも釉が施されているが雑である。二次的な火然熱を受けた釉が白濁し微細な気泡痕が部分的に観察できる。その為、貫入が確認できない。中国南部の窯。14c~15c。	C-D-12 SS05 第2層
" " 5		口 縁 部	17.6 — —	器形: 口縁部の縦断面が直角四形状となる怒り肩の壺。上記、図1~3の口縁部との違いは口唇部が平坦面を形成しない点と釉薬が異なる点などである。内面の口縁近くから肥厚部を深く窪ませている。この窪みが蓋を受ける際の蓋受けとなる。文様:なし。素地:黄白色の繊粒子で、細かい石英と粗い鉱物(茶褐色、黒色、石英)を少量含んでいる。釉色:黄色の釉が両面に施されている。内面に粗い貫入がみられる。中国南部の窯。15c。	C-D-12 SS05 第2層
			— — —	器形: 玉縁状の肥厚口縁を有するナデ肩の壺。口縁部に微弱な玉縁状の肥厚を造り口唇部が舌状となる。文様:なし。素地:黄白色の繊粒子で、細かい石英と粗い鉱物(茶褐色、黒色、石英)を少量含んでいる。釉色:白濁した白色の釉が両面に施されているが、内面の施釉は頭部近くまで雑に施している。細かい貫入がみられる。中国南部の窯。15c~16c。	

注 ( ):推定、「-」:計測不可



第38図 塚敷きSS05出土品⑤ 中国産褐釉陶器：1～6

第79表 埋敷きSS05 本土産磁器出土状況

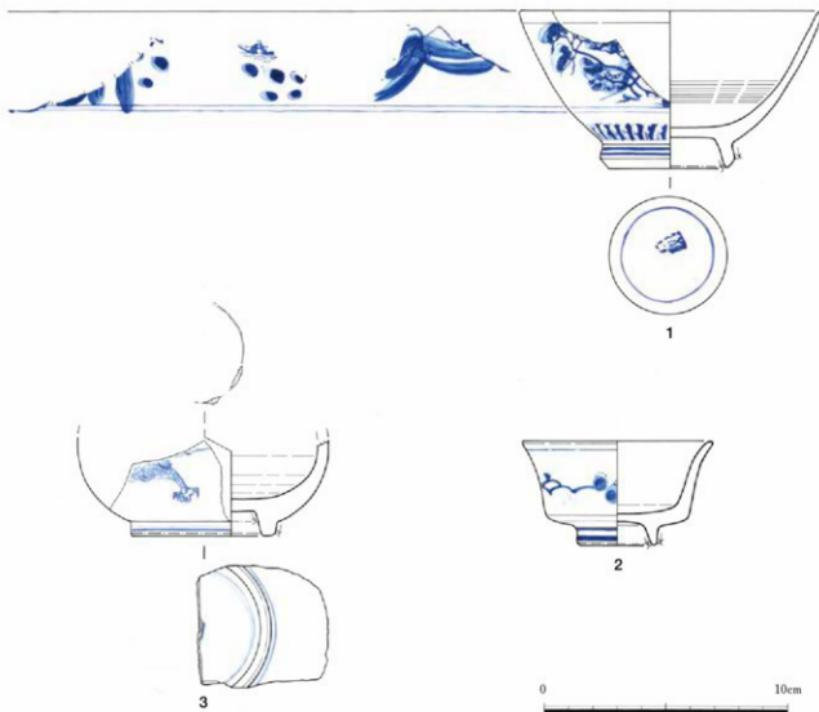
種類	層序	C-12		C-D-12		合計		
		SS05		SS05				
		東側	西側	第2層	第2層			
		第1層 (覆土)	第2層	第2層	第2層			
本土産 磁器	碗	口縁部～底部		2		2		
		クロム青磁			1	1		
		クロム青磁、ロサビ、 掛けわけ、印判染付	近現	1		1		
		胴部	印判染付			1		
		底部	クロム青磁	1		1		
		小皿	印判染付、銅版転写			1		
			クロム青磁	1		1		
		底部	印判染付(ヌタブリ+銅版?)			1		
		皿	印判染付、型紙		1	1		
			印判染付(型紙転写とダミ)		1	1		
小皿	鉢	胴部	印判染付、銅版染付	1		1		
		胴部	近現	1		1		
		香炉	クロム青磁	1		1		
		円筒形容器	近現	2		2		
		置物(鳥形)		1		1		
		壺or瓶		1		1		
		不明	口縁部	ロサビ、印判染付	1	1		
			胴部	近現	3	4		
			不明	近現	1	1		
合 計				1	16	1		
					6	24		

第80表 埋敷きSS05 本土産磁器観察一覧

単位: cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第39図 図版31 1	碗	口 縁部 底部	12.4	器形: 統制陶器の型物碗。高台の横断面が「ハ」の字状に外側に開き、豊付が尖る。文様: 外面は胴部に「松」「山」「海+舟と漁夫」、胴下部に二条の界線を施し、界線直下の高台際から高台脇に簡素化された「波溝文」が施されている。高台外側の中央にも二条の界線を施している。高台外底面の縁沿いに纏線を施し、中央に生産者(生産工場)表示記号(番号)である「漸」「1」が確認できる。素地: 光沢のある白色。釉色: 両面とも白色の釉を施すが高台下端部から高台内面までの釉が焼き取られ露胎となる。口唇部に茶褐色の釉が施されている。漬戸系。昭和初期(昭和15年~昭和21年)。	C-12 SS05 東側 第2層
			6.5		
			5.6		
〃 〃 2		口 縁部 底部	7.8	器形: 統制陶器の型物小碗。腰折れの小碗で口縁部が外側に外反する。文様: 外面の縁部に界線と胴部に省略された「花唐草文」とみられる文様が施されている。高台際と高台脇にそれぞれ一条を施し、高台外面の下寄りに幅広の界線を施している。素地: 光沢のある白色。釉色: 両面に薄い緑色の釉を施した後に豊付の釉を焼き取って露胎とする。両面とも白色の釉を施すが高台下端部から高台内面までの釉が焼き取られ露胎となる。口唇部に茶褐色の釉が施されている。漬戸系。美濃系。昭和初期(昭和15年~昭和21年)。	C-12 SS05 東側 第2層
			4.3		
			3.3		
〃 〃 3	壺 or 瓶	底 部	—	器形: 壺、若しくは瓶。高台脇から丸味を持たせて胴部に移行する。内面に回転擦痕が観察でき見込みに重ね焼きの胎土目の痕がみられる事からすると広口の壺などが考えられる。文様: 外面の胴部にかぎ爪の5爪龍が施されている。界線は高台脇に一条と高台外面途中に二条一組の計、三条が施されている。素地: 光沢のある白色。釉色: 外面のみ白色の釉を外底面まで施した後に高台外面下端から高台内面途中までの釉を焼き取って露胎とする。内面は露胎のままである。肥前系。明治後半~大正。	C-12 SS05 東側 第2層
			6.0		

注「-」: 計測不可



第39図 塹敷きSS05出土品⑥ 本土産磁器：1～3

第81表 塹敷きSS05 沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器出土状況

種類		層序		C-12		C-D-12		合計	
				SS05		SS05			
		東側	西側	第1層 (覆土)	第2層	東側	第2層		
沖縄産 施釉陶器	碗	胴部		3				3	
		底部		1				1	
	皿	口縁部					1	1	
	鉢	口縁部				1	1	2	
		胴部		1				1	
	壺	口縁部		1				1	
	鍋	胴部		1				1	
	急須	蓋		2				2	
		胴部		3			2	5	
		底部		1			1	2	
大型急須(アンビン)	底部					1		1	
	酒器	底部					1	1	
	火鉢	底部		1				1	
	合計			0	14	0	1	22	
沖縄産 無釉陶器	障子	口縁部		1				1	
	瓶or壺	底部		1				1	
	不明	胴部		1	6	1	1	10	
	合計			2	7	1	1	12	

第82表① 埼敷きSS05 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土点 出土層
第40図 図版32 1	皿	口 縁 部	13.0 — —	器形:外反口縁の白釉皿。外面に輪轍痕が頗著にみられる。内面は丁寧な成形。内面の腰下部に釉の掻き取りがみられる。文様:なし。素地:淡橙白色の細粒子で、微細な黒色鉱物と気泡痕が僅かにみられる。釉色:白濁した黄白色の釉が両面にみられる。貫入:なし。	C-D-12 SS05 東側 第2層
〃 〃 2	鉢	口 縁 部	26.0 — —	器形:内彎口縁の大鉢。口唇部を舌状に尖らせている。内外面の器面の成形は丁寧で輪轍痕が僅かに観察できる程度である。文様:口縁に幅広の丸籠工具で界線を二条施している。素地:淡黄白色の細粒子で、微細な黒色鉱物と気泡痕が僅かにみられる。釉色:外面が茶褐色の透明釉を施し、内面が白濁した黄白色の釉を施している。両面に細かい貫入がみられる。	C-D-12 SS05 東側 第2層
〃 〃 3	壺	口 縁 部	12.4 — —	器形:小振りの玉縁口縁の壺。口唇部に重ね焼きの砂胎目の目痕がみられる。器面の成形は外面が丁寧で、内面に輪轍痕や擦痕が僅かに観察できる。文様:なし。素地:精選された光沢のある茶紫色の微粒子で、微細な石英と粗い石英が僅かに含まれている。釉色:茶褐色の釉を外面から内面まで施しているが、部分的に口唇部の露胎や内面胴部の釉が薄くなっている部分もあり難な仕上げとなっている。貫入はない。	C-12 SS05 東側 第2層
〃 〃 4	( アン型 急須 )	底 部	— — 10.0	器形:大型の急須の底部破片。俗称「アンビン」と称されるものである。器面調整は丁寧で外面の高台間に回転擦痕がみられ、高台脇に削りが入る。高台外面はカンナによる回転削りがみられる。内面は胴部に回転擦痕がみられ、胴下部から内底面に刷毛目調の粗密な条痕がみられる。疊付は平坦で回転圧痕がみられ丁寧に仕上げている。高台の内割りと外底面の仕上げは丁寧な回転擦痕と回転擦痕がみられる。文様:なし。素地:灰白色の細粒子で、微細な石英が僅かに観察できる。釉:粗い石英と微細な黒色鉱物や茶褐色の鉱物がみられる。その他に細かいと気泡痕がもみられる。釉色:外面にのみ施釉、内面は下地の茶紫色の成化土を高台外面に施し、高台脇から茶黒色釉を施している。貫入:なし。	C-D-12 SS05 東側 第2層
〃 〃 5	急須 の 蓋		外径8.5 高さ(3.75) 内径6.0	器形:線彫りの三彩急須の蓋。撮みが欠落するが、扁平な宝珠様の撮みとして復元した。蓋甲内面に丁寧な回転擦痕がみられ、部分的にナデもみられる。蓋甲内面の縁よりの突出部も緻密な回転擦痕と繩かく回転擦痕で丁寧に成形されている。文様:蓋甲縁沿いと蓋甲中央に線彫りの二重圓線を描き、中央の圓線から花弁を線彫りで丁寧に描き、花弁内を斜沈線で埋めている。素地:淡黄白色の細粒子で、微細な黒色鉱物と気泡痕が僅かにみられる程度である。釉色:蓋甲外面上のみ白濁した黄白色の釉を施している。急須は淡い藍色で圓線や花弁の輪郭にのみ施し、花弁内には黄茶色の釉を施して花弁を強調する。貫入:細かい貫入がみられる。	C-12 SS05 東側 第2層
〃 〃 6	酒 器	底 部	— — 8.0	器形:酒器(俗称:カラカラ)の底部。外底面に重ね焼きの際に付着した釉薬が弧状にみられる。高台に内側に傾斜する蛇ノ目状の高台で、高台内側も微弱で浅い。内面は丁寧な輪轍痕が観察できる。文様:なし。素地:精選された光沢のある灰白色の微粒子で、微細な石英と黒色鉱物が僅かに含まれている。釉色:灰白色の透明釉を外表面の底面まで施した後に蛇ノ目状となる範囲の釉を掻き取って露胎とする。内面への施釉はない。細かい貫入がみられる。	C-D-12 SS05 第2層

注「—」:計測不可、( )推定

第82表② 塙敷きSS05 沖縄産無釉陶器観察一覧

単位:cm

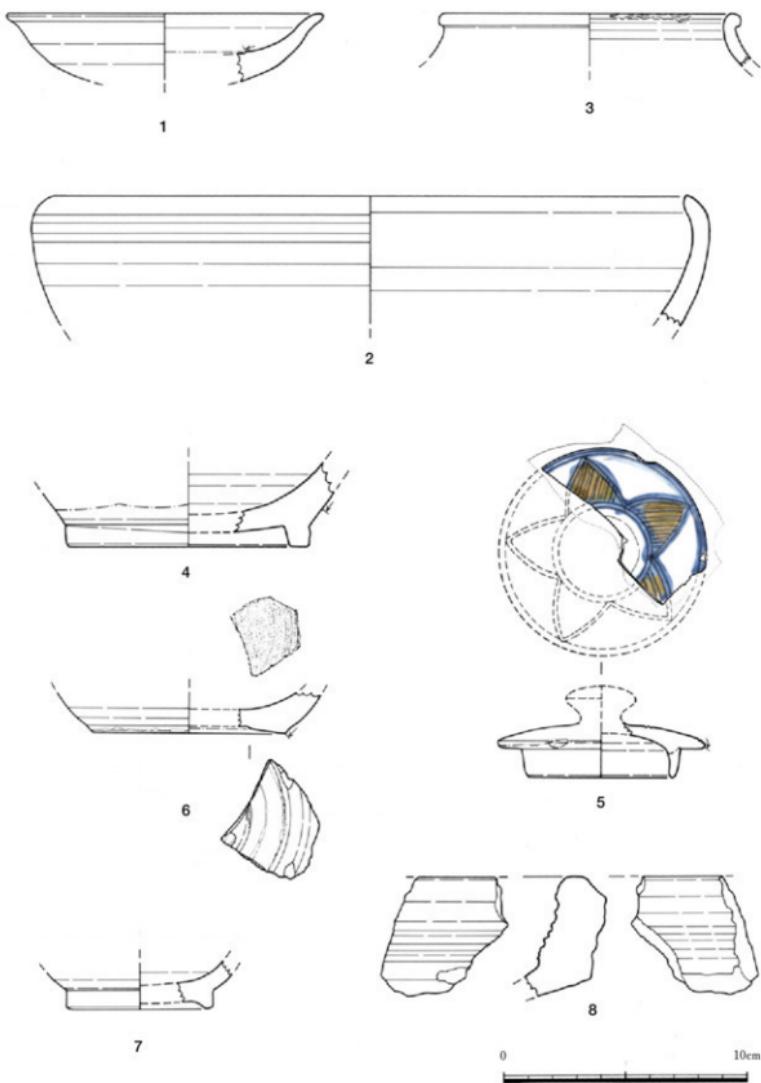
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第40回 図版32 7	瓶 or 碗	底部	— — 6.0	器形:瓶、若しくは碗の底部。高台の造りや器面調整は粗雑であることから瓶の底部が考えられる。外面の高台部分から高台径までカーナによる削りで、高台外面に刷毛目様の擦痕がみられる。豊付は器面の保持が悪く、残存部で僅かに削りの痕跡が窺える程度である。高台内面(内削り)を斜位に削り出して成形する。外底面も雑で回転擦痕と刷毛目様の削りがみられる。内面は外面より丁寧なナデを主体とするが部分的に指圧痕が確認できる。文様:なし。素地:茶紫色の粗粒子で、微細な石英と細かい茶褐色や白色の鉱物が僅かに含まれている。	C-12 SS05 東側 第1層 (覆土)
〃 〃 8	陶管	口縁部	— — —	円筒状ソケット型土管で輪轤成形の連結部の広端部の破片、外面に起伏のある粗目の輪轤痕がみられる。広口の口縁部と肥厚帯上部にも輪轤痕がみられる。口唇部は丸味を持たせて成形する。外面肥厚帯部での最大直径推定24.1cm 広口の外側口縁部での推定外径22.3cm 広口の内側口縁部での推定内径19.0cmを測った。内面の口縁直下に6本櫛で深目の櫛目がみられる。素地:茶紫色の粗粒子で、粗繊な石英が多量に混入する。釉色:褐色の釉を両面に施しているが、外面の肥厚帯下端の釉は鱗剥れた状態となっている。壺屋焼。大正末期～昭和初期。陶管の類例は壺屋古窯群(註1)、中城御殿跡(註2)などで出土している。	C-12 SS05 東側 第2層

注「—」:計測不可

## 註文献

註1. 那霸市文化財調査報告書第23集『壺屋古窯群 I -個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査-』那霸市教育委員会 1992年3月。

註2. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集『中城御殿跡-県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)-』沖縄県立埋蔵文化財センター 2011年3月。



第40図 塚敷きSS05出土品⑦ 沖縄産施釉陶器：1～6、沖縄産無釉陶器：7・8

第83表 埼敷きSS05 骨製品・石・石製品・円盤状製品出土状況

種類	層序	C-12				C-D-12	合計	
		SS05				SS05		
		東側		西側		第2層 下部		
		第1層 (覆土)	第2層	第2層	第2層 下部			
骨製品	筒状骨製品	ウシ	肋骨?		1		1	
	合 計		0	0	1	0	1	
石・石製品	硯片	粘板岩		1			1	
		砂岩		1			1	
	石材	敷石片 細粒砂岩(ニーピ)		1			1	
		細粒砂岩(ニーピ)			3	3	7	
		河原石	1	3			4	
	合 計		1	6	3	3	14	
円盤状 製品	中国産褐釉陶器		1				1	
	沖縄産無釉陶器			1		1	2	
	合 計		1	1	0	0	1	
							3	

第84表 埼敷きSS05 金属製品出土状況

種類	層序	C-12				C-D-12	合計	
		SS05				SS05		
		東側		西側		第2層		
		第1層 (覆土)	第2層	第1層 (覆土)	第2層			
金属製品	工具類・ 生産用具	丸釘	完形	中	鉄	1	2	
			頭部欠損	中	鉄	1	2	
		角釘	完形	中	鉄	3	3	
			先端部欠損	中	鉄	1	3	
	釘 (形状不明)	先端+頭部欠損	中	鉄			4	
		頭部欠損	不明	鉄		4	4	
	生活用具	鍋	先端+頭部欠損	不明	鉄	4	4	
			口縁部	鉄		1	1	
	武具	札		鉄		2	2	
				鉄		4	4	
		鎖		鉄		1	1	
	武器	覆輪		青銅	1		1	
				鉄	9	1	10	
		砲弾片		青銅	3	4	7	
	不明			鉄	3	1	9	
		不明		青銅		1	1	
				不明			11	
	近現	金具		不明		1	1	
		合 計			1	22	15	
					2	22	74	

第85表 埋敷きSS05 骨製品・石製品・石器(線刻石器)・円盤状製品観察一覧

単位:cm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	残存長(縦) 残存幅(横)	残存厚 重量	観察事項	出土地点 出土層	
第41図 図版33 1	骨製品 鍾状骨製品		3.95 1.7	0.25 1.6	ウシの骨を利用した鍾状骨製品。横断面が扁平な隅丸台形状を呈する。上部端近くに青銅製の丸新(残存長:6.86mm、頭部最大直径:1.79mm、身部幅:1.73mm)に座金具(外径3.29mm、厚さ1.27mm)を取り付けて打ち込まれている。上部縁辺部と両側を刃物で斜位に面取成形後に縁辺部を直角に面取を行っている。表面は丁寧に削られた磨面となっている。裏面は削りの方向が右下から左上方に継目の線状痕が一定方向に走っている。新の入った部分のみ横位方向に粗目の削り痕(線状痕)がみられる。用途としては扇子、籌木などに利用されたかもしねしないが判然しない。	C-12 SS05 西側 第2層
〃 2	硯		3.21 6.0	2.2 40.7	硯の海部が残存。海部に使用した摺り墨、若しくは塗布墨とみられるものがご飯の焦げ状となる。裏面を除く各面とも丁寧で平滑に仕上げられているが素材が砂岩質のため研磨痕は確認できない。裏面も平坦であるが部分的に鉛物が抜け落ちてアバタ状となる。軟質の灰白色の砂岩。	C-12 SS05 東側 第2層
〃 3	石製品 ・石器 (線刻石器)	砥石 ・線刻石器	14.0 12.2	最大3.7 最小3.1 1.08kg	細粒砂岩製の砥石。砂岩の大型破片を利用した砥石で、平面観が歪な五角形状となる。正面の右下が自然面とみられ磨面様となる。正面の砥石として使用面となるが、低平面には細かい線彫りで左上に低平な波と船の帆を二枚に重ねた「大型帆船(進賈船か)」、その右となりに低平な波と「一枚帆の船」、中央より右斜め下には、「波」と菱形に目を入れた「魚の頭」、中央より下に「口」の字と「大」の字を合わせたような合わせ文字などが彫かれている。線彫りの部分は使用痕(条痕)は潰れて磨面となり観察がしにくい。裏面には剥離面が部分的に残存する砥面となるが正面より使用頻度が少ないが、刃物などの研いだ際にみられる使用痕(条痕)が正面よりも多く観察できる。正面と同様に線彫りで右下寄りに「帆船(船、旗、マスト、人)」、「魚の頭と背鰭」を「波」と同化させた文様がみられる。中寄りに「天幕のある和船と人物」、その左側には、「飛翔する鳳凰と菊花」を沈線彫りと浮彫りで描いている。側面(右下側面)にも「帆船と魚」、左側に「難破船(竜骨)と高潮」が不鮮明ながら描かれている。当該線刻画の製作時期は、正殿を含む6施設が再建された1712年以前(18c初頭)から共伴する遺物の時期が17世紀として考えられる。	C-11 SS01 第1層
〃 4	円盤状製品	遊具	4.7 4.7	1.1 39.4	沖縄産無釉陶器の壺の肩にある二条界線(幅2.3mmの丸彫り工具で施文)のある部分を利用した遊具。加工は主に表面から打削している。打削した外周縁面には研磨はみられない。素地:光沢のある茶紫色の微粒子で、微細な石英と微細な黒色や茶褐色の鉱物が僅かに確認できる。外面に黄茶色の泥釉が塗布されているが細かい剥離れが発生している。裏面は回転擦痕が顕著にみられる。裏面の色調は赤茶色を帯びている。	C-D-12 SS05 第2層
〃 5			3.3 3.3	1.0 14.4	沖縄産無釉陶器の擂鉢の胴部片を利用して作られた遊具。内面に横で12条一組の櫛目を施している。加工は表面から打削している。打削した外周縁面には僅かに研磨がみられる程度である。また、剥離面の縁沿いが使用によって角が潰れ钝角となる部分も僅かに観察できる。素地:光沢のある茶紫色の微粒子で、微細な石英と微細な茶褐色の鉱物が僅かに確認できる。外面に暗褐色の泥釉が塗布されている。裏面の色調は赤茶色を帯びている。	C-12 SS05 東側 第2層

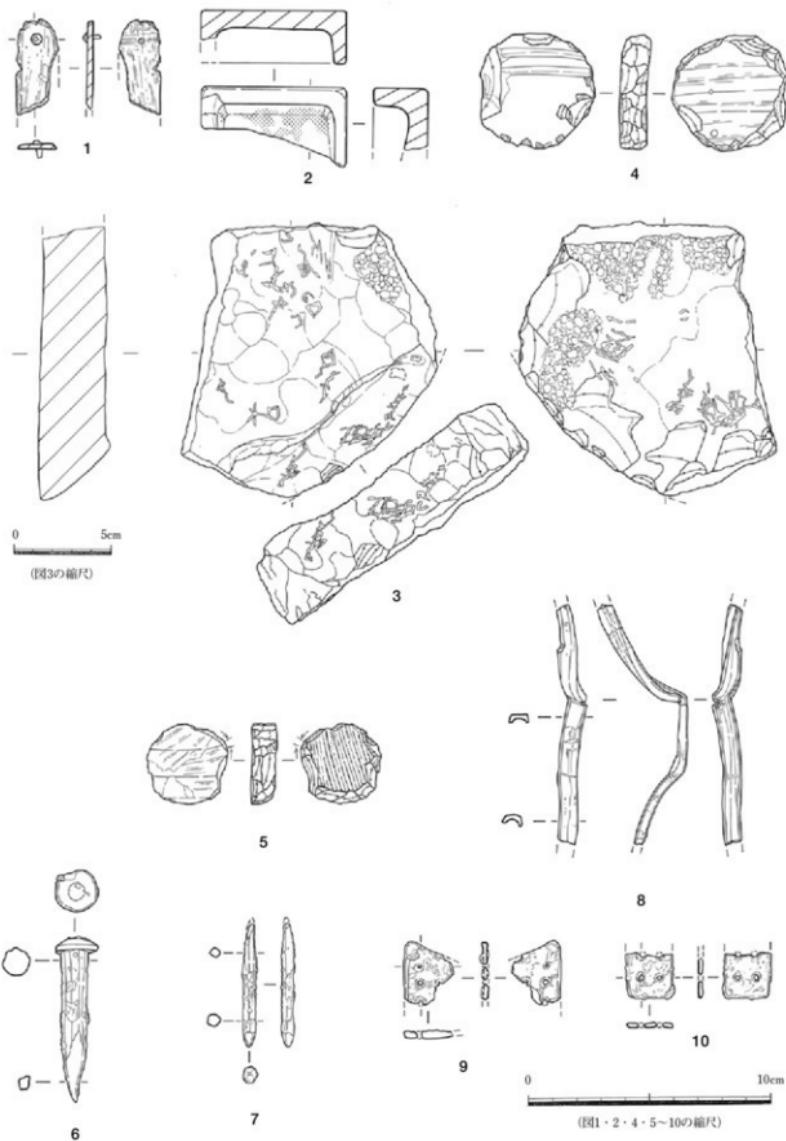
第86表 塗敷きSS05 金属製品観察一覧

単位:mm/g

攝図番号 図版番号 遺物番号	分類・ 名称・ 仮称	材質	残存長(縦) 残存幅(横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観察事項	出土地点 出土層
第41図 図版33 6	工具類・ 生産用具	釘 鉄製品	68.0 10.74 頭部 16.92 17.72	10.76 3.20 34.2	頭部の平面觀が円形で、身部の横断面が丸味を持ち身部から先端にかけての横断面が方形状となる釘。形態からすると近・現代の時期にみられる和船(天馬船)用の俗称「タック釘」(註1)と称される釘の範疇に含まれるが、身部および先端の形態が両刃状のではなく、方形状となるところが異なっている。船釘を再利用した可能性が高い。長さが46.8cmを測ることから2寸程度の釘となる。頭部の縁辺部は面取された小さな面を持って外周縁部となる。全体的に錆止めや剥離がみられる。部分的に錆汁が小さな砂礫を取り込んで凝固している。	C-12 SS05 東側 第2層
〃 〃 7			50.14 4.96	5.55 3.09 3.8	雖、若しくは現代の普通釘と称されるものに近似するが、身部上部の身が細くなっていることから錆などの用途が考えられるところである。身部の横断面が円形状となるが、身部下端の先端近くの横断面が方形状となっている。先端および方形状となる角の部分が摩滅する。全体的に錆が発生し、身部中央付近で錆による剥離や鱗がみられる。	C-12 SS05 東側 第2層
〃 8		覆輪 青銅製品	99.5 7.38	3.97 1.60 15.1	覆輪の金具、若しくは調度品の縁金具や帯金具などの破片とみられる。横断面の形状が「コ」の字状となる点と裏面の溝が浅いことなどから調度品などの縁金具の可能性も考えられるところである。裏面に錆青が発生するが特に内面が著しく縁沿いが部分的に錆青によって浸食されて欠落する。	C-12 SS05 東側 第2層
〃 9	武具	札 鉄製品	26.0 20.6	3.12 1.88 3.0	盛上札の札頭の破片。孔は1行3孔の存在が確認できる程度である。劈開面から観察では鉄素材が少なく鉄錆の膨張で地金の大半が失われ空洞となっている。表裏面とも錆膨れが著しい。札の縁沿いは肥厚した縁取りとなっていたようである。	C-12 SS05 西側 第5層
〃 10			19.0 20.0	1.96 1.70 2.1	札の札足部分が残存する。2行4孔の存在が窺える。横断面の観察からすると地金の一部に剥離がみられる。表面は錆止め、そして錆止めの被膜痕や錆汁がみられる。裏面に錆汁が凝固しアバタ状となる部分がみられる。	C-12 SS05 西側 第5層

## 註文献

註1. 沖縄県文化財調査報告書 第101集『西表島 船浦スラ所跡-港湾施設用地工事等に伴う発掘調査』沖縄県教育委員会 1991年3月。



第41図 塚敷きSS05出土品⑧ 骨製品：1、石製品：2・3、円盤状製品：4・5、金属製品：6～10

第87表 塗敷きSS05 二次的火熱溶解銭貨

銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
開元通寶(唐621年初鑄) or (唐845年初鑄) or (南唐960年初鑄)	1片	1.79	「元」・「通」の二字が残存	C-D-12 SS05 第2層
開元通寶(唐845年初鑄)	1片	1.29	「開」・「寶」の二字が残存	C-D-12 SS05 第2層
至道元寶(北宋995年初鑄)	1片	0.44	「道」の一字が残存	C-D-12 SS05 第2層
咸平元寶(北宋998年初鑄)	2片	4.91	(上)「咸」・「平」・「元」の三字と 「寶」の一部が残存	C-D-12 SS05 第2層
	1片	0.75	「咸」の一子が残存	C-D-12 SS05 第2層
景德元寶(北宋1004年初鑄)	1片	2.58	「景」・「德」・「寶」の三字が残存	C-D-12 SS05 第2層
(上) 皇宋通寶(北宋1038年初鑄) (下)	2片	4.05	(上)「宋」・「寶」の二字が残存 (下)「天」・「寶」の二字と 「藉」の一部が残存	C-D-12 SS05 第2層
天祐通寶(北宋1017年初鑄)				
至和通寶(北宋1054年初鑄)	1片	1.53	「寶」の一子が残存	C-D-12 SS05 第2層
(上) 紹聖元寶(北宋1094年初鑄) (下)	2片	5.48	(上)「紹」・「聖」・「元」の三字が残 存 (下)「熙」・「寧」の二字が残存	C-D-12 SS05 第2層
熙寧元寶(北宋1068年初鑄)				
元豐通寶(北宋1078年初鑄)	1片	1.53	「元」・「通」・「寶」の三字が残存	C-D-12 SS05 第2層
元祐通寶(北宋1086年初鑄)	1片	0.87	「祐」の一子が残存	C-12 SS05 東側 第2層
元祐通寶(北宋1086年初鑄) or 元符通寶(北宋1098年初鑄)	1片	1.95	「元」・「寶」の二字が残存	C-12 SS05 西側 第5層
政和通寶(北宋1111年初鑄)	1片	2.05	「政」の一子と「通」の一部が残存	C-D-12 SS05 第2層
政和通寶(北宋1111年初鑄) or 宣和通寶(北宋1119年初鑄)	1片	0.83	「和」・「通」の二字が残存	C-D-12 SS05 第2層
紹興元寶(南宋1131年初鑄)	1片	6.20	「紹興元寶」の四字が残存 背面に「月」	C-D-12 SS05 第2層
洪武通寶(明1368年初鑄)	1片	2.58	「洪」・「武」・「通」の三字が残存	C-D-12 SS05 第2層
	1片	1.41	「洪」・「寶」の二字が残存	C-D-12 SS05 第2層
	1片	2.95	「元」・「寶」の二字が残存	C-D-12 SS05 第2層
	5片	12.51	(上)「開」の一子が残存	C-D-12 SS05 第2層
不明銭貨	1片	0.60	「通」の一子が残存	C-D-12 SS05 第2層
	1片	0.61	「通」の一子が残存	
	14片	8.87	判読不可	
	1片	0.92	判読不可	
合計	43			

第88表 塗敷きSS05 ガラス玉・プラスチックひねりこま出土状況

種類	層序		合計
	C-12	C-D-12	
	SS05	SS05	
ガラス玉	II類	青色	1 1
合計	0	1	1
プラスチックひねりこま	1		1
合計	1	0	1

第89表① 塙敷きSS05 錢貨観察一覧

単位:mm/g

押出番号 国版番号 造幣番号	銭種	鉄 鋳造年 類	初 年	材 質	設 み 方	状 態	書 体	内 郭 外 径 A B	内 郭 内 径 C D	方 穿 E F	断面計測部位			重量	観察事項	出土点 出土層
											①	②	③			
第42回 国版34 1	開元通寶	模 铸 錢	唐 845年	銅 錢	対 読	破 損	楷 書	—	—	—	0.71	0.65	0.81	1.29	唐代の開元通寶で小型銭と一致するが背面に铸造地の地名がある所謂「紀地銭」(注1)の特徴である字跡が欠落。器厚(内郭:厚さ0.91mm、字款部の厚さ0.57mm)の薄さ、背面に孔郭が存在しない、内郭の一部のズレ、字款の「寶」の「日」の字が右上に印ることなどからする模铸錢の可能性が高い。	C-D-12 SS05 第2層
# # 2	至道元寶	模 铸 錢	北宋 995年	銅 錢	回 読	破 損	行 書	—	—	—	0.84	0.62	0.76	0.44	至道元寶の「道」の字款が残存。器厚(内郭:厚さ30.81mm、字款部分の厚さ5.79mm)と薄い。背面には緑青の影響を受けて器面が微細なアバタ状となる。	C-D-12 SS05 第2層
# # 3	咸平元寶	公 铸 錢	北宋 999年	銅 錢	回 読	破 損	楷 書	—	—	—	1.40	—	—	4.91	錢貨が2枚二次的な火熱を受けて縮んだ資料である。左斜の下は切断(切斷部分に新たな面が形成された可能性が高いため)から青銅製品を作成する為に溶解目的で使用された銭で、溶解の際に銭を細分化して鋸歯の中に投入した可能性を示す資料として考えられた。	C-D-12 SS05 第2層
# # 4	景德元寶	公 铸 錢	北宋 1004年	銅 錢	回 読	破 損	行 書	— 25.14	20.64	6.58 5.99	1.38	0.53	1.01	2.58	「景」・「德」・「寶」の字款が3字が残存し、「元」の字款は僅かに「一」の字款のみが残存する。特に「德」・「寶」の字款が最も薄い。背面にも面が緑青の緑の影響を受けて部分的に浸食されている。両面に鉄錆の跡合が付着している。	C-D-12 SS05 第2層
# # 5	天祐通寶 （下通寶） （上通寶） 不明	(上) 北宋 1039年 (下) 北宋 1017年	(上) 銅 錢	(上) 対 読	(下) 破 損	(上) 筆 書	26.16 (下) 25.45	—	—	1.44	—	—	4.05	錢貨が2枚付着した銭。上の銭は「宋」・「寶」の2字が判別でき、下の銭は字款が確認しているが「天」・「祐」の2字が「組」の字の上端の字の一體が確認できた。2枚とも緑青の影響を受けているが特に下の銭は組合せ付着による砂粒の付着が確認できる。	C-D-12 SS05 第2層	
# # 6	元祐通寶	公 铸 錢	北宋 1096年	銅 錢	回 読	破 損	篆 書	—	—	—	1.23	0.63	0.89	0.87	「祐」の字款のみ残存。字款が若干摩滅する。背の内郭に鉄錆が付着する。	C-12 SS05 東側 第2層
# # 7	元符通寶 元祐通寶 r	模 铸 錢	北宋 1086年 or 1096年	銅 錢	回 読	破 損	篆 書	20.72 (25.08)	—	7.0	1.00	0.43	0.84	1.95	「元」・「寶」の2字しか確認できなかった為、「元祐通寶」が「元祐通寶」よりも何かの銭とみられる。緑青の影響が強く、界面から地金の空洞化などの部分が存在する。また、内郭部分には緑青の浸食や微細な穴も確認できる。	C-12 SS05 西側 第5層
# # 8	熙寧通寶 （下通寶） （上通寶） 不明	(上) 北宋 1094年 (下) 北宋 1068年	(上) 銅 錢	(上) 回 読	(下) 破 損	(上) 行 書	26.31 23.39	—	7.82 7.85	25.10	—	—	5.48	錢貨が2枚付着した銭。上の銭は「寶」の字が摩滅して緑青の影響で判別しにくい。下の銭は摩滅して緑青の影響が強い。「熙」・「寧」の字款が半ばうつりで確認できる。2枚とも二次的な火熱を受けて上の銭の字が「組」の字の上に別の銭の内郭が部分で溶け付着している。両の面の破損面も溶解してクロト状となる。下の銭も緑青の影響を強く受けて内郭に微細な穴が空いている。	C-D-12 SS05 第2層	
第43回 国版35 9	政和通寶	公 铸 錢	北宋 1111年	銅 錢	対 読	破 損	分 楷 書	—	—	—	1.31	1.08	1.34	2.05	公鉄錢の折二銭。字款は「政」と「通」の一部が残存する。「政」の字の下に孔郭から見て「正」の字款が左下に「行」・「文」・「大」が「組」の字の上に重なっている。背の内郭と内側の段差が微弱で確認しづらいが中国製の公鉄錢と判断される。両面とも緑青の影響を受けて器面の保持が悪く、微細な剥離跡がみられる。	C-D-12 SS05 第2層
# # 10	紹興元寶	公 铸 錢	南宋 1131年	銅 錢	回 読	破 損	篆 書	29.19 28.64	25.57 25.42	7.72 8.45	1.54	0.87	1.26	6.20	背面に「三日月」のある背「上月」のある正規銭。僅かに左下が欠損する。両面とも緑青がみられ緑細なアバタ状となる部分や変形した際に生じた剥離跡がみられる。国内の動遷からみて未発見の資料のようである(註2)。	C-D-12 SS05 第2層
# # 11	洪武通寶	公 铸 錢	明 1368年	銅 錢	対 読	破 損	楷 書	23.49 —	18.56 —	5.90	1.50	0.80	1.42	2.58	洪武通寶の中でも最も小さい銭形で铸造された「小平銭」と記される。面は緑青の影響を受けて微細なアバタ状となり、器面の一部が剥離する。背は面より緑青の影響が弱く、内郭や孔郭も鮮明である。また、背には铸造地を示す文字があるが、当該製品には文字が存在する部分が破損しているのが残念である。	C-D-12 SS05 第2層

注 () :推定、(−):計測不可

第89表② 埋敷きSS05 銭貨観察一覧

単位:mm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	銭種	鉄 造種類	初 年	素 材	設 み 方	状 態	書 体	内郭外 径			内郭 内径	方穿	断面計測部位			観察事項	出土点 出土層	
								A B	C D	E F			①	②	③			
第43図 図版35 12	不明	不明	不明	銅 銭	不明	破 損	楷 書	26.47	—	—	33.53	—	3.12	—	—	12.51	二次的な火熱を受けて5枚の銭貨が溶着する。 5枚とも溶解によって錢形が保けて再凝固の状態となる。 最上位にある1枚目の破片にのみ 「開」の字跡が観察できる。「開」の字跡がある 銭貨には15種類が存在するが、南唐の開元通寶(960年初鑄造)、唐の開元通寶(845年初鑄造・621年初鑄造)の3種類が該当するようである(註3)。	C-D-12 SS05 第2層

注「—」:計測不可

## 註 文 献

註1. 永井久美男『日本出土銭絶覧 1996年度版』兵庫埋蔵銭調査会 成友印刷株式会社 1996年6月10日 第2刷。

註2. 下関市立大学経済学部 教授 櫻木 晋一へ2017(平成29)年2月16日に鑑定を依頼したところ「紹興元寶の背月は、珍しい資料」とのコメントを頂いた、記して謝意を表したい。

註3. 註1と同じ。

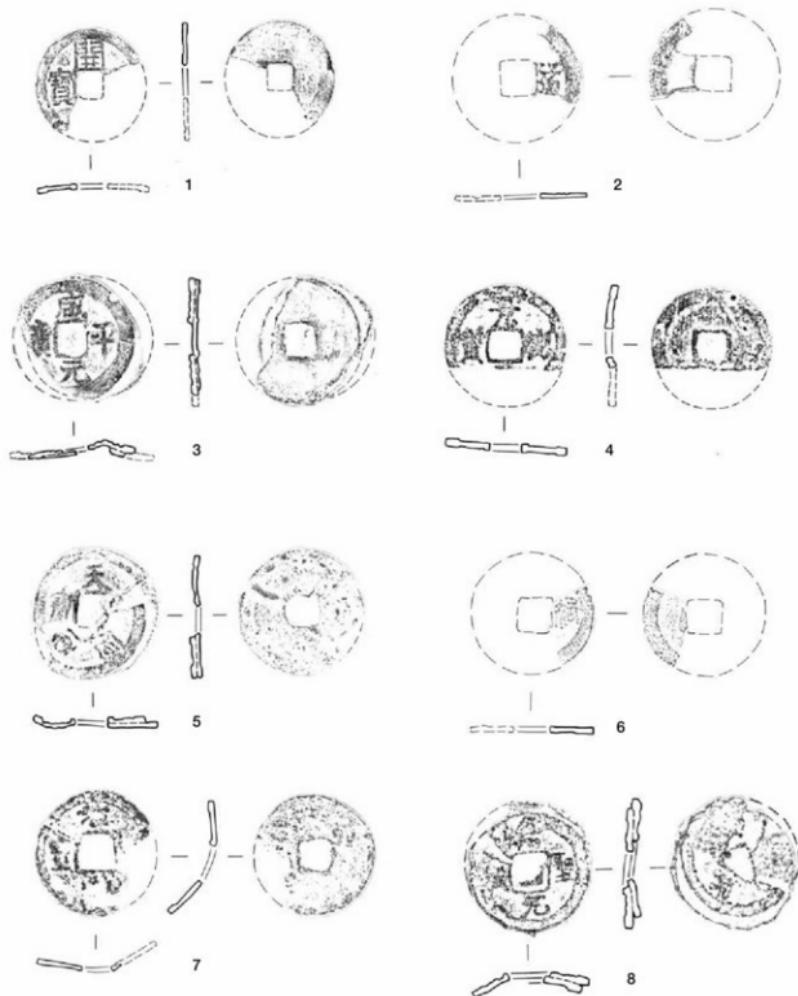
第90表 埋敷きSS05 ガラス玉観察一覧

単位:mm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	形 状 分 類	色 調	素 材	製 作 技 法	長軸 短軸 厚さ	孔径 最大 最小	重量	観察事項		出土点 出土層
第43図 図版35 13	II 類	青 色	ガ ラ ス	巻 き 付 け	5.55 5.17 3.37	2.34 2.20	0.16	小玉の上位の孔には成形時の切り離しの際に生じたバリが残る。下位の孔は丸味を帯びるが孔の周辺部が微弱に歪んでいる。全体的に成形は難である。器面には成形時に発生した微細な気泡痕が観察できる。巻き付け。		C-D-12 SS05 西側第1層 (覆土)

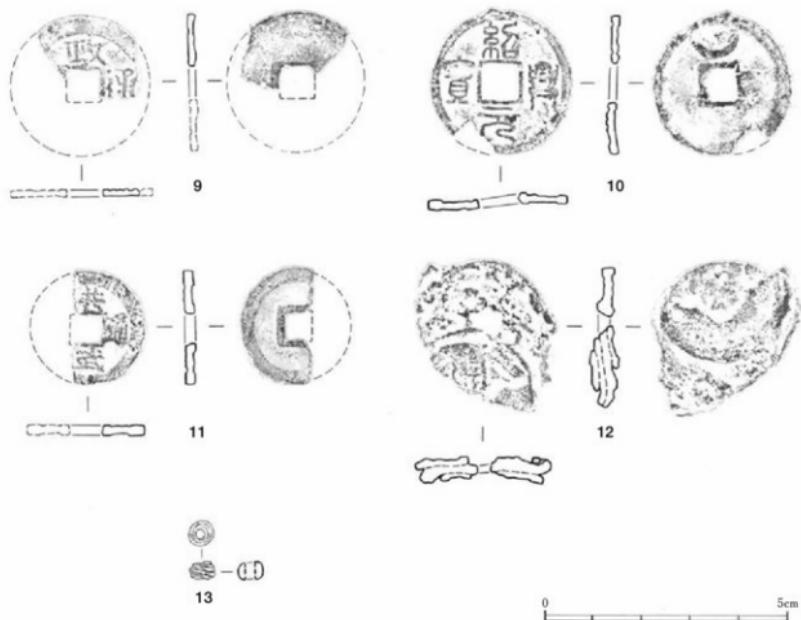
第91表 埋敷きSS05 こま(図版のみ)観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	観察事項					出土点 出土層	
図版35 14	プラスチック ひねりこま	型物のひねりこま 外周縁面にあら鋸歯状(三角形状)の突起の間隔が一定ではない。突起間の最大幅が7.69mm、最少幅6.27mmを測る。最大幅で突起の数を復元すると7箇所の突起となるが、最少幅では9箇所の突起となる。大小の幅を調整しながら8箇所となるように突起の位置を調整している。内側には段差一段を設け、コマ軸の下端部には補強用の「十」の突起を設け、十字突起の間に半円柱の小突起がみられる。色調は乳白色を主体とするが所々に薄い黄緑色のプラスチックが入り込んでいる。コマの外側には同心円状に三角形状の隆起突帯が4箇所で確認できる。昭和初期(戦前)から1950年代頃の製品とみられる。後者の時期が考えられるところである。						C-12 SS05 東側第1層 (覆土)



0 5cm

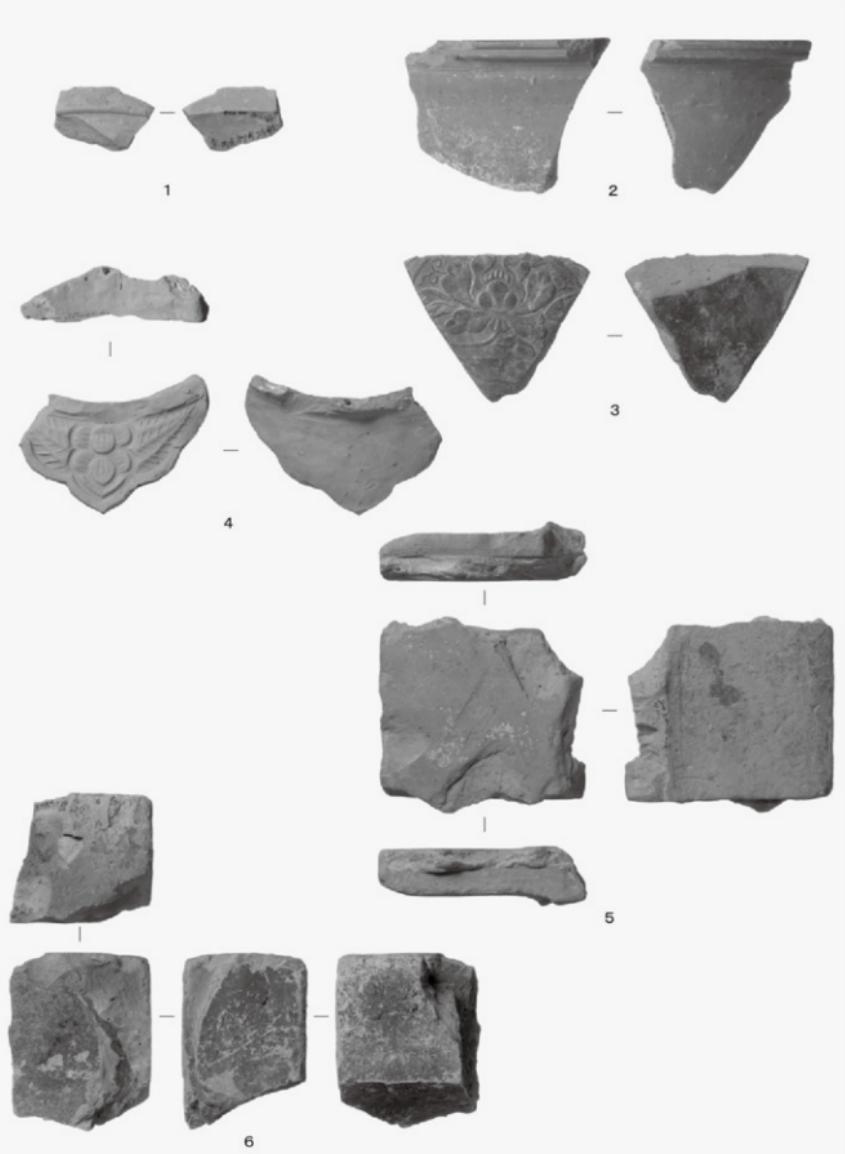
第42図 塚敷きSS05出土品⑨ 錢貨：1～8



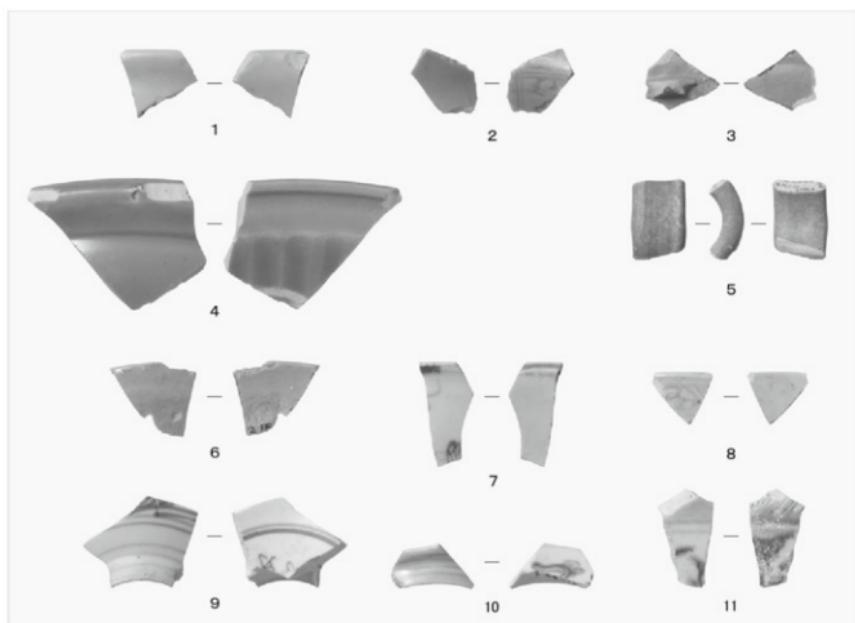
第43図 塚敷きSS05出土品⑩ 錢貨：9~12

第92表 塚敷きSS05 出土遺物状況（図版外）

種類	部位	C-12 SS05				合計	
		東側		西側			
		第2層	第1層 (覆土)	第2層	第2層 下部		
グスク土器	器種不明 胸部	1	1	2	3	7	
	合 計	1	1	2	0	3	
タイ産土器(半神)	蓋 胸部	1				1	
	合 計	1	0	0	0	0	
タイ産 搗臼陶器	壺 胸部	23	1	7	5	37	
	底部	2				2	
	合 計	25	1	7	5	39	
本土産 陶器	壺 胸部	1				1	
	甕 胸部					1	
	不明 胸部	1				1	
	合 計	2	0	0	0	1	
ガラス製品	瓶 底部	1				1	
	板ガラス	1				1	
	合 計	2	0	0	0	0	
鍛冶関連	鉄滓片 鉄	1				1	
	合 計	1	0	0	0	1	



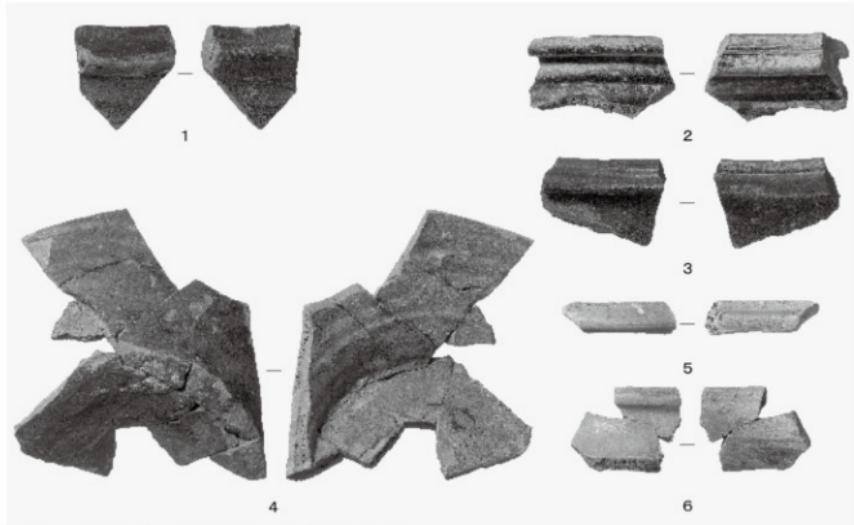
図版 27 塗敷き SS05 出土品①・② 陶質土器：1・2、瓦質土器 3、屋瓦 4、博瓦 5・6



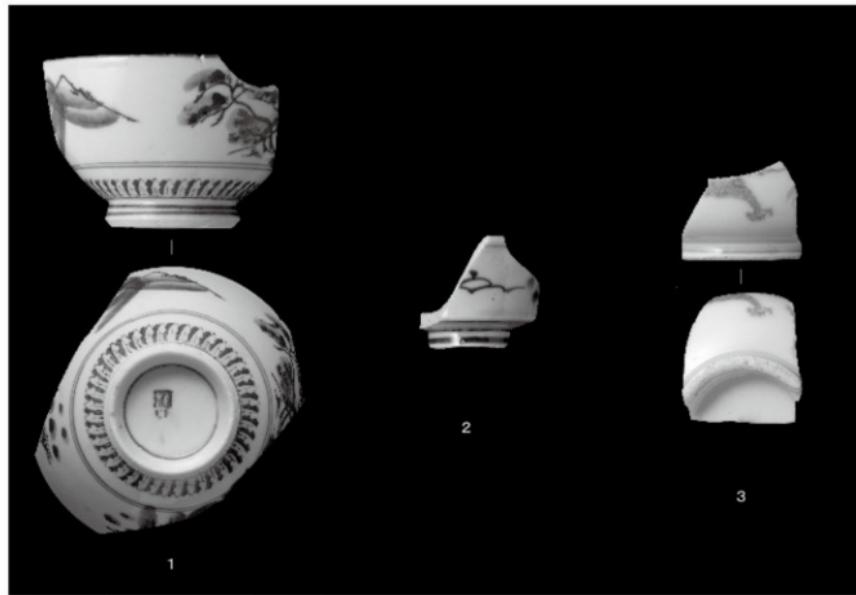
図版 28 塗敷き SS05 出土品③ 青磁：1～5、白磁：6、青花：7～11



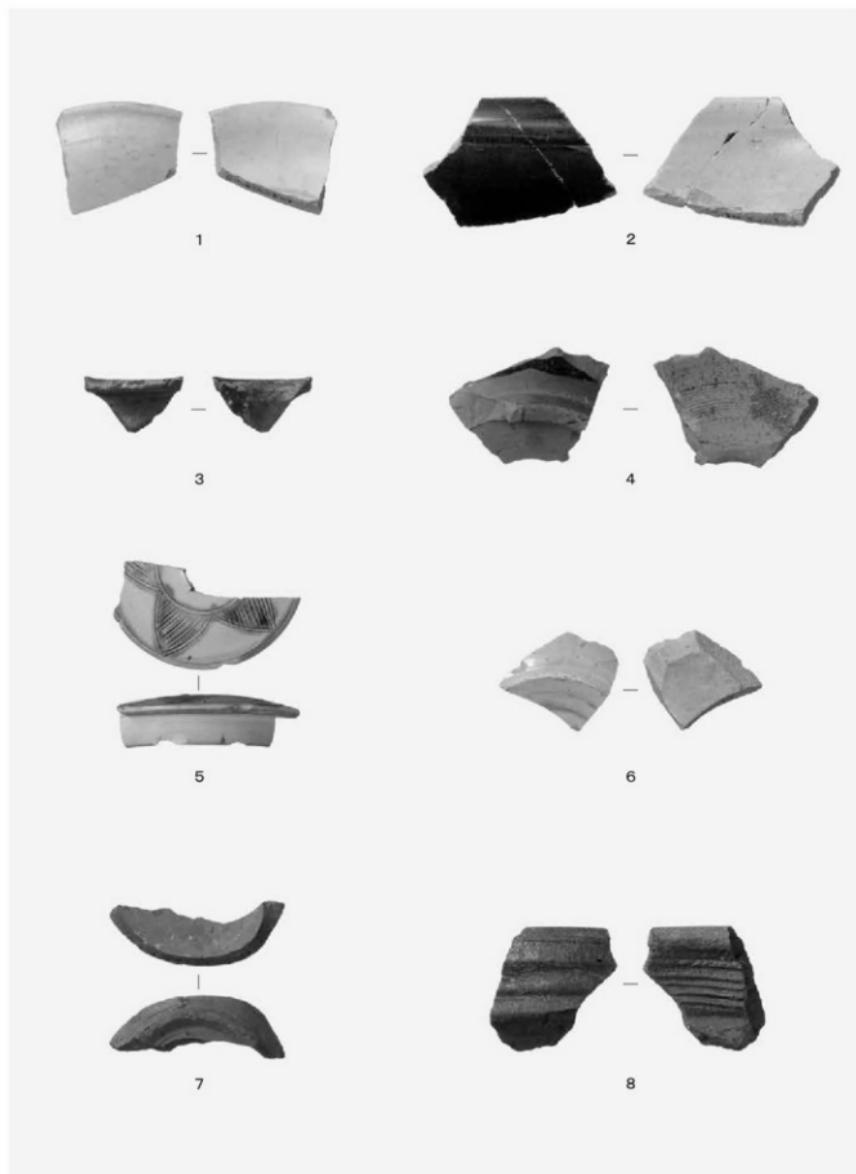
図版 29 塗敷き SS05 出土品④ 彩釉陶器 盤：1、鶴形・鴨形水注：2、鶴形水注：3～6



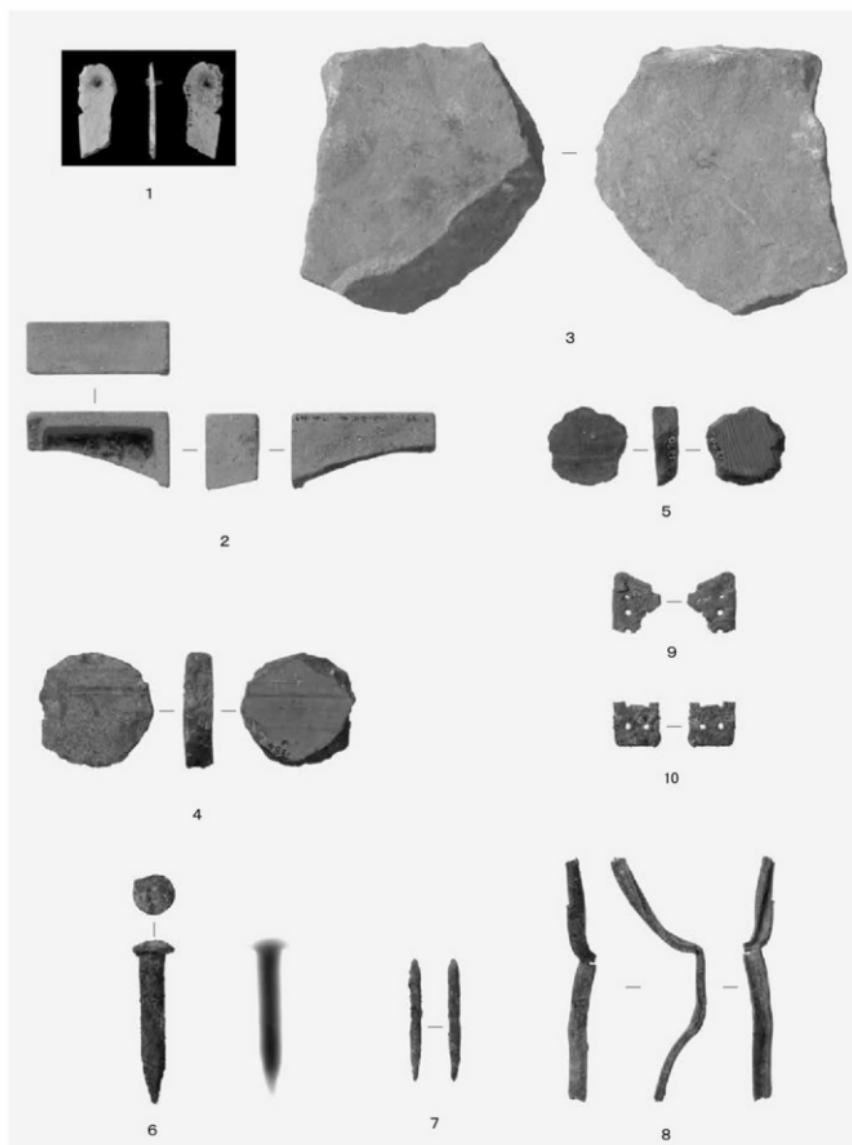
図版 30 塹敷き SS05 出土品⑤ 中国産褐釉陶器 : 1~6



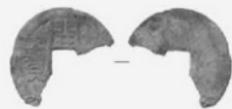
図版 31 塹敷き SS05 出土品⑥ 本土産磁器 : 1~3



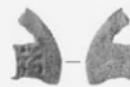
図版 32 塙敷き SS05 出土品⑦ 沖縄産施釉陶器：1～6、沖縄産無釉陶器：7・8



図版33 塗敷きSS05出土品⑧ 骨製品：1、石製品：2・3、円盤状製品：4・5、金属製品：6～10



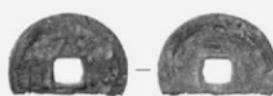
1



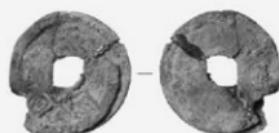
2



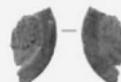
3



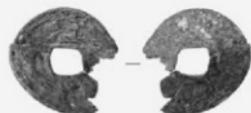
4



5



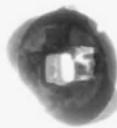
6



7



8



3 軟X線写真

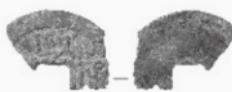


5 軟X線写真

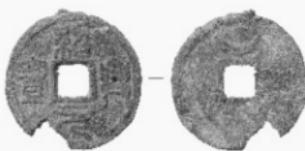


8 軟X線写真

図版 34 塗敷き SS05 出土品⑨ 錢貨 : 1~8



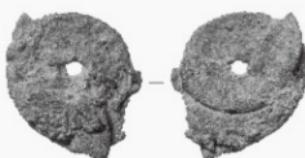
9



10



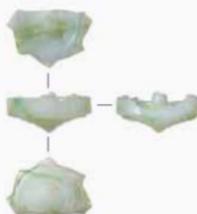
11



12



13



14

12 軟X線写真

図版 35 塗敷き SS05⑩ 銭貨：9～12、ガラス玉：13、こま（プラスチック製品）：14

(8) B-12・13北側トレンチの出土遺物(第44図、第93表～第98表、図版36)

B-12・13北側トレンチ内から出土した遺物の種類は、第6表に呈示したように総計で121点(=100%)が得られている。

出土遺物の内訳は、グスク土器10点(8.26%)、瓦類13点(10.74%)、青磁10点(8.26%)、白磁1点(0.83%)、中国産褐釉陶器47点(38.84%)、沖縄産施釉陶器1点(0.83%)、タイ産褐釉陶器7点(5.79%)などの15種類が確認されている。輸入陶磁器(タイ産、中国産)の占める割合は、59.50%(72点)であった。

当該期に該当する出土遺物は、第44図1の中国華南彩釉陶器のみであった。

なお、出土遺物の大半は細分化した資料が多く、その中から比較的大きな破片資料や特徴的な資料を第44図に示した。

第93表 B-12・13北側トレンチ 彩釉陶器・中国産褐釉陶器出土状況

種類	層序		B-12	B-12・13	B-13			合 計	
	北側トレンチ		北側トレンチ	北側トレンチ	北側トレンチ				
			第1層e	第1層d	第1層d	第1層e	第5層 (暗褐色 土層)	第5層 西端 岩盤周辺	
彩釉陶器	盤	口縁部	1					1	
	鉢	口縁部				1		1	
	鶴形水注	胴部	1				1	2	
合 計			2	0	0	1	1	4	
中国産 褐釉陶器	壺	口縁部	1					1	
		頸部	3					3	
		胴部	30	1	2		7	1	
		底部	2					2	
合 計			36	1	2	0	7	1	
								47	

第94表 B-12・13北側トレンチ 金属製品出土状況

種類	層序		B-12		B-13		合 計	
	北側トレンチ		北側トレンチ		北側トレンチ			
	第1層c (裏栗石内 淡黄白色 砂層)	第1層e	第1層d 西端岩盤 周辺	第5層 (暗褐色 土層)				
金属 製品	工具類・ 生産用具	角釘	先端部欠損	中	鉄	1	5	
			先端+ 頭部欠損	中	鉄	4	7	
	武具		座金具		青銅		1	
	武器		弾丸		鉄	1	1	
合 計						1	14	
						7		
						1		
						5		

第95表 B-12・13北側トレチ 彩釉陶器・中国産褐釉陶器観察一覧

単位:cm

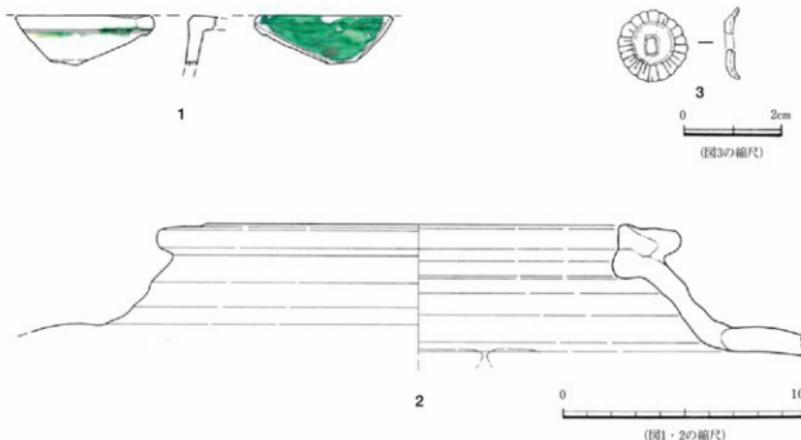
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称・仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第44図 図版36 1	彩 釉 陶 器	盤	口 縁 部	一	器形:華南三彩盤。口縁の端部が欠落する。文様:なし。素地:黄白色の細粒子で、粗細な石英以外に粗い石英や細かい黒色鉱物を少量ながら含んでいる。釉色:両面に緑色の釉を施しているが、外面の釉は大部分が剥落し下地の白化粧土が薄く残っている。中国南部(福建・廣東)の窯。15c後半~16c。
				一	
				一	
〃 2	褐 中 國 陶 器	壺	口 縁 部	21.6 一 一	器形:口縁部の縦断面が直角な隅丸方形状となる怒り肩の壺。口縁部の肥厚部は陶土の繊維足によって製作されている。外面に輪轂底が頗著にみられる。内面も口縁の肥厚部を軽く確ませている。内面は輪轂底以外に肩部に当て具痕がみられる。口唇部の内側には輪轂の回転を利用した深めの窪みがみられる。文様:なし。素地:淡茶紫色の細粒子で、細かい石英と粗い鉱物(茶褐色、石英)を少量含んでいる。釉色:茶黒色の釉が両面に施されているが、内面の施釉は稚であり部分的に露胎がある。内面に粗細な貫入がみられる。中国南部(福建・廣東)の窯。14c~15c。

注「一」:計測不可

第96表 B-12・13北側トレチ 金属製品観察一覧

単位:mm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称・仮称	材質	残存長(縦) 残存幅(横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観察事項	出土地点 出土層
第44図 図版36 3	武具 座金具	青銅	14.5 14.4	2.0 1.05 1.1	八双鉢の座金具とみられる。表面は花芯となる部分を円形に盛り上げて、中央に長方形の孔を穿っている。外周縁を鑄で線彫りして花弁を造るが花弁の間隔が一定しない。また、花弁の内側にも葉脈が一条鑄で打ち込んでいるが、花弁内に葉脈があるものとないものがあり、打刻が一定しない。内面には鉄錆が付着するものがみられ、一部は外面まで錆汁が及んでいる。錆青や鉄錆の影響で内側縁沿いは地金の剥離が発生している。	B-13 北側トレチ 第5層 (暗褐色土層)



第44図 B-12・13北側トレチ出土品 彩釉陶器:1、中国産褐釉陶器:2、金属製品:3



図版 36 B-12-13 北側トレチ出土品 彩釉陶器：1、中国産褐釉陶器：2、金属製品：3

第97表 B-12・13北側トレチ 二次的火熱溶解鉄貨

銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
天聖元寶(北宋1023年初鑄)	1片	1.58	「元」・「寶」の二字が残存	B-13 北側トレチ 第1層d
合計	1			

第98表 B-12・13北側トレチ 出土遺物状況(図版外)

種類	層序	B-12		B-13			合計	
		北側トレチ		北側トレチ				
		第1層d	第1層e	第1層d	第5層 (暗褐色 土層)	第5層 岩盤周辺		
グスク土器	鍋	底部		1			1	
	壺	口縁部		1			1	
	器種不明	胴部		2	2	4	8	
合計		0	0	4	2	4	10	
屋瓦	明朝系	丸瓦	灰色 漆喰無し	5			5	
		褐色	漆喰無し	2			2	
	平瓦	灰色	漆喰無し	6			6	
合計		0	13	0	0	0	13	
青磁	碗	口縁部	直口 蓮弁・藤彫り	1			1	
		外反	無文	1			1	
		玉縁	無文		1		1	
	皿	胴部	無文	2		2	4	
	盤	口縁部	直口 無文		1		1	
		胴部	外面:無文 内面:蓮弁・型起し		1		1	
		底部	印花文 高台なし		1		1	
合計		0	4	3	1	2	10	
白磁	碗	胴部		1			1	
合計		0	0	1	0	0	1	
青花	碗	口縁部 直口		1			1	
		胴部				1	1	
	皿	胴部		1			1	
合計		0	1	1	0	1	3	
タイ産 褐釉陶器	壺	口縁部				1	1	
		頸部		1			1	
		耳				1	1	
		胴部			1	2	3	
		底部		1			1	
合計		0	2	0	1	4	7	
本土産磁器	絵の具皿	- (底部焼?)近現				1	1	
合計		0	0	0	0	1	1	
沖縄産施釉陶器	碗	胴部	1				1	
合計		0	1	0	0	0	1	
沖縄産無釉陶器	不明	胴部	3				3	
合計		0	3	0	0	0	3	
石材	黒色千枚岩						1	
	細粒砂岩(ニーピ)	1	2				3	
自然石	河原石	中粒砂岩 北部地域	1				1	
合計		1	3	0	0	1	5	
ガラス製品	板ガラス	破片				1	1	
合計		0	0	0	0	1	1	

# 報告書抄録

ふりがな	しゅりじょうあと									
書名	首里城跡									
副書名	京の内跡発掘調査報告書（VI） 平成6年度調査の遺物編（3）									
卷次	一									
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書									
シリーズ番号	第89集									
編著者名	金城亜信・宮里美也子・大城友理華・仲村綾乃									
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター									
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL 098-835-8751・8752									
発行年月日	2017年3月31日									
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	発掘面積m <sup>2</sup>	調査原因			
収録遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	○××						
しゅりじょうあと 首里城跡	沖縄県那覇市 首里町當麻園3丁目 ・金城町1丁目	那覇市 47201	—	26° 12' 31.32683"	127° 43' 18.24229"	1994. 11. 21 1995. 3. 28	国営首里城公園整備事業			
				26° 12' 32.15599"	127° 43' 18.93019"					
				26° 12' 32.35347"	127° 43' 20.97267"					
				26° 12' 32.97711"	127° 43' 20.97684"					
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項					
首里城跡	祭祀空間	中世・近世	倉庫跡、建物跡、区画石積み、御殿、塹堀き、土壙など	屋瓦(高麗系・大和系等)、金属製品(鏡の小札・釘・鐵貨等)、ガラス製品(小玉)、中国産(青磁・白磁・青花・唐物陶器等)、タイ産土器、沖縄産(瓦質土器・無釉陶器・施釉陶器)など。	京の内跡は、琉球王国に於ける神聖な城域的な空間として国王即位の儀式をはじめ常用な儀式や祭司が執りおこなわれた空間として位置づけられている。京の内は区画石積みがなされ区内には重要な施設である百間森御殿、真玉森御殿、京の内の三御殿の五つの御殿があつた。京の内跡の発掘調査報告書は、平成10年3月に発掘調査報告書(Ⅰ)を刊行して以来、平成21年3月に発掘調査報告書(Ⅱ)、平成23年3月に発掘調査報告書(Ⅲ)・遺構編を報告し、平成24年3月に遺物編(1)、平成26年3月に遺物編(2)を報告した。今回も遺物編として第V期(16世紀前半～19世紀後半)までの遺構及び遺構周辺から出土した遺物を報告した。本報告書では注目された資料として石積みSAI56ら大和系鬼瓦を標識した鬼瓦の崩の部分が確認され、湯田古窯での生産を示唆する資料であった。標記S055ら国内での報告がなかった南洋系統で背面に三日月(丁酉上月)のある組雲元寶(時降造1131年)が一枚出土している。その他に既石として利用された繊維砂岩の表裏面及び画面に線彫りによる線刻画(仮称:「鳳凰・菊花・進貢船海雞所図」)が初めて出土している。					
要約	昭和61年度に首里城公園計画区内約18haの内、首里城内部の約4haが国営公園区域として整備することが閣議決定された。復元整備に伴う遺構確認調査は、昭和63年度から内閣府・沖縄総合事務局・国営沖縄記念公園事務所との委託を沖縄県教育委員会が受け、南殿・北殿・御庭地区などの遺構確認調査を実施し、平成4年度に首里城正殿・南殿・北殿などをが復元整備され一部が開園した。未整備地区であった京の内・地区の復元整備が課題となり、整備に必要な基礎資料を得る目的で平成6年度から平成9年度までの四カ年間に亘って発掘調査を実施した。その内、報告(平成6年度調査の國の重要文化財が出土した土壙SK01及び石積みSA33-34)済みを除く、平成6年度調査の全ての遺構について報告を行った。今回は平成6年度調査で遺物を6時期に分類した中で、第V期(16世紀前半～19世紀後半)の遺構及び遺構周辺から出土した遺物(造成立層や壊乱層を含む)の報告をおこなった。									

---

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第89集

## 首里城跡

—京の内跡発掘調査報告書（VI）—  
平成6年度調査の遺物編（3）

発行年 平成29（2017）年3月31日

発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

編集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
〒903-0125

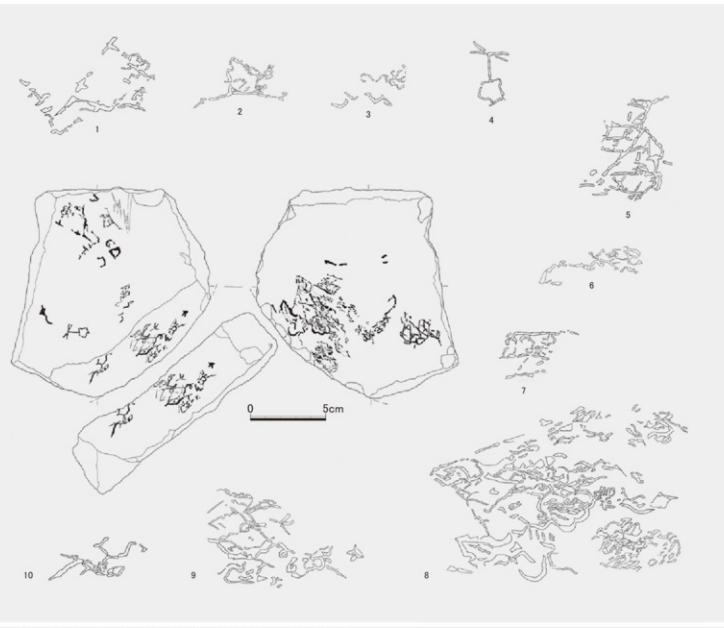
沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7  
TEL 098（835）8751・8752

印刷 合同印刷  
〒903-0807  
沖縄県那覇市首里久場川町 1-117-5  
TEL 098（887）1066

---



表（实物大）右上：唐敷きSS05出土の篆書体「紹興元寶」（南宋、1131年初鋤造）  
 背面「背土月」の正規錢  
 表（实物の1/7）左下：石積みSA15出土の大和系鬼瓦模倣の肩（15世紀後半～16世紀）  
 参考資料の崎山御殿遺跡出土の大和系鬼瓦（15世紀中頃～以降）



表（線刻石器：实物の2/5）左中：石敷きSS01出土の線刻石器（17～18世紀初頭）  
 （線刻面：实物大）左上：（石器表面）1：一枚帆の帆船、2：一枚帆の小舟、3：波と魚、4：桟子の萌芽  
 右上：（石器裏面）5：帆船（旗、マスト、人、鷲）、6：波と魚  
 7：天鵝のあわ和船と人物、8：飛翔する鳳凰と菊花  
 中央下：（石器側面）9：帆船と魚、10：難破船と漁網